

第Ⅲ部 2020-2021年度における各教員の活動

01 言語学

教授 西村 義樹 NISHIMURA, Yoshiki

1. 略歴

1984年3月	東京大学文学部英語英文学専修課程卒業
1984年4月	東京大学大学院人文科学研究科英語英文学専攻修士課程入学
1987年3月	東京大学大学院人文科学研究科英語英文学専攻修士課程修了
1987年4月	東京大学大学院人文科学研究科英語英文学専攻博士課程進学
1989年3月	東京大学大学院人文科学研究科英語英文学専攻博士課程退学
1989年4月	実践女子大学文学部英文学科専任講師
1992年4月	東京大学教養学部助教授
1993年4月	東京大学大学院総合文化研究科専攻助教授
2004年4月	東京大学人文社会系研究科助教授 併任
2004年9月	東京大学人文社会系研究科助教授
2007年4月	東京大学人文社会系研究科准教授
2012年4月	東京大学人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

言語学、意味論、認知文法

b 研究課題

文法の意味的基盤

認知文法の観点からさまざまな文法現象の意味的な基盤を明らかにすることを目標として研究を進めてきた。これまでに分析の対象にしてきた主な現象は、日英語の使役構文、項構造の交替、文法関係などである。近年は認知言語学の分野でその遍在性、重要性が新たに注目されている換喩 (metonymy) の本質を解明し、それに基づいて従来別々に扱われてきた多くの文法現象を統一的に把握し直すことを目指している。

c 概要と自己評価

日本語と英語の文法現象についての認知文法の立場からの研究を継続して行い、その成果の一部を発表した。

d 主要業績

(1) 著書

共著、山本史郎、西村義樹、森田修、『オー・ヘンリーで学ぶ英文法』、アスク出版、2020.12

共著、柴田元幸、西村義樹、森田修、『シャーロック・ホームズで学ぶ英文法』、アスク出版、2022.2

(2) 論文

Shinya Hirasawa and Yoshiki Nishimura, 「Native speakers are creative and conservative: What Explain Me This reveals about the nature of linguistic knowledge」、『English Linguistics』、Vol. 38, no. 1, pp.139-163, 2021.11

西村義樹・松田俊介・田中太一、「言語の身体的基盤—認知言語博の観点から—」、『体育の科学』、vol.72 no.1, 11-15 頁、2022.1

(3) 解説

西村義樹、「結果構文の文法と意味」、『オー・ヘンリーで学ぶ英文法』、104-110 頁、2020.12

西村義樹、「to 不定詞が文中で果たす役割」、『オー・ヘンリーで学ぶ英文法』、220-233 頁、2020.12

西村義樹・長谷川明香、「サピアの名詞・動詞論」、『日本エドワード・サピア協会研究年報』、第34号、67-68 頁、2021.3

西村義樹、「いわゆる「無生物主語」の構文」、『シャーロック・ホームズで学ぶ英文法』、pp.78-90、2022.2

西村義樹、「〈be + sure + 不定詞句〉とその周辺」、『シャーロック・ホームズで学ぶ英文法』、pp.162-172、2022.2

(4) 学会発表

国際、Yoshiki Nishimura, 「Metonymy in Grammar Revisited」, The English Linguistic Society of Japan 14th International Spring Forum, 2021.5.8

国内、野中大輔、松田俊介、長谷川明香、田中太一、ワークショップ「「~かのように」語ることばたち：伝え方の意味論に向けて」、日本語学会第162回大会（オンライン開催）、2021.6.27
国内、西村義樹、「Langackerを読む：認知文法の基礎から最前線まで」、東京言語研究所夏期集中講義、2021.8.13
国内、西村義樹、「認知文法との35年」、日本英語学会第39回大会、オンライン開催、2021.11.14

(5) 予稿・会議録

国内会議、西村義樹、「認知文法との35年」、日本英語学会第39回大会、オンライン開催、2021.11.14
『Conference Handbook 39』、pp.156-161、2021.11

(6) 翻訳

共訳、Thom Scott-Phillips, "Speaking Our Minds: Why human communication is different, and how language evolved to make it special", 畔上耕介、石塚政行、田中太一、中澤恒子、西村義樹、山泉実、『なぜヒトだけが言葉を話せるのか：コミュニケーションから探る言語の起源と進化』、東京大学出版会、2021.6

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

特別講演、Festina Lente、「文法と意味、文法の意味：認知言語学の視点」、2021.3
特別講演、翻訳研究会、「認知文法は翻訳（論）に貢献しうるか?」、2021.6
特別講演、アスク出版、「英語で味わうシャーロック・ホームズ」、2022.3

教授 **小林 正人** KOBAYASHI, Masato

1. 略歴

1992年3月 京都大学文学部文学科卒業（文学士）
1992年4月 京都大学大学院文学研究科修士課程梵語学梵文学専攻入学
1994年3月 京都大学大学院文学研究科修士課程梵語学梵文学専攻修了（文学修士）
1994年4月 京都大学大学院文学研究科博士後期課程梵語学梵文学専攻進学
2000年3月 京都大学大学院文学研究科梵語学梵文学専攻博士後期課程中途退学
1996年9月 ペンシルバニア大学文理大学院言語学科 Ph.D.課程入学
2000年12月 ペンシルバニア大学文理大学院言語学科 Ph.D.課程卒業（Ph.D）
2000年4月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 COE 非常勤研究員（2001年3月まで）
2001年4月 白鷗大学経営学部専任講師（2005年3月まで）
2005年4月 白鷗大学経営学部助教授（2007年3月まで）
2007年4月 白鷗大学教育学部准教授（2010年3月まで）
2010年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2020年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

歴史言語学、音韻論、インド・アーリア語、ドラヴィダ語、オーストロアジア（ムンダ）語

b 研究課題

インド・アーリア語、とくにサンスクリット文献学と、ドラヴィダ語族、オーストロアジア語族少数民族言語のフィールドワーク・歴史言語学

c 概要と自己評価

インド・アーリア語についてはサンスクリットを中心として他の印欧語族言語と比較し、音韻上の特性を記述した著書を出版し、現在は伝統文法の研究を行っている。ドラヴィダ語族では、北部の2つの少数民族言語について、現地調査を重ねて文法記述を完成させた。オーストロアジア語族では、未記述の言語エルンガ・コルワ語の調査を進めている。

d 主要業績

(1) 論文

- Masato Kobayashi, 「Viewing Proto-Dravidian from the northeast」、『Journal of the American Oriental Society』、140-2、467-481 頁、2020
- Masato Kobayashi, 「Reconstruction of verb suffixes in Kurux and Malto」、『Indian Linguistics』、81、1-12 頁、2021.12
- Masato Kobayashi, 「Origin of the -k past in Kurux and Malto」、『International Journal of Dravidian Linguistics』、51、1-25 頁、2022.1
- Masato Kobayashi, 「Panini's definition of the bahuvrihi as sesa 'remainder」、『Indian linguistic studies in honor of George Cardona』、1、217-236 頁、2022.3

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本言語学会、常任委員、2012.4～2018.3、編集委員、2018.4～
海外、Dravidian Linguistic Association、Advisory Board、2017～

(2) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

教育機関、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、運営委員会委員、2013～、研修専門委員会委員、2016～

准教授 **長屋 尚典** NAGAYA, Naonori

1. 略歴

- 2000年4月 東京大学教養学部文科三類入学
- 2004年3月 東京大学文学部言語文化学科言語学専修課程卒業
- 2004年4月 東京大学大学院人文社会系研究科言語学専門分野修士課程入学
- 2006年3月 東京大学大学院人文社会系研究科言語学専門分野修士課程修了
- 2006年4月 東京大学大学院人文社会系研究科言語学専門分野博士課程入学
- 2006年4月 日本学術振興会特別研究員 DC1 (東京大学大学院) (～2006年8月)
- 2006年8月 アメリカ合衆国ライス大学 (Rice University) 言語学科博士課程入学
- 2009年9月 東京大学大学院人文社会系研究科言語学専門分野博士課程退学
- 2011年9月 国立国語研究所言語対照研究系 PD フェロー (～2012年3月)
- 2011年12月 アメリカ合衆国ライス大学 (Rice University) 言語学科博士課程修了 (Ph.D)
- 2012年4月 日本学術振興会特別研究員 SPD (国立国語研究所) (～2013年3月)
- 2013年4月 東京外国語大学総合国際学研究院 専任講師
- 2018年4月 東京外国語大学総合国際学研究院 准教授
- 2019年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授
- 2021年10月 東京大学ヒューマニティーズセンター HMC フェロー (～2022年9月)

2. 主な研究活動

a 専門分野

言語学、言語類型論、フィールド言語学

b 研究課題

オーストロネシア諸語、特に、フィリピン・インドネシアで話される諸言語を中心に、言語類型論の観点から、その文法構造について研究している。具体的には、タガログ語とラマホロット語 (東インドネシア、フローレス島) について、その文法関係やヴォイス現象、情報構造、空間表現を研究し、言語類型論についての貢献を目指している。言語調

査においては、フィールドワーク・実験を重視し、実際の談話や会話を撮影・録音することで、経験的事実に基づく記述・一般化を試みている。

c 概要と自己評価

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) によって海外調査が実質的に不可能になったため、研究課題はそのままに、すでに収集したデータやオンライン・コーパスを使用した分析に研究の中心を移した。たとえば、タガログ語の自然会話コーパスを用いた疑問詞 *ano* 'what' の研究 (Beyond questions: Non-interrogative uses of *ano* 'what' in Tagalog) やラマホロット語の空間表現に関する研究 (Directionals, topography, and cultural construals of landscape in Lamaholot) などを行った。

さらに、個人研究に加えて国内外の研究者や本学大学院生との共同研究にも力を入れた。その結果、タガログ語の音韻論について新たな観点から分析を提示したり (Ludlings and phonology in Tagalog)、トルコ語などの移動表現について実験研究の成果を発表したり (Variation in the encoding of motion events in Turkish; 「複数局面を含む移動事象表現と言語類型論: 日本語と他言語の比較」) することができた。

この期間中には、新たに可能となったオンライン学会やオンライン講演会を通して、海外や日本国内の方々に広く研究成果を発表することができた。また、日本言語学会論文賞や The Br Andrew Gonzalez FSC Distinguished Professorial Chair in Linguistics and Language Education を受賞するなど、これまでの研究を評価していただく機会にも恵まれた。

d 主要業績

(1) 著書

共著、長屋尚典、「会話のなかのタガログ語文末助詞 e」、中山俊秀・大谷直輝 (編) 『認知言語学と談話機能言語学の有機的接点: 用法基盤モデルに基づく新展開』 267-290. 東京: ひつじ書房、2020

共著、松本曜、鈴木唯、高橋舜、谷川みずき、長屋尚典、吉成祐子、「複数局面を含む移動事象表現と言語類型論: 日本語と他言語の比較」、窪園晴夫・野田尚史・ブラシャント パルデシ・松本曜 (編) 『日本語研究と言語理論から見た言語類型論』 178-205. 東京: 開拓社、2021

(2) 論文

Naonori Nagaya, Suzuki Yui & Enomoto Emi, 「Variation in the encoding of motion events in Turkish」、『NINJAL Research Papers』、19、1-30 頁、2020

Naonori Nagaya, 「Reduplication and repetition from a constructionist perspective」、『Belgian Journal of Linguistics』、34 (1)、259-272 頁、2020.12

Naonori Nagaya & Hiroto Uchihara, 「Ludlings and phonology in Tagalog」、『Asian and African Languages and Linguistics』、15、9-20 頁、2021.3

Naonori Nagaya, 「Directionals, topography, and cultural construals of landscape in Lamaholot」、『Linguistics Vanguard』、8(s1)、25-37 頁、2022.1

Naonori Nagaya, 「Beyond questions: Non-interrogative uses of *ano* 'what' in Tagalog」、『Journal of Pragmatics』、190、91-109 頁、2022.3

(3) 学会発表

国際、Naonori Nagaya, 「The middle voice in symmetrical voice languages: Toward a diachronic typology」、53rd Annual Meeting of the Societas Linguistica Europaea, SLE 2020 Platform、2020.8.26

国際、Naonori Nagaya, 「Teaching the Filipino Language in Japan」、INTERSECTIONS: International Conference on the Shared Histories and Cultural Heritage of Japan and the Philippines、online、2020.11.6

国内、吉田樹生、島健太、鈴木唯、谷川みずき、林真衣、細羽洗希、諸隈夕子、長屋尚典、「日本語と世界の言語における単複と頻度の関係: 言語類型論的コーパス研究」、Prosody & Grammar Festa 5、国立国語研究所、2021.2.21

国際、Naonori Nagaya, 「Usage-based Philippine linguistics」、Br. Andrew Gonzalez FSC Distinguished Professorial Lecture in Linguistics and Language Education、Linguistic Society of the Philippines (LSP) and the Br. Andrew Gonzalez FSC College of Education (BAGCED)、De La Salle University、online、2021.3.6

国内、長屋尚典、「タガログ語における *thetic/categorical* 判断と情報構造」、言語の類型的特徴対照研究会、オンライン、2021.4.3

国際、Naonori Nagaya, 「Morphosyntactic and phonological constituency in Tagalog」、International workshop on constituency, wordhood, and the morphology-syntax distinction: description and typology、CNRS-DDL、Lyon II - ONLINE、2021.4.28

国内、長屋尚典、「タガログ語における *thetic/categorical* 判断: 主題の対照研究」、ドイツ文法理論研究会、オンライン、2021.6.6

国内、長屋尚典、林真衣、細羽洗希、「ウェブデータから言語変化を捉える: タガログ語の *sana all* の分析」、日本言語学会第 162 回大会、2021.6.26

国際、Naonori Nagaya、「Two ways of requesting confirmation in Tagalog」、17th International Pragmatics Conference、Online、2021.6.28

国際、Naonori Nagaya、「Category change and nominalization in Tagalog: A constructionist approach」、11th International Conference on Construction Grammar、University of Antwerp, Belgium、2021.8.19

国内、長屋尚典、「「右」も「左」もない言語と言語類型論」、東京大学ヒューマニティーズセンター 第49回 HMC オープンセミナー、オンライン、2021.12.17

国内、長屋尚典、鈴木唯、谷川みづき、林真衣、諸隈夕子、「移動表現における多重表示の冗長性と類型論」、Prosody & Grammar Festa 6、Zoom、2022.1.30

国際、Naonori Nagaya & Mai Hayashi、「The dynamics of sana all in online interactions」、The 4th LSP International Conference (LSPIC 2022) and the 21st English in Southeast Asia International Conference (21ESEA)、Online、2022.3.12

(4) 啓蒙

長屋尚典、「英語は特殊な言語で、日本語はありふれた言語」、『ラボの世界』、290、8頁、2020

(5) 会議主催

国際、「The 31st meeting of the Southeast Asian Linguistics Society」、実行委員、University of Hawai'i at Mānoa、2022.5.18～2022.5.20

(6) 受賞

国内、長屋尚典、2020年度 日本言語学会論文賞、Best Paper Award 2020、「Thethetic/categorical distinction in Tagalog revisited: A contrastive perspective」、「Thethetic/categorical distinction in Tagalog revisited: A contrastive perspective」、日本言語学会、Linguistic Society of Japan、2020.11.22

国際、Naonori Nagaya、The Br Andrew Gonzalez FSC Distinguished Professorial Chair in Linguistics and Language Education、The Br Andrew Gonzalez FSC Distinguished Professorial Chair in Linguistics and Language Education、Linguistic Society of the Philippines & De La Salle University、Linguistic Society of the Philippines & De La Salle University、2021.3.6

国際、Naonori Nagaya、名誉会員、Honorary membership、フィリピン言語学会、Linguistic Society of the Philippines、2021.3.13

(7) 資料・データベース

『Transitivity pairs in Tagalog』、長屋尚典、2020

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

特別講演、第95回五月祭、「空間と言語：ことばの多様性入門」、2022.5

(2) 学会

国際、Linguistic Society of the Philippines、Editorial Consultant (Philippine Journal of Linguistics)、2020～

国内、日本言語学会、編集委員、2021.4～

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

教育機関、東京言語研究所 理論言語学講座、運営委員、2020.4～

教育機関、フィリピン大学ディリマン校、外部評価委員、2022.1～2022.7

民間企業、Brill、Endangered and Lesser-Studied Languages and Dialects シリーズ編集委員、2022～

02 考古学

教授 佐藤 宏之 SATOU, Hiroyuki

1. 略歴

1982年3月	東京大学文学部考古学専修課程卒業
1982年4月	財団法人東京都埋蔵文化財センター調査員
1988年4月	法政大学大学院人文科学研究科日本史学専攻修士課程入学
1991年3月	法政大学大学院人文科学研究科日本史学専攻修士課程修了
1991年4月	法政大学大学院人文科学研究科日本史学専攻博士後期課程入学
1994年3月	法政大学大学院人文科学研究科日本史学専攻博士後期課程修了、博士（文学）取得
1994年4月	財団法人東京都埋蔵文化財センター副主任調査研究員
1997年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
1997年5月	東京大学文学部付属北海文化研究常呂実習施設助教授
1999年4月	東京大学大学院新領域創成科学研究科助教授
2003年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授 (新領域創成科学研究科助教授併任、2004年3月まで)
2007年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授
2022年3月	定年退職

2. 主な研究活動

a 専門分野

先史考古学、民族考古学、人類環境史

b 研究課題

- (1) 日本列島および東アジアの旧石器時代における石器技術論、行動論、遺跡形成論、石材論的研究。
- (2) 生業・居住形態等に関する民族考古学的研究。
- (3) 民俗知の環境論的研究。

c 概要と自己評価

上記の研究課題(1)では、科研費基盤研究(B)「現生人類ホモ・サピエンスのアジア早期拡散プロセスに関する考古学的研究」(2019～2021年度)プロジェクトを実施した。また科研費国際共同研究強化(B)「カザフスタンにおける現生人類北回り拡散ルートの解明に関する国際共同研究の基盤強化」(2018～)および科研費基盤研究(B)「中央アジア 天山-パミール地域における後期旧石器文化成立過程の研究」(2019～)プロジェクトに分担者として参画し、中央アジアにおける現生人類拡散プロセスの研究を実施している。

研究課題(2)および(3)については、科研費基盤研究(A)「ホモ・サピエンス躍進の初源史: 東アジアにおける海洋進出のはじまりを探る総合的研究」(2018～2021)プロジェクトに分担者として参画し、東北日本における現代の丸木舟漁労の調査を行っている。いずれも当初の研究計画をおおむね遂行できたと考えている。

上記研究課題とは別に、科研費基盤研究(A)「先住性と集団帰属意識の歴史的形成過程の検討」プロジェクト(2021～)に研究分担者として参加し、考古学分野における先住性の位置付けについて調査を行った。

また放送大学の授業科目『考古学』の分担講師として、2回の授業を担当した。

d 主要業績

(1) 著書

共著、池谷信之・佐藤宏之、『愛鷹山麓の旧石器文化』、敬文舎、2020

(2) 論文

佐藤宏之、「後期旧石器時代の古本州島と古北海道半島における地域性と社会の形成」、『吉留秀敏氏追悼論文集』、2020
佐藤宏之、「東アジア旧石器社会の歴史的変遷と愛鷹旧石器文化の意義」、『愛鷹山麓の旧石器文化』、2020
山崎健・尾田識好・市田直一郎・森先一貴・岩瀬彬・國木田大・佐藤宏之、「東京都前田耕地遺跡から出土した動物遺存体の再検討」、『旧石器研究』、2020

佐藤宏之、「旧石器時代から縄文時代への移行期とはどのような時代であったか」、『多摩のあゆみ』、179号、4-19頁、2020.8

佐藤宏之、「神子柴遺跡の性格をめぐって」、『季刊考古学』、153号、22-25頁、2020.10

Yamaoka, T., Sato, H., Mijares, A.S., 「Multi-faceted analyses of lithic artifacts from Callao cave in Northern Luzon (Philippines) .」、『Quaternary International』、596、93-108頁、2021.2

安藤政雄・小田静夫・加藤真二・佐藤宏之・設楽博己・竹岡俊樹、「静岡県伊豆の国市八丁平遺跡採集石器の研究―日本列島における中期旧石器時代をめぐって―」、『東京大学考古学研究室研究紀要』、34号、1-43頁、2021.3

佐藤宏之・根岸洋、「陸奥湾および男鹿半島における木造船を用いた漁撈活動に関する民族考古学的研究」、『東京大学考古学研究室研究紀要』、34号、73-84頁、2021.3

福田正宏・M. Gabrilchuk・國木田大・張恩恵・M. Gorshkov・夏木大吾・森先一貴・田邊えり・佐藤宏之、「ロシア連邦ユダヤ自治州ビジャン4遺跡出土の新資料について―2017・2018年度試掘調査報告―」、『東京大学考古学研究室研究紀要』、34号、107-130頁、2021.3

佐藤宏之、「IUP研究の現状と香坂山：日本列島後期旧石器時代の成立に関する展望」、『香坂山遺跡2020年度発掘調査成果報告書』、190-202頁、2021.6

Tsydenova, N., Kunikita, D. Sato H., Onuki, S., Natsuki, D., Bazarova, V.B., Lyashevskaya, M.S., 「Environmental conditions and the emergence of ceramics in the Late Pleistocene - Early Holocene at the Krasnaya Gorka site in the Transbaikal region, Southern Siberia」、『Quaternary International』、608-609、112-119頁、2022.1

(3) 書評

上峯篤史、Are Tsirk、『石の目を読む：石器研究のための破壊力学とフラクトグラフィ』、京都大学学術出版会、『日本考古学』、53号、69-72頁、2021.10

(4) 学会発表

国内、佐藤宏之、「人類化に与えた狩猟の意義」、「狩猟の民族考古学」(第1講)、朝日カルチャーセンター新宿教室、2020.1.31

国内、佐藤宏之、「狩猟の民族考古学調査1：ロシア極東」、「狩猟の民族考古学」(第2講)、朝日カルチャーセンター新宿教室、2020.2.21

国内、佐藤宏之、「狩猟の民族考古学調査2：マタギ」、「狩猟の民族考古学」(第3講)、朝日カルチャーセンター新宿教室、2020.3.27

国内、尾田識好・市田直一郎・山崎健・森先一貴・岩瀬彬・國木田大・佐藤宏之、「東京都前田耕地遺跡における縄文時代草創期の居住史―第17号住居跡の空間分析を通じて―」、日本考古学協会第86回総会・研究発表、専修大学生田キャンパス、2020.5.24

国内、佐藤宏之、「北西海岸インディアンの世界：クイーン・シャーロット諸島」、朝日カルチャーセンター新宿教室「狩猟採集民の生活と文化：狩猟の民族考古学 Part2」(第1講)、2020.6.26

国内、佐藤宏之、「赫哲(ナーナイ)の生活と社会」、朝日カルチャーセンター新宿教室「狩猟採集民の生活と文化：狩猟の民族考古学 Part2」(第2講)、2020.7.10

国内、佐藤宏之、「アイヌのイオマンテ(クマ送り儀礼)とは何か」、朝日カルチャーセンター新宿教室「狩猟採集民の生活と文化：狩猟の民族考古学 Part2」(第3講)、2020.8.28

国内、佐藤宏之、「人文学における国際的地域・社会連携の推進」、東京大学FSIバーチャル・シンポジウム、オンライン、2020.10.17

国内、佐藤宏之、「環日本海地域と縄文文化」、朝日カルチャーセンター新宿教室「東アジアの中の縄文文化」(第1講)、2020.10.30

国内、佐藤宏之、「森林性新石器文化としての縄文」、朝日カルチャーセンター新宿教室「東アジアの中の縄文文化」(第2講)、2020.11.27

国内、佐藤宏之、「34,000年前、墨古沢は日本の中心であった」、墨古沢遺跡国史跡指定1周年記念シンポジウム、千葉県酒々井町、2020.12.5

国内、佐藤宏之、「東日本と西日本の縄文時代」、朝日カルチャーセンター新宿教室「東アジアの中の縄文文化」(第3講)、2020.12.25

国内、佐藤宏之、「旧石器捏造事件とは何か」、朝日カルチャーセンター新宿教室「旧石器捏造事件から20年」(第1講)、2021.1.22

国内、佐藤宏之、「検証のプロセスと結果」、朝日カルチャーセンター新宿教室「旧石器捏造事件から20年」(第2講)、2021.2.19

- 国内、佐藤宏之、「旧石器考古学の革新と再生」、朝日カルチャーセンター新宿教室「旧石器捏造事件から20年」(第3講)、2021.3.26
- 国内、佐藤宏之、「世界最古の旧石器時代の陥し穴猟」、朝日カルチャーセンター新宿教室「考古学からみた日本列島3万年の狩猟史」(第1講)、2021.4.23
- 国内、佐藤宏之、「縄文狩猟採集社会の陥し穴猟」、朝日カルチャーセンター新宿教室「考古学からみた日本列島3万年の狩猟史」(第2講)、2021.5.14
- 国内、国武貞克・須藤隆司・堤隆・國木田大・佐藤宏之、「長野県佐久市香坂山遺跡の発掘調査—日本列島における石刃石器群の起源をめぐる調査研究—」、日本考古学協会第87回総会・研究発表、専修大学、2021.5.23
- 国内、佐藤宏之、「弥生から現代までの農耕社会の陥し穴猟」、朝日カルチャーセンター新宿教室「考古学からみた日本列島3万年の狩猟史」(第3講)、2021.6.25
- 国内、佐藤宏之、「IUP研究の現状と香坂山：日本列島後期旧石器時代の成立に関する展望」、第1回香坂山遺跡研究会『列島最古の石刃石器群を求めて』、佐久市、2021.6.26
- 国内、佐藤宏之、「日本の細石刃文化」、朝日カルチャーセンター新宿教室「旧石器から縄文へ Part 2」(第1講)、2021.7.23
- 国内、佐藤宏之、「神子柴の墓」、朝日カルチャーセンター新宿教室「旧石器から縄文へ Part 2」(第2講)、2021.9.10
- 国内、佐藤宏之、「前田耕地遺跡とサケマス漁の始まり」、朝日カルチャーセンター新宿教室「旧石器から縄文へ Part 2」(第3講)、2021.9.10
- 国内、佐藤宏之、「IUP研究と石刃技法」、朝日カルチャーセンター新宿教室「現生人類ホモ・サピエンスの登場—最新の考古学から見た4万年前の日本」(第1講)、2021.10.22
- 国内、佐藤宏之、「日本列島後期旧石器時代の成立に関する展望」、日本旧石器学会普及講演会、オンライン、2021.10.23
- 国内、佐藤宏之、「モヴィウス・ラインの形成とアジアの地域文化圏」、朝日カルチャーセンター新宿教室「現生人類ホモ・サピエンスの登場—最新の考古学から見た4万年前の日本」(第2講)、2021.11.26
- 国際、Kunitake, S., Huzhageldiyev, T., Kunikita, D., Sato, H., 「2019 excavation report on the Khudjy site at the southern foot of the Zeravshan Mountains in southern Tajikistan」、The 10th Meeting of the Asian Paleolithic Association、中国鄭州市オンライン、2021.12.4
- 国内、佐藤宏之、「最古の日本の歴史：3つの日本文化」、第254回文化交流研究懇談会、東大文学部オンライン、2021.12.9
- 国内、佐藤宏之、「常呂における地域連携の歴史と成果」、東大基金寄付者特別セミナー、オンライン、2021.12.16
- 国内、佐藤宏之、「日本列島現生人類文化の出現と形成」、朝日カルチャーセンター新宿教室「現生人類ホモ・サピエンスの登場—最新の考古学から見た4万年前の日本」(第3講)、2021.12.17
- 国内、佐藤宏之、「脳の巨大化と肉食の意義」、朝日カルチャーセンター新宿教室「私たちは何を食べてきたか？ 旧石器時代と縄文時代の食料事情」(第1講)、2022.1.28
- 国内、佐藤宏之、「旧石器時代の食事情」、朝日カルチャーセンター新宿教室「私たちは何を食べてきたか？ 旧石器時代と縄文時代の食糧事情」(第2講)、2022.2.18
- (5) 総説・総合報告
- 佐藤宏之、「夏の本郷・常呂」、『令和元年度文学部夏期特別プログラム報告書』、2020
- 佐藤宏之、「北東アジア考古学の蓄積を世界と地域に還元する！：人文学における国際的地域・社会連携の推進」、『東大×SDGs：先端知からみえてくる未来のカタチ』、2021.3
- 佐藤宏之、「加藤晋平先生と北方ユーラシア学会」、『しんぺい牧場の仲間たち 加藤晋平先生卒寿記念文集』、56-58頁、2021.5
- 佐藤宏之、「旧石器遺跡の保護と史跡整備」、『考古学ジャーナル』、764、1頁、2022.2
- (6) 受賞
- 国内、佐藤宏之、令和3年度 教育功労者(社会教育)表彰、神奈川県教育委員会、2021.12.1

3. 主な社会活動

(1) 行政

- 北海道北見市、常呂遺跡史跡整備専門委員会、委員長、2015.9～
- 考古調査士資格認定機構、資格審査専門委員会、委員長、2016.4～
- 神奈川県教育委員会、神奈川県文化財保護審議会、会長、2016.4～
- 明治大学黒曜石研究センター、運営委員会、委員、2019.6～

大学改革支援・学位授与機構、国立大学教育研究評価委員会、研究計画立案監理、委員、2020.2～2021.3
沖縄県教育委員会、白保竿根田原洞穴遺跡保存活用計画策定委員会、立案、副委員長、2020.12～
千葉県酒々井町、墨古沢遺跡整備活用計画策定委員会、立案、委員長、2021.6～
山形県高島町、日向洞窟遺跡調査検討委員会、研究計画立案監理、委員長、2021.7～
東京都小平市、鈴木遺跡保存活用計画策定委員会、立案、委員長、2021.10～

(2) 学会

Asian Paleolithic Association、副会長、2021.3～
日本考古学協会、副会長、2020.7～
日本旧石器学会、会長、2020.7～
日本学術会議、第25期史学委員会、連携会員、2020.10～
文化庁文化審議会文化財分科会、第三専門調査会、委員、2016.3～

教授 **設楽 博己** SHITARA, Hiromi

1. 略歴

1974年3月	群馬県立前橋高等学校卒業
1974年4月	静岡大学人文学部人文学科入学
1978年3月	静岡大学人文学部人文学科卒業
1978年4月	静岡大学人文学部人文学科研究生
1979年3月	静岡大学人文学部人文学科研究生修了
1979年4月	筑波大学大学院歴史人類学研究科文化人類学専攻博士課程入学
1986年3月	筑波大学大学院歴史人類学研究科文化人類学専攻単位取得退学
1986年4月	筑波大学大学院歴史人類学研究科文化人類学専攻研究生
1987年12月	筑波大学大学院歴史人類学研究科文化人類学専攻研究生修了
1988年1月	国立歴史民俗博物館考古研究部助手
1996年4月	国立歴史民俗博物館考古研究部助教授
2004年4月	駒澤大学文学部歴史学科助教授
2006年12月	博士（文学）取得（筑波大学）
2007年4月	駒澤大学文学部歴史学科教授
2010年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授
2021年3月	定年退職

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本考古学

b 研究課題

- (1) 縄文時代から弥生時代への移行問題の研究
- (2) 縄文・弥生時代の葬墓制の研究
- (3) 縄文・弥生時代の通過儀礼の研究

c 概要と自己評価

上記の(1)に関して、2016年度より科学研究費基盤研究(A)「東日本における食糧生産の開始と展開の研究—レブリカ法を中心として—」のテーマで、植物種子圧痕の研究を基軸に、東日本を中心とした農耕文化複合の形成の特質を東アジア的な視野から分析することを目指した。2018年度は最終年度であり、総括をおこなった。(2)に関して、愛知県田原市保美貝塚の発掘調査を行い、盤状集骨という特異な埋葬を検出し、調査し縄文晩期の葬墓制の特質を明らかにする手掛かりを得たが、その結果をまとめつつある。(3)に関して、2019年度より科学研究費基盤研究(C)「土製耳飾

りの集成と分析による縄文時代の社会組織と儀礼へのアプローチ」のテーマで、縄文時代の土製耳飾りから当時の社会にせまる研究を開始した。

d 主要業績

(1) 論文

設楽博己、「土偶よもやま話―第1回 黥面土偶と有髻土偶」、『My 舍人倶楽部』、29、4-5 頁、2020.1

設楽博己、「弥生再葬墓」批判にこたえる」、『季刊考古学』、150、154-160 頁、2020.2

設楽博己、「千葉県安房神社洞窟遺跡の土器と抜歯の年代と系譜」、『世界と日本の考古学―オリブの林と赤い台地―』、六一書房、303-315 頁、2020.3

設楽博己、「土偶よもやま話―第3回 ダブルハの字文の土偶」、『My 舍人倶楽部』、30、4-5 頁、2020.4

設楽博己、「土偶よもやま話―第2回 縄文人の入墨の検証」、『My 舍人倶楽部』、30、4-5 頁、2020.4

設楽博己・近藤修・米田穰・平林大樹、「長野県生仁遺跡出土抜歯人骨の年代をめぐって」、『物質文化』、100、95-104 頁、2020.5

設楽博己、「縄文時代・弥生時代のはじまりの年代について」、『歴史と地理』、733、40-46 頁、2020.6

國木田大・佐々木由香・綿田弘実・松崎浩之・設楽博己、「縄文時代中期の遺構から出土した炭化米とオオムギの分析―長野県中野市千田遺跡の資料をめぐって―」、『長野県考古学会誌』、160、173-184 頁、2020.9

設楽博己、「土偶よもやま話―第4回 縄文土偶の名前」、『My 舍人倶楽部』、32、4-5 頁、2020.10

設楽博己、「食料生産と土器組成」、『酒井清治先生古稀記念 生産の考古学Ⅲ』、47-65 頁、2020.12.10

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

朝日カルチャーセンター横浜、「唐古鍵遺跡・纏向遺跡」「向ヶ岡貝塚」「砂沢遺跡・垂柳遺跡・有珠モシリ遺跡」、『弥生時代の遺跡 最新の発掘情報とその意義』、2020.1～2020.3

非常勤講師、國學院大学大学院、「先史考古学特論」、2020.4～2021.3

非常勤講師、駒澤大学大学院、「考古学特講」、2020.4～2021.3

委嘱教授、放送大学、「考古学」、2020.4～2021.3

朝日カルチャーセンター横浜、「世界の土偶、日本の土偶」「土偶から復元する縄文人のいでたち」「縄文人の入墨―黥面土偶とはなにか―」「土偶はこわしたのかこわれたのか」「土偶の性別」「土偶のその後」、『縄文土偶の魅力を語る』、2020.7～2020.11

准教授 **福田 正宏** FUKUDA, Masahiro

1. 略歴

1997年3月 筑波大学第一学群人文学類考古学・民俗学主専攻卒業
1997年4月 筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科文化人類学専攻入学
2003年3月 筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科文化人類学専攻単位取得退学
2003年4月 日本学術振興会特別研究員 (PD) (東京大学大学院人文社会系研究科)
2006年2月 東京大学大学院人文社会系研究科・博士 (文学) 授与
2006年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助手 (～2007年3月)
2007年10月 東北芸術工科大学東北文化研究センター博士研究員
2008年4月 東北芸術工科大学芸術学部歴史遺産学科専任講師
2012年4月 東京大学大学院新領域創成科学研究科准教授
2015年4月 東京大学大学院新領域創成科学研究科特任准教授
2015年12月 九州大学大学院人文科学研究院助教
2017年4月 九州大学大学院人文科学研究院准教授
2018年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

東北アジア考古学、先史考古学、人類環境適応史

b 研究課題

- (1) 東北アジア新石器時代の環境適応形態に関する構造論的研究
- (2) 日露国境地帯の考古学
- (3) 環日本海北部地域における完新世先史文化変遷の通時的解明

c 概要と自己評価

上記の研究課題 (1)・(2) に関連して、2018 年度から科研費・基盤研究 (B)「東北アジアにおける温帯性新石器文化の北方拡大と適応の限界」(2018~2021 年度) プロジェクトを開始した。研究課題 (1) では、ロシア国内の教育・研究機関 (サハリン国立大学・ハバロフスク地方郷土誌博物館・ハバロフスク地方歴史文化遺産保護センター等) と連携し、アムール流域・サハリン島の新石器時代遺跡群における国際共同発掘調査を実施した。研究課題 (2) では、2019 年度から稚内市教育委員会・人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設・サハリン国立大学考古学教育博物館と連携し、北海道宗谷地方における縄文時代遺跡群の実態調査を実施した。研究課題 (1)・(2) に関連して実施した発掘調査及び関連資料分析調査に関しては、2010・2021 年度に総合研究報告書『東北アジアにおける温帯性新石器文化の北方拡大と適応の限界 (I) ~ (III)』を3部刊行し、その成果を公開した。研究課題 (3) では、土器出現期~中世の環日本海北部地域における通史を叙述すべく、完新世初頭 (新石器時代前期) 及び紀元前2千年紀 (新石器時代古金属器時代移行期) の中国東北部-ロシア極東-東シベリア-北海道 (道東北) における広域編年構築と域外交流メカニズムの解明に取り組んだ。なお研究課題 (2)・(3) に関連して、研究対象を絞り込んだ国際共同調査を実施する必要性が生じたため、2021 年度から科研費・国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化 (B))「日露共同調査によるサハリン新石器時代社会形成過程の解明」(2021~2026 年度) プロジェクトを開始した。

d 主要業績

(1) 著書

共著、小田裕樹・小澤佳憲・西江幸子・栗畑光博・渡邊誠・石田智子・主税英徳・齊藤希・丹羽崇史・徳留大輔・福田正宏・松本圭太・Amgalantugs Tsend・Ishteren Lochin・李作婷・主税和賀子・辻田淳一郎・岩永玲・上條信彦・村の正景・藤岡悠一郎・米元史織・佐藤廉也・堤研二、『持続する志 下-岩永省三先生退職記念論文集-』、中国書店、2021.3

(2) 論文

Fukuda, M., Shevkomud, I. Ya., Kunikita, D., Dyakonov, V. M., Gorshkov, M. V., Gabrilchuk, M. A., 「Syalakh-type pottery at the Dalzha-2 site in the Amur river mouth.」、『Записки Гродековского музея』、39、84-94 頁、2020.9

장은혜・후쿠다 마사히로、 「아무르하류역 출현기토기 연구」、『한국신석기연구』、40、63-94 頁、2020.12

福田正宏・ガブリルチュク, M・夏木大吾・國木田大・張恩惠・ゴルシュコフ, M・森先一貴・佐藤宏之・熊木俊朗、 「ユダヤ自治州新石器時代ビジャン4遺跡出土の新資料—2017・2018 年度試掘調査出土遺物の分析結果報告—」、『東京大学考古学研究室研究紀要』、34、107-130 頁、2021.3

Fukuda, M., Gabrilchuk, M. A., Kunikita, D., Uchida, k., Jang, E., Yanshina, O. V., Natsuki, D., Gorshkov, M. V., Shevkomud, I. Ya., 「Radiocarbon dates in the Neolithic East Amur River basin」、『Northern Expansion of Temperate Neolithic Culture in Northeast Asia and Adaptation Limitations』、III、122-155 頁、2022.2

(3) 解説

森貴教・福田正宏、「中世7 元寇防塁 (箱崎) 外寇に備えた博多湾東部の石築地」、『新修 福岡市史 資料編 考古2 遺跡からみた福岡の歴史—東部編—』、2020.3

(4) 学会発表

国際、福田正宏、「ロシア極東先史文化と周辺地域—日露共同研究の最新成果にもとづいて—」、동아시아 SAP 융합 인제 양성 사업팀 講演会、釜山大学校 (オンライン)、2021.2.24

国内、福田正宏、「ロシア極東の竪穴住居群と北海道について—大陸河川氾濫原の遺跡保存状態と竪穴—」、令和2年度 (2020 年度) 第2回北海道東部の竪穴住居群調査懇談会、北海道教育庁 (オンライン)、2021.3.24

国内、福田正宏、「極東ロシアの考古学と日本列島—日露国際共同研究の最前線—」、歴史を語る③、松戸市立博物館、2021.12.4

(5) 啓蒙

福田正宏、「アムールの遺跡と川魚の話」、『My 舎人倶楽部』、35、2021.7

(6) 研究報告書

福田正宏・萩野はな（編）、「東北アジアにおける温帯性新石器文化の北方拡大と適応の限界（I）—北海道宗谷地方における縄文時代遺跡群の実態調査 2019 年度成果報告書—」、2020.4

福田正宏・ガブリルチュク, M・張恩恵（編）、「東北アジアにおける温帯性新石器文化の北方拡大と適応の限界（II）—ルチェイキ 1 遺跡の研究—」、東京大学常呂実習施設研究報告第 20 集、2021.3

福田正宏・夏木大吾（編）「東北アジア東北アジアにおける温帯性新石器文化の北方拡大と適応の限界（III）—総括編—」、東京大学常呂実習施設研究報告第 21 集、2022.2

(7) マスコミ

「井浦新と知る、道内の縄文土器の進化のゆくえ。」、『Pen』、2021.4.15

3. 主な社会活動

(1) 行政

西東京市、下野谷遺跡整備指導委員会、委員、2020.3～

准教授 **根岸 洋** NEGISHI, Yo

1. 略歴

2002 年 3 月 東京大学文学部歴史文化学科考古学専修課程卒業
2002 年 4 月 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 期限付調査員（～2003 年 3 月）
2003 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻考古学専門分野修士課程入学
2005 年 4 月 明治大学校地内遺跡調査団 短期嘱託職員（～2006 年 3 月）
2006 年 3 月 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻考古学専門分野修士課程修了
2006 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻考古学専門分野博士課程進学
2006 年 4 月 日本学術振興会 特別研究員（DC1）（東京大学大学院人文社会系研究科）（～2009 年 3 月）
2010 年 3 月 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻考古学専門分野博士課程単位取得満期退学
2010 年 4 月 青森県教育庁文化財保護課 文化財保護主事（～2014 年 8 月）
2010 年 12 月 東京大学大学院人文社会系研究科・博士（文学）授与
2014 年 9 月 国際教養大学地域環境研究センター 助教（～2015 年 3 月）
2015 年 4 月 国際教養大学アジア地域研究連携機構・国際教養学部 助教（～2019 年 3 月）
2019 年 4 月 国際教養大学アジア地域研究連携機構・国際教養学部 准教授
2021 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

先史考古学（縄文・弥生時代）、民族考古学

b 研究課題

- (1) 縄文時代から弥生時代への移行に関する総合的研究
- (2) 新石器化・社会複雑化に関する考古学的研究
- (3) 土器製作伝統と生業形態に関する民族考古学的研究

c 概要と自己評価

上記の研究課題 (1) に関連して、2018 年度から科研費・若手研究「紀元前一千年紀前半の気候変動期における縄文晩期社会システムの変容プロセス」(2018～2020 年度) プロジェクトに取り組んできた。秋田県内における縄文晩期の集落遺跡の発掘調査を実施し、研究成果を 2021 年 3 月に報告書として刊行した。また 2019 年度から三菱財団法人科学研究助成「縄文・弥生移行期の低湿地遺跡から復元する環境変動適応史」(2019 年～2020 年度) プロジェクトを開始し、低湿地環境に所在する縄文後・晩期の遺跡のボーリング調査と年代測定の成果を学術論文として刊行した。このほか集落・墓制・物質文化に関わる総合的な調査研究を実施し、その成果をまとめて単著として刊行した。研究課

題 (2) では、科研費・学術変革領域研究 (A) 「土器を掘る：22 世紀型考古資料学の構築と社会実装をめざした技術開発型研究」(2020～2024 年度) の研究分担者として、東日本における栽培植物出現の年代と文化変容の時期を解明するプロジェクトを開始した。また、データが大幅に不足していた縄文時代前半期の年代測定と土器編年構築に取り組んだほか、縄文時代・文化に関する比較考古学的研究の成果を韓国・ソウル市で開催された国際シンポジウム (2021 *International Symposium on Seoul Amsadong Site*) で発表した。研究課題 (3) では、オセアニアの新石器時代に相当するラピタ文化期の解明に取り組んだほか、環日本海地域に伝承されている丸木船・準構造船に関する民族考古学的研究を実施し、前近代における操船・漁撈・建造技術の解明に取り組んだ。

d 主要業績

(1) 著書

単著、根岸洋、『東北地方北部における縄文／弥生移行期論』、雄山閣、2020.7

共編著、熊谷嘉隆・成澤徳子・秋葉丈志・豊田哲也・根岸洋、『人口減少・超高齢社会と外国人の包摂—外国人労働者・日本語教育・民俗文化の継承—』、明石書店、2022.3

(2) 論文

Chynoweth, M., Summerhayes, G., Ford, A., Negishi, Y., Lapita on Wari Island: What's the Problem?, *Asian Perspectives: the Journal of Archaeology for Asia and the Pacific*, 59(1), 100-116 頁、2020.4

根岸洋・大上立朗、「東北地方における弥生前期・中期の碧玉製管玉」、『靱』、第 10 号記念号、159-163 頁、2021.3

根岸洋・大上立朗・太田圭・岡本洋、「宇鉄遺跡出土の碧玉製管玉に関する基礎的研究」、『青森県立郷土館研究紀要』、第 45 号、63-74 頁、2021.3

佐藤宏之・根岸洋、「陸奥湾および男鹿半島における木造船を用いた漁撈活動に関する民族考古学的研究」、『東京大学考古学研究室研究紀要』、第 34 号、73-84 頁、2021.3

根岸洋、「地下遺構と世界遺産」、『月刊文化財』、698、39-44 頁、2021.11

根岸洋・國木田大、小林謙一、「鏡田遺跡出土土器群の年代測定と炭素・窒素安定同位体比」、『秋田考古学』、64・65 号、37-48 頁、2021.12

根岸洋、「世界遺産を通してみる「縄文」」、『文化交流研究』、35、1-10 頁、2022.3

根岸洋・夏木大吾・國木田大、池谷信之、佐藤宏之、「津軽海峡周辺域における縄文時代早期の測定年代と黒曜石産地推定」、『東京大学考古学研究室研究紀要』、35、1-24 頁、2022.3

根岸洋、「東北地方における弥生前期・中期の紡錘車」、『弥生布の出現と展開—紡錘車と布目圧痕—』、37-39 頁、2022.3

(3) 学会発表

国内、根岸洋・西村広経・隈元道厚・関根有一朗・國木田大、「上新城中学校遺跡における縄文晩期後半の溝跡 (木柵跡) とその評価」、日本考古学協会第 86 回総会研究発表 (紙上発表)、2020.6

国内、根岸洋、「外部人材がナマハゲになれるか?—現状と課題の整理—」、異文化間教育学会第 41 回大会公開シンポジウム『「ナマハゲ」と「なまはげ」—地域創生から考える異文化間教育—』、国際教養大学 (オンライン開催)、2020.6.14

国内、根岸洋、「亀ヶ岡社会の変容」、第 9 回青森県考古学会村越潔賞受賞記念講演、2021.6.26

国際、Negishi, Y., Challenges of 'Jomon Prehistoric Sites in Northern Japan': Cultures, OUV and Landscape. 2021 *International Symposium on Seoul Amsadong Site*、岩寺洞先史遺跡博物館 (オンライン)、2021.10.8

国内、根岸洋・成澤徳子、「伝統行事における包摂と継承」、シンポジウム「人口減少社会における包摂と継承—『最先端』秋田からの提言」、国際教養大学 (オンライン)、2021.12.18

(4) 啓蒙

国内、根岸洋、「縄文を語る意義—世界遺産を巡る言説—」、第 59 回文化交流茶話会、2021.6.3

国内、根岸洋、「文化的多様性」を示した「(縄文遺跡群) 世界遺産登録識者談話」、『東奥日報』、2021.7.29

(5) 研究報告書

根岸洋 (編)、『紀元前一千年紀前半の気候変動期における縄文晩期社会システムの変容プロセス』、国際教養大学アジア地域研究連携機構第 5 集、2021.3

(6) 総説・総合報告

根岸洋・上野祐依・熊谷嘉隆、「秋田の竿灯」と外部参加者に関する基礎的検討、『国際教養大学アジア地域研究連携機構研究紀要』、11、111-120 頁、2020.7

根岸洋、「5 秋田県」、『日本考古学年報』、72 (2019 年度版)、79-81 頁、2020.11

村山めい子・相沢陽子・根岸洋、「秋田のクルーズ観光：秋田港の訪日クルーズ客の調査」、『国際教養大学アジア地域研究連携機構研究紀要』、12、1-34 頁、2021.3

根岸洋・熊谷星・北畑有紀乃、「秋田竿燈まつりへの外国人の参加」、『国際教養大学アジア地域研究連携機構研究紀要』、12、63-72 頁、2021.3

根岸洋、「弥生時代—東北—」、『考古学ジャーナル』、755、43-44 頁、2021.6

根岸洋・成澤徳子、「伝統行事における継承と包摂」、『国際教養大学アジア地域研究連携機構研究紀要』、14、29-36 頁、2022.3

(7) 受賞

国内、根岸洋、第9回青森県考古学会村越潔賞、青森県考古学会、2021.6.26

(8) 翻訳

ジョン・モック（根岸洋訳）、「秋田竿燈まつりとの関わり—地域連携と異文化間コミュニケーション」、『人口減少・超高齢社会と外国人の包摂—外国人労働者・日本語教育・民俗文化の継承』、287-290 頁、明石書店、2022.3

(9) 受託研究

日本学術振興会「課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業」、「人口減少社会における包摂と継承—「最先端」秋田からの提言」、研究分担者、2018.10～2022.3

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

朝日カルチャーセンター横浜、「世界遺産と『北海道・北東北の縄文遺跡群』」、2021.8.27

日経カルチャーセミナー、「縄文—JOMON—を知る」、「世界から見た”Jomon”の特徴と価値」、2021.9.24

さんまる縄文学講座、「『縄文社会』とは何か—13,000年間に及ぶ狩猟・漁撈・採集社会—」、2021.11.13

(2) 行政

青森県教育委員会、三内丸山遺跡発掘調査委員会、委員、2017.5～

秋田市、秋田城跡歴史資料館協議会、委員、2017.4～2021.3

男鹿市教育委員会、史跡協本城跡調査整備委員会、委員、2017.4～2021.3

北海道・青森県・秋田県・岩手県、縄文遺跡群世界遺産登録推進会議担当者会議 4 道県分科会作業 WG、外部委員、2016.4～2021.3

秋田県・男鹿市・湯沢市・八峰町・大潟村、秋田県ジオパーク連絡協議会研究統括会、専門委員、2015.5～2021.3

03 美術史学

教授 秋山 聰 AKIYAMA, Akira

1. 略歴

- 1986年3月 東京大学文学部美術史学専修課程卒業（文学士）
- 1989年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（文学修士）
- 1997年2月 フライブルク大学哲学部 Ph.D
- 1997年4月 電気通信大学電気通信学部助教授（～1999年3月）
- 1999年4月 東京学芸大学教育学部助教授（～2006年3月）
- 2006年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
- 2007年4月 同上准教授
- 2011年3月 同上教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

西洋美術史

b 研究課題

デューラーを中心とした中近世ドイツ美術、聖遺物と美術との相関性、イメージ（像）の生動性、比較宗教美術史、造形物の記述に関する文化史的研究、人文学の成果・蓄積を応用しての地域連携活動

c 概要と自己評価

2018年度から副研究科長・教育研究評議員を、2020年度から研究科長を務めたため、研究に割ける時間は激減したが、引き続き、宗教的な宝物や宮廷宝物についての比較美術史的研究を、美術と宝物との相関性および宮廷における宗教文化を意識しつつ展開した。また聖地形象や造形物および風景等の記述等についても比較宗教美術史的考察をも展開した。

さらに、部局の教育事業の展開と並行する形で、主として熊野地方をベースとして、人文学の成果・蓄積を応用・活用した地域連携活動を試行しており、新宮市や山形県鶴岡市羽黒町等において、地域の歴史・伝統に関わる市民フォーラムないし研究集会を組織するとともに、異なる地域を人文学的トピックによって繋ぐことによる地域振興を試みた。社会実装とまではいかないものの、人文学における研究成果の効率的な社会発信に向けて一定の寄与をなしたものと考えている。

d 主要業績

(1) 著書

共編著、Akira Akiyama・Giuseppe Capriotti/Valentina Zivkovic, "The Mystical Mind as a Divine Artists: Visions, Artistic Production, Creation of Images through Empathy", in: *MOTION: TRANSFORMATION: 35th Congress of the International Committee of the History of Art*, Bologna 2021, pp.18-21

共編著、秋山聰／田中正之（編）、『西洋美術史（美術出版ライブラリー 歴史編）』、美術出版社、2021.12、432pp
分担執筆、秋山聰、「夢ないし幻視における像の生動性についての比較美術史的考察」、『聖性の同質性』、三元社、2022.3、pp.219-245

分担執筆、秋山聰、「聖なるモノの来し方、行く末—協会宝物をめぐって」、『宗教遺産テキスト学の創成』、勉成出版、2022.3、pp.379-395

(2) 論文

秋山聰、「聖像と聖なるモノのエージェンシー：比較宗教美術史の試み」、『青山学院大学文学部紀要』62、2020

秋山聰、「聖像/偶像のエージェンシーをめぐるノート」、『西洋美術研究』20、2020.9、pp.144-164

秋山聰、「造形イメージの着装についての若干の考察—比較宗教美術史学的観点から」、『言語文化』38、2021.3、pp.24-37

秋山聰、「聖像と観者とのインタラクティブな関係をめぐって—比較宗教美術史学的観点から」、『美術史論叢』37、2021、pp.76-70

(3) 学会発表等

国際、Akira Akiyama, Keynote Lecture I: Emperor's Body and regalia from comparative perspectives, Staging the Ruler's Body in Medieval Cultures: A Comparative Perspective, Online Graduate Workshop and International Conference, University of Fribourg, Switzerland, 23.11.2021

(4) 翻訳

秋山聰／太田泉フロランス共訳、マデリン・キャヴィネス、「ザクセンシュペーゲル彩飾写本における女性とマイノリティ」、『日本学士院紀要』、72 巻特別号、7-48 頁、2018.3

(5) 研究テーマ

科学研究費補助金、基盤研究 (B) 秋山聰、研究代表者、「中世宝物の贈与・寄進に関する比較美術史学的研究」、2018～2020

科学研究費補助金、基盤研究 (B) 秋山聰、研究代表者、「形象の記述・記録についての比較美術史学的研究」、2021～2024

3. 主な社会活動

(1) 学会等

美術史学会、常任委員、2018.4～、事務局長、2019.6～2021.5

地中海学会、常任委員、2018.4～

国際美術史学会 (CIHA) 委員、2021.4～

日本学術会議、連携会員、2018.4～

Art in Translation 誌 (英国)、Advisory Board、2018.4～

Iconographica 誌 (イタリア)、Advisory Board 2018.4～

准教授 **高岸 輝** TAKAGISHI, Akira

1. 略歴

1990年4月 東京藝術大学美術学部芸術学科入学
1994年3月 同上 卒業
1994年4月 東京藝術大学大学院美術研究科日本・東洋美術史専攻修士課程入学
1996年3月 同上 修了
1996年4月 東京藝術大学大学院美術研究科美術専攻博士後期課程入学
2000年3月 同上 修了、博士 (美術) の学位取得
2000年4月 日本学術振興会特別研究員 (PD) (～2003年3月)
2004年4月 財団法人大和文華館学芸部部員 (～2005年9月)
2005年10月 東京工業大学大学院社会理工学研究科価値システム専攻助教授 (～2007年3月)
2007年4月 同上 准教授 (～2012年3月)
2012年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授 (～2022年3月)

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本美術史、主として中世絵画史

b 研究課題

中世やまと絵の研究、絵巻および絵師組織の研究、美術史学における人文情報学手法の導入、中世絵画の復元的考察、海外所在日本美術コレクションの調査研究

c 概要と自己評価

海外における最大の日本美術コレクションであるボストン美術館において、絵巻の悉皆調査を行った成果に基づき『ボストン美術館日本美術総合調査図録』を刊行した。本書は、過去30年以上にわたって同美術館と鹿島美術財団の協働によって行われてきた国際学術調査を総括するものであり、監修者としてボストン美術館との折衝などの実務を担当した。日本美術史の国際的展開に関しては、フランス国立美術史研究所 (INHA) 主催のフォンテーヌブロー美術史フェスティバルにおいて日本側実行委員を務め、リモート開催された会議のチェアや報告のほか、フォンテーヌブロー宮で再発見された江戸幕末の外交贈答品に関する展覧会の学術委員および図録執筆を担当した。このほか、日本画・日本史・風俗史との協働による中世屏風の復元的研究の出版、中世絵巻の展覧会に関わる作品研究、中世絵師の活動に関する文献的考察、IIIF画像を活用した絵巻の様式比較プラットフォームの開発に携わった。

d 主要業績

(1) 著書

共編著、岩永てるみ・阪野智啓・高岸輝・小島道裕編、『「月次祭祀図屏風」の復元と研究—よみがえる室町京都のかげやき』、思文閣出版、2020.5

共著、高岸輝、『国宝粉河寺縁起と粉河寺の歴史』、和歌山県立博物館、2020.10

編著、板倉聖哲・高岸輝編、『日本美術のつくられ方—佐藤康宏先生の退職によせて』、羽鳥書店、2020.12

共著、高岸輝ほか、『〈作者〉とは何か：継承・占有・共同性』、岩波書店、2021.3

共著、Akira Takagishi, Art et Diplomatie: Œuvres Japonaises du Château de Fontainebleau, Éditions Faton, 2021.6

共著、高岸輝ほか、『文化資源学 文化の見つけかたと育てかた』、新曜社、2021.10

(2) 論文

高岸輝、「融通念仏縁起絵巻」明徳版本の版行・摺写と表現、『学苑』、961、330-334 頁、2020.11

高岸輝、「美術史／日本史の境界と越境の可能性—展覧会・美術全集・デジタル画像—」、『日本史研究』、700、28-44 頁、2020.12

Chikahiko Suzuki, Akira Takagishi, Asanobu Kitamoto, Style Comparative study of Japanese medieval picture scrolls focusing on landscapes using GM Method with IIIF Curation Platform, JADH2021, pp.16-21 2021.9

(3) 解説

高岸輝、「王権と絵画—美術をめぐる権力構造」、『美学の事典』、丸善出版、244-245 頁、2020.12

高岸輝、「融通念仏縁起絵巻（禅林寺本）」、『国華』1511、71-73 頁、2021.9

(4) 学会発表

国内、高岸輝、「伝統技術と最新技術で古美術を復元する」、東京大学芸術創造連携研究機構発足シンポジウム「学問と芸術の協働—アートで知性を拡張し、社会の未来を開く—」、東京大学芸術創造連携研究機構、2021.3.21

国際、高岸輝、「王者の絵画と御用絵師 1000 年の終焉—10 幅の掛軸をめぐる—」、シンポジウム「再発見！フォンテーヌブロー宮殿の日本美術—徳川幕府からフランス皇帝への贈り物—」、日仏会館、2021.4.17

国際、高岸輝、「絵巻に描かれた「喜び」—古代中世の夢告・法悦・救済・奇瑞—」、フォンテーヌブロー美術史フェスティバル、ラウンドテーブル「日本美術における〈喜び〉とその表現」、フランス国立美術史研究所 (INHA)、2021.6.5

国際、高岸輝、「王者の絵画と御用絵師 1000 年の終焉—将軍徳川家茂から皇帝ナポレオン 3 世に贈られた 10 幅の掛軸をめぐる—」、フォンテーヌブロー美術史フェスティバル、ラウンドテーブル「美術と外交、フォンテーヌブロー宮殿日本美術コレクション展」、フランス国立美術史研究所 (INHA)、2021.6.6

国内、高岸輝、「多巻構成の絵巻における絵師の分担に関する検討—「顔コレ」と GM 法導入による「遊行上人縁起絵巻」(清浄光寺甲本) の比較を通じて」、第 15 回 CODH セミナー「IIIF と AI で変わる美術史研究—大規模顔貌データの様式分析から読み解く日本中世絵巻」、人文学オープンデータ共同利用センター (CODH)、2021.7.29

国内、高岸輝、「日本中世における顔を隠す表現とその意味—絵巻を素材として—」、第 21 回 文化資源学フォーラム「顔を隠す—日本中世の絵巻と現代の映え写真から見る、表現と社会」、東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究室、2021.12.19

国内、高岸輝、「紀伊国の縁起絵巻と耕雲の役割」、応永・永享期文化論研究会「室町前期の寺院史料」、国際日本文化研究センター、2022.3.26

(5) 啓蒙

高岸輝、「私の気になる細川家の一点「細川澄元像」—動乱の時代に踏みだす貴公子の哀愁』、『季刊永青文庫』、112、26-27 頁、2020.9

(6) 予稿・会議録

国際会議、Alexis Mermet, Asanobu Kitamoto, Chikahiko Suzuki, Akira Takagishi, Face Detection on Pre-modern Japanese Artworks using R-CNN and Image Patching for Semi-Automatic Annotation, SUMAC'20: Proceedings of the 2nd Workshop on Structuring and Understanding of Multimedia heritAge Contents, pp.23-31, 2020

国内会議、鈴木親彦、高岸輝、本間淳、Alexis Mermet、北本朝展、「日本中世絵巻における性差の描き分け—IIIF Curation Platform を活用した GM 法による『遊行上人縁起絵巻』の様式分析」、『じんもんこん 2020 論文集』、67-74 頁、2020.12

(7) 研究報告書

高岸輝、梅沢恵、「ボストン美術館所蔵日本美術品調査図録刊行（「美術普及振興」研究報告）」、『鹿島美術財団年報』37、663-666 頁、2020.11

(8) 監修

辻惟雄・アン・ニシムラ・モース・高岸輝編、『ボストン美術館 日本美術総合調査図録』、中央公論美術出版、2022.3

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、慶應義塾大学文学部、「美術史特殊講義（日本絵巻史）」、2021.4～

特別講演、唐招提寺・一般財団法人律宗戒学院、「鑑真和上の風景—「東征伝絵巻」に描かれた中国と日本—」、2021.6

(2) 学会

国内、日本歴史学会、評議員、2018.7～

国内、美術史学会、常任委員、2019.6～

国際、国際美術史学会、代理委員、2021～

(3) 行政

人間文化研究機構 国文学研究資料館、運営会議委員、2016.4～2022.3

公益財団法人 阪急文化財団、文化財修理事業専門委員、2020.10～

准教授 **増記 隆介** MASUKI, Ryusuke

1. 略歴

1993 年 4 月 東京大学教養学部文科三類入学
1995 年 4 月 東京大学文学部歴史文化学科美術史学専修課程進学
1997 年 3 月 同上 卒業
1997 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻美術史学専門分野修士課程入学
1999 年 3 月 同上 修了
1999 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻美術史学専門分野博士課程進学
1999 年 4 月 同上 退学
1999 年 4 月 財団法人大和文華館学芸部員（～2004 年 9 月）
2002 年 4 月 神戸大学大学院文化科学研究科客員助教授（～2004 年 9 月）
2004 年 10 月 文化庁文化財部美術学芸課文化部科学技官（絵画部門）（～2009 年 6 月）
2007 年 10 月 文化庁文化財部古墳壁画室併任（～2013 年 9 月）
2009 年 7 月 文化庁文化財部美術学芸課文化財調査官（絵画部門）（～2013 年 9 月）
2013 年 10 月 神戸大学大学院人文学研究科准教授
2016 年 11 月 博士（文学）学位取得（東京大学）
2019 年 9 月 コロンビア大学客員教授（～2019 年 12 月）
2021 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本美術史 おもに日本古代・中世仏教絵画史

b 研究課題

仏教絵画史における日中交流の研究、仏教絵画と世俗画との相関関係に関する研究

c 概要と自己評価

近年は、仏教絵画において技法が有する宗教的意味と地域におけるその変容について関心を持って研究を進めている。その成果としては、東京国立博物館「普賢菩薩像」(平安時代・12世紀)や仁和寺「孔雀明王像」(北宋・11世紀)に関する論考があげられる。これらの調査研究については、科学研究費基盤研究(C)を得るとともに、京都大学人文科学研究所、九州大学等の研究プロジェクトに参加することでその成果を広く共有している。

また、文化庁文化財調査官としての勤務経験を生かして、国、及び地方公共団体における文化財調査や文化財指定・保護に関する委員会の委員を多く務めるとともに、文化財修理に関する歴史的な検証、その成果を実際の文化財修理に役立てるプロジェクトへの参加を行なっている。さらに美術史学会全国大会シンポジウムのチェアとして「修理と美術史学」を企画、運営し、修理が有する歴史と現在の意義を学会規模の共通認識へと広げている。

あわせて、東京国立博物館における特別展「鳥獣戯画のすべて」の開催に関わり、従来の仏教絵画史研究に加えて、「鳥獣戯画」を中心とした平安時代の絵巻研究、就中、後白河院による蓮華王院宝蔵の絵画コレクションの成立と崩壊について、美術史学の視点から研究を進めた。その成果については、広く市販されている『別冊太陽』として公刊するとともに、仏教文学会等、他分野の学会からの招聘を受けてシンポジウムにおける発表、『仏教文学』への投稿等を通じて広く周知している。また、コロンビア大学において教鞭をとるとともに、同大学における一般向けの講演会も実施し、研究成果を海外に発信している。今後も、技法の共有を通じた仏教絵画と世俗画との関わり、日本絵画史におけるコレクションの問題等に注目しながら研究を進める予定である。

d 主要業績

(1) 著書

共著、岩崎奈緒子、増記隆介ほか、『日本の表装と修理』、勉誠出版、2020.3

共著、土屋貴裕、増記隆介ほか、『鳥獣戯画』、東京国立博物館、2021.4

編著、増記隆介、『四天王寺所蔵 国宝扇面法華経冊子』、四天王寺、2021.9

(2) 論文

増記隆介、「平安時代の仏画制作とその修理」、『日本の表装と修理』、229-264頁、2020.3

増記隆介、「普賢菩薩の聖と俗 東京国立博物館普賢菩薩像の淡墨線をめぐって」、『日本美術のつくられ方 佐藤康宏先生の退職によせて』、3-29頁、2020.12

増記隆介、「仁和寺孔雀明王像とその周辺」、『アジア仏教美術論集 東アジアIII 五代・北宋・遼・西夏』、267-297頁、2021.3

増記隆介、「正倉院宝物と鳥獣戯画」、『特別展 国宝鳥獣戯画のすべて 図録』、418-419頁、2021.4

増記隆介、「十六羅漢図」、『国華』、1511、61-66頁、2021.9

増記隆介、「五島美術館蔵 駿牛図」、『国華』、1513、24-26頁、2021.11

増記隆介、「後堀河院の絵巻制作と蓮華王院宝蔵」、『コレクションとアーカイブ 東アジア美術研究の可能性』、263-297頁、2021.12

(3) 書評

山本聡美、『中世仏教絵画の図像誌』、吉川弘文館、『図書新聞』、2020.5

(4) 学会発表

国内、増記隆介、「鳥獣戯画とは何か」、神戸大学美術史研究会総会、2021.2.16

国内、増記隆介、「ガラス乾板から再現された法隆寺金堂壁画の美」、法隆寺講演会「国宝・法隆寺金堂の謎に迫る」、2021.2.20

国内、増記隆介、「正倉院宝物と鳥獣戯画」、連続講座 鳥獣戯画研究の最前線、東京国立博物館、2021.4.24

国内、増記隆介、「後白河院時代の絵画制作と宝蔵」、仏教文学会シンポジウム、2021.9.11

国内、増記隆介、「後白河院崩御後の蓮華王院宝蔵 宝蔵絵の去就をめぐる諸問題」、宝物とそのいれもの シンポジウム、2021.12.18

国内、増記隆介、「仏画四大展覧会 平安仏画・仏教の聖画・王朝の仏画と儀礼・美麗」、仏教芸術学会連続講座第一回、2022.2.20

(5) **研究報告書**

増記隆介ほか、「大乘寺文化財調査報告書 大乘寺の絵画」、2020.3

(6) **監修**

増記隆介、『別冊太陽 決定版 鳥獣戯画：「絵の原点」にふれる』、平凡社、2021.4

(7) **会議主催(チェア他)**

国内、「第74回 美術史学会全国大会」、実行委員、シンポジウム 修理と美術史学、神戸大学、2021.5.14～2021.5.16

(8) **マスコミ**

「京都の国宝」、『読売新聞』、2020.3.1

(9) **受賞**

国内、増記隆介、神戸大学優秀若手研究者賞、神戸大学、2020.11

3. 主な社会活動

(1) **他機関での講義等**

非常勤講師、関西学院大学、「平安仏画史」、2021.8

非常勤講師、京都市立芸術大学、「平安仏画史」、2021.8

(2) **学会**

国内、美術史学会、常任委員、2020.5～2021.4

国内、仏教芸術学会、運営委員、編集委員、2019.1～

国内、日本仏教総合研究学会、理事、2021.4～

(3) **行政**

文化庁、「高松塚古墳壁画保存管理施設（仮称）の設置にかかる基礎調査」ワーキンググループ委員、2020.4～

読売新聞東京本社、文化庁、宮内庁、「日本の美を守り伝える『紡ぐプロジェクト』文化財維持・修理助成事業」選考委員、2021.11～

滋賀県、文化財保護審議会委員、2021.8～

兵庫県、文化財保護審議会委員、2021.8～2022.7

京都府、暫定登録文化財調査主任調査員、2021.8～

04 哲学

教授 **納富 信留** NOTOMI, Noburu

1. 略歴

1987年3月	東京大学文学部第1類哲学専修課程卒業
1990年3月	東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻修士課程修了
1990年4月	同 博士課程進学 (1994年9月 退学)
1991年10月	ケンブリッジ大学大学院古典学部 Ph.D.コース入学
1995年10月	同大にて Ph.D.取得
1996年10月	九州大学文学部講師 (哲学・哲学史)
1998年4月	九州大学文学部、大学院人文科学研究院助教授 (哲学・哲学史)
2002年4月	慶應義塾大学文学部助教授 (哲学)
2006年3月	オランダ・ユトレヒト大学訪問研究員 (慶應義塾大学塾派遣留学: 2007年9月まで)
2007年4月	慶應義塾大学文学部准教授 (哲学)
2008年4月	慶應義塾大学文学部教授 (哲学)
2016年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

西洋古代哲学、西洋古典学

b 研究課題

西洋における哲学の成立を、古代ギリシア哲学の初期から後期にかけて、哲学史と古典文献学の手法を用いながら多角的に検討することを課題とする。主なテーマとして、(1) 紀元前5~4世紀の古典期アテナイの知的状況、具体的には、ソフィスト思潮、ソクラテス、ソクラテス文学、プラトン、イソクラテスら、(2) 初期のイオニアとイタリアの知的状況、および、(3) ヘレニズム期から古代後期にかけての継承と展開、を扱っている。それらの分析をつうじて、現代における「哲学」のあり方を根源から見直し、新たな視野を得ることを目的としている。

また、古代ギリシア哲学が、19世紀以降の日本や東アジアにどのように導入され、翻訳や研究をつうじて社会や思想に影響を与えてきたかという受容史、もテーマにしている。

c 概要と自己評価

これまで、(1)の古典期アテナイ哲学を研究の中心に据えて、複数の研究書など成果をまとめ、プラトン『ポリテイア』を中心とする「イデア論」の解明をより詳細に進めた。2021年3月に(1)と(2)の検討をまとめて、『ギリシア哲学史』(筑摩書房)として公刊したが、引き続き(3)の範囲の検討を続け、『続ギリシア哲学史』として出版する予定で研究を進めている。これらの作業をつうじて、ギリシアで哲学が誕生した前6世紀初めから終焉を迎えた後6世紀前半のローマ後期までの古代哲学の全体像を描くことになる。『ギリシア哲学史』は、姫路市主催の第34回和辻哲郎文化賞(学術部門)を受賞した(2022年3月6日、姫路文学館)。

また、哲学をより広く展開する「世界哲学・世界哲学史」のプロジェクトを国内外の研究者と共同で進めている。その成果は『世界哲学史』(ちくま新書、全8巻+別巻、2020年)として編集・執筆した。

d 主要業績

(1) 著書

- 共編著、『世界哲学史4—中世II 個人の覚醒』、伊藤邦武・山内志朗・中島隆博・納富信留編、ちくま新書、2020.4
- 共編著、『世界哲学史5—中世III バロックの哲学』、伊藤邦武・山内志朗・中島隆博・納富信留編、ちくま新書、2020.5
- 共編著、『世界哲学史6—近代I 啓蒙と人間感情論』、伊藤邦武・山内志朗・中島隆博・納富信留編、ちくま新書、2020.6
- 共編著、『世界哲学史7—近代II 自由と歴史的発展』、伊藤邦武・山内志朗・中島隆博・納富信留編、ちくま新書、2020.7
- 共編著、『世界哲学史8—現代 グローバル時代の知』、伊藤邦武・山内志朗・中島隆博・納富信留編、ちくま新書、2020.8
- 単著、『対話の技法』、笠間書院、2020.11

共編著、『世界哲学史 別巻—未来をひらく』、伊藤邦武・山内志朗・中島隆博・納富信留編、ちくま新書、2020.12
単著、『ギリシア哲学史』、筑摩書房、2021.3
単著、『西洋哲学の根源』(放送大学教材)、放送大学教育振興会、2022.3

(2) 論文

納富信留、「浄めとしてのオリンピック —エンペドクレスの奇跡」、『三田文学』142 夏季号 2020、三田文学会、196-200 頁、2020.8

納富信留、「大西祝の批評主義から見る『哲学雑誌』、『哲学研究』605号(特集:座談会 日本におけるアカデミズムの哲学史 —『哲学雑誌』と『哲学研究』の比較分析)、50-57 頁、2020.10

納富信留、「古代哲学をどう読むか —レオ・シュトラウスとプラトンと私」、『ひらく』4、89-98 頁、2020.11

納富信留、「哲学がうまれる」、葛西康徳、ヴァネッサ・カツァート編『古典の挑戦 —古代ギリシア・ローマ研究ナビ』、知泉書館、361-378 頁、2021.3

納富信留、「プラトン」(第1編 テーマ編)「プラトン」(第3編 人名編)、『ハイデガー事典』ハイデガー・フォーラム編、昭和堂、138-139、499 頁、2021.6

Noburu Notomi, “How Modern Japanese People Read Plato’s *Politeia*”, *Plato and His Legacy*, Yosef Z. Liebersohn, John Glucker, and Ivor Ludlam (eds.), Cambridge Scholars Publishing, 219-232 頁、2021.7

納富信留、「プラトン『パイドン』はどう読まれたか、どう読むべきか」、『西日本哲学会年報』29号、西日本哲学会編、41-64 頁、2021.10

Noburu Notomi, “Images and Imagination in Plato’s *Republic* and *Sophist*”, *The Journal of Greco-Roman Studies* 60-3, the Korean Society of Greco-Roman Studies, pp.1-15、2021.12

Noburu Notomi, “Plato, Isocrates and Epistolary Literature: Reconsidering the *Seventh Letter* in its contexts”, *Plato Journal* 23, International Plato Society, 67-79 頁、2022.3

納富信留、「ソフィストたちのオリンピック —文化・政治・哲学的意義—(シンポジウム: オリンピア—古典古代のからだとこころ—)、日本西洋古典学会編『西洋古典学研究』69、岩波書店、99-108 頁、2022.3

納富信留、「ギリシア哲学が直面した運命と偶然 —オイディプス、ソクラテス、アリストテレス—(特集1 運命と偶然)、『比較思想研究』第48号、比較思想学会、5-12 頁、2022.3

納富信留、「「真実の虚偽」とは何か? —プラトン『ポリテイア』の虚偽論序説—、東京大学大学院人文社会系研究科・文学部哲学研究室『論集』40号、1-20 頁、2022.3

(3) 書評

納富信留、「裏側にある制約 果敢に暴く」(木村覚著『笑いの哲学』)、『日本経済新聞』、2020.9.26

(4) 学会発表

国際、Noburu Notomi, “Socrates among the sophists: reconsidering his position in the fifth century BC”, ISSS (International Society for Socratic Studies), Virtual Socrates Colloquium 8 (Online), 2020.9.2

国際、Noburu Notomi, “Images and Imagination in Plato’s *Republic* and *Sophist*”, The 3rd Asia Regional Meeting of the International Plato Society, Plenary Session, Seoul National University (Online), 2020.11.28

国内、納富信留、「プラトン『パイドン』はどう読まれたか、どう読むべきか」、西日本哲学会第71回大会シンポジウム「魂の不死をめぐる系譜—古代哲学と近代哲学のダイアログ」、佐賀大学(オンライン)、2020.12.6

国内、納富信留、「ソフィストたちのオリンピック—宗教・文化・政治的意義—、西洋古典学会第71回大会シンポジウム「オリンピア—古典古代のからだとこころ」、国際基督教大学(オンライン)、2021.6.5

国内、納富信留、「ギリシア哲学が直面した運命と偶然—ソフォクレス『オイディプス王』とアリストテレス『詩学』を中心に—」、比較思想学会第48回大会シンポジウム「運命と偶然」、東京大学文学部(オンライン)、2021.6.26

国際、Noburu Notomi, “Japanese Philosophers on Plato’s Ideas”, *London Lectures 2021: Expanding Horizons*, The Royal Institute of Philosophy, London, Online, 2021.11.25

(5) 解説・総合報告

納富信留・中島隆博、対談「ロゴスと道」、岩波書店『思想』1154号、6-28 頁、2020.6

納富信留、対談「プラトン『ソクラテスの弁明』: 哲学二千年の謎を解く —死の理由、そしてプラトンの戦略とは」、駒井稔+「光文社古典新訳文庫」編集部編著『文学こそ最高の教養である』、光文社新書、541-584 頁、2020.7

納富信留、シンポジウム「ことばのあり方 —哲学からの考察」、東京大学文学部広報委員会・編『ことばの危機 —大学入試改革・教育政策を問う』、集英社新書、117-148 頁、2020.6

納富信留、座談会「日本におけるアカデミズムの哲学史 —『哲学雑誌』と『哲学研究』の比較研究—」、『哲学研究』605号、78-108 頁、2020.10

中島隆博・納富信留、対談「『哲学の未来』っていったい？ —思考を更新するための条件をめぐって」、『未来哲学』創刊号、59-104 頁、2020.11

Noburu Notomi, “Interview: Intellectual innovation and cities, learned from Athens with diverse intellectuals”, host: Osamu Naito, Hitachi Research Institute, 2021.6

納富信留、「インタビュー 第 51 回 多彩な知識人が集うアテナイに学ぶ知的イノベーションと都市」、『日立総研』vol. 16-1、日立総合計画研究所（聞き手：内藤理）、4-11 頁、2021.5

納富信留、対談「ことば見聞録 第五回 納富信留・川野里子」、『歌壇』第 35 巻第 11 号、本阿弥書店、52-71 頁、2021.11

(6) 新聞・雑誌記事

納富信留、「当たり前の日常、偶然の産物：新型コロナ 予期せぬ出来事に辛抱強く」、『読売新聞』、2020.4.1、17 面
納富信留、「『当たり前』とは、維持することが難しい、有り難いこと」、『清流』320、24-25 頁、2020.12

納富信留、インタビュー〈あすへの考〉「なぜ言葉を交わすのか 対話 生き方に関わる技法」、『読売新聞』、2021.5.30、6 面

納富信留、インタビュー「集まる、観る、讃える 五輪の求心力」、『朝日新聞』「文化」、2021.8.5、23 面

納富信留、インタビュー「『気晴らし』か『余暇』か ギリシャ哲学から考える五輪」、連載「語る 五輪」第 4 回、朝日新聞デジタル、2021.8.13

納富信留、「ギリシャ哲学をはじめると：プラトンを読む。」、『Brutus』「特集：はじめる。今考えうる最良のはじめ方カタログ」、35 頁、2022.3.1

(7) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 (B)、納富信留、Noburu Notomi、研究代表者、「古代ギリシア文明における超越と人間の価値—欧文総合研究—」、2016～2022

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

納富信留、講義「西洋古代が抱えた不安」、東京大学朝日講座「不安の時代」、東京大学文学部 (オンライン)、2020.10.7

納富信留、講義「論理学とは何か?」、東京大学公開講座「論理」、東京大学安田講堂 (オンライン)、2020.11.7

納富信留、コメンテータ「世界哲学プロジェクト紹介」、第 38 回日本哲学史フォーラム「Histories of Philosophy in a Global Perspective プロジェクト基調講演」、京都大学文学部 (オンライン)、2020.12.18

納富信留、報告「世界哲学史の軸としての中国とヨーロッパ」、EAA 連続シンポジウム「世界哲学・世界哲学史を再考する」、第 1 回「世界哲学史の可能性：中国とヨーロッパを付き合わせる」、オンライン、2021.3.9

納富信留、対談「あらためてギリシア哲学史を語る」(『ギリシア哲学史』(筑摩書房) 刊行記念)、本屋 B&B 対談、納富信留×栗原裕次、世田谷代田、2021.5.30

納富信留、コメンテータ「ΠΕΡΙ ΦΥΣΕΩΣ ギリシア哲学、世界哲学からの考察」、「米虫正己『自然の哲学史』書評会」(オンライン)、2021.6.12

納富信留、報告「啓蒙とは何か? 現代の問題状況と対話の哲学」、第 2 回文工 Zoom サロン (オンライン)、2021.6.30

納富信留、講演「『志向倫理』を哲学する ～志向倫理を多面的にとらえる～」、令和 3 年度研究倫理ウィーク「研究倫理セミナー：『志向倫理』と『責任ある研究・イノベーション』」、東京大学研究倫理推進室 (オンライン)、2021.9.29

納富信留、講演「古代ギリシア哲学から見た現代 —自然・魂・知性—」、第 25 回東京大学文学部・常呂高校特別講座、常呂高等学校体育館、2021.11.12

納富信留、講義「ギリシア哲学における生き方・死に方」、かわさき市民アカデミー「人間学再論—生・老・病・死の哲学」、川崎市生涯学習プラザ (会場・オンライン併用)、2021.12.2

Noburu Notomi, Lecture “Reconsidering Values from Ancient Greek Philosophy”, EAA-NYU-Bonn Intensive Course: “Value Values, Social, Humans”, EAA, the University of Tokyo (Online), 2022.2.9

納富信留、講演「世界哲学におけるギリシア哲学」、東大人文熊野フォーラム in 新宮、新宮市丹鶴ホール、2022.2.20

納富信留、講演「受賞にあたって」、第 34 回和辻哲郎文化賞授業式、姫路市市民会館大ホール、2022.3.6

(2) 学会

International Federation of Philosophical Societies (FISP), Steering Committee Member, 2018.8～

International Plato Society, Advisory Board, 2013.7～

日本学術会議・連携会員、2014.10～

日本西洋古典学会・委員、2001.6～、常任委員、2016.6～

日本哲学会・評議員、2011.6～、理事、2021.6～
新プラトン主義協会・理事、2018.9～
フィロロギカ [古典文献学研究会]・編集委員、2005.10～
ギリシャ哲学セミナー・運営委員、2005.9～、幹事、2015.9～、代表、2021.9～
The Korean Society of Greco-Roman Studies, Editorial Board、2008.8～
Korean Philosophical Association, Editorial Board、2013.3～

教授 鈴木 泉 SUZUKI, Izumi

1. 略歴

1986年3月 東京大学文学部哲学専修課程学士・文学士
1989年3月 東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻修士・文学修士
1990年10月 東京大学教養学部助手（～1993年3月）
1993年4月 神戸大学文学部助教授（～2006年3月）
2006年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2018年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

哲学、特に西欧近世哲学と現代フランス哲学

b 研究課題

<内在性の哲学>の体系化の作業として次の三つが現在の研究課題である。

1/西洋形而上学の形成史の探求とそれを背景とした<存在の一義性>の哲学の系譜学の作業。

2/現代フランスにおける差異哲学の検討。

3/非人間主義 (inhumanisme) の哲学の展開。

c 概要と自己評価

上記三つの研究課題をより具体的には次のように遂行している。

1/ドゥンス・スコトゥスからスピノザに至る中世後期から近世にかけての<存在の一義性>の系譜学の意義を、とりわけスピノザ哲学に焦点をあてて解明すること。

2/現代における<内在性の哲学>の範型=差異哲学としてのドゥルーズ哲学を解凍し、その意義を現代分析的形而上学や日本語の哲学と突き合わせながら展開すること。

3/限定された存在としての人間とは異なる他のありようへと変容していくことの可能性を肯定する思考としての非人間主義の哲学を、具体的な主題において展開すること。

これらに関して、とりわけスピノザ哲学の特異な位置づけを、ライプニッツ哲学との関連、ならびにその受容史をもとに解明する作業を行い、単著『スピノザライプニッツ問題』として刊行する準備を集中的に進めてきた。さらに、岩波書店から刊行予定の『スピノザ全集』編集委員として、全集刊行の準備を進め、幾つかの著作の翻訳を終え、刊行に向けて、全体の最終的な調整を行った。2022年12月に刊行が始まる。また、2に関しドゥルーズとドゥルーズ&ガタリの思索に関する単著二冊を刊行する準備を進めてきた。さらに、3に関しても単著『非人間主義の哲学』の刊行に向けての執筆を進めてきた。

しかしながら、2020年度は、教務委員長の職についてコロナ対策に携わったために、学会活動に関わることができなくなった上に、とりわけ、2021年6月の事故によって、外傷性のくも膜下出血を発症し、同年9月まで複数の病院に入院し、その後もリハビリが続いたため、主に『スピノザ全集』の刊行作業のみに時間をあてざるを得ず、その他の作業を完成させることが出来なかった。若干の後遺症を残しつつも復調したので、これまでの研究の集大成となる、上に挙げた三つの課題それぞれに関する大部の著作の刊行を期したい。

d 主要業績

(1) 論文

鈴木泉、「呼吸すること」、『ひとおもい』2、東信堂、96-100頁、2020.7

(2) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究(B)、鈴木泉、Izumi Suzuki、研究代表者、「『哲学雑誌』のアーカイブ化を基礎とした近代日本哲学の成立と展開に関する分析的研究」、2018～2021

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、東洋大学、「近世哲学演習 IIA・IIB」・「哲学特殊研究 VA・VB」、2019.4～2020.3

(2) 学会

哲学会、理事、2006.4～

日本哲学会、評議員、2017.5～、理事、2019.5～

スピノザ協会、運営委員、2018.4～

日本ライブニッツ協会、理事、2018.4～

教授 古庄 真敬 FURUSHO, Masataka

1. 略歴

- | | |
|----------|---|
| 1987年4月 | 東京大学教養学部文科三類入学 |
| 1989年4月 | 東京大学文学部第一類(哲学専修課程)進学 |
| 1991年3月 | 東京大学文学部第一類(哲学専修課程)卒業 |
| 1991年4月 | 東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻修士課程入学 |
| 1993年3月 | 東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻修士課程修了 |
| 1993年4月 | 東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻博士課程進学 |
| 1995年10月 | ドイツ学術交流会(DAAD)給費奨学生として、ドイツ連邦共和国フライブルク大学(Albert-Ludwigs-Universität Freiburg)に留学(～1997年9月) |
| 1998年3月 | 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻哲学専門分野博士課程単位取得退学 |
| 1998年11月 | 日本学術振興会特別研究員(～2001年10月) |
| 2000年3月 | 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻哲学専門分野博士課程修了
博士(文学)学位取得 |
| 2002年1月 | 山口大学工学部 助教授 |
| 2005年4月 | 山口大学人文学部 助教授 |
| 2007年4月 | 山口大学人文学部 准教授 |
| 2011年4月 | 東京大学大学院総合文化研究科 准教授 |
| 2018年4月 | 東京大学大学院総合文化研究科 教授 |
| 2021年4月 | 東京大学大学院人文社会系研究科 教授 |

2. 主な研究活動

a 専門分野

哲学、特に近代から現代に至るドイツ哲学と現象学および実存哲学

b 研究課題

近代から現代に至るドイツ哲学、現象学、ならびに日本哲学のテキストの批判的読解を試みながら、人間の実存の本質構造に関する探究をおこなっている。われわれ人間の世界理解および自己理解の基本的構造を明らかにし、この構造が、その「超越的内在」との接触によっていかなる変様の経験を被るかについて考察することが現在の課題である。この課題を具体的に展開するため、1) いわゆる超越論哲学と生の哲学という二つの思考様式の必然的な絡み合いと、時として生じる自己矛盾にみちた展開を、ハイデガーを初めとする現象学や実存哲学のテキストに即して剔抉し、2) また、西田以降の近代日本哲学に特有な論理構造の哲学史的意義を明らかにして批判的に対峙することを試みている。

c 概要と自己評価

上記における二つの具体的課題を、ここ二年間の活動においては次のように展開してきた。1) については、「アレーテア」「非覆蔵性」概念をめぐるハイデガー哲学の展開を再構成するかたわら、「言語」に関するハイデガーの思索の意義をいまいちど全般的に検討する作業を、『ハイデガー事典』(2021.7)の多くの担当記事の執筆と全編にわたる共同編集に携わるなかで行い、側面的に進展させることができた。しかしながら、事典記事の作成という仕事の性格上、初学者向けの記述に徹することを余儀なくされ、主題的な展開という点では不十分なものに留まらざるを得なかった。だが、2) に関して「非合理的なもの」や「汝」をめぐる西田幾多郎の議論を、いわゆる「メタ存在論」をめぐるハイデガーの模索との理論的な対応関係において再解釈することを試みるなかで、1) に関する探究を前進させるための新たな着想を得ることができたのは大きな収穫であった。ここで得られた成果を、数年前に九鬼周造の「偶然性」論の批判的解釈において展開した考察と結合して、全体を体系的な布置のもとにもたらすことが今後の課題である。

d 主要業績

(1) 著書

共編著 (ハイデガー・フォーラム編)、『ハイデガー事典』、昭和堂、2021.7

(2) 論文

古荘真敬、シンポジウム報告「世界哲学における西田」、『哲学雑誌』、2021.10

古荘真敬、「西田における「自覚」と「非合理的なるもの」」、『哲学雑誌』、2021.10

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

(着任前)

東京大学教養学部、「哲学Ⅰ」、2020.4～2020.9

東京大学教養学部、「初年ゼミナール文科」、2020.4～2020.9

東京大学教養学部、「現代哲学(1)」、2020.4～2020.9

東京大学大学院総合文化研究科、「文化社会論演習(1)」、2020.4～2020.9

東京大学大学院総合文化研究科、「比較文学比較文化演習Ⅴ」、2020.4～2020.9

東京大学教養学部、「現代哲学特殊研究」、2020.9～2021.3

(着任後)

非常勤講師、東京大学教養学部、「哲学Ⅰ」、2021.4～2021.9

非常勤講師、東京大学大学院総合文化研究科、「比較思考分析Ⅱ」、2021.4～2022.3

非常勤講師、東京大学教養学部、「現代哲学特殊演習Ⅱ」、2021.4～2022.3

(2) 学会

哲学会、理事、2011.4～

日本哲学会、編集委員、2019.7～

実存思想協会、理事 2013.10～、編集委員、2019.9～

ハイデガー・フォーラム、実行委員、2006.9～、事務局代表、2017.10～

1. 略歴

- 1987年4月 東京大学教養学部文科三類入学
1989年4月 東京大学文学部第一類（哲学専修課程）進学
1992年3月 東京大学文学部第一類（哲学専修課程）卒業
1992年4月 東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻修士課程入学
1994年3月 東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻修士課程修了
1994年4月 東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻博士課程進学
1996年3月 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻哲学専門分野博士課程退学
1996年4月 四国学院大学文学部人文学科 専任講師
1999年4月 四国学院大学文学部 助教授（～2007年3月）
2003年8月 トロント大学哲学部 [Department of Philosophy, University of Toronto] 訪問教授 [Visiting Professor]
（～2004年7月）
2007年4月 四国学院大学文学部 准教授
2010年4月 四国学院大学文学部 教授
2014年4月 東京女子大学現代教養学部人文学科哲学専攻 教授（～2019年3月）
2017年4月 東京女子大学比較文化研究所副所長、兼丸山眞男記念比較思想研究センター副所長（～2019年3月）
2019年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

哲学、特に近世・近代から現代に至る英語圏の哲学と形而上学

b 研究課題

近世・近代から現代に至る英語圏の哲学に基盤を置きながら、哲学的なコスモロジー（宇宙論）の可能性を探求している。具体的なテーマとしては、

- (1) 19世紀後半から20世紀前半にかけての北米の哲学者、特にパース、W.ジェイムズ、ホワイトヘッドにおける形而上学についての考察
 - (2) D.ルイスやレッシュャーら、現代の哲学者の形而上学についての考察
 - (3) 哲学的なコスモロジーについての歴史的研究
- を課題としている。

c 概要と自己評価

先述の具体的なテーマの(1)については、次項の「命題の発話者とは誰か」において、パースが「プラグマティズムの成果」（1905）で提示した一般性と曖昧性の概念、そして、それを表す命題に対して、それぞれ排中律と矛盾律が適用されないという、一見、奇妙な主張の解明を試みた。これは先述の(2)にも関係するが、現代の哲学者、たとえばティモシー・ウィリアムソンやロバート・レーンなどがこのパースの主張に整合的な解釈を与える試みを行ってきたが、本論文においては、パースが当該の論文の前後に書いた論文と照らし合わせると、命題の発話者を「自然・世界」、命題の解釈者を「探究者」と考えるならば、論理的な整合性を保ったまま、確定される以前の一般的な命題には排中律が適用されず、確定される以前の曖昧な命題には矛盾律が適用されないという事態を説明できると主張した。その背景には、先述の(3)と関連するパースの可塑的な世界という存在論的主張があり、それをさらに探究していく必要があることを確認でき、今後の研究の方向性が明らかになったと考える。研究に対する自己評価としては、パース、ジェイムズといった古典的プラグマティズムが背景にしている世界観の解明については、ある程度の道筋がついてきたものの、それを現代の議論へどのようにつなげていくかという点ではまだ十分ではなく、今後の課題としたい。

d 主要業績

(1) 論文

乗立雄輝、「命題の発話者とは誰か」、東京大学大学院人文社会系研究科・文学部哲学研究室『論集』、39、1-17頁、2021.3

(2) 書評

沖永宣司、『始原と根拠の形而上学』、北樹出版、『実存思想論集』、XXXV、181-183頁、2020.6

(3) 啓蒙

乗立雄輝、「大学の場所、大学という場所」、『ひとおもい 3 号』、214-219 頁、2021.7

(4) 予稿・会議録

乗立雄輝、「ワークショップ報告 マクダウェルにおける合理性の概念をめぐる」、『世界哲学の中の西田幾多郎』
(哲学雑誌第 135 巻第 808 号)、哲学会編、139-141 頁、2021.10

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、東京女子大学、「4 年次演習」、2020.4～2021.3、大学院科目「人間文化科学基礎演習」、2020.4～2020.7、
大学院科目「人間文化科学研究法」、2020.9～2021.3

非常勤講師、聖心女子大学、「哲学・倫理学特講 X III, X IV」、2020.4～2021.3

(2) 学会

哲学会、理事、2019.4～

日本感性工学会、理事、2018.4～

日本ホワイトヘッド・プロセス学会、理事、2019.10～

アメリカ哲学フォーラム、企画・運営委員、2018.4～

05 倫理学

教授 熊野 純彦 KUMANO, Sumihiko

1. 略歴

1981年3月	東京大学文学部第1類（文化学類・倫理学専修）卒業（文学士）
1983年3月	東京大学大学院人文科学研究科倫理学専攻修士課程終了（文学修士）
1983年4月	東京大学大学院人文科学研究科倫理学専攻博士課程進学
1986年3月	東京大学大学院人文科学研究科倫理学専攻博士課程単位取得退学
1986年4月	跡見学園女子大学文学部非常勤講師 ～1989年3月
1987年4月	日本学術振興会特別研究員 ～1989年3月
1989年4月	専修大学文学部非常勤講師 ～1990年3月
1990年4月	北海道大学文学部哲学科倫理学講座助教授
1995年4月	北海道大学文学部人文科学科倫理学講座助教授（学部改組による）
1996年10月	東北大学文学部哲学科倫理学講座助教授
1997年4月	東北大学文学部人文社会学科哲学講座助教授（学部改組による）
2000年4月	東北大学大学院文学研究科哲学講座助教授（大学院重点化による）
2000年10月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2007年10月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

倫理学原理論・近現代西欧倫理思想

b 研究課題

倫理学的諸概念の哲学的考察

c 概要と自己評価

主たる研究は、一方ではドイツ観念論から現代の現象学的・解釈学的哲学をはじめとする思想史的研究をふまえながら、倫理学的諸問題を「人のあいだ」に根ざし、「人のあいだ」にかかわる問題群として思考することである。この数年は、現在の共同的な生を枠づけている資本制の問題にあらためて関心をいだき、かつて発表した『マルクス 資本論の思考』に引きつづき、考察を継続している。

d 主要業績

(1) 著書

単著、熊野純彦、『カント 美と倫理とのはざままで』、講談社、2017.1

単著、熊野純彦、『マルクス 資本論の哲学』、岩波書店、2018.1

単著、熊野純彦、『本居宣長』、作品社、2018.9

単著、熊野純彦、『三島由紀夫』、清水書院、2020.2

単著、熊野純彦、『源氏物語＝反復と模倣』、作品社、2020.3

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本倫理学会、評議員、2016.4～

(2) 行政

国内、東京大学大学院人文社会系研究科長・文学部長・東京大学評議員、2015.4～2017.3

国内、東京大学大学執行役・副学長・附属図書館長、2018.4～2021.3

1. 略歴

1984年3月	お茶の水女子大学文教育学部哲学科卒業（倫理学専攻）
1984年4月	東京大学大学院人文科学研究科修士課程入学（倫理学専門課程）
1986年3月	同 修了
1986年4月	東京大学大学院人文科学研究科博士課程進学（倫理学専門課程）
1991年3月	同 単位取得退学
1991年4月	山口大学人文学部日本思想史学講座専任講師
1994年3月	東京大学大学院人文科学研究科において博士号（文学）を取得
1995年7月	山口大学人文学部日本思想史学助教授
1996年4月	お茶の水女子大学文教育学部哲学科助教授（倫理学専攻）
2007年4月	お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科准教授（比較社会文化学専攻思想文化学コース） （改組に伴う配置換え）
2011年1月	同 教授
2013年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授
2018年4月	放送大学客員教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

倫理学原理論・日本倫理思想史・比較思想

b 研究課題

日本思想の倫理学的考察

c 概要と自己評価

倫理学の中心問題である「何をなすべきか」という行為に対する問いを、その基盤となる「人は何であるのか」「世界は何であるのか」という存在の問いにまで遡って考えることを目指す。研究方法としては、日本語で書かれたテキストの思想構造を解明することを通じて、その世界観、人間観を検討するとともに、背後にあるコンテキストも探る。具体的には、聖徳太子、最澄、空海、道元、法然、親鸞、日蓮などの日本仏教の思想を中心として、日本思想を幅広く扱っている。特に、和辻哲郎の倫理学、倫理思想史の方法について検討し、「間柄の倫理学」には収まらない超越との関係という側面から、新たな日本倫理思想史の構築を目指す。また、和辻倫理学の対抗軸として、現在、日本民俗学の諸思想家（柳田國男、折口信夫など）について研究を進めている。

なお、これまでの研究は、個別思想家を中心対象としてきたが、今後は、それらを踏まえて新たな日本倫理思想史の構築に関する研究を進める必要があり、現在、出版を計画している。

d 主要業績

(1) 論文

頼住光子、「大乘仏教の思想家としての法然」（『佛教大学法然仏教学研究センター紀要』第6号、2020.3）

頼住光子、「日本における自然観の一形態——道元の自然観を手がかりとして」（『未来創成学の展望—逆説・非連続・普遍性に挑む』ナカニシヤ書店、2020.3.31、pp. 305-318、依頼原稿）

頼住光子、「道元の思想と表現」（『ひらく』第3号、京都大学こころの未来研究センター、2020.6.15、pp. 174-183、依頼原稿）

頼住光子、「禅の思想から見る「自立」——道元『正法眼蔵』から考える道元の哲学」（『学鏡』秋号（第117巻第3号）、丸善出版、2020.9.5、pp. 22-25、依頼原稿）

頼住光子、「道元の哲学」（『世界哲学史』別巻、II世界哲学史のさらなる論点第6章、ちくま新書、2020.12.10、pp. 279-292、依頼原稿）

頼住光子、「和辻哲郎と仏教——初期の作品・資料をてがかりとして——」（『和辻哲郎の人文学』ナカニシヤ書店、2021.3.28、pp. 211-240、依頼原稿）

頼住光子、「道元の時間論から見た卍山道白における「復古」について」（『日本思想史の現在と未来』、ペリカン社、2021.5.10、pp. 43-88、依頼原稿）

頼住光子、「中世仏教にみる道德教育の原理—禅の思想をてがかりとして」（日本道德教育学会全集編集委員会編『道德教育の変遷・展開・展望』（新道德教育全集 第1巻、第21章第1節）、学文社、2021.6.30、pp.201-205、依頼原稿）

頼住光子、「特集「運命と偶然」趣旨と総括」（『比較思想研究』第48巻、2022.3、pp.1-4、依頼原稿）

(2) 学会発表

国内、頼住光子、「中世日本哲学と世界哲学」（EAA 公開シンポジウム「世界哲学・世界哲学史を再考する 第2回 世界における日本哲学を再考する」、東京大学東アジア藝文書院、2021.3.25、Zoom 会議）

国際、Mitsuko Yorizumi、「Il significato della pratica tra le montagne di Dōgen: il rapporto tra il mondo secolare e le montagne（道元における山林修行の意義—世俗世界と山との関係）」（シンポジウム”Lo Zen e il distacco: essere nel mondo ma non del mondo” Il Convegno international, Associazione Culturale Centro Zen Firenze, Tempio Sōtō Zen Shinnyoji, Sede Italiana del Monastero Tōkōzan Daijōji di Kanazawa in Giappone. Firenze, 2021.3.27、Zoom 会議）

国内、頼住光子、「道元『正法眼蔵』の世界観」（Meiji Institute of Philosophies (MIPs) 東アジア哲学レクチャーシリーズ第3回、2021.10.6、Zoom 会議）

国内、頼住光子、「道元思想について（On Dogen's philosophy）」（TCJS Seminar Series Joint Seminar with the Humanities Center (HMC)、2022.3.3、Zoom 会議）

(3) 啓蒙等

日本思想史辞典編集委員会、日本思想史学会編集協力『日本思想史事典』（編集委員）（丸善出版、2020.4、項目執筆「女性と宗教」「道元」）

頼住光子、10 ミニッツ TV 「日本仏教の名僧・名著」、2020.10～

(4) 書評

頼住光子、柴田泰山『善導教学の研究 第3巻』（『比較思想研究』第48巻、2022.3、pp.152-153）

(5) 会議主催(チェア他)

国内、比較思想学会第48回大会実行委員長・シンポジウムコーディネーター、2020.6.26

(6) 教科書

『改訂版 現代の倫理』、頼住光子、編集委員、山川出版、2020

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、お茶の水女子大学、「倫理思想史特殊講義BI」、2020.4～9、2021.4～9、

非常勤講師、慶應義塾大学、「哲学倫理学特殊IE」、2020.4～

非常勤講師、慶應義塾大学、「日本倫理思想」、2020.4～

非常勤講師、法政大学、「東洋思想2」、2020.10～2021.3、2021.10～2022.3

(2) 行政

大学入試センター、大学入学共通テスト新教育課程試験問題調査研究特別部会委員（公民問題研究分科会委員）、2020.4～2021.3

文部科学省、令和2年度「人文学・社会科学を軸とした学術知共創プロジェクト」に係る公募要領等の作成及び実施機関の審査について、審査委員会委員、2020.4～2021.3

大学入試センター、大学入学共通テスト教科委員会委員、2020.4～2021.3

学術振興会、特別研究員等審査会専門委員、卓越研究員候補者選考委員会書面審査員及び国際事業委員会書面審査員・書面評価員、2020.4～2021.3

日本学術振興会学術システム研究センター専門研究員、2021.4～

(3) 学会

比較思想学会会長、2020.4～

日本倫理学会会長、2021.4～

日本思想史学会評議員、2020.4～

日本仏教総合研究学会理事、2020.4～

日本倫理道德教育学会理事、2020.4～

実存思想協会理事、2020.4～

1. 略歴

- 1998年4月 東京大学教養学部 文科三類入学
2002年3月 東京大学文学部思想文化学科 倫理学専修課程卒業
2002年4月 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻 倫理学専門分野修士課程入学
2005年3月 同 修了
2005年4月 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻 倫理学専門分野博士課程進学
2008年3月 同 単位取得退学
2008年4月 日本学術振興会特別研究員 (PD) (～2011年3月)
2011年2月 博士号 (文学) 取得 (東京大学)
2013年4月 新潟大学人文社会・教育科学系 准教授 (～2017年3月)
2015年4月 放送大学 客員准教授
2017年4月 専修大学文学部 准教授 (～2019年3月)
2019年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

倫理学原理論・近現代西欧倫理思想

b 研究課題

言語、心、行為をめぐる諸概念の倫理学的考察

c 概要と自己評価

英語圏とドイツ語圏における近現代の哲学・倫理学全般を研究しているが、特に重点を置いて取り組んでいるのはルートウィヒ・ウィトゲンシュタインである。彼の思考の全体像を把握する試みを中心軸に据えつつ、主に倫理学的関心の下で、関連する言語論や心の哲学、行為論といった分野に関する研究も展開している。その方向性は大きく分けて、ウィトゲンシュタインの「以後」と「以前」に分かれる。「以後」に関しては、主にドナルド・デイヴィッドソン、スタンリー・カヴェル、バーナード・ウィリアムズといった、ウィトゲンシュタインの影響を受けた英語圏の哲学者・倫理学者の思考を検討している。「以前」に関しては、ゲーテ、ショーペンハウアー、カール・クラウスといった人物がウィトゲンシュタインに与えた影響および相違と、そこから見えてくる視角を追っている。

また近年では、運と道徳の相克、また、懐疑論と実在論の相克という大枠の問題圏をめぐる、古代から現代に至る倫理思想史全体を振り返る作業も進めている。

d 主要業績

(1) 著書

単著、古田徹也、『はじめてのウィトゲンシュタイン』、NHK 出版、2020.12

単著、古田徹也、『いつもの言葉を哲学する』、朝日新聞出版、2021.12

共著、瀧川裕英 (編著)、古田徹也、岡崎晴輝、坂井豊貴、飯田高、『くじ引きしませんか?——デモクラシーからサバイバルまで』、信山社、2022.6

(2) 論文

古田徹也、「くじ引きは (どこまで) 公正なのか—— 古代と現代における空想的事例をめぐる」、『法と哲学』、第7号、77-104 頁、2021.6

古田徹也、「自由意志の有無について考える前に考えるべきこと」、『現代思想』、2021年8月号、2021.7

古田徹也、「前期ウィトゲンシュタインにおける「意志」とは何か」、『現代思想』、Vol. 49-16、105-116 頁、2021.12

(3) 書評

武田砂鉄、『わかりやすさの罪』、朝日新聞出版、『群像』、75 (12)、612-613 頁、2020.11

宮野真生子、『出逢いのあわい』、堀之内出版、『社会と倫理』、第35号、239-244 頁、2020.12

川添愛、『ふだん使いの言語学——「ことばの基礎力」を鍛えるヒント』、新潮社、『波』、614、74-75 頁、2021.2

池田喬、「アメリカ哲学の体現者としてのハイデガー」『何処から何処へ——現象学の異境的展開』、知泉書館、『フィロソフィ』、Vol. 6, No. 2、382-387 頁、2021.8

植原亮、『思考力改善ドリル——批判的思考から科学的思考へ』、勁草書房、『朝日新聞』、2021年10月30日付朝刊、読書面(25面)、2021.10

磯野真穂、『他者と生きる』、集英社、『青春と読書』、2022年2月号、52頁、2022.1

(4) 解説

古田徹也、『野矢茂樹『語りえぬものを語る』』講談社学術文庫、481-495頁、2020.11

古田徹也、『監訳者解説』、『現代倫理学基本論文集III：規範倫理学篇②』、261-320頁、2021.8

古田徹也、『これは、まぎれもない哲学書である：『ハイデガー『存在と時間』を解き明かす』について』、『NHK出版〈本がひらく〉』、2021.10

古田徹也、『監訳者解説』、『現代倫理学基本論文集II：規範倫理学篇①』、215-265頁、2021.12

古田徹也、『〈言葉を大切にすること〉とは何をすることなのか』、『一冊の本』、2022年1月号、6-7頁、2022.1

古田徹也、『ウィトゲンシュタイン哲学の「新しい」相貌』、『ウィトゲンシュタインと言語の限界』ピエール・アド(著)、合田正人(訳)、講談社、2022.6

(5) 学会発表

国内、古田徹也、『意図と自由と責任の一筋縄ではいかない関係』、第20回東京大学生命科学シンポジウム、東京大学駒場キャンパス、オンライン開催、2020.10.31

国内、古田徹也、『言葉が表情をもつとはどういうことか——多義性についての一視座』、基礎言語学研究会設立シンポジウム、オンライン開催、2021.3.27

国内、古田徹也、『研究に「倫理」が必要な理由』、日本発達心理学会第32回大会シンポジウム「研究倫理をどう考える：原理、行動、執筆・投稿に向けて」、オンライン開催、2021.3.29

国内、古田徹也、『前期ウィトゲンシュタインにおける「意志」とは何か』、日本哲学会第80回大会学協会シンポジウム「論理と倫理：『論考』100年を機に」、オンライン開催、2021.5.16

国内、古田徹也、『偶然とアイロニー：英米圏の現代哲学の一断面をめぐる』、比較思想学会第48回大会シンポジウム「運命と偶然」、オンライン開催、2021.6.26

国内、古田徹也、『『ドイツ文化事典』について——哲学との関連の下で』、『ドイツ文化事典』刊行記念シンポジウム、オンライン開催、2021.7.18

国内、古田徹也、『日本語の「やさしさ」と「豊かさ」の緊張関係について』、第13回産業日本語研究会シンポジウム、オンライン開催、2022.2.22

(6) 啓蒙

古田徹也、『自由で民主的な社会の基盤としての「理由の説明」』、『東京大学大学院人文社会系研究科・文学部ウェブサイト』、2021.1

(7) 会議主催(チェア他)

国内、『現代思想 総特集 = ウィトゲンシュタイン(2022年1月臨時増刊号)』合評会、主催、オンライン開催、2022.3.13

(8) 総説・総合報告

古田徹也、『倫理学は「運」をどう扱うべきか』、『文化交流研究』、第33号、21-29頁、2020.3

(9) マスコミ

『『自粛を要請』『新しい生活様式』——新たな言葉が“自粛警察”を増やす?』、『本をひらく』、NHK出版、2020「合理的判断だけを追求すれば、自分の人生を手放すことになる」、『WIRED.jp』、2020.3.25

『濃厚接触で何を連想する? 哲学者が考えるコロナの言葉』、『朝日新聞デジタル』、2020.4.21

『“新型コロナ禍”で日本社会は? 哲学&倫理学・思想史の視点から見る“今”』、BSフジLIVE「プライムニュース」、BSフジ、2020.4.30

『相互監視が残した傷』、『共同通信配信記事』、2020.5

『((にじいろの議) 新しい状況と新しい言葉 吟味するのは私たち)』、『朝日新聞』、2020.5.20

『匿名の私的制裁許すな——古田東大大学院准教授に聞く』、『高知新聞』、2020.7.5

『不確実性へ「溜め」足りず』、『山陰中央新報』、2020.7.8

『誤用の自由ときらめき』、『朝日新聞朝刊、文化・文芸面』、朝日新聞社、2020.9.3

『綺麗事突き放す「ガチャ」』、『朝日新聞朝刊、文化・文芸面』、朝日新聞社、2020.9.17

『型崩れした見出しに危惧』、『朝日新聞朝刊、文化・文芸面』、朝日新聞社、2020.10.1

『空虚さ 慣れてはいけない』、『朝日新聞朝刊、文化・文芸面』、朝日新聞社、2020.10.15

『ものの呼び名が表す姿』、『朝日新聞朝刊、文化・文芸面』、朝日新聞社、2020.10.29

「責任逃れの「〇〇感」」、『朝日新聞朝刊、文化・文芸面』、朝日新聞社、2020.11.12
「〇〇感、独特の面白さも」、『朝日新聞朝刊、文化・文芸面』、朝日新聞社、2020.11.26
「卒論、作法に頼るよりも」、『朝日新聞朝刊、文化・文芸面』、朝日新聞社、2020.12.10
「「かわいい」に隠れた苦み」、『朝日新聞朝刊、文化・文芸面』、朝日新聞社、2020.12.24
「なんのメッセージもない言葉」、『絶版本』『かしわもち 柏書房のwebマガジン』、柏書房、2021.1.4
「複雑さに見合う見出しを」、『朝日新聞朝刊、文化・文芸面』、朝日新聞社、2021.1.14
「「自粛を解禁」の奇妙さ」、『朝日新聞朝刊、文化・文芸面』、朝日新聞社、2021.1.28
「不穏な現実と共に生きる」、『共同通信配信記事』、2021.2
「呼び名が生む理不尽」、『朝日新聞朝刊、文化・文芸面』、朝日新聞社、2021.2.11
「哲学者が危機感をもつ「コロナ」と「言葉」の関係」、「SIGHTRADIO 渋谷陽一」とうせいこうの話せばわかる！
政治も社会も」No.79、2021.2.15
「昔がなくなっちゃう！」、『朝日新聞朝刊、文化・文芸面』、朝日新聞社、2021.2.25
「伝統も変化も踏まえつつ」、『朝日新聞朝刊、文化・文芸面』、朝日新聞社、2021.3.11
「本当の「社会人」とは」、『朝日新聞朝刊、文化・文芸面』、朝日新聞社、2021.3.25
「役割を自称する意味」、『朝日新聞朝刊、文化・文芸面』、朝日新聞社、2021.4.8
「「言葉を選びとる」を諦めない 哲学者・古田徹也さん」、『西日本新聞、文化面』、西日本新聞社、2021.4.21
「常用漢字「まん延」の理由」、『朝日新聞朝刊、文化・文芸面』、朝日新聞社、2021.4.22
「ニュースの見出しと「言葉の実習」」、『アステイオン』第94号、CCCメディアハウス、2021.5
「「自由」「自主」「自立」 大事な価値の実質失う」、『西日本新聞、文化面』、西日本新聞社、2021.5.10
「土地の名を病に使うなら」、『朝日新聞朝刊、文化面』、朝日新聞社、2021.5.13
「比喩的表現に満ちた世界」、『朝日新聞朝刊、文化面』、朝日新聞社、2021.5.27
「ウイトゲンシュタインの全貌と「急所」を 哲学者・古田徹也さん、初学者向け解説本」、『朝日新聞夕刊、特集面』、
朝日新聞社、2021.6.2
「(論の芽) まん延、改ざん、ねつ造—交ぜ書きはおかしい? 東大准教授・古田徹也さんに聞く」、『朝日新聞朝刊、
オピニオン面』、朝日新聞社、2021.6.3
「説明・言い換えを」3割超 3密・ステイホーム—コロナ関連8語 文化庁世論調査」、『朝日新聞2021年9月25
日付朝刊1面』、朝日新聞社、2021.9.25
「コロナ禍において必要な言葉の吟味」、『NHK ラジオ第一放送「Nらじ」』、日本放送協会、2021.10.21
「東京と生活史に導かれて——岸政彦編『東京の生活史』(筑摩書房)刊行を機に」、『週刊読書人』第3416号、
2021.11.19
「今年の収穫」、『共同通信配信記事』、2021.12
「コロナ禍で生まれた言葉を考える」、『NHK(総合・Eテレ)「視点・論点」』、日本放送協会、2021.12.27
「言葉の歴史を辿り直す意義」、『Voice』9月号、PHP研究所、2022.8

(10) 翻訳

個人訳、Rosalind Hursthouse、"Normative Virtue Ethics"、古田徹也、「規範的な徳倫理学」、『現代倫理学基本論文集Ⅲ：
規範倫理学篇②』、勁草書房、2021.8
監訳、David Gauthier, T. M. Scanlon, G. E. M. Anscombe, Michael Slote, Rosalind Hursthouse、"Why Contractarianism?", "The
Structure of Contractualism", "Modern Moral Philosophy", "Agent-Based Virtue Ethics", "Normative Virtue Ethics"、古田徹
也、『デヴィッド・ゴティエ「なぜ契約論か?」、T・M・スキャンロン「契約主義の構造」、G・E・M・アンスコム「現
代道徳哲学」、マイケル・スロート「行為者基底的な徳倫理学」、ロザリンド・ハーストハウス「規範的な徳倫理
学』、『現代倫理学基本論文集Ⅲ：規範倫理学篇②』、勁草書房、2021.8
監訳、Cristine Korsgaard, Barbara Herman, R. B. Brandt, R. M. Hare、"Kant's Formula of Universal Law" (1985), "Making Room
for Character" (1996), A Theory of the Good and the Right (1979), "Ethical Theory and Utilitarianism" (1976)、田原彰太郎、圓
増文、水野俊誠、『クリスティン・コースガード「カントの普遍的法則の方式」、バーバラ・ハーマン「性格のため
の余地を設ける」、R・B・ブランド「理想的規則功利主義(善と正の理論)より抜粋」、R・M・ヘア「倫理学理論と
功利主義』、『現代倫理学基本論文集Ⅱ：規範倫理学篇①』、勁草書房、2021.12

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

セミナー、NHK 文化センター町田教室、「人生にとって運とは何か」、2020.2

非常勤講師、熊本大学、「ウィトゲンシュタイン入門」、2020.2
非常勤講師、明治大学、「コミュニケーションの哲学」、2020.4～2020.9
セミナー、NHK 文化センター横浜ランドマーク教室、「ウィトゲンシュタイン入門——像の呪縛をめぐって」、2021.2
特別講演、福岡市東図書館、「〈言葉を大切にす〉って何をすること?」、2021.3
特別講演、東京都立西高等学校、「倫理学とはどのような学問か」、2021.3
セミナー、朝日カルチャーセンター、「ウィトゲンシュタイン入門」、2021.7～2021.9
セミナー、出版文化産業振興財団 (JPIC)、「言葉を使うことの倫理」、2022.2
セミナー、朝日カルチャーセンター、「いつもの言葉を哲学する」、2022.5
セミナー、三鷹市民大学、「暮らしの中の言葉を哲学する」、2022.6
セミナー、かわさき市民アカデミー、「人生にとって運とは何か」、2022.6
セミナー、朝日カルチャーセンター、「ウィトゲンシュタイン入門——『論理哲学論考』を読む」、2022.7～2022.9

(2) 学会

国内、日本倫理学会、評議員、2019.4～
国内、日本哲学会、評議員、2021.4～
国内、比較思想学会、評議員、2022.4～、編集委員、2022.6～

(3) 行政

文部科学省、文化庁、文化審議会臨時委員 (国語分科会)、2021.4～

06 宗教学宗教学史学

教授 池澤 優 IKEZAWA, Masaru

1. 略歴

1982年3月 東京大学文学部I類宗教学宗教学史学専門課程卒業
1982年4月 東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教学史学専攻修士課程入学
1984年3月 東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教学史学専攻修士課程修了
1984年4月 東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教学史学専攻博士課程進学
1987年9月 ブリティッシュ・コロンビア大学アジア学科大学院博士課程（カナダ・ヴァンクーバー）入学
1990年8月 東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教学史学専攻博士課程退学
1990年8月 筑波大学地域研究研究科文部技官、哲学思想学系準研究員就任
1993年4月 筑波大学地域研究研究科（哲学思想学系）助手昇進
1994年5月 ブリティッシュ・コロンビア大学アジア学科大学院博士課程修了
1995年4月 東京大学大学院人文社会系大学院宗教学宗教学史学研究室助教授転任
2007年4月 同准教授（名称変更）
2009年4月 同教授
2011年4月 東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター長（兼任）

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国古代宗教研究、祖先崇拜研究、死生学研究、生命倫理研究、環境倫理研究、応用倫理研究

死者にかかわる思想、表象、儀礼を比較文化的視点から考察することを中心的な目的とし、その目的の下に具体的な研究テーマを以下のように設定する。(A)「死者性」という概念（我々が死者をどのような存在として認識しているのか、また我々が死者とどのような関係を持っているのか、死者に対するイメージと記憶）をキーワードとして、宗教/世俗の枠を越えた死生学を構築することを目指した上で、具体的研究対象として、(B) 古代中国における死ならびに死者に対する観念と儀礼の背後にある宗教的宇宙観と救済論、歴史を明らかにすること、(C) 現代の死生学・生命倫理をめぐる言説の中に、死と死者に関わる考え方がどのように反映しているかを明らかにすること、という二つを設定し、その上で (D) 伝統的な宗教的な価値観や感覚が、宗教という形態をとらずに現代社会に浸透している様を考えることを目指している。

b 研究課題

具体的な研究課題は以下のように区分できる。

まず、「死者性」概念に基づく死生学研究（上記（A））にかかわる分野として

- (1) 死生学の研究史とその理論構築、および死生学の比較文化論的研究。
- (2) 祖先崇拜の理論研究ならびに比較文化的研究。

次に、中国古代における死ならびに死者に関する研究（上記（B））にかかわる分野として

- (3) 殷・周・春秋時代の出土文字資料（甲骨・金文）を用いた中国古代宗教研究。
- (4) 戦国・秦・漢時代の出土文字資料（簡牘・帛書）を用いた中国古代宗教研究。
- (5) 戦国・秦・漢時代の儒家の「孝」文献に関する研究。
- (6) 戦国・秦・漢時代の儒家文献を用いた葬送儀礼、祖先祭祀研究。
- (7) 漢代の墓葬文書（告地策・鎮墓文・画像石・墓碑）に関する研究。
- (8) 殷周～隋唐時代における「死者性」の変化をあとづける宗教学史的研究。

現代の死生学・生命倫理に関する研究（上記（C））として

- (9) 死生学言説の学説史的研究
- (10) 生命倫理言説の学説史的研究。
- (11) 特に東アジアにおける死生学と生命倫理の文化性に関する研究。

伝統的価値観の現代における浸透の研究（上記（D））として

- (12) 応用倫理という領域に宗教が与えている影響に関する研究。

c 概要と自己評価

2021年度に特別研究期間を取得し、上記の(2)(3)(4)(5)(6)(7)(8)の研究を体系的に論述する著書を出版すべく、原稿の執筆を行った。2021年度内に執筆した分量はA5換算で1000頁ほどになる。最終的には1400頁程度になると思われる。今後、上記(9)(10)(11)(12)の分野についても、今後、研究成果をまとめたいと思っている。

d 主要業績

(1) 論文

池澤優、「死生学再考—フランクフルトとベッカーを軸にして」、『死生学・応用倫理研究』第25号、9-40頁、2020.3

池澤優、「戦国秦漢の墓葬における死者と死後世界の表象—墓葬美術という媒体」、津曲信一・細田あや子編『媒介物の宗教史【下巻】』LITHON、283-313頁、2020.8

池澤優、「サナトロジーから死生学への「越境」—鄭志明の死生学構想」、久保田浩ほか編『越境する宗教史【上巻】』、LITHON、263-291頁、2020.11

池澤優、「ロバート・リフトンにおける死の現在」、『死生学・応用倫理研究』第26号、7-26頁、2021.3

(2) 学会発表・講演

国内、池澤優、「死生学とは何か?—ロバート・リフトンにおける死の現在」、東京大学文学部上級死生学・応用倫理講座主催「医療・介護従事者のための死生学夏季セミナー」、2020.9.27

国内、池澤優、「死生学とは何か?—ハンス・ヨナスにおける生命と科学技術」、東京大学文学部上級死生学・応用倫理講座主催「医療・介護従事者のための死生学夏季セミナー」、2021.9.19

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

國學院大學神道文化学部非常勤講師(2020.4~2021.3)、早稲田大学大学院文学研究科非常勤講師(2020.4~2020.9)

(2) 学会

日本生命倫理学会、評議員

日本宗教学会、常務理事

中國出土資料學會、理事

東方学会、評議員

(3) 行政

東京大学認定臨床研究審査委員会委員

東京大学医学部附属病院法的脳死判定委員会委員

教授 藤原 聖子 FUJIWARA, Satoko

1. 略歴

1986年3月 東京大学文学部宗教学宗教史学専門課程 卒業
1986年4月 東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻修士課程 入学
1988年3月 東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻修士課程 修了
1988年4月 東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻博士課程 進学
1991年9月 シカゴ大学大学院ディヴィニティ・スクール宗教史専攻留学(至1994年6月)
1995年12月 東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻博士課程単位取得退学
1996年1月 日本学術振興会特別研究員(至1998年12月)
2001年4月 大正大学文学部国際文化学科助教授
2006年4月 大正大学文学部表現文化学科教授
2010年4月 大正大学文学部人文科学科教授
2011年4月 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻宗教学宗教史学専門分野准教授
2017年4月 同教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

宗教学（理論研究・比較研究）、宗教と教育の関係、北米の宗教

宗教学の基礎でありながら、20世紀後半以降、方法として成立し難くなった「比較」に注目し、その観点から理論研究を行うとともに、ケーススタディでは宗教と教育の関係、世界宗教史記述を対象としている。さらに、宗教学史についても国際宗教学宗教学会（IAHR）と宗教現象学の関係史について議論を活性化させ、国際学会のあり方・日本のアカデミアの関わり方についての問題提起を試みている。

b 研究課題

宗教比較の方法、宗教史の記述について、学界ならびに一般社会に見られる問題とその背景・原因を洗い出し、具体的対案を提示することを課題とする。個々の課題設定は以下の通りである。

(1) 比較理論の検討として、①欧米宗教学の変遷、②宗教分類概念の問題、③宗教に対する代替概念の問題をとりあげる。

①「比較宗教学 comparative religion」から出発した欧米の宗教学とその基礎前提が、その後通時的・実証的研究を重視することによってどのように変化したかを調べる。人文的宗教学と社会科学的宗教学の制度的位置関係についても、その歴史的変遷過程を明らかにする。特に20世紀の比較宗教研究の代名詞であった、宗教現象学の受容と変容について10カ国の研究者の協力を得て調査を行い、その成果をIAHRをめぐる現在の論争に反映させる。

②「世界宗教」「民族宗教」の対概念をはじめ、宗教学で伝統的に用いられてきた宗教分類概念の妥当性を、昨今の批判理論に照らして検討する。

③2000年代以降の宗教現象を分析するために、ポスト・セキュラー論・概念がしばしば用いられるようになったが、それは日本の現状をとらえるのにどこまで有効かを検討する。

(2) 近現代社会の公教育において宗教がどう扱われてきたかに関する歴史的研究を行う。

ある国の公教育では宗教が排除される、他の国では宗教が取り込まれるという現象を、単に「宗教教育の有無」や「政教分離の有無」として見るのではなく、排除・吸収どちらの場合でもその前提として公権力により「宗教」が定義されているということに注目し、各国の教育制度と法令・教科書の中にその表れを探る。一般概念としての「宗教」のみならず、キリスト教、仏教といった各宗教に関する記述と、教育方法・思想や当該国の宗教・社会情勢の関係を調べる。

(3) (2)の研究成果を踏まえ、国内の公教育における宗教の描き方・教え方に関する問題点を指摘し、改善のための具体的な方策を示す。対象は中等教育から高等教育、社会人教育を含む。

c 概要と自己評価

上記の(1)の①②については国際共著書籍を1冊を刊行、国際共著論文を2点発表、科研の研究報告書を刊行した他、国際学会で研究発表を行った。国際学会での発表はいずれもオンラインでの実施となったが、国際哲学・人文学会議（CIPSH）の会議では基調講演を務めた。また、CIPSHのGlobal History of the Humankindプロジェクト委員として、学際的な視野から世界宗教史記述を再検討するためのプラットフォームづくりに継続して取り組んでいる。

(2)の課題については2019年度にまとまった研究成果を発表したため、今期は同様の問題意識を持つ海外の研究者との連携を試みている。コロナ禍により当初の予定ほどは進まなかったが、オンライン会議により議論を深めることができた。

d 主要業績

(1) 著書

共著、Satoko Fujiwara, David Thurfjell, and Steven Engler eds, *Global Phenomenologies of Religion: An Oral History in Interviews*, Equinox, 2021.3

単著、藤原聖子、『宗教と過激思想』、筑摩書房、2021.5

(2) 論文

Satoko Fujiwara and Tim Jensen, "What's in a (Change of) Name? Much—but Not That Much—and Not What Wiebe Claims," *Method & Theory in the Study of Religion*, 32/2, pp.159-184, 2020.5

Tim Jensen and Satoko Fujiwara, "Professor Geo Widengren, IAHR Vice-President 1950-1960, IAHR President 1960-1970, IAHR Honorary Life Member 1996," *The Legacy: Life and Work of Geo Widengren and the Study of the History of Religions after World War II*, ed. by Göran Larsson, Leiden: Brill, 2021.11

(3) 学会発表

国内、藤原聖子、「宗教学から考える世界」、日本学術会議 学術フォーラム、2020.9.20

国内、藤原聖子、「宗教学から見た「女性」と「学」と「社会」」、ホームカミングデー企画公開シンポジウム「文学部が見てきた「女性と社会」」、2020.10.17

国内、藤原聖子、「コメント」、科研・成果論集『宗教と風紀』連続講演会、2021.7.17

国際、Satoko Fujiwara, “Global Phenomenologies of Religion and their Implications for Philosophical Anthropology,” The Phenomenology of Religion as Philosophical Anthropology, Oxford University, 2021.10.4 (招待講演)

国内、藤原聖子、「「世界哲学」は世界に開かれているか—宗教学も直面する問い—」、連続シンポジウム「世界哲学・世界哲学史を再考する」第6回「世界哲学と宗教」、2021.11.22

国際、Satoko Fujiwara, “The Global History of Religions in the Era of the SDGs,” CIPSH International Conference: Sustainability, Social Relevance, and the Humanities: Opportunities and Challenges, Southern University of Denmark, 2021.12.16 (招待講演)

(4) 啓蒙

藤原聖子、「宗教学から見た「女性」と「学」と「社会」、『文学部が見てきた「女性と社会」』、2021.2

(5) 研究報告書

藤原聖子、「宗教現象学の歴史の変遷と地域性に関する包括的研究」、『東京大学宗教学年報』37 特別号、1-267 頁、2020.12

(6) 会議主催、チェア他

国内、「日本宗教学会第80回年次大会」、チェア、KARS-JARS Joint Forum: Toward Post-COVID19 Networking、2021.9.7

国内、「ホームカミングディ文学部企画「共感」と「分断」、チェア、2021.10.16

国際、AAR Annual Meeting: The ICC-IAHR Joint Round-Table Session、チェア、2021.11.20

(7) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究B、藤原聖子、研究代表者、「宗教現象学の形成と論争に関するトランスナショナル・ヒストリー」、2020～

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

特別講演、日本学術会議、学術フォーラム「生きる意味 —コロナ収束後の産学連携が目指す価値の創造—」、2020.9
九州大学非常勤講師

海外インフラ展開人材養成プログラム（計画・交通研究会）講師

(2) 学会役員

国内、日本宗教学会 常務理事

国内、日本宗教研究諸学会連合 幹事

国内、日本学術会議 連携会員

国際、International Association for the History of Religions, Secretary General, 2020.8～

国際、International Council for Philosophy and Humanistic Studies (CIPSH), Executive Committee, 2020.12～

(3) 行政

文化庁宗務課 宗教法人審議会委員

文部省 大学設置委員会委員

1. 略歴

1997年3月	東京大学文学部思想文化学科宗教学宗教史学専修課程 卒業
1997年4月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻宗教学宗教史学専門分野修士課程 入学
1999年3月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻宗教学宗教史学専門分野修士課程 修了
1999年4月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻宗教学宗教史学専門分野博士課程 進学
2001年4月	日本学術振興会特別研究員 DC2 (東京大学、至2003年3月)
2002年3月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻宗教学宗教史学専門分野博士課程 単位取得退学
2003年4月	日本学術振興会特別研究員 PD (九州大学、至2004年3月)
2004年4月	鹿児島大学法文学部人文学科助教授
2007年4月	鹿児島大学法文学部人文学科准教授
2012年9月	ハワイ大学マノア校歴史学科客員研究員・米国国務省東西センター太平洋諸島開発プログラム 客員研究員 (フルブライト奨学金研究員プログラム、至2013年2月)
2013年4月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻宗教学宗教史学専門分野准教授
2019年4月	東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻兼任

2. 主な研究活動

a 専門分野

宗教史学・宗教人類学・宗教民俗学、慰霊・死者儀礼の継承、日本と太平洋域の宗教文化

主な研究活動は大きく以下の3つのテーマ群についてである。

(A) 戦争や災害による犠牲者に対する態度、(B) 現代の地域社会における宗教生活と日常生活の関係性、(C) 島嶼と半島におけるダイナミックな人的交流と宗教接触、(D) 世俗的空間における宗教性の表出

b 研究課題

具体的な研究課題は以下のとおりである。

(1) 「(A) 戦争や災害による犠牲者に対する態度」に関わる研究

遺骨収集・戦地慰霊において、遺族や戦友といった戦死者を取り巻く直接的関係者ばかりではなく、宗教者・旅行業者・行政といった第三者がどのように関与するかをめぐると、次世代へどのように継承されようとしているかをめぐるとして調査・考察を行っている。その際、日本人による遺骨収集や戦地慰霊の状況と米豪や太平洋諸島の状況との国際比較、次世代継承に関する宗教体験の伝承や宗教組織の継承などとの比較、戦地慰霊に関する聖地巡礼との比較を行っている。

(2) 「(B) 近現代の地域社会における宗教生活と日常生活の関係性」に関わる研究

九州をおもなフィールドとして、近現代の地域社会のなかで人びとがどのような信仰実践や宗教的行為を行ったかについて、そうした実践を支える日常生活とともに調査・考察している。とりわけ、民俗社会を基盤とした地域が、戦争や公害、自然災害などの歴史的経験からのレジリエンス(回復力)をどのように発揮しているかということについて、博士論文で取り上げた長崎の原爆慰霊を視野に入れながら考察しようとしている。

(3) 「(C) 島嶼と半島におけるダイナミックな人的交流と宗教接触」に関わる研究

奄美群島とマイクロネシア地域を主な対象としながら、大航海時代以降のヨーロッパ人のグローバルな移動に端を発する人的な交流の活発化のなかで宗教的接触状況が地域の宗教性のあり方にどのような影響を及ぼしているのかについて比較宗教的な理解を目指している。

(4) 「(D) 世俗的空間における宗教性の表出」に関わる研究

博物館・美術館における宗教的文物の展示をめぐる社会関係と、世俗的な戦争博物館・平和資料館等における慰霊・追悼の側面の考察を通して、ミュージアムという世俗的空間において、現代人の宗教性がどのように表出しているのか(あるいはしていないのか)を考察しようとしている。

c 概要と自己評価

(1)は博士論文の研究課題の延長上にあるものだが、対象地域の拡大と継承という宗教学的テーマへの深化を図りつつある状況である。2010～12年度に代表を務めた科研費基盤研究と、2012年度に滞在したハワイ大学での研究によって研究内容も研究ネットワークもさらなる展望が開けつつある。複数の単著としてまとめる予定である。

(2)(3)はさまざまな研究プロジェクトへの関わりから徐々に輪郭が浮かびつつある、ポスト博士論文の研究テーマであるが、モノグラフや翻訳の作業を重ねて体系化を図っているところである。将来的には九州を窓口としてアジア・太平洋を視野に入れた日本宗教史の構想につなげようとするものである。

(4)は、共著の論文集におけるモノグラフを数本刊行したが、2019年度から兼任となった文化資源学と連携しつつ、ヴァンキュラー宗教研究の視点も組み込みながら、今後の積極的に進展めざしている。

d 主要業績

(1) 著書

共著、伊藤聡・佐藤文子編、『日本宗教史5 日本宗教の信仰世界』、吉川弘文館、2020.11

共著、方法論懇話会編、『療法としての歴史〈知〉—いまを診る』、森話社、2020.12

編著、島菌進・末木文美士・大谷栄一・西村明編、『近代日本宗教史5 敗戦から高度成長へ』、春秋社、2021.3

共著、長谷千代子・別所裕介・川口幸大・藤本透子編、『宗教性の人類学—近代の果てに、人は何を願うのか』、法蔵館、2021.4

共著、東京大学文化資源学研究室編、『文化資源学—文化の見つけかたと育てかた』、新曜社、2021.10

編著、蘭信三・石原俊・一瀬俊也・佐藤文香・西村明・野上元・福間良明編、『シリーズ戦争と社会第5巻 変容する記憶と追悼』、岩波書店、2022.4

(2) 論文

西村明、「架橋としての視覚物—戦地訪問映像を中心に」、『日本オーラル・ヒストリー研究』、16、2020.9

西村明、「記憶とたましい—戦争死者の遺骨をめぐる対応から考える」、『ひらく』、4、2020.12

西村明、「疫病で検出される信仰世界—近代日本のコレラ流行を中心に」、『宗教学論集』、40、2021.1

西村明、「「戦争体験」と慰霊に対する宗教学的アプローチの再検討」、『理論と動態』、14、2021.3

西村明、「近代日本におけるコレラの流行と宗教」、『宗教研究』、95(2)、2021.9

西村明、「戦没者慰霊と紀元節—三笠宮崇仁にとっての軍隊と学問」、『思想』、1177、2022.4

(3) 学会発表

国内、西村明、「出身地域から「日本の宗教」を捉え直す—島原半島調査から」、日本宗教学会第79回学術大会、駒澤大学（オンライン）、2020.9.19

国内、西村明、「疫病で検出される信仰世界—近代日本のコレラ流行を中心に」、駒澤大学 総合教育研究部・文化学部 門主催公開講演会（共催：駒沢宗教学研究会）、2020.11.6

国内、西村明、「死者と生者をつなぐアート—多様な慰霊を生み出す想像力と創造力—」、現代民俗学会第51回研究会、オンライン、2020.11.7

国内、西村明、「近代日本の感染症と宗教」、国際宗教研究所シンポジウム「新たな感染症の時代の宗教」、2021.2.20

国際、西村明、「衛生と信仰のはざま—近代日本宗教史に学ぶ」、神道国際学会第25回国際神道セミナー「神々と伝染病 II」、関西大学東京センター（オンライン併用）、2021.3.9

国内、西村明、「政教分離フィルター—濾過後の残留宗教性と芸術」、美学会第72回学術大会シンポジウム「新・限界芸術論」、東京大学（オンライン）、2021.10.10

国際、Akira Nishimura, “Vernacular Attitudes toward Remains in Japan: Considering Historic Cultural Background of the Politicization,” International Conference Actions for the Missing: Scientific and Vernacular Forms of War Dead Accounting, NIOD Institute for War, Holocaust and Genocide Studies, Amsterdam（オンライン参加）、2022.6.8

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、東北学院大学、「平和学」、2020.9、2021.9

非常勤講師、東京藝術大学、「宗教学」、2021.8～

(2) 学会

国内、日本宗教学会、『宗教研究』編集委員長、2020.9～

国内、日本宗教学会、男女共同参画・若手支援ワーキンググループ委員、2020.9～

国内、西日本宗教学会、『西日本宗教研究誌』編集委員、2021.3～

(3) 行政

鹿児島県伊仙町、立案、伊仙町誌編纂審議会委員、2021.8～

(4) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

公益財団法人国際宗教研究所、理事、2020.6～

1. 略歴

2000年4月	東京大学教養学部文科Ⅲ類 入学
2002年4月	東京大学文学部思想文化学科宗教学宗教学専修課程 進学
2004年3月	東京大学文学部思想文化学科宗教学宗教学専修課程 卒業
2004年4月	東京大学大学院人文社会系研究科宗教学宗教学専門分野修士課程 入学
2007年3月	東京大学大学院人文社会系研究科宗教学宗教学専門分野修士課程 修了
2007年4月	東京大学大学院人文社会系研究科宗教学宗教学専門分野博士課程 進学
2009年4月	日本学術振興会特別研究員 (DC2) (東京大学、～2011年3月)
2010年6月	サントル・セーヴルーパリー・イエズス会神学部 (日本学術振興会優秀若手研究者海外派遣事業 (第二回) による海外派遣、～2011年3月)
2011年9月	フランス国立社会科学高等研究院 (EHESS) 博士課程 入学
2011年9月	フランス政府給費留学生 (フランス国立社会科学高等研究院、～2013年7月)
2012年7月	東京大学大学院人文社会系研究科宗教学宗教学専門分野博士課程 単位取得退学
2012年8月	東京大学大学院次世代人文学開発センター研究員 (～2013年3月)
2014年4月	天理大学人間学部宗教学科 専任講師
2014年11月	博士 (文学)、東京大学
2015年4月	フランス国立社会科学高等研究院 (EHESS) 博士課程 退学
2019年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

宗教史・靈性史、神秘主義、現代宗教思想・宗教哲学

17世紀フランスを中心に、近世西欧カトリック圏に興隆した「神秘主義 (la mystique)」と呼ばれる思想潮流を研究している。①西洋の靈性史を広く見渡しつつ近世神秘主義文献を吟味することを軸として、②近代的な神秘主義論の問い直しと「神秘主義」の思想史的再定位、③近現代宗教思想と神秘主義の接点をテーマに研究を進めている。

b 研究課題

(1) 近世西欧神秘主義研究

17世紀フランス神秘主義、ジャン＝ジョゼフ・スュラン研究を軸としながら、同時代に輩出した神秘家・靈性家たちのテキスト解釈を通じてその思想的ダイナミズムを掬いあげること。(2)や(3)のテーマとの関連を意識し、とくに言語、信仰、経験、身体といった鍵概念を焦点として近世神秘主義の思想史的射程を明らかにすること。

(2) 「神秘主義」の思想史的再定位

19世紀以降宗教学の重要概念となった「神秘主義 (mysticism)」の歴史性を検討し、近代神秘主義論を相対化すること。また、「神秘」をめぐる思想や実践の変遷を西洋古代以降の靈性史に内在しつつ辿り、系譜学的観点から神秘主義という知のありかたを立体的に捉えるとともに、狭義のキリスト教神学や靈性に留まらない思想史のなかに神秘主義を再定位すること。

(3) 近現代宗教思想と神秘主義の接点 (脱近代主義的な宗教論の探究)

「宗教離れ」や「神の死」が叫ばれる近現代にあって、宗教や信仰の条件をラディカルに問いなおす思想がしばしば神秘主義と接点をもつことを論点化し、神秘主義を「他なるもの」を語ろうとする知として捉えなおすこと。より具体的には、現代的な神秘主義研究の出発点となったミシェル・ド・セルトーのテキストをポスト近代の宗教論として解釈すること。また、近代日本に発生した民衆宗教思想 (天理教) を脱近代主義的な観点から再解釈すること。

c 概要と自己評価

博士論文以来の研究課題である(1)については、スュランや十字架のヨハネに関して継続している研究成果を書籍や論文として発表した。フランス文学研究やキリスト教教父研究の専門家が集う場での発表を通じて研究ネットワークを広げるとともに、本研究の領域横断的なインパクトを確かめることができた。近年着手した(2)については、2021年より5年間の科研費 (若手研究) の課題としても採択され、より長期的な見通しの下に研究を行っている。パウロやアウグスティヌスはじめ、古代・中世のキリスト教思想にも踏み込み、今後の研究の土台となる成果を論文にまとめた。また、神秘主義の系譜を概観する単著を執筆中である。(3)については、セルトーの宗教思想をめぐる研究成果を書籍や論文と

して発表したほか、セルトーの著書の翻訳書を刊行に向けて準備中である。(2)や(3)の研究を進めるなかで、ジェンダー・セクシュアリティ研究の文脈での神秘主義の思想的可能性も明らかになってきている。また、天理教の奥義といわれる「泥海古記」についても論文としてまとめた成果を発表した。

d 主要業績

(1) 著書

共著、伊藤邦武・山内志朗・中島隆博・納富信留編、『世界哲学史 5』（第2章「西洋近世の神秘主義」）、筑摩書房、2020.5

共著、川口茂雄・越門勝彦・三宅岳史編、『現代フランス哲学入門』（「セルトー」）、ミネルヴァ書房、2020.7

共著、伊達聖伸・アブデヌール・ビダール編、『世俗の彼方のスピリチュアリティ フランスのイスラム哲学者との対話』（第II部第3章「キリスト教の破碎／燦めき—現代カトリックの危機とミシェル・ド・セルトー」）、東京大学出版会、2021.12

(2) 論文

渡辺優、「神秘主義の知のありか」、『文化交流研究』、33、43-63頁、2020.3

渡辺優、「魂の根底の溶解？—中世北方神秘思想と近世フランス神秘主義のあいだ（2）」、『東京大学宗教学年報』、37、1-17頁、2020.3

渡辺優、「暗夜の信仰の近世— 一七世紀フランス神秘主義における十字架のヨハネ解釈の諸相」、『宗教研究』、94(1)、49-73頁、2020.6

渡辺優、「「泥海古記」の想像力」、『天理大学学報』、72(2)、21-50頁、2021.2

渡辺優、「もうひとつの原典—「泥海古記」を読みなおすために」、『「原典」—教えの豊かさを汲み取るために—（2021年度天理大学学術・研究・教育活動助成 教理研究会報告書）』、13-36頁、2022.2

渡辺優、「スランにおけるパウロ研究序説—「パウロの神秘論」の風を受けて」、『パトリスティカ』、25、151-163頁、2022.3

(3) 書評

村上寛、『鏡・意志・魂：ポレートと呼ばれるマルグリットとその思想』、晃洋書房、『宗教研究』、94(2)、355-362頁、2020.9

御園敬介、『ジャンセニスム 生成する異端』、慶應義塾大学出版会、『宗教研究』、95(3)、704-710頁、2021.12

(4) 解説

渡辺優、「日常実践という大海の浜辺を歩く者—ミシェル・ド・セルトーと「場」の思考」、『日常実践のポイエティック（ちくま学芸文庫）』、2021.3

(5) 学会発表

国内、渡辺優、「ミシェル・ド・セルトーそして／あるいはポスト世俗主義の宗教論—探究の今日的可能性」、科学研究費補助金（基盤A）「西洋社会における世俗の変容と「宗教的なもの」の再構成—学際的比較研究」A班第1回研究会、オンライン、2020.7.25

国内、渡辺優、「キエティスム論争再訪」、日本宗教学会第79回学術大会、駒澤大学（オンライン）、2020.9.19

国内、渡辺優、「天理教における正典化をめぐる」、科研挑戦的研究（開拓）「諸宗教における正典化をテーマとする、比較宗教教典研究の立ち上げのための総合的研究」第8回研究会、北海道大学（オンライン）、2021.5.21

国内、渡辺優、「神秘主義と愛知—世界哲学史と神秘主義研究の接点を求めて」、連続シンポジウム「世界哲学・世界哲学史を再考する」第4回「中世と近世のあわい」、東京大学（オンライン）、2021.5.31

国内、渡辺優、「スランにおけるパウロ『パウロの神秘論』の風を受けて」、第173回教父研究会、オンライン、2021.6.19

国内、渡辺優、「近世神秘主義の「経験」概念をめぐる—ジャン=ジョゼフ・スラン『経験の学知』（1663年）を中心に」、「フランス近世の〈知脈〉」第8回研究会、大阪大学（オンライン）、2021.9.10

国内、渡辺優、「近世神秘主義の「経験」論の射程—「身体の詩学」のためのスケッチ」、龍谷大学国際社会文化研究所2021プロジェクト研究会、オンライン、2021.9.14

国内、渡辺優、「スランにおけるパウロ—近世神秘主義における身体の詩学の一断面」、教父研究会第175回研究会、オンライン、2021.12.4

国内、渡辺優、「近現代西欧カトリックの危機と「神秘主義」あるいは「スピリチュアリティ」のゆくえ—世俗／宗教のあわい—こうぐめくもの」、科学研究費補助金（基盤A）「西洋社会における世俗の変容と「宗教的なもの」の再構成—学際的比較研究」A班第4回研究会、オンライン、2021.12.28

国際、渡辺優、「コメント（セリーヌ・ペロー「近年のフランスにおける宗教状況の変容」に対する）」、「フランスにおける宗教的状況の特殊性」、科学研究費補助金（基盤 A）「西洋社会における世俗の変容と「宗教的なもの」の再構成——学際的比較研究」（主催、東京大学東アジア藝文書院（共催）、オンライン、2022.3.1

(6) **共同研究・受託研究**

共同研究、龍谷大学国際社会文化研究所、「宗教概念批判以降の宗教研究に基づく人間性の探究」（研究代表者：古荘匡義）、2021～

3. 主な社会活動

(1) **他機関での講義等**

天理大学大学院宗教文化研究科非常勤講師、2019.4～

(2) **学会**

国内、日本宗教学会、評議員、2019.9～

07 美学芸術学

教授 小田部 胤久 OTABE, Tanehisa

1. 略歴

- 1977年3月 東京教育大学附属高等学校卒業
1977年4月 東京大学教養学部文科3類入学
1981年3月 東京大学文学部第一類(美学芸術学専修課程)卒業
1981年4月 東京大学大学院人文科学研究科(美学芸術学専門課程)修士課程入学
1984年3月 東京大学大学院人文科学研究科(美学芸術学専門課程)修士課程修了
1984年4月 東京大学大学院人文科学研究科(美学芸術学専門課程)博士課程進学
1988年9月 東京大学大学院人文科学研究科(美学芸術学専門課程)博士課程単位取得退学
(その間 1987年10月～1988年9月 DAAD(ドイツ学術交流会)奨学生としてハンブルク大学に留学)
1992年10月 東京大学大学院人文科学研究科において博士(文学)取得
1988年10月 神戸大学助教授, 文学部(哲学科芸術学専攻課程)
(その間 1990年10月～1991年8月 ハンブルク大学で研究)
1993年10月～ 神戸大学大学院文化学(博士課程)兼任
1996年4月 東京大学大学院人文社会系研究科(美学芸術学専門課程)助教授
2007年4月 東京大学大学院人文科学研究科(美学芸術学専門課程)教授
(その間 2008年10月～2009年9月 ドイツ連邦政府の招聘によりドイツにて研究)

2. 主な研究活動

a 専門分野

美学・芸術学の基本概念の研究、「感性の学」としての美学の歴史的再構成、18世紀から19世紀にかけてのドイツ語圏を中心とする美学理論の研究、20世紀前半におけるドイツと日本の美学交渉史の研究、および間文化的視点からの美学理論の構築

b 研究課題

2020年度から21年度にかけての研究課題は、基本的に18年度から19年度にかけての研究課題の継続である。

第一に、2001年に公刊した『芸術の逆説——近代美学の成立』以来の研究の一環として、美学・芸術学の基本概念の研究に従事している。その一端は2009年に公刊した『西洋美学史』(東京大学出版会)において示した。この書物は、学説史研究の持ちうる現代的な意味を問う試みでもあり、この研究をその後も継続して行っている。

第二に、「感性の学」としての美学を歴史的に再構成し、現代の美学を刷新する作業に携わっている。これは数年後に『西洋美学史』第二巻として結実するはずのものである。この2年間はとりわけカントとヘルダーに即してこの主題を検討した。

第一、第二の研究課題とも連関するが、第三に、近代美学を基礎づけた書物と一般に見なされているカント『判断力批判』への新たな接近を試みている。その一端は2020年に公刊した『美学』において公表したが、さらに『判断力批判』第1部の訳・訳註を公刊したいと考えている。

第四に、昨今の「間文化性」への関心の増大に応じつつ、19世紀末から20世紀前半における日本の西洋美学の受容を「間文化性」の問題として扱う可能性を探る作業を継続している。

c 概要と自己評価

上記四つの課題に関して、この2年間はとりわけ第三の課題に多くの時間を割き、美学の新たな教科書として『美学』を公刊することができた。ただし、この書はかなり専門性を伴うものであるため、より多くの読者に開かれた教科書の必要性を自覚し、新たな教科書の作成に向けて準備を始めた。

d 主要業績

(1) 著書

単著、小田部胤久、『美学』、2020.9

(2) 論文

Tanehisa Otabe, 「Fine Art as the “Art of Living”: Johann Gottfried Herder’s Calligone Reconsidered from a Somaesthetic Point of View」、『Journal of Somaesthetics』、Vol. 6, no. 1、25-35 頁、2020

小田部胤久、「(実践的) 無関心と (美的) 関与——〈美の無関心性説〉再考」、『美学芸術学研究』、29、119-141 頁、2020.3

Tanehisa Otabe, 「The Significance of the Classics (*koten*) in Modern Japanese Aesthetics」、『JTILA』、44、59-66 頁、2020.3

Tanehisa Otabe, 「Das Exemplarische und die Originalität. Schellings Kunstphilosophie im begriffsgeschichtlichen Kontext」、『Athenaeum. Jahrbuch der Friedrich Schlegel-Gesellschaft』、29、95-109 頁、2020.12

Tanehisa Otabe, 「The Aesthetic Disinterestedness Reconsidered: Baumgarten, Kant, Schopenhauer, and Duchamp」、『JTILA』、45、31-37 頁、2021.3

Tanehisa Otabe, 「The conceptions of Folk and Art in the Age of Goethe: Herder, Wolf, Görres, and Schelling」、『JTILA』、45、65-73 頁、2021.3

小田部胤久、「芸術の汎律性について——近代日本における〈日常性の美学〉の試み」、『美学芸術学研究』、39、189-223 頁、2021.3

(3) 書評

井奥陽子、『バウムガルテンの美学——図像と認識の修辞学』、『日本18世紀学会年報』、36、149-150 頁、2021.6

(4) 学会発表

国際、Tanehisa Otabe, 「Schelling in Japan」、Conference organized by the North American Schelling Society、Zoom、2021.5.20

国際、Tanehisa Otabe, 「Aesthetic Disinterestedness: Kant, Schopenhauer, Heidegger, and Duchamp」、The George Story Lecture at the Memorial University、Zoom (Canada, Memorial University)、2021.5.20

国内、小田部胤久、「大西克礼とシェリング」、日本シェリング協会、2021.7.3

(5) 啓蒙

小田部胤久、「〈よそ〉の美学者——パンタスマに佇む浅沼圭司』、『コメント通信』、16、8-9 頁、2021.11

(6) マスコミ

「AI時代の音楽の独創性とは」、『東京大学新聞』、2020.1.28

「カント『判断力批判』からみる美学史と現代思想——『美学』刊行記念」、ゲンロンカフェ、宮崎裕助氏との対談、2020.11.27

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本シェリング協会、会長、2020.4～2020.7

国内、日本シェリング協会、理事、2020.4～2022.3

国際、Culture and Dialogue、編集委員、2020.4～2022.3

国際、国際シェリング協会、委員、2020.4～2022.3

国際、美学芸術学研究 (韓国)、編集委員、2018.4～2020.3

国際、Athenaeum (国際Fr. シュレーゲル協会機関誌)、編集委員、2020.4～2022.3

国際、Kalibi (北米シェリング協会機関誌)、編集委員、2020.4～2022.3

国際、Schelling-Studien (国際シェリング協会機関誌)、編集委員、2021.7～2022.3

(2) 学外組織 委員・役員

日本学術会議連携会員、2020.4～2022.3

1. 略歴

1983年3月	東京大学文学部美学芸術学専修課程卒業
1983年4月	同大学院総合文化研究科比較文学比較文化専門課程修士課程入学
1985年3月	同修士課程修了
1985年4月	同博士課程進学
1989年3月	同博士課程単位取得退学
1989年4月	和洋女子大学文家政学部英文学科専任講師
1994年4月	和洋女子大学文家政学部英文学科助教授
1998年4月	和洋女子大学人文学部国際社会学科助教授
2003年4月	和洋女子大学人文学部国際社会学科教授
2008年4月	和洋女子大学人文学群日本文学・文化学類教授
2015年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

分析哲学、美学

b 研究課題

フィクションの存在論の研究から出発し、虚構文の論理構造の解明から論理学の「可能世界」概念の応用へ、そして「可能世界」概念そのものの論理の研究へと進んだ。その過程で、自然科学の「多世界」「多宇宙」の概念と「可能世界」との関係の考察を迫られ、それらの概念に立脚した「人間原理」を方法的基盤とした諸議論の中で哲学問題を再構成する仕事を進めた。現在は、芸術の現状に対して人間原理的（進化論的）な説明を与え、見かけの法則性を観測選択効果へ還元する論理を追求しつつ、多分野を横断する「諸理論のネットワーク」の中に芸術定義論および認識論・ジェンダー論を主としたカテゴリ論全体を位置付けるプロジェクトを進めている。

c 概要と自己評価

哲学問題を人間原理の観点から考察し直す仕事については、心の哲学、ロボット科学、人文死生学といった分野の研究者と研究会を重ねる中で、着実に思索が進みつつある。人間原理の観測選択効果の論理構造を多くの領域に見出す作業とともに、長年の研究テーマであるフィクション論の人間原理的再構成を進めつつある。

中心課題である「芸術の定義」については、30種類以上にわたる既成諸説を検討する中で、自分独自の定義を結晶化させつつある。方法としては、「美学芸術学」という学問分野名称から察せられるような美的定義のアプリオリな優位性を前提し、美的定義に対する有力な二つの反証を再反駁する形で進めている。反証の一つは、美的関心、美的経験といった「美的」カテゴリというものは実在しないのではないかと、という問題。もう一つは、コンセプチュアルアート、ソーシャリーエンゲージドアートのような「美的でない（知覚的属性に依拠しない、あるいは無関心性に反する）芸術」の存在である。この二つを一度に解決できる提案として、「志向性による定義」を提唱する。既成の美的定義のうち最も洗練されたバージョン「美的関心を満たす性能を持たせる意図をもって作られた人工物」の「意図」の部分、任意の志向性で置き換えるという提案である。これによって、芸術と美的カテゴリとの関係は、美的カテゴリの現実的存在を前提せずに済むようになり（志向的世界の中に実在しさえすればよい）かつ、志向された属性の肯定的形跡が制作物の中および周辺に見出されなくてもよいことになる（否定的もしくは他の関与的形跡があればよい）。この芸術定義は、反証を免れた美的定義となると考えられ、この方向での考察が目下順調に進みつつある。

なお、クリティカルシンキングの啓蒙的発信にも継続的に力を注いできたが、近年、ジェンダーをめぐるキャンセルカルチャーの動向に関する所見を適宜発表し、討論会なども催している。それらは以下の業績申告には含まれないが、現場では極力、学術的成果を反映させるよう留意している。

d 主要業績

(1) 著書

- 単著、三浦俊彦、『東大の先生！超わかりやすくビジネスに効くアートを教えてください！』、かんき出版、2020.4
単著、外国語版『這就是邏輯學』、広東経済出版社、钟小源 訳、2021.6（『本当にわかる論理学』日本実業出版社、初版、2010.10）中国語（簡体字）版、p.296

(2) 論文

Toshihiko MIURA, "The Holistic Definition of Art" *JTLA* 44, 9-19 頁, 2020.6

三浦俊彦, 「芸術形式としてのジョーク」, 『美学芸術学研究』, 38, pp.143-165, 2020.7

三浦俊彦, 「芸術の諸定義——同型対応による認識に向けて」, 『美学芸術学研究』, 39, 225-248 頁, 2021.7

(3) 研究報告書

三浦俊彦, 「「芸術」の終焉と「芸術学」の終焉」, 東京大学総長裁量経費プロジェクト「Sustainability と人文知」(2015年度～2020年度報告書), 2021年3月, 77-98 頁

(4) 小論、項目執筆

三浦俊彦, 「バンクシーが世界でウケる3つの理由」, *PRESIDENT Online*, 2020年6月8日

三浦俊彦, 「違和感だらけの人生」にキレないための新提案」, 『東洋経済オンライン』, 2020年6月15日

美学会編『美学の事典』, 丸善出版, 2020年12月(「分析美学——20世紀後半からの新たな流れ」 pp.24-25, 「芸術の定義・芸術作品の存在論」 pp.58-59, 「アートワールド——芸術の定義との関わりで」 pp.78-79)

(5) その他(ラジオ出演)

『DAYS』, 原田龍二 DAYS 「アートで逆転!」(日本放送), 2020年6月24日

『STEP ONE』, 「BEHIND THE SCENE」(J-WAVE), 2020年7月6日

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本科学哲学会、『科学哲学』編集委員、2016.4～

国内、美学会、委員、2016.10～、副会長、東部会代表、2019.10～

国内、東大比較文学会、会員、2016.4～

准教授 **吉田 寛** YOSHIDA, Hiroshi

1. 略歴

1992年4月	東京大学教養学部文科Ⅲ類入学
1996年3月	同教養学部教養学科第一(表象文化論)卒業
1996年4月	同大学院人文社会系研究科(美学芸術学専門分野)修士課程入学
1998年3月	同修士課程修了、修士(文学)取得
1998年4月	同博士課程進学
2005年10月	同博士課程修了、博士(文学)取得
2006年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 助手
2007年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 助教
2008年4月	立命館大学大学院先端総合学術研究科 准教授
2015年4月	立命館大学大学院先端総合学術研究科 教授
2015年4月	ロンドン大学ゴールドスミス校客員研究員(～2016年3月)
2019年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

感性学、ゲーム研究

b 研究課題

1. 「感性学」の(再)構築。これまで基本的に「美と芸術の学」として展開されてきたエステティクス(aesthetics)を「感性の学」として再起動する。その際には、現在「感性」の研究に取り組んでいる他の学問分野の成果と蓄積を

参照しなければならないと考えている。例えば人間工学や認知科学、脳科学、人工知能研究などがそこに含まれる。それらを架橋しながら人間の感性を探究する総合的な学として「感性学」を構想している。

2. 遊びとゲームの研究。われわれの感性が、つねに技術やメディアとの相互作用のもとで触発され、変化していることは言うまでもない。そして現代的な感性のあり方を理解するうえで最良の手がかりとなるのがデジタルゲーム(コンピュータゲーム、ビデオゲーム)である。ゲームプレイヤーの経験——空間、時間、運動、物語、虚構、ルール、競争、楽しさなど——を解明することで、感性の現代的条件が理解できる。その際には、最先端技術の結晶であるゲームを、「遊び」という、人類のより原初的で普遍的な活動の一種として理解する視点も必要になる。
3. メディアとデザインの研究。感性学はデザインの実践に学び、また再度そこに知見を差し戻す。デザインは、人と技術と社会の交わるところに成立する。文房具や食器のような「道具」から、自動車やコンピュータなどの「機械」、さらにはプロセスやサービスといった「実体のない」ものまで、あらゆるデザインは、われわれの内部(思考、感覚)と外部(物質世界、社会)を媒介するメディアである。そしてまたあらゆるメディアは、デザインされる。メディアとデザインをつなぐ、さまざまな理論と実践の探究を通して、感性学としてのエステティックスの現代的課題を検討し、来たるべき時代の技術と社会のあり方を構想したい。

c 概要と自己評価

上記研究課題の2と3にまたがるデジタルゲームの研究に、この二年間はとりわけ注力した。スクリーンの記号論的分析、画面分割、エレクトロニック・スポーツ(eスポーツ)とスポーツの境界問題、メディアとしてのゲームの特質、文化資源としてのゲーム、ゲームにおける音楽とサウンド、コロナ禍のロックダウン生活の中でゲームがもつ意義など、さまざまな視角と主題からゲームと遊びにアプローチすることができた。そのうちの多くは、2020年度から2021年度まで研究代表者として遂行した「デジタルゲームにおける没入(イマージョン)概念の美学的考察」(科学研究費基盤研究(C)、課題番号20K00123)、2021年度に研究代表者として外国人特別研究員と共同で遂行した「リアルとは何か? 拡張した心の理論を通じた都市と身体景観の探索」(特別研究員奨励費、課題番号21F21769)、および2020年度から2021年度まで研究分担者として参加した「脱マスメディア時代のポップカルチャー美学に関する基盤研究」(研究代表者:室井尚(横浜国立大学)、科学研究費基盤研究(A)、課題番号19H00517)の成果である。第三の共同研究では「ポップカルチャー美学」の総合的研究に、ゲーム研究者として貢献することができた。また第一の没入研究は、デジタル時代における遊びとゲームの研究へと射程を拡げて、2022年度以降も継続する。

d 主要業績

(1) 著書

Martin Roth, Hiroshi Yoshida & Martin Picard (eds.). *Japan's Contemporary Media Culture between Local and Global: Content, Practice and Theory*. Heidelberg & Berlin: CrossAsia-eBooks, December 9, 2021, 340p.

(2) 論文

Hiroshi Yoshida, "L'expérience vidéoludique en tant que double processus sémiotique," *JTLA (Journal of the Faculty of Letters, The University of Tokyo, Aesthetics)*, Vol. 44, pp. 51-57, 2020.3.20

吉田寛、「デジタルゲーム固有の経験とはなにか」、小林信重編著『デジタルゲーム研究入門——レポート作成から論文執筆まで』、ミネルヴァ書房、pp. 232-233、2020.6.1

吉田寛、「民謡とナショナリズム」、石田勇治編集代表『ドイツ文化事典』、丸善出版、pp. 522-523、2020.10.30

吉田寛、「eスポーツから考える——身体、技術、コミュニケーションの現在と未来」、『Fashion Talks...』第12号、京都服飾文化研究財団、pp. 28-37、2020.11.11

吉田寛、「音楽理論(近代)——「音楽そのもの」の美学はどのように誕生したか」「ポピュラーカルチャーと美学」「遊びとゲーム——新たな物語メディアの出現」、美学会編『美学の事典』、丸善出版、pp. 372-373、pp. 544-547、pp. 548-551、2020.12.25

吉田寛、「游戏中的死亡意味着什么? ——再访“游戏现实主义”问题」、鄧劍訳編『探寻游戏王国里的宝藏——日本游戏批评文选』、上海书店出版社、pp. 237-273、2020.12

吉田寛、「元游戏现实主义——数字游戏作为批评的平台」、鄧劍訳編『探寻游戏王国里的宝藏——日本游戏批评文选』、上海书店出版社、pp. 274-304、2020.12

吉田寛、「作为“反抗”的玩游玩——通向游戏现实主义2.0」、鄧劍訳編『探寻游戏王国里的宝藏——日本游戏批评文选』、上海书店出版社、pp. 305-322、2020.12

吉田寛、「遊び/ゲーム」、門林岳史、増田展大編『クリティカル・ワード メディア論——理論と歴史から(いま)が学べる』、フィルムアート社、pp. 34-40、2021.2.25

吉田寛、「19世紀ドイツ:「音楽の国」の成立から分裂まで」、津上英輔、赤塚健太郎編著『新訂 西洋音楽史』、放送大学教育振興会、pp. 205-221、2021.3.20

吉田寛、「新しい生活様式」は学術活動をどう再編成するのか——ソーシャルディスタンスとメディア」、『2020年度オープン研究会「メディア変容と新型コロナウイルス」記録集』（科学研究費基盤研究（A）研究課題番号19H00517「脱マスメディア時代のポップカルチャー美学に関する基盤研究」）、pp. 45-58、2021.3.24

吉田寛、「ビデオゲームにおける画面分割」、『2020年度オープン研究会「メディア変容と新型コロナウイルス」記録集』（科学研究費基盤研究（A）研究課題番号19H00517「脱マスメディア時代のポップカルチャー美学に関する基盤研究」）、pp. 166-177、2021.3.24

Hiroshi Yoshida, “Johann Gottfried Herder’s Folksong Project as a Pioneering Involvement in Intangible Cultural Heritage: Between Universalism and Nationalism,” *JTLA (Journal of the Faculty of Letters, The University of Tokyo, Aesthetics)*, Vol. 45, pp. 23-29, 2021.3.26

吉田寛、「ゲーム研究——ゲームが「メディア」であるとはいかなる意味か」、伊藤守編著『ポストメディア・セオリーズ——メディア研究の新展開』、ミネルヴァ書房、pp. 141-166、2021.3.31

吉田寛、「文化資源としてのゲーム——ゲーム保存の現状と課題」、東京大学文化資源学研究室編『文化資源学——文化の見つけかたと育てかた』、新曜社、pp. 98-116、2021.10.25

吉田寛、「ゲームにとって音とは何か——ダイエージェンシ（物語世界）概念をめぐって」、細川周平編著『音と耳から考える——歴史・身体・テクノロジー』、アルテスパブリッシング、pp. 466-481、2021.10.25

(3) 小論

吉田寛、松永伸司「“ゲームらしさ”をもっと深く語りたい！——そんなあなたのためのゲームスタディーズ入門」、電ファミニコゲーマー、2020.6.15 (URL=<https://news.denfamnicogamer.jp/interview/200615a>)

吉田寛、「メタゲーミング」「カウンタープレイ」、谷口暁彦、松永伸司、大岩雄典、吉田寛「ゲーム×アートを考えるためのキーワード解説」、『美術手帖』（特集：ゲーム×アート）、美術出版社、p. 33、1083号、2020.8.1

イアン・ボゴスト、吉田寛「説得的ゲーム」と『あつまれ どうぶつの森』、『美術手帖』（特集：ゲーム×アート）、美術出版社、pp. 118-125、1083号、2020.8.1

吉田寛、「パネル2 挑発するメディア——「長い60年代」における批判的コミュニケーションとしての芸術」、『REPRE』Vol. 40、表象文化論学会、2020.10.20 (URL=<https://www.repre.org/repre/vol40/1/2-1/>)

吉田寛、「デジタルゲームの保存はどうあるべきか」、『人文情報学月報』第112号、一般財団法人人文情報学研究所、2020.11.30

吉田寛、「游戏中的死亡意味着什么？——再访“游戏现实主义”问题」、『澎湃新闻』、2021.2.5 (URL=https://www.thepaper.cn/newsDetail_forward_10933109)

室井尚、吉岡洋、秋庭史典、佐藤守弘、吉田寛、ファビアン・カルパントラ「第一回オープン研究会 討議」「第二回オープン研究会 討議」「第三回オープン研究会 討議」「第四回オープン研究会 討議」「第五回オープン研究会 討議」、『2020年度オープン研究会「メディア変容と新型コロナウイルス」記録集』（科学研究費基盤研究（A）研究課題番号19H00517「脱マスメディア時代のポップカルチャー美学に関する基盤研究」）、pp. 36-44、pp. 59-71、pp. 93-107、pp. 126-137、pp. 156-165、pp. 178-193、pp. 207-221、pp. 234-249、pp. 269-290、2021.3.24

Claudia Bonillo Fernández & Hiroshi Yoshida. “Diálogos con Japón: Entrevista al Profesor Yoshida Hiroshi,” *e-tramas*, No. 9, pp. 45-79, 2021.7.31

吉田寛、「編集後記」、日本音楽学会西日本支部『西日本支部通信』第20号（通巻120号）、p. 10、2021.10.1

吉田寛、「视频游戏的符号理论分析——以屏幕的双重化为中心」、『澎湃新闻』、2021.11.6 (URL=https://www.thepaper.cn/newsDetail_forward_15204603)

吉田寛、「电子竞技距离成为奥运会比赛项目还有多远」、『澎湃新闻』、2022.2.26 (URL=https://www.thepaper.cn/newsDetail_forward_16801976)

吉田寛、「【ゲームが研究対象になるって知ってましたか？】東大のゲーム研究者、吉田寛先生にインタビュー【生活がゲーム化した現在を考える】」、『UmeeT——東大発オンラインメディア』、2022.3.2 (URL=<https://todai-umeeet.com/article/62980>)

室井尚、吉岡洋、秋庭史典、佐藤守弘、吉田寛、ファビアン・カルパントラ「第一回オープン研究会 討議」「第二回オープン研究会 討議」「第三回オープン研究会 討議」、『2021年度オープン研究会「ポスト・コロナのポップカルチャー」最終報告書』（科学研究費基盤研究（A）研究課題番号19H00517「脱マスメディア時代のポップカルチャー美学に関する基盤研究」）、pp. 42-99、pp. 124-149、pp. 193-227、2022.3.24

(4) 書評・解説等

吉田寛、「Exhibition #00 ファイナルファンタジーII『メインテーマ』」、『Ludo-Musica——音楽からみるビデオゲーム』（文化庁令和2年度「メディア芸術連携基盤等整備推進事業」）、文化庁、pp. 16-17、2021.3.26

(5) 学会発表・講演等

- 国内、吉田寛、「新しい生活様式」は学術活動をどう再編成するのか——ソーシャルディスタンスとメディア」、第一回オープン研究会「メディア変容と新型コロナウイルス」(科学研究費基盤研究(A) 研究課題番号 19H00517「脱マスメディア時代のポップカルチャー美学に関する基盤研究」)、日本丸研修センター、横浜、2020.6.13
- 国内、吉田寛、「ゲームにおける画面分割(スプリットスクリーン)」、第三回オープン研究会「メディア変容と新型コロナウイルス」(科学研究費基盤研究(A) 研究課題番号 19H00517「脱マスメディア時代のポップカルチャー美学に関する基盤研究」)、同志社大学、京都、2020.9.12
- 国際、Hiroshi Yoshida, “Japanese Digital Games in the Tradition of Toys,” The International Symposium “Playing Japan: Toys, Games, Literature, and Language Education,” Department of Asian, Middle Eastern and Turkish Studies, Stockholm University, Sweden, 2020.9.23
- 国内、吉田寛、「デジタルゲームの感性学」、東京大学芸術創造連携研究機構発足シンポジウム「学問と芸術の協働——アートで知性を拡張し、社会の未来をひらく」、東京大学芸術創造連携研究機構、東京、2021.3.21
- 国際、吉田寛、「在玩具的传统中反思日本的数字游戏」、创意中国与游戏文化系列论坛第一场「游戏与跨文化传播国际论坛」、上海交通大学、中国、2021.3.27
- 国内、吉田寛、「仮想環境における記号過程の長期ダイナミクスの解明」、立命館大学グローバル・イノベーション研究機構(R-GIRO)「次世代人工知能と記号学の国際融合研究拠点」プロジェクト年次研究会、オンライン開催、2021.3.29
- 国内、吉田寛、「芸術、スポーツ、ゲーム——三項関係で考える」、芸術学関連学会連合 第15回公開シンポジウム「芸術とスポーツ」、オンライン開催、2021.6.12
- 国内、吉田寛、「デジタルゲームの感性学」、2021年度Sセメスター「高校生と大学生のための金曜特別講座」、東京大学、東京、2021.6.18
- 国内、吉田寛、「『思想史としてのゲーム史』(仮題)の構想」、「ゲームリサーチダンジョン03」、立命館大学ゲーム研究センター、立命館大学、京都、2021.7.24
- 国内、吉田寛、「仮想環境における記号過程の長期ダイナミクスの解明」、立命館大学グローバル・イノベーション研究機構(R-GIRO)「次世代人工知能と記号学の国際融合研究拠点」プロジェクト最終報告シンポジウム「人とAIの調和が導く未来社会」、オンライン開催、2022.2.23

(6) 受賞

- 国内、吉田寛、オンライン授業・ハイブリッド授業のグッドプラクティス総長表彰、東京大学、2021.3.22

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

- 国内、非常勤講師、放送大学、「西洋音楽史」、2020.4.1~2021.3.31
- 国内、非常勤講師、東京藝術大学、「音楽美学演習」、2020.4.1~2021.3.31
- 国内、非常勤講師、岩手大学、「現代文化特講B」、2020.4.1~2021.3.31
- 国内、非常勤講師、放送大学、「西洋音楽史」、2021.4.1~2022.3.31
- 国内、非常勤講師、九州大学、「感性哲学」、2021.4.1~2021.9.30
- 国内、非常勤講師、東京藝術大学、「音楽美学講義」、2021.4.1~2022.3.31
- 国内、兼任講師、立教大学、「音楽と感性」、2021.4.1~2022.3.31
- 国内、非常勤講師、跡見学園女子大学、「現代文化表現学特殊講義(ポピュラーカルチャー)」、2021.4.1~2022.3.31
- 国内、研究員、国際日本文化研究センター、人間文化研究機構基幹研究プロジェクト連携研究員、2020.4.1~2022.3.31
- 国内、研究員、立命館大学、ゲーム研究センター、客員協力研究員、2020.4.1~2022.3.31
- 国内、研究員、立命館大学、クリエイティブ・メディア研究センター、客員協力研究員、2020.4.1~2022.3.31
- 国内、講演、吉田寛、「メディアがつくる「新しい現実」——ヒューマンファクターからソーシャルファクターへ」、rakumo、東京、2020.7.28
- 国内、司会、吉田寛、パネル2「挑発するメディア——「長い60年代」における批判的コミュニケーションとしての芸術」、表象文化論学会オンライン研究フォーラム2020、東京、2020.8.9
- 国際、司会、Hiroshi Yoshida, Module 8: “Aesthetics, Contemplation and Narration in Japanese Games,” Replaying Japan 2020, Université de Liège, Belgium、2020.8.12

国内、取材記事、吉田寛、「ゲームの時代 (4) ——新しい感性呼び覚ます」、日本経済新聞、文化、44 面、
2020.11.27

国内、司会、吉田寛、「サバイバルのためのメディア——ポピュラーカルチャーの生存圏」、オープン研究会（番外
編）「メディア変容と新型コロナウイルス」（科学研究費基盤研究（A）研究課題番号 19H00517「脱マスメディア
時代のポップカルチャー美学に関する基盤研究」）、京都大学稲森文化財団記念館、京都、2021.3.7

(2) 学会

国内、日本音楽学会、西日本支部委員（支部通信担当）、2021.4.1～2022.3.31

国内、美学会、委員（ホームページ担当）、2020.4.1～2022.3.31

国内、日本音楽学会、美学会、表象文化論学会、日本デジタルゲーム学会、会員、2020.4.1～2022.3.31

国際、Royal Musical Association Music and Philosophy Study Group (United Kingdom)、Advisory Board、2020.4.1～
2022.3.31

国際、Journal of Sound and Music in Games (JSMG)、Editorial Board、2020.4.1～2022.3.31

国際、International Association for Aesthetics (IAA)、International Association for Semiotic Studies (IASS)、Replaying Japan、
Digital Games Research Association (DiGRA)、会員、2020.4.1～2022.3.31

(3) 行政

国内、文化庁、第 75 回文化庁芸術祭執行委員会審査委員、2020.7.16～2021.3.31

08 心理学

教授 **横澤 一彦** YOKOSAWA, Kazuhiko

<http://www.lu-tokyo.ac.jp/~yokosawa/index-j.html>

1. 略歴

1979年3月	東京工業大学工学部情報工学科卒
1981年3月	東京工業大学大学院総合理工学研究科電子システム専攻修士課程了
1981年4月	日本電信電話公社（現NTT）入社
1986年9月	ATR 視聴覚機構研究所（出向）（～1990年2月）
1990年9月	東京工業大学より工学博士号授与
1991年11月	東京大学生産技術研究所 客員助教授（～1992年12月）
1995年6月	南カリフォルニア大学 客員研究員（～1996年6月）
1998年10月	東京大学大学院人文社会系研究科 助教授
2006年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 教授
2009年12月	カリフォルニア大学バークレイ校 客員研究員（～2010年3月）
2010年4月	東京大学文学部 行動文化学科長（～2011年3月）
2013年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 基礎文化研究専攻長（～2014年3月）
2014年4月	東京大学文学部 行動文化学科長（～2015年3月）
2017年4月	東京大学文学部 行動文化学科長（～2018年3月）
2018年2月	東京大学バーチャルリアリティ教育研究センター 運営委員
2018年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 基礎文化研究専攻長（～2019年3月）
2020年4月	東京大学文学部 行動文化学科長（～2021年3月）
2021年11月	東京大学連携研究機構 次世代知能科学研究センター 運営委員
2022年3月	定年退職

2. 主な研究活動

a 専門分野

統合的認知の心理学

b 研究課題

統合的認知について、認知心理学的研究を行っている。統合的認知とは、知覚された特徴がどのように記憶や言語や概念と関わりあって、認知に至るのかを解明しようとする広範囲の研究を指している。特に、視覚的注意やオブジェクト認知の問題を中心に研究している。さらに、感覚融合認知や共感覚に関する研究にも取り組んでおり、研究分野は視覚だけに限らず、扱っている研究課題は多岐に渡っている。

c 概要と自己評価

統合的認知に関する、多岐に渡る研究を行い、研究成果を学術論文として発表することができた。特に、共感覚とVRに関する研究において、多くの研究成果を論文化できた。共感覚に関しては、長年継続して取り組んだことで、共感覚の基本的な特徴である時間安定性に関して、5年から8年経過後の安定性に関して縦断的研究によって明らかにできた。さらに、これまで得られた共感覚研究の成果を社会に還元するために、一般社団法人共感覚研究所を設立した。VRに関する研究では、バーチャルな空間における身体表象を操作することで、身体近傍空間が変容することを明らかにすることができた。また、シリーズ「統合的認知」全6巻のうち、この期間には第3巻「身体と空間の表象」、第6巻「共感覚」の3巻を順に出版することができた。広く一般にも研究成果を発信するために、「認知科学のスズメ」シリーズの1冊として、「感じる認知科学」を上梓し、書籍化による研究成果の発信も続けることができた。学内では、バーチャルリアリティ教育研究センター、次世代知能科学研究センターの運営委員を務め、ニューロインテリジェンス国際研究機構が主宰する日本科学未来館の企画に協力することができた。学会活動の一つとして、第26回認知神経学会を会長としてリモート開催した。

d 主要業績

(1) 著書

共著、横澤一彦、積山薫、西村聡生、『身体と空間の表象 行動への統合』、勁草書房、2020.4

共著、浅野倫子、横澤一彦、『共感覚 統合の多様性』、勁草書房、2020.8

単著、横澤一彦、『感じる認知科学』、新曜社、2021.4

(2) 論文

Mine, D., & Yokosawa, K., 「Remote hand: Hand-centered peripersonal space transfers to a disconnected hand avatar」、『Attention, Perception & Psychophysics』、83, 3250-3258 頁、2021.5

Mine, D., Ogawa, N., Narumi, T., & Yokosawa, K., 「The relationship between the body and the environment in the virtual world: The interpupillary distance affects the body size perception」、『PLOS ONE』、15, 4, e0232290 頁、2020.4

Mine, D., & Yokosawa, K., 「Does response facilitation to visuo-tactile stimuli around remote-controlled hand avatar reflect peripersonal space or attentional bias?」、『Experimental Brain Research』、239, 3105-3112 頁、2021.10

Mine, D., Kimoto, S., & Yokosawa, K., 「Obstacles affect perceptions of egocentric distances in virtual environments」、『Frontiers in Virtual Reality』、2:726114、2021.11

Mine, D., & Yokosawa, K., 「Disconnected hand avatar can be integrated into the peripersonal space」、『Experimental Brain Research』、239, 1, 237-244 頁、2021.11

Mine, D., & Yokosawa, K., 「Adaptation to delayed visual feedback of the body movement extends multi-sensory peripersonal space」、『Attention, Perception & Psychophysics』、84, 2, 576-582 頁、2022.2

Okubo, L., Yokosawa, K., Sawayama, M., & Kawabe, T., 「Discounting mechanism underlies extinction illusion」、『Consciousness and Cognition』、90, 103100、2021.4

Root, N. B., Asano M., Melero H., Kim C.-Y., Sidoroff-Dorso A.V., Vatakis, A., Yokosawa, K., Ramachandran, V. S., & Rouw, R., 「Do the colors of your letters depend on your language? Language-dependent and universal influences on grapheme-color synesthesia in seven languages」、『Consciousness and Cognition』、95, 103192、2021.10

横澤一彦、『共感覚』、『脳神経内科』、95, 2, 195-201 頁、2021.8

Uno, K. & Yokosawa, K., 「Apparent physical brightness of graphemes is altered by their synaesthetic colour in grapheme-colour synaesthetes」、『Scientific Reports』、10, 20134 頁、2020

Uno, K., Asano, M., Kadowaki, H., & Yokosawa, K., 「Grapheme-color associations can transfer to novel graphemes when synesthetic colors function as grapheme “discriminating markers”」、『Psychonomic Bulletin & Review』、27, 4, 700-706 頁、2020.4

Uno, K., Asano, M., & Yokosawa, K., 「Consistency of synesthetic association varies with grapheme familiarity: A longitudinal study of grapheme-color synesthesia」、『Consciousness and Cognition』、89, 103090、2021.3

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本心理学会、理事、2019.6～2021.5

国内、日本認知神経科学会、理事、2019.7～

国内、日本認知科学会、常任運営委員、2011.1～

国内、第26回認知神経科学会、会長、2021.7

1. 略歴

1987年3月	東京大学文学部第四類心理学専修課程 卒業
1987年4月	東京大学大学院人文科学研究科心理学修士課程 進学
1989年3月	東京大学大学院人文科学研究科心理学修士課程 修了
1989年4月	東京大学大学院人文科学研究科心理学博士課程 進学
1992年3月	東京大学大学院人文社会系研究科心理学博士課程 単位取得退学
1992年4月	国際電気通信基礎技術研究所 (ATR) 奨励研究員
1995年2月	東京大学大学院人文社会系研究科心理学博士課程 博士 (心理学) 取得
1996年10月	科学技術振興事業団・川人学習動態脳プロジェクト 計算心理グループリーダー
2001年10月	ATR 人間情報科学研究所 主任研究員
2002年4月	大阪大学大学院生命機能研究科 客員准教授
2003年5月	ATR 脳情報研究所・認知神経科学研究室 室長
2008年8月	情報通信研究機構 バイオICT グループリーダー
2010年4月	ATR 認知機構研究所 所長
2011年4月	情報通信研究機構 脳情報通信融合研究室 副室長
2011年4月	大阪大学大学院生命機能研究科 客員教授
2015年9月	東京大学大学院人文社会系研究科 教授
2019年4月	東京大学大学院工学系研究科 教授 (兼任)

2. 主な研究活動

a 専門分野

運動の学習と制御, 認知機能を支える脳のネットワーク解析

b 研究課題

人間は新たな生活環境に置かれたとき, さまざまなことを学習し, 行動パターンを変え, 環境に適応する. 自分の脳や身体もケガ・病気・加齢などで変化することがあり, そのような場合にも新たな学習・適応を迫られる. このような学習と適応のメカニズムを調べ, それに関わる脳の仕組みを解明するとともに, 学習や適応を支援する技術の開発を行う.

c 概要と自己評価

「まさに自分が身体を動かしている/道具を操作している」という感覚である運動主体感や道具の操作性に関する研究に重点的に取り組んだ. 機能的磁気共鳴画像 (fMRI) で計測した脳活動の局所的なパターンから, 運動主体感の強さを予測することに成功した (Cerebral Cortex 誌に論文掲載). また, 人が操作性の違いを能動的に探索するときに現れる行動のパターン (iScience 誌に論文掲載), 操作性の認識におけるカテゴリー知覚の特徴 (eNeuro 誌に論文掲載), 操作性の知覚と運動学習の個人差が関連すること (Scientific Reports 誌に論文掲載) など, 行動面から運動主体感を解明する研究で多くの成果を得た. 一連の成果をもとに Nature Reviews Psychology 誌に総説論文を発表した. 運動主体感の他にも, 運動学習と自己受容感覚の関係を明らかにした論文を発表した (Scientific Reports 誌に論文掲載).

言語・思考・意思決定などの認知機能は, 脳という巨大な情報ネットワークに支えられている. 脳のネットワークを読み解き, その機能を適切に維持することは, 認知機能を理解するために重要であるだけでなく, 加齢や脳疾患による認知機能の低下を防ぐことに役立つ. これまでの成果をもとに, 脳画像を撮像した施設に依存せず, 脳のネットワークからうつ病を予測できる脳回路マーカーを開発した (PLoS Biology 誌に論文掲載).

以上のように, 運動の制御と学習, 脳のネットワークという 2 つのテーマに関して, 基礎(脳の仕組みの解明)と応用(学習機能の支援)を織り交ぜながら研究を展開した. 民間企業との共同研究も積極的に進めた. 新学術領域「身体性システム」および「超適応」の計画研究として, 運動を基礎とする自己意識の解明に従事し, 学会・招待講演などで精力的に成果を発表・議論した. 主な研究成果に関する報道発表, リハビリテーション関係者向けの講習会を中心に, 研究成果を広く一般に伝えるアウトリーチ活動に努めた.

d 主要業績

(1) 著書

共著、今水寛、浅井智久、弘光健太郎、「脳のネットワークから見た瞑想状態」、荻輪顕量（編）『仏典とマインドフルネス—負の反応とその対処法』第4部 第2章、臨川書店、2021.3

共著、中島亮一、田中大、今水寛、「注意機能とマインドフルネス瞑想」、荻輪顕量（編）『仏典とマインドフルネス—負の反応とその対処法』第3部 第4章、臨川書店、2021.3

(2) 論文

Ohata, R., Asai, T., Kadota, H., Shigemasa, H., Ogawa, K., and Imamizu, H., 「Sense of Agency Beyond Sensorimotor Process: Decoding Self-Other Action Attribution in the Human Brain」、『Cerebral Cortex』、Vol. 30, No. 7, p. 4076-4091、2020.3

Yoshihara, Y., Lisi, G., Yahata, N., Fujino, J., Matsumoto, Y., Miyata, J., Sugihara, G.I., Urayama, S.I., Kubota, M., Yamashita, M., Hashimoto, R., Ichikawa, N., Cahn, W., van Haren, N.E.M., Mori, S., Okamoto, Y., Kasai, K., Kato, N., Imamizu, H., Kahn, R.S., Sawa, A., Kawato, M., Murai, T., Morimoto, J., and Takahashi, H., 「Overlapping but Asymmetrical Relationships Between Schizophrenia and Autism Revealed by Brain Connectivity」、『Schizophrenia Bulletin』、Vol. 46, No. 5, pp.1210-1218、2020.4

Wen, W., Shibata, H., Ohata, R., Yamashita, A., Asama, H., and Imamizu, H., 「The Active Sensing of Control Difference」、『iScience』、Vol. 23, No. 5, e101112、2020.5

Chiyohara, S., Furukawa, J., Noda, T., Morimoto, J., and Imamizu, H., 「Passive training with upper extremity exoskeleton robot affects proprioceptive acuity and performance of motor learning」、『Scientific Reports』、Vol. 10, e11820、2020.7

Wen, W., Shimazaki, N., Ohata, R., Yamashita, A., Asama, H., and Imamizu, H., 「Categorical perception of control」、『eNeuro』、Vol. 7, No. 5, ENEURO.0258-20.2020、2020.9

Yano, S., Hayashi, Y., Murata, Y., Imamizu, H., Maeda, T., and Kondo, T., 「Statistical Learning Model of the Sense of Agency」、『Frontiers in Psychology』、Vol. 11, e539957、2020.10

Yamashita A, Sakai Y, Yamada T, Yahata N, Kunimatsu A, Okada N, Itahashi T, Hashimoto R, Mizuta H, Ichikawa N, Takamura M, Okada G, Yamagata H, Harada K, Matsuo K, Tanaka SC, Kawato M, Kasai K, Kato N, Takahashi H, Okamoto Y, Yamashita O, and Imamizu H., 「Generalizable brain network markers of major depressive disorder across multiple imaging sites」、『PLoS Biology』、Vol. 8, No. 2, e3000966、2020.12

Yamashita, A., Sakai, Y., Yamada, T., Yahata, N., Kunimatsu, A., Okada, N., Itahashi, T., Hashimoto, R., Mizuta, H., Ichikawa, N., Takamura, M., Okada, G., Yamagata, H., Harada, K., Matsuo, K., Tanaka, S. C., Kawato, M., Kasai, K., Kato, N., Takahashi, H., Okamoto, Y., Yamashita, O., and Imamizu, H., 「Common Brain Networks Between Major Depressive-Disorder Diagnosis and Symptoms of Depression That Are Validated for Independent Cohorts」、『Frontiers in Psychiatry』、12, e667881、2021.6

Tanaka, S.C., Yamashita, A., Yahata, N., Itahashi, T., Lisi, G., Yamada, T., Ichikawa, N., Takamura, M., Yoshihara, Y., Kunimatsu, A., Okada, N., Hashimoto, R., Okada, G., Sakai, Y., Morimoto, J., Narumoto, J., Shimada, Y., Mano, H., Yoshida, W., Seymour, B., Shimizu, T., Hosomi, K., Saitoh, Y., Kasai, K., Kato, N., Takahashi, H., Okamoto, Y., Yamashita, O., Kawato, M., and Imamizu, H., 「A multi-site, multi-disorder resting-state magnetic resonance image database」、『Scientific Data』、8, e227、2021.8

Wen, W., Ishii, H., Ohata, R., Yamashita, A., Asama, H., and Imamizu, H., 「Perception and control: individual difference in the sense of agency is associated with learnability in sensorimotor adaptation」、『Scientific Reports』、11, e20542、2021.10

Takai, A., Lisi, G., Noda, T., Teramae, T., Imamizu, H., and Morimoto, J., 「Bayesian Estimation of Potential Performance Improvement Elicited by Robot-Guided Training」、『Frontiers in Neuroscience』、15, e704402、2021.10

Tanaka, T., Nakashima, R., Hiromitsu, K., and Imamizu, H., 「Individual Differences in the Change of Attentional Functions With Brief One-Time Focused Attention and Open Monitoring Meditations」、『Frontiers in Psychology』、12, e716138、2021.10

Ohata, R., Ogawa, K., and Imamizu, H., 「Neuroimaging Examination of Driving Mode Switching Corresponding to Changes in the Driving Environment」、『Frontiers in Human Neuroscience』、16, e788729、2022.2

Asai, T., Hamamoto, T., Kashihara, S., and Imamizu, H., 「Real-Time Detection and Feedback of Canonical Electroencephalogram Microstates: Validating a Neurofeedback System as a Function of Delay」、『Frontiers in Systems Neuroscience』、16, e786200、2022.2

Wen, W. and Imamizu, H., 「The sense of agency in perception, behaviour and human-machine interactions」、『Nature Reviews Psychology』、1, pp. 211-222、2022.2

(3) 学会発表

国内、今水寛、「人工物と脳：人工物への適応と脳活動の変化」、第3回「サステナブルな日本のものづくり」研究会、オンライン開催、2020.10.30

国内、田中大、井澤淳、今水寛、「運動結果の自他帰属が運動学習に与える影響」、第2回超適応領域全体会議、オンライン開催、2021.3.6

国内、弘光健太郎、門田宏、浅井智久、田中大、濱本孝仁、今水寛、「各種tESによる脳機能結合への影響」、第2回超適応領域全体会議、オンライン開催、2021.3.6

国内、若林実奈、大畑龍、高木優、宇津木安来、今水寛、「踊りを見る時に重要な身体の部分と熟練度の関係」、第2回超適応領域全体会議、オンライン開催、2021.3.6

国内、大畑龍、浅井智久、今泉修、今水寛、「自分の音声により高められる発話時の運動主体感」、第2回超適応領域全体会議、オンライン開催、2021.3.6

国内、高木優、清水大地、大畑龍、若林実奈、今水寛、「ダンス視聴中の脳情報処理」、第2回超適応領域全体会議、オンライン開催、2021.3.6

国内、柴田浩史、大畑龍、今水寛、「事前の信念はいかに内受容感覚知覚に影響するか〜偽の心拍フィードバックを用いた研究〜」、第2回超適応領域全体会議、オンライン開催、2021.3.6

国際、Ohata, R., Asai, T., Imaizumi, S., and Imamizu, H., 「My voice therefore I spoke: Sense of agency over speech enhanced in hearing self-voice」、The 1st International Symposium on Hype-Adaptability (HypAd2021)、Online Conference、2021.5.26

国際、Ohata, R., Asai, T., Imaizumi, S., and Imamizu, H., 「My voice therefore I spoke: Sense of agency over speech enhanced in hearing self-voice」、The 2021 APS (Association for Psychological Science) Virtual Conference、Online Conference、2021.5.26

国内、今水寛、「認知機能と脳のネットワーク」、第11回東京大学文学部公開講座、オンライン開催 (YouTubeライブ配信)、2021.6.26

国内、今水寛、「脳活動と心理実験から探る心の働き〜運動主体感を例として〜」、リコーオンラインセミナー 第3回「ココロの理解」(東京大学大学院工学系研究科社会連携・産学協創推進室主催)、オンライン開催 (Zoom ウェビナー形式)、2021.8.25

国内、今水寛、「内部モデルと主体感・身体化」、自己研究の此岸と彼岸〜「身体×モデル×制御」から「抽象×メタ×エナジー」へ【招待講演】、オンライン開催 (WebEx Events 形式)、2021.9.11

国内、今水寛、「学習や適応を支援する技術開発」、第20回グレーター東大塾「脳とAI」、オンライン開催 (Zoom ミーティング形式)、2021.9.15

国内、今水寛、「運動主体感の神経機構」、第13回日本ニューロリハビリテーション学会学術集会・特別講演、神戸国際会議場(兵庫県神戸市中央区港島中町) / オンライン ハイブリッド開催、2022.2.2

国内、田中大、井澤淳、今水寛、「自他帰属が運動学習に与える影響」、第3回超適応領域全体会議、オンライン開催、2022.3.7

国内、若林実奈、田中拓海、浅井智久、宇津木安来、今水寛、「踊りの映像の見せ方の変化が与える知覚と感情への影響」、第3回超適応領域全体会議、オンライン開催、2022.3.7

国内、弘光健太郎、馬野千雅、浅井智久、今水寛、「HD-tACSによる運動の自他帰属への介入」、第3回超適応領域全体会議、オンライン開催、2022.3.7

国内、柴田浩史、今水寛、「心拍フィードバックを用いた内受容感覚の情報処理過程の検討」、第3回超適応領域全体会議、オンライン開催、2022.3.7

国内、田中拓海、今水寛、「行動—結果間の空間マッピングがコントロール感に与える影響の検討」、第3回超適応領域全体会議、オンライン開催、2022.3.7

(4) 予稿・会議録

国内会議、山下歩、八幡憲明、國松聡、岡田直大、板橋貴史、橋本龍一郎、水田弘人、市川奈穂、高村真広、岡田剛、山形弘隆、原田健一郎、松尾幸治、田中沙織、川人光男、笠井清登、加藤進昌、高橋英彦、岡本泰昌、山下宙人、今水寛、「独立施設で撮像されたデータに汎化する大うつ病の安静時機能的結合マーカー」、第43回日本神経科学大会 基礎-臨床連携シンポジウム「人工知能とビッグデータは精神神経疾患の神経科学に何をもたらすか?」、オンライン開催、2020.7.30

『オンライン演題検索システム』、2S05a-04、2020.7

国内会議、濱本孝仁、今水寛、浅井智久、「4種の microstates による EEG-microstates ニューロフィードバック」、第43回日本神経科学大会、オンライン開催、2020.7.30

『オンライン演題検索システム』、2P-195、2020.6

国内会議、Koizumi, A., Cortese, A., Ohata, R., and Imamizu, H., 「Integrating diverse events to form holistic fear memories in the human brain」、第43回日本神経科学大会 シンポジウム「Emergence and regulation of fear - from mouse behavior to human imagination」、オンライン開催、2020.7.31

『オンライン演題検索システム』、3S03a-03、2020.7

国際会議、Takai, A., Rivela, D., Lisi, G., Noda, T., Teramae, T., Imamizu, H., and Morimoto, J., 「Neural investigation towards motor skill improvements through brain-computer interface-based training」、The 6th International Conference Brain-Computer Interface: Science and Practice (BCI Samara 2020)、Online、2020.10.8

『BCI Samara 2020 Proceedings』、p. 23、2020.10

国際会議、Imamizu, H., Asai, T., Hiromitsu, K., Tanaka, M., and Nakashima, R., 「Meditation and brain network/cognitive function」、International Symposium on Mindfulness and Human Cognition、Online Conference、2021.3.10

『Proceedings for International Symposium on Mindfulness and Human Cognition』、2021.3

国際会議、Imamizu, H. and Tsutsui, K., 「Neuroscientific approach to body cognition and emotion that induce "hyper-adaptability"」、The 1st International Symposium on Hype-Adaptability (HypAd2021)、Online Conference、2021.5.27

『Abstracts for the 1st International Symposium on Hyper-Adaptability』、p. 12、2021.5

国内会議、今水寛、「運動と認知を支える予測のメカニズム」、第26回認知神経科学会学術集会【教育講演】、オンライン開催、2021.7.17

『第26回認知神経科学会学術集会オンライン抄録集』、p. 5、2021.7

国内会議、中島亮一、田中大、弘光健太郎、今水寛、「注意機能と行動抑制・行動賦活システムの関係」、日本心理学会第85回大会、オンライン開催、2021.9.1

『日本心理学会第85回大会オンライン演題検索システム』、PI-033、2021.9

国内会議、柏原志保、浅井智久、今水寛、「刺激にロックされる脳活動：ERP と EEG マイクロステートの比較」、日本認知心理学会第19回大会、オンライン開催、2022.2.28

『日本認知心理学会第19回大会発表原稿集』、p.18、2022.2

(5) マスコミ

「"小脳力"トレーニング」、『NHK ガッテン!』、2020.2.12

「「運動主体感（まさに自分が運動している感覚）」脳内過程を初解明」、『科学新聞』、2020.3.27

「「ブレイン・アバター・インターフェース」研究開発を推進」、『電波新聞』、2020.7.2

「瞑想でたどる仏教」、『NHK こころの時代』、2021.9.19

3. 主な社会活動

(1) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

民間企業、NTT コミュニケーション科学基礎研究所、研究倫理委員会委員、2016.10～

国立大学法人、東京工業大学、MRI 安全委員会委員、2019.4～

(2) 行政

省庁、日本学術会議、科学技術政策、連携会員、2017.10～

教授 **村上 郁也**

MURAKAMI, Ikuya

1. 略歴

1991年3月	東京大学文学部第四類心理学専修課程 卒業
1991年4月	東京大学大学院人文科学研究科心理学修士課程 進学
1993年3月	東京大学大学院人文科学研究科心理学修士課程 修了
1993年4月	東京大学大学院人文科学研究科心理学博士課程 進学
1996年3月	東京大学大学院人文社会系研究科心理学博士課程 修了 博士(心理学)取得
1996年4月	岡崎国立共同研究機構生理学研究所 研究員 (COE ポスドク)
1997年4月	岡崎国立共同研究機構生理学研究所 研究員 (日本学術振興会特別研究員 PD)
1997年9月	米国ハーバード大学心理学部視覚科学研究所 研究員 (日本学術振興会特別研究員 PD)
1999年4月	NTT コミュニケーション科学基礎研究所 社員

2000年4月	NTT コミュニケーション科学基礎研究所	研究主任
2004年4月	NTT コミュニケーション科学基礎研究所	主任研究員
2005年4月	東京大学大学院総合文化研究科	助教授
2007年4月	東京大学大学院総合文化研究科	准教授
2013年4月	東京大学大学院人文社会系研究科	准教授
2018年4月	東京大学大学院人文社会系研究科	教授
2021年4月	東京大学文学部	行動文化学科長（～2022年3月）

2. 主な研究活動

a 専門分野

知覚心理学、認知神経科学

b 研究課題

知覚や行動に伴う心的時間の脳内機構とその操作。周辺視野での事物の定位に動的信号がおよぼす影響に関する視覚心理学的研究。AIの導入による総合的錯視研究の新展開。

c 概要と自己評価

新型コロナウイルス感染症の蔓延に伴う研究活動の制限下にあつて、行動データの採取における不自由が続いたことは否めないが、そうした状況下で上記研究課題の進捗に向けて最大限の努力をした。心的時間の脳内機構については、秒未満のオーダーで微小時間発展する脳内表現を措定し、逆行マスクング事態を用いて脳内表現の時間発展に介入をかけた際の形状知覚について心理物理実験を行い、マスクングのかけ方によって空間的文脈の作用としての傾き対比の量が増加することを発見した。また、周囲に事物が存在することによってそれらに囲まれた事物の同定が困難になるという事態を導入することで、秒未満の知覚時間が変容する様子についても心理物理実験にて明らかにした。周辺視野での運動信号の影響については、局所的なサイン波運動によって大域的な回転再現運動の抑制が生じるという関係を心理物理実験で明らかにしたほか、変形ベクトル場という運動の流れに知覚順応を起こした後では図形形状の縦長・横長の知覚に若干の陰性残効が生じることを確かめた。また、さまざまな環境整備の結果として、上記の研究実績概要のほかにもいくつかの並列的な実験作業を遂行することができた。例えば、両眼視において輝度変調を左右眼に両眼視差をつけて呈示することによって、視差がゼロである場合に比べて、見かけの輝度コントラストが増加するという両眼加算の効果を心理物理実験によって明らかにした。また、視野の盲点に対応する眼内の部位において存在が認められているメラノプシン視物質によって受容されたと考えられる光刺激が、通常視野に呈示された光に対する絶対閾を上げるという関係を、心理物理実験および眼球運動・瞳孔の生体計測実験の組み合わせによって明らかにした。時間知覚研究、錯視研究のいずれに関しても、高インパクトの国際専門誌への掲載などをはじめ、実験室での活動が制限された中での進捗としては順調な研究成果の出力をしており、おおむね順調に進展している。

d 主要業績

(1) 論文

Nakamura, T., Lavrenteva, S. & Murakami, I., 「Four-dot masking in monoptic and dichoptic viewing」, 『Scientific Reports』, 10(1):11120, 1-10 頁, 2020.6

Maehara, G. & Murakami, I., 「Perceptual enhancement of suprathreshold luminance modulation in stereoscopic patterns」, 『Journal of Vision』, 20(12):8, 1-11 頁, 2020.11

Nakamura, T. & Murakami, I., 「Common-onset masking terminates the temporal evolution of orientation repulsion」, 『Journal of Vision』, 21(8):5, 1-20 頁, 2021.8

Nakada, H. & Murakami, I., 「Search asymmetry in periodical changes of motion directions」, 『Vision Research』, 195:108025, 1-11 頁, 2022.3

(2) 予稿・会議録

国内会議、仲田穂子・清永深津紀・村上郁也、「運動による位置ずれ錯視により知覚的に歪んだアスペクト比への順応」, 日本視覚学会、長津田、2020.1.10

国内会議、Lavrenteva, S.・村上郁也、「クラウドニングが持続時間の知覚に与える影響」, 日本視覚学会、長津田、2020.1.11

国内会議、中村友哉・村上郁也、「共通オンセットマスクングによる傾きの同時対比効果の減少」, 日本視覚学会、長津田、2020.1.12

国内会議、齋藤真里菜・宮本健太郎・村上郁也、「盲点に照射した光が通常視野の光覚閾値を上げる」, 日本視覚学会、長津田、2020.1.12

- 国際会議、Lavrenteva, S. & Murakami, I., 「Spatial crowding distorts the perceived duration of visual stimuli」、Vision Sciences Society、オンライン、2020.6.19
- 国際会議、Maehara, G. & Murakami, I., 「Perceived luminance contrast of stereoscopic patterns」、Vision Sciences Society、オンライン、2020.6.19
- 国際会議、Nakada, H. & Murakami, I., 「Interactions between different visual features in the ensemble perception of size」、Vision Sciences Society、オンライン、2020.6.19
- 国際会議、Nakamura, T. & Murakami, I., 「Common-onset visual masking reduces a simultaneous tilt illusion」、Vision Sciences Society、オンライン、2020.6.19
- 国際会議、Saito, M., Miyamoko, K. & Murakami, I., 「Spot illumination within the blind spot affects the absolute threshold for light in a normal region of the visual field」、Vision Sciences Society、オンライン、2020.6.19
- 国内会議、Lavrenteva, S.・村上郁也、「非文字刺激を用いたクラウディングによる時間知覚歪みのメカニズムの検討」、日本視覚学会、オンライン、2020.9.18
- 国内会議、中村友哉・村上郁也、「逆向マスクングによる傾き対比の減少とその微小時間過程」、日本基礎心理学会、オンライン、2020.11.7
- 国内会議、Lavrenteva, S.・村上郁也、「時間的オッドボール効果における注意の役割」、日本視覚学会、オンライン、2021.1.21
- 国内会議、鬼頭宗平・村上郁也、「フリッカー運動残効によるフラッシュドラッグ効果」、日本視覚学会、オンライン、2021.1.22
- 国内会議、仲田穂子・村上郁也、「運動場への順応により生じるアスペクト比の残効」、日本視覚学会、オンライン、2021.1.22
- 国内会議、菅原岳・村上郁也、「視覚的レート順応の呈示位置不変性」、2021.1.22
- 国際会議、Yokosuka, S., Nakada, H. & Murakami, I., 「Temporal characteristics of the Craik-O' Brien-Cornsweet effect as revealed by high-speed motion correspondence」、Vision Sciences Society、オンライン、2021.5.21
- 国際会議、Saito, M., Nakada, H. & Murakami, I., 「Ensemble coding of temporally distributed elements eliminates irrelevant stimuli of salient size」、Vision Sciences Society、オンライン、2021.5.21
- 国際会議、Nakamura, T. & Murakami, I., 「Microgenesis of orientation appearance during common-onset masking」、Vision Sciences Society、オンライン、2021.5.21
- 国際会議、Nakada, H. & Murakami, I., 「Adaptation to an illusory aspect ratio distorted by motion patches in a deformation vector field」、Vision Sciences Society、オンライン、2021.5.21
- 国際会議、Murakami, I., Seshita, Y., & Kito, S., 「The flash grab effect into the blind spot」、Vision Sciences Society、オンライン、2021.5.21
- 国際会議、Lavrenteva, S. & Murakami, I., 「Duration compression in unrecognizable objects due to crowding as seen in general shape recognition」、Vision Sciences Society、オンライン、2021.5.21
- 国内会議、齋藤真里菜・宮本健太郎・村上郁也、「盲点領域のメラノプシンによって受容された光刺激が通常視野の絶対閾を上げる」、日本視覚学会、オンライン、2021.9.23
- 国内会議、仲田穂子・村上郁也、「局所的なサイン波運動による大域的な回転仮現運動の抑制」、日本視覚学会、オンライン、2021.9.24
- 国内会議、中村友哉・村上郁也、「D2 図形を用いた傾き対比の微小時間発展の追跡」、日本視覚学会、オンライン、2021.9.24
- 国内会議、中村友哉・村上郁也、「傾き対比現象の微小時間発展—誘導刺激への意識的アクセス可能性との関係」、日本基礎心理学会、オンライン、2021.12.5
- 国内会議、中村友哉・村上郁也、「位置特異的な処理促進による傾き対比の減少—内的表象と意識内容の関係」、日本視覚学会、オンライン、2022.1.19
- 国内会議、Lavrenteva, S.・中間卓巳・村上郁也、「運動残効により動いて知覚される静止刺激における時間伸長」、日本視覚学会、オンライン、2022.1.21
- 国内会議、田中真衣・中山遼平・村上郁也、「Double-drift illusion による主観的な運動軌道への方位順応」、日本視覚学会、オンライン、2022.1.21

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、東京女子大学、「知覚・認知心理学 A」、2021.9～2022.3

(2) 学会

国内、日本視覚学会、幹事、2020.4～2022.3

国内、日本心理学会、代議員、2020.4～2022.3

国内、日本基礎心理学会、常務理事、2020.4～2020.11、編集委員長、2020.4～2020.11、編集委員、2020.11～2022.3

国際、Frontiers in Perception Science、Review Editor、2020.4～2021.3

国際、Scientific Reports、Editorial Board Member、2020.4～2021.3

国際、Vision Research、Consultative Board Member、2020.4～2022.3

(3) 行政

日本学術会議、科学技術政策、連携会員、2020.4～2022.3

准教授 **鈴木 敦命** SUZUKI, Atsunobu

1. 略歴

2001年3月	東京大学教養学部生命・認知科学科 卒業
2001年4月	東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻修士課程 入学
2003年3月	東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻修士課程 修了
2003年4月	東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻博士課程 進学
2006年3月	東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻博士課程 修了 博士(学術)取得
2006年4月	東京大学大学院総合文化研究科 日本学術振興会特別研究員 (PD)
2007年4月	東京大学総括プロジェクト機構ジェロントロジー寄付研究部門 日本学術振興会特別研究員 (PD)
2006年9月	イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校ベックマン研究所 客員研究員
2009年4月	名古屋大学大学院環境学研究科 講師
2012年10月	名古屋大学大学院環境学研究科 准教授
2017年4月	名古屋大学大学院情報学研究科 准教授
2017年9月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

実験心理学、認知心理学

b 研究課題

社会的認知とエイジングを主な研究課題としている。社会的認知とは人間の社会行動を支える心の働きの総称であり、他者の感情・思考や性格の推測、自己の行為のコストベネフィット評価や道徳性の判断、相手を信頼して協力するか否かの意思決定など、多様な心理過程が含まれる。一方、エイジングは aging のカタカナ表記で、「年をとること」である。「近頃、年のせいで…」というぼやきもあれば、「年の功」という言葉もあるように、心の働きには年齢とともに低下する側面も向上する側面もある。中でも社会的認知のエイジングについて検討することで、世代間の交流・理解を促進するヒントが得られないかと考えて研究を進めている。

c 概要と自己評価

人間は他者の顔つきを手がかりとしてその性格や能力などの特性を推論する傾向があるが、そうした顔特性判断への依存度には個人差が存在する。例えば、顔特性推論の妥当性を信じる程度や顔特性推論を実際に極端に行う程度には個人差があり、両者は正の相関を示す。顔特性推論への高い依存が他者への偏見・差別や自身の対人問題（詐欺被

害など)につながる可能性を踏まえると、それがなぜ生じ、どのような作用を持つかの解明は重要な研究課題である。そこで、顔特性推論の個人差がどのような特徴をもち、その背後にどのようなメカニズムがあるかを明らかにすることを旨として研究を進めている。最近の研究では、顔画像の印象を Semantic Differential 尺度上で評価したデータから顔特性推論の極端さを定量化する方法を用いて、顔特性推論の極端さと顔表情認知能力やステレオタイプ受容との関係を明らかにした。また、顔特性推論の極端さや顔表情認知能力を含む社会的認知の個人差と物語読書習慣との関係を調べる英日二国間研究も実施した。この研究では、従来欧米で報告されてきたような社会的認知と物語読書習慣との関連が日本では認められないという結果が得られ、さらなる検討の必要性が明らかになった。以上に関連する研究成果は既に国内外の学会で発表され、発表賞を受賞する評価も受けており、研究は順調に進んでいる。

d 主要業績

(1) 著書

辞書・辞典・事典、Chen, S. H. A., & Suzuki, A., 「Trust」, in S. Della Sala (Ed.), Encyclopedia of behavioral neuroscience, 2nd ed., vol. 3 (pp. 532-539), Elsevier, 2021

(2) 論文

Childs, M. J., Jones, A., Thwaites, P., Zdravkovic, S., Thorley, C., Suzuki, A., Shen, R., Ding, Q., Burns, E., Xu, H., & Tree, J., 「Do individual differences in face recognition ability moderate the other ethnicity effect?」, 『Journal of Experimental Psychology: Human Perception and Performance』, Vol. 47, no. 7, 893-907 頁, 2021

(3) 学会発表

国内、鈴木敦命、「顔感情認知能力の高い人ほど極端な顔特性推論をおこないやすい」、日本感情心理学会第 28 回大会、オンライン開催、2020.6

国際、Suzuki, A., 「Perception and learning of others' trustworthiness in healthy older adults」, Online Workshop 2020 on Sustainable Development, 2020.9

国内、大江朋子・鈴木敦命、「高温環境がもたらす表情知覚のバイアス：怒りと恐れ顔分類課題を用いて」、日本心理学会第 84 回大会、オンライン開催、2020.9

国内、鈴木敦命・塚本早織・高橋雄介、「顔特性推論の極端さはステレオタイプ化傾向と関連する」、日本心理学会第 84 回大会、オンライン開催、2020.9

国際、Suzuki, A., Tsukamoto, S., & Takahashi, Y., 「Relationships of face-based trait inference with face emotion recognition ability and stereotype endorsement」, 61th Annual Meeting of the Psychonomic Society, Online, 2020.11

国際、Wong, J.-Y., Suzuki, A., & Liu, C. H., 「Is face perception associated with fiction reading?」, January Meeting of the Experimental Psychology Society, Online, 2021.1

国内、鈴木敦命・小山内秀和・Chang Hong Liu, 「物語読書習慣と社会認知の個人差の関連に関する英日二国間研究」、日本心理学会第 85 回大会、明星大学（オンライン開催）、2021.9

国内、伊藤資浩・樋口航大・鈴木敦命、「金銭的誘因が探索・隠蔽行動における推論の深さに及ぼす影響」、日本心理学会第 85 回大会、明星大学（オンライン開催）、2021.9

国際、Suzuki, A., Ueno, M., Ishikawa, K., Kobayashi, A., Okubo, M., & Nakai, T., 「Bias towards trusting others is associated with insular activity before distrusting them」, 62nd Annual Meeting of the Psychonomic Society, Online, 2021.11.5

(4) 研究報告書

鈴木敦命・宮崎由樹・大江朋子・上田祥行, Humanities Center Booklet Vol. 7 「顔の実験心理学 (2) —顔では決まらない顔の印象」、2021.2

(5) 受賞

国内、鈴木敦命・江見美果・石川健太・小林晃洋・大久保街亜・中井敏晴、日本心理学会第 83 回学術大会特別優秀発表賞、日本心理学会、2020.9

国内、服部友里・渡邊伸行・鈴木敦命、2019 年度 日本基礎心理学会優秀論文賞、日本基礎心理学会、2020.11.9

国内、鈴木敦命・小山内秀和・Liu Chang Hong、日本心理学会第 85 回学術大会優秀発表賞、日本心理学会、2021.12.20

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本心理学会、『Japanese Psychological Research』編集委員、2019.11～

国内、日本基礎心理学会、『基礎心理学研究』編集委員、2018.4～

09a 日本語日本文学（国語学）

教授 井島 正博 IJIMA, Masahiro

1. 略歴

1982年3月	東京大学文学部国語学専修課程卒業
1984年3月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程修了
1984年4月	東京大学大学院人文科学研究科研究生
1985年10月	防衛大学校人文科学研究室助手
1989年4月	山梨大学教育学部専任講師
1991年4月	山梨大学教育学部助教授
1992年4月	成蹊大学文学部日本文学科助教授
1998年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授（日本語・日本文学）
2007年4月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授（日本語・日本文学）
2012年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授（日本語・日本文学）

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本語学 日本語文法・日本語文法学史および言語理論

b 研究課題

現代語・古典語の日本語文法あるいは日本語文法学史および言語理論の研究をテーマとしている。なかでも現代語日本語文法に関する研究を一貫して続けており、これまでに、格構造（受身文、使役文、可能文、授受動詞構文）、テンス・アスペクト構造、言語行為構造（推量文、疑問文）、談話構造、中でも情報構造・視点構造（テンス、授受動詞構文）・期待構造（否定文、数量詞、限定表現、条件文）など、日本語文法をできる限りグローバルにとらえられる枠組を求めて考察を進めてきた。

さらに現代語の成果を古典語に適用して、古典語文法に新たな方向からアプローチをするとともに、従来の文法研究を歴史的にとらえることによって、各時代の文法理論を相対化することも試みている。言語理論に関しては、コミュニケーション行為構造の分析に力点を置きつつ、近年の有力な言語理論の批判的検討を通して、理論的全体像を模索している。

c 概要と自己評価

最近10年あまり特に力を入れて進めてきたことは、古典語のテンス・アスペクトに関して、これまでの研究史を概観し、その上に立ってこれまでの研究成果を包括的に説明できる理論的枠組を構築することであり、それは博士論文としてまとめた上で、それに推敲を重ね、『中古語過去・完了表現の研究』として出版することができた。現在では、テンス・アスペクトに続き、古典語の推量表現について研究を進めている。

またそれと平行して、現代語に関しては、ノダ・ワケダ・モノダ・コトダなどの形式名詞述語文、あるいは最近はとりたてて詞と呼ばれることの多い副助詞、また否定文に関して研究を進めており、近い将来それぞれ単著としてまとめるつもりである。

さらにこれまであまり解明が進んでいない近世・近代の文法研究についても、数百点に及ぶ文献を収集し、それをもとに文法的な認識のあり方の変遷という観点から、分析を始めた。それぞれの時代の研究者が、どのような認識的な枠組のなかで研究をしてきたのか、そしてその枠組がどのようなきっかけで大きく方向を変えたのかなどを、実証的にたどっていきたい。

言語理論に関しても、特にグライスに端を発する研究の流れと広がりについて、批判的な究明を進めており、これもある程度全体像が見えてきた段階で、単著としてまとめた。

d 主要業績

(1) 編著

井島正博編、『現代日本語文法概説』、朝倉書店、第1章「現代語文法序説」pp.1-12、第10章「否定表現」pp.119-129、2020.11

(2) 論文

井島正博、「同一名詞連体節のテンス」、『日本語学論集』、第17号、pp.1-12、2021.3

井島正博、第4部第2章「談話と文法」、pp.405-419、沖森卓也編『日本語文法百科』朝倉書店、2021.9

井島正博、「条件文のテンス」、『日本語学論集』第18号、pp.28-46、2022.3

(3) 辞書

井島正博、『新明解国語辞典 第8版』、編集委員、三省堂、2020.11

(4) 教科書

井島正博、『古典探求』『言語文化』、編集委員、筑摩書房、2021

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、成蹊大学、2020.4～2022.3

(2) 学会

国内、日本語学会、評議員、2020.4～2022.3

教授 肥爪 周二 HIZUME, Shuji

1. 略歴

1989年3月 東京大学文学部国語学専修課程卒業
1991年3月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専攻修士課程修了
1993年3月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専攻博士課程中退
1993年4月 明海大学外国語学部日本語学科専任講師（～1996年3月）
1996年4月 茨城大学人文学部人文学科専任講師（～1997年9月）
1997年10月 茨城大学人文学部人文学科助教授（～2003年3月）
2003年4月 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部助教授
2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部准教授
2018年4月 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部教授（～現在に至る）

2. 主な研究活動

a 専門分野

国語学

b 研究課題

日本語音韻史・日本漢字音史・日本韻学史を、主な専門領域とする。古代日本における外国語研究の二本の柱、すなわち漢字音韻学（中国語学）・悉曇学（梵語学）の学史的な研究を、主要な研究領域とする。先人の残したさまざまな記録を元に、江戸時代以前の日本における、音声観察・音声分類の発達および変遷を解明することを目指す。これらの研究成果と連動させつつ、漢字音の日本化の問題、拗音分布の偏在性についての歴史的解釈、濁音の起源（連濁現象の起源）についての考察など、音韻史分野にも研究対象を拡張し、着実に成果を上げている。近年の課題としては、国語音・漢字音（呉音系字音、漢音系字音、唐音系字音）・梵語音を総合する、日本語音節バリエーションの歴史を明らかにすることを目指している。

c 概要と自己評価

論文「悉曇学者行智の江戸語音声観察—ハ行音の場合—」においては、インド本来の梵語の発音を復元するために、まず比較言語的な手法を用いて古代中国語の発音を復元し、それにより梵語の音訳漢字を読むことを提唱した、江戸時代のユニークな悉曇学者・行智の、江戸語ハ行音の音声観察について、他の江戸期音韻学のハ行音観察と比較しながら分析した。行智の緻密な音声観察が、梵字の 39 種の子音を発音し分けるといふ、悉曇学上の必要から生じたものであり、伝統的な五十音図的な枠組みを解体し、ハ行音を「ハヒホウヘホ」と「ファフィフフェフォ」の二行の混交体であることを江戸時代の段階で指摘していたことは大いに注目される。

論文「漢字音の拗音と外来語の拗音」においては、漢字音の拗音と外来語の拗音の日本語への受容の仕方を整理し、漢字音の場合は開拗音 2 単位的・合拗音 1 単位的、外来語の場合は開拗音 1 単位的・合拗音 2 単位的というように、受容の仕方が逆転したことを指摘し、その背後には、室町時代に至るまでに起こった音節組織の組み換え（アヤワ三行の統合・CVu 音節の長母音化・開拗音の定着・合拗音の整理）という日本語音韻史上の重大な転換があったことを述べた。

発表「石山寺本守護国界主陀羅尼経長保頃点の漢字音」においては、当該資料が開拗音・合拗音を仮名で表記する場合に、すべて直音表記をするという、類例のない特異な資料であることを確認した。一方、同筆の類音注の場合には、開拗音・合拗音ともに拗音を表す音注が選択されているので、直音表記は単なる表記上の問題であり、区別はできていたと考えられる。この類音注は、合拗音はカ行・ガ行のア段・イ段・エ段でのみ直拗が一致しており、つまりは中国原音ではなく、日本漢字音を前提とした和製の類音注ということになる。先の論文の見通しとは異なり、かつては開拗音も合拗音も 1 単位的に受容する方式も存在したのであり、これは後世に継承されることなく途絶えてしまった受容方式であることを指摘した。

文献資料の調査と理論的な考察の双方を、バランスよく進めてゆくことを目指す方針が、順調に推し進められたと考える。今後、コロナ禍により中断している社寺における文献資料の調査を継続的に進め、その成果を順次公開していくことを目指したい。

d 主要業績

(1) 論文

肥爪周二、「悉曇学者行智の江戸語音声観察—ハ行音の場合—」、『近代語研究』、22、115-136 頁、2021.3

肥爪周二、「漢字音の拗音と外来語の拗音」、『日本語学論集』、18、17-27 頁、2022.3

(2) 学会発表

国内、肥爪周二、「石山寺本守護国界主陀羅尼経長保頃点の漢字音」、訓点語学会、オンライン、2020.10.18

国内、肥爪周二、「借用語音韻論からみた拗音の変遷」、愛知県立大学国文学会、オンライン、2021.6.19

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、立教大学、「文学」、2020.4～2022.3

非常勤講師、國學院大學、「日本語音韻史」、2020.4～2022.3

(2) 学会

国内、日本語学会、選挙管理委員長、2020.1～2021.5、評議員、2020.4～2022.3

国内、訓点語学会、運営委員、2020.4～2021.3、編輯主任、2020.4～2021.3、運営委員長、2021.4～2022.3

国内、東方学会、学術委員、2021.6～2022.3

1. 略歴

1992年4月	東京都立大学人文学部 入学
1996年3月	東京都立大学人文学部 卒業
1996年4月	東京都立大学大学院人文科学研究科国文学専攻 修士課程 入学
1998年3月	東京都立大学大学院人文科学研究科国文学専攻 修士課程 修了
1998年4月	東京都立大学大学院人文科学研究科国文学専攻 博士課程 入学
1999年3月	東京都立大学大学院人文科学研究科国文学専攻 博士課程 退学
2005年4月	東北大学大学院文学研究科言語科学専攻国語学専攻分野 博士課程後期 入学（社会人枠）
2008年3月	東北大学大学院文学研究科言語科学専攻国語学専攻分野 博士課程後期 修了 博士（文学）（東北大学）
1999年4月	東京都立大学人文学部 助手（2005年4月、公立大学法人首都大学東京に改組）
2007年4月	広島大学大学院教育学研究科国語文化教育学講座 講師
2009年4月	広島大学大学院教育学研究科国語文化教育学講座 准教授
2020年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本語学、方言学

b 研究課題

日本語方言の記述的研究、対照研究、言語地理学的研究を専門領域とする。記述的研究における主な対象方言は、富山県方言、山梨県奈良田方言、島根県隠岐・出雲方言であり、これらの方言に関しては音韻・語彙・文法・談話構造にわたる総合的な記述を行っている。日琉方言全般を対象とする対照研究、言語地理学的研究においては、文法、特に格、主題、終助詞、命令・禁止表現、談話標識をテーマとする調査・研究を行う。また、こうした研究を支える基礎領域・関連領域として、言語アーカイブや言語ドキュメンテーション、日本の地域言語・方言をめぐる社会言語学的研究に携わっている。

c 概要と自己評価

2020～2021年度は、コロナ禍により臨地調査ができないことから、ビデオ通信によるオンラインでの調査を試行しながら研究を行った。記述的研究・対照研究の主な成果として下記主要業績の著書、論文2編、研究報告書を刊行した。それらの基礎資料となる、言語アーカイブ、言語ドキュメンテーションの成果として下記主要業績のデータベースを公開した。また、コロナ禍における方言調査・方言研究を支援したり、その経過を記録する活動を行った。主要業績の解説、予稿・会議録の各1編がそれにあたる。臨地調査に制限がある中で可能な研究を行った。

d 主要業績

(1) 著書

木部暢子、竹内史郎、下地理則（編）、『日本語の格表現』、くろしお出版、2022.3（分担執筆、「富山市方言における格成分のゼロ標示：二重対格相当構文が可能になることに着目して」93-110頁）
セリック・ケナン、木部暢子、五十嵐陽介、青井隼人、大島一（編）、『日本の消滅危機言語・方言の文法記述』国立国語研究所言語変異研究領域、2022.3（分担執筆、「山梨県早川町奈良田」〔三樹陽介、吉田雅子と共著〕77-150頁、「島根県雲南市木次町」〔平子達也と共著〕151-213頁）

(2) 論文

小西いずみ、「終助詞が表す意味とはどのようなものか：終助詞の方言間対照から見えてくること」、『日本語文法』、20巻2号、23-39頁、2020.9
小西いずみ、「「方言の島」山梨県奈良田の言語状況」、『文化交流研究』、34、87-94頁、2021.3

(3) 解説

小西いずみ、「コロナ禍のもとでの方言研究：遠隔調査の実践と学生の研究経過の記録」、『方言の研究』、7、37-55頁、2021.7

(4) 研究報告書

方言文法研究会 (編)『全国方言文法辞典資料集 (7) 活用体系 (5)』科学研究費報告書 (編集・分担執筆、「基本例文 50 要地方言訳：山梨県南巨摩郡早川町奈良田方言」75-78 頁)

(5) 予稿・会議録

国内会議、小西いずみ、三樹陽介、吉田雅子、「山梨県奈良田方言の格・情報構造：属格ノ・ガの用法を中心に」、国立国語研究所 研究発表会「格・情報構造 (本土諸方言)」、オンライン、2020.6.14

国内会議、小西いずみ、「富山県朝日町笹川方言の人称代名詞：総合的な形態の主格に着目して」、国立国語研究所シンポジウム「係り結びと格の通方言的・通時的研究」、オンライン、2020.9.20

国内会議、小西いずみ、「感動詞の運用：ナラティブにおける富山方言のナン類」、日本日本方言研究会第 111 回研究発表会、シンポジウム「感動詞の世界」、オンライン、2020.10.23

国内会議、小西いずみ、「方言の終助詞の対照研究：平叙文専用の形式を中心に」、国立国語研究所シンポジウム「日本語文法研究のフロンティア：日本の言語・方言の対照研究を中心に」、オンライン、2021.3.21

国内会議、小西いずみ、「コロナ禍における日琉方言研究の支援活動」、東京外国語大学アジア・アフリカ研究所ワールドサイエンス・コロキウム 2021 年度第 2 回、オンライン、2022.3.18

(6) データベース

小西いずみ、足立研二、大島英之、高城隆一、田中智章、中鉢絢貴、中澤光平、「日琉方言の命令・禁止表現：調査票とデータ集」DOI: 10.5281/zenodo.6379988

方言文法研究会、「基本例文 50 要地方言訳データベース」

<https://sites.google.com/view/hogenbunpo/home/%E5%9F%BA%E6%9C%AC%E4%BE%8B%E6%96%8750%E8%A6%81%E5%9C%B0%E6%96%B9%E8%A8%80%E8%A8%B3>

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、広島大学、「言語・コミュニケーション表現と学習材デザイン発展研究 (国語)」、2020.10～2021.3

非常勤講師、東北大学、「日本語学各論」「日本語学特論I」、2020.10～2021.3

非常勤講師、慶應大学、「日本語学III」「日本語学IV」、2021.4～2022.3

非常勤講師、聖心女子大学、「日本語学研究III」「日本語学研究IV」、2021.4～2022.3

(2) 学会

国内、日本語学会、編集委員会委員、2020.4～2021.5

国内、日本語文法学会、大会委員、2020.4～2022.3

国内、社会言語科学会、理事・事務局長、2021.4～2022.3

国内、日本言語学会、編集委員会委員、2021.4～2022.3

国内、日本方言研究会、世話人・編集委員会委員、2021.6～2022.3

(3) 行政

国内、日本学術会議、連携会員、2020.10～2022.3

09b 日本語日本文学（国文学）

教授 **渡部 泰明** WATANABE, Yasuaki

1. 略歴

1981年3月	東京大学文学部国文学専修課程卒業
1984年3月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程修了
1984年4月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程博士課程退学
1986年4月	東京大学文学部助手
1988年4月	フェリス女学院大学文学部専任講師
1991年4月	フェリス女学院大学文学部助教授
1993年4月	上智大学文学部助教授
1999年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
1999年4月	博士（文学）（東京大学）
2006年10月	東京大学大学院人文社会系研究科教授
2021年3月	退職

2. 主な研究活動

a 専門分野

中世文学、和歌文学

b 研究課題

和歌文学については、マクロ的には和歌史を構想し記述すること、ミクロ的には新古今集前後を中心とした中世和歌作品の方法を解明することを課題としている。前者は専門化し、細分化された研究の現状に対して、和歌を長い射程のもとに捉え、この文芸のもつ意義と独自性を総体的に把握することを目指している。後者は、作品を完成したものとして結果論的に捉えるだけでなく、より作者自身の方法に即した、内在的な理解を目標としている。

中世文学については、徒然草や方丈記など、とくに和歌的素養を基盤とした作品について、その文体と方法を解明することを目標としている。

c 概要と自己評価

2017年に刊行した『中世和歌史論 様式と方法』で中世和歌史をまとめたが、それ以後、中世に限らず、古代から近世までの和歌史を記述することを目指し、各時代の特徴的な歌人の方法の分析を行い、なぜ和歌史が続いたかの解明を進めた。全体としての成果は『和歌史 なぜ千年を越えて続いたか』および『日本文学と和歌』の2冊の和歌史の著書にまとめた。二著は相互に補完的な関係にある。また和歌における作者の位置づけの、理論的な考察を行った。

d 主要業績

(1) 単著

渡部泰明、『和歌史 なぜ千年を越えて続いたか』、334頁、KADOKAWA、2020.10

渡部泰明、『日本文学と和歌』、258頁、放送大学教育振興会、2021.3

(2) 共著

藤原克己、長島弘明、渡部泰明、安藤宏、鉄野昌弘、高木和子、『講義 日本文学〈共同性〉からの視界』（59-88頁、157-186頁、ほか）、東京大学出版会、2021.3

(3) 論文

渡部泰明、『和歌における〈作者〉』、ハルオ・シラネ他編『〈作者〉とは何か 継承・占有・共同性』、113-127頁、岩波書店、2021.3

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

放送大学客員教授、2018.4～9

(2) 学会

和歌文学会、常任委員、2020 年度
中世文学会、委員、2020 年度
西行学会、常任委員、2020 年度
中古文学会、委員、2020 年度

(3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

日本学術会議、会員、2020 年度

教授 **安藤 宏** ANDO, Hiroshi

1. 略歴

1982 年 3 月 東京大学文学部国文学専修課程卒業
1985 年 3 月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程修了
1987 年 3 月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程博士課程中退
1987 年 4 月 東京大学文学部助手
1990 年 4 月 上智大学文学部専任講師
1995 年 4 月 上智大学文学部助教授
1997 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2007 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2010 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本近代文学

b 研究課題

太宰治の文学の自意識過剰の饒舌体と呼ばれる文体に注目するところから出発、そのような文体が育まれてゆく必然性を近代文学史の展開に即して考察して行く中で、「私小説」というわが国独自の表現形式の生み出されていく過程を表現史的に解明する方向へと進んだ。作家論の一環として太宰治の文学の特質を解明して行く方向と、小説を中心とする日本近代文学の表現機構の研究とを、並行的しておしすすめて行くことを研究課題としている。

c 概要と自己評価

「表現機構」という観点から、小説が小説として認知される暗黙の要件を分析し、近代日本における変遷の様相を、『近代小説の表現機構』（岩波書店、2012 年）にまとめ、それをさらに一般書の形で『日本近代小説史』（中公選書、2015 年）と『私』をつくる 近代小説の試み』（岩波新書、2015 年）にまとめた。これら近代小説研究に関する成果を踏まえ、これまでの太宰治研究の成果を集大成し、『太宰治論』（東京大学出版会、2021 年）を刊行した。

d 主要業績

(1) 単著

安藤宏、『日本近代小説史 新装版』、中央公論新社、2020.8、全 251p。
安藤宏、『太宰治論』、東京大学出版会、2021.12、全 1184p。

(2) 共編著

斎藤理生と共編、『太宰治 単行本にたどる検閲の影』（執筆 p.44-53、p.104-139）、秀明大学出版会、2020.10、全 153p。
鈴木健一、高田祐彦と共編、佐々木孝浩著「近代「国文学」の肖像 第 1 巻『芳賀矢一「国文学」の誕生』、岩波書店、2021.2、全 162p。
鈴木健一、高田祐彦と共編、陣野英則著「近代「国文学」の肖像 第 2 巻『藤岡作太郎「文学史」の構想』、岩波書店、2021.8、全 158p。

- 鈴木健一、高田祐彦と共編、鈴木健一著「近代「国文学」の肖像 第3巻『佐佐木信綱 本文の構築』、岩波書店、2021.2、全162p.
- 鈴木健一、高田祐彦と共編、田淵向美子著「近代「国文学」の肖像 第4巻『窪田空穂 「評釈」の可能性』、岩波書店、2021.6、全166p.
- 鈴木健一、高田祐彦と共編、高田祐彦著「近代「国文学」の肖像 第5巻『高木市之助 文藝論の探究』、岩波書店、2021.4、全160p.

(3) 分担執筆

- 安藤宏、『ことばの危機 大学入試改革・教育政策を問う』（「はじめに」「おわりに」を執筆）、集英社、2020.6、p.3-23、p.205-207
- 安藤宏・斎藤理生共編、『太宰治 単行本にたどる検閲の影』（『佳日』から『黄村先生言行録』へ）『お伽草紙』「パンドラの匣」、p.44-53、p.104-139）、秀明大学出版会、2020.10
- 安藤宏、日本近代文学館編『教科書と文学 「羅生門」「山月記」「こころ」の世界』（「あとがき」、p.130-132）、秀明大学出版会、2021.6
- 藤原克己、長島弘明、渡部泰明、安藤宏、鉄野昌弘、高木和子、『講義 日本文学 〈共同性〉からの視界』（p.139-154、p.189-204、ほか）、東京大学出版会、2021.3

(4) 小論・解説

- 安藤宏、「地域文化としての太宰治 桜桃忌の話題から」、「東京新聞」、2021.6.16、夕刊5
- 安藤宏、「太宰治 自意識をさらけ出し、そしてあなたに語りかける」、「東京大学新聞」、2021.10.12
- 安藤宏、「なぜ国語に文学 異質な他者に触れ心情思う」、「朝日新聞」、2022.1.22、朝刊19
- 安藤宏、「太宰治という迷宮（ラビリンス）『太宰治論』を執筆して」、「UP」、東京大学出版会、2022.2、p.1-5
- 安藤宏、「文学作品の解釈とAI」、「未来からの問い 日本学術会議100年を構想する」、日本学術会議、2020.10、p.110-111

3. 主な社会活動

(1) 学外組織委員・役員

- 日本学術会議連携会員（2020、2021年度）
- 日本近代文学館理事（2020、2021年度）、専務理事（2021年度）
- 日本近代文学会理事（2021年度）
- 筑摩書房教科書編集委員（2020、2021年度）
- 教育出版教科書編集委員（2020、2021年度）

(2) 提言等

- 共同執筆「高等学校教育の改善に向けて」、日本学術会議言語・文学委員会古典文化と言語分科会、2020.6.30

(3) 講演

- 安藤宏、「太宰治と志賀直哉」、高志の国文学館、2021.11.6
- 安藤宏、「常呂公開講座「近代小説」の誕生—「言」と「文」は一致するか—」、北見市常呂町公民館大講堂、2021.11.12

教授 **鉄野 昌弘** TETSUNO, Masahiro

1. 略歴

- | | |
|---------|-------------------------------|
| 1983年3月 | 東京大学文学部国文学専修課程卒業 |
| 1983年4月 | 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程入学 |
| 1986年3月 | 同 修了 |
| 1986年4月 | 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程博士課程進学 |
| 1990年3月 | 同 単位取得退学 |
| 1990年4月 | 帝塚山学院大学文学部専任講師 |

1994年4月	帝塚山学院大学文学部助教授
1995年4月	東京女子大学文理学部助教授
2003年4月	東京女子大学文理学部教授
2007年12月	東京大学大学院人文科学研究科 国語国文学専門課程 博士（文学）学位取得
2009年4月	東京女子大学現代教養学部教授（改組による学部名変更）
2013年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本上代文学・和歌文学

b 研究課題

上代（奈良時代以前）日本文学を、韻文中心に研究している。特に『万葉集』の歌人、柿本人麻呂や、大伴家持の作品について、その読み直しを課題としている。『万葉集』の和歌は、中国の先進文明に正面から向き合って成立した日本という国家における草創期の文芸であり、漢詩文の表現に対して、学びつつ対抗するという両義的な関係を結んでいる。それゆえ、当時伝来していた六朝・初唐の漢詩文との比較・対照を主たる研究方法として、和歌独自の表現を明らかにしつつ、その価値を見出すことを論文執筆の際の、目標としている。更に『万葉集』は、7世紀前半から、8世紀中ごろまでの和歌の歴史を語る書物であると考えられ、歌人たちの積み重ねた作品群がいかなる軌跡を描くか、すなわち『万葉集』の和歌史を明らかにすることを、研究全体の目標とする。

c 概要と自己評価

2020年度は、大伴旅人の伝記をまとめる作業に追われた。2021年3月によりやく刊行できた。論文は、大伴家持に関するものと、旅人から家持へと、いうテーマであった。2021年度は、旅人・家持を中心とする論文集をまとめる作業に携わった。2021年度には、NHKで、「カルチャーラジオ」の講師を務め、啓蒙にも力を入れている。共著・共編著もそうした業績である。

d 主要業績

(1) 単著

鉄野昌弘、『大伴旅人』（人物叢書）、全280p、吉川弘文館、2021.3

(2) 共著

藤原克己、長島弘明、渡部泰明、安藤宏、鉄野昌弘、高木和子、『講義 日本文学（共同性）からの視界』（p.3-36、p.155-170、ほか）、東京大学出版会、2021.3

(3) 共編著

上野誠・鉄野昌弘・村田右富実、『万葉集の基礎知識』、角川書店、2021.4

(4) 論文

鉄野昌弘、「天平勝宝八歳の難波行幸と大伴家持」、『難波宮と古代都城』、同成社、2020.6

鉄野昌弘、『万葉集』における「望郷」と「隠逸」、『萬葉集研究』第41集、塙書房、2021.2

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

東京女子大学非常勤講師、2020.9～2021.3、2021.9～2022.3

(2) 学会

萬葉学会 編輯委員

上代文学会 常任理事

(3) 学外組織

大学改革支援・学位授与機構 国語・国文学部会専門委員

高岡市万葉歴史館評議員

1. 略歴

1988年3月	東京大学文学部国文学専修課程卒業
1988年4月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学修士課程入学
1991年3月	同 修了
1991年4月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学博士課程進学
1996年3月	東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻日本語日本文学 専門分野博士課程単位取得退学
1996年4月	東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻日本語日本文学 専門分野研究生（～1997年3月）
1998年4月	博士（文学）学位取得（東京大学） 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻日本語日本文学専門分野博士課程修了
1998年4月	関西学院大学文学部専任講師
2002年4月	関西学院大学文学部助教授（2007年4月より准教授）
2008年4月	関西学院大学文学部教授
2013年4月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2017年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

平安文学、源氏物語、物語史

b 研究課題

源氏物語は、平安前期に成立した長編物語・歌物語・和歌の発想を基盤とし、日記文学・漢詩文・史実等を貪婪に吸収して成立したと思われる。そこに到りつくまでの文学史的な動態、及び、源氏物語それ自体の構造や表現の分析を主な研究課題としており、初期の成果は『源氏物語の思考』（風間書房、2002年、第五回紫式部学術賞受賞）にまとめた。また平安時代の人々の思考や発想の形式にも関心を寄せており、和歌の贈答の分析を通じた意思伝達の呼吸などについて、『女から詠む歌 源氏物語の贈答歌』（青簡舎、2008年）に提案、これまでの成果は『源氏物語再考 長編化の方法と物語の深化』（岩波書店、2017年）にまとめた。そのほか、研究成果を一般の人々に分かりやすく伝える仕事として、瀬戸内寂聴訳源氏物語の注釈等の執筆のほか、『男読み 源氏物語』（朝日新書、2008年）、『コレクション日本歌人選 和泉式部』（笠間書院、2011年）、『平安文学でわかる恋の法則』（ちくまプリマー新書、2011年）等の一般書も手掛けている。

c 概要と自己評価

故三角洋一氏（本学名誉教授）が執筆途中だった『風葉和歌集』（和歌文学大系、明治書院、2019年）の注釈や解説を補完した刊行に続き、今期は、久保田淳氏をはじめ五名で分担執筆した注釈書『古今和歌集』（和歌文学大系、明治書院、2021年）を刊行した。また、『源氏物語を読む』（岩波新書、2021年）の刊行によって、研究成果の一般への普及にも尽力した。現在は、源氏物語を中心とする平安朝の和歌・日記・歴史等の研究から、より広域に物語と和歌を中心とした古典文学史の再構築に取り組みつつある。

d 主要業績

(1) 著書

共著、藤原克己、長島弘明、渡部泰明、安藤宏、鉄野昌弘、高木和子、『講義 日本文学〈共同性〉からの視界』（p.43-58、p.91-106、ほか）、東京大学出版会、2021.3

単著、高木和子、『源氏物語を読む』、岩波書店、2021.6

共著、久保田淳、高野晴代、鈴木宏子、高木和子、高橋由記、『和歌文学大系5 古今和歌集』、明治書院、2021.12

(2) 編集（編集責任者）

鈴木宏子、高木和子編『源氏物語を読む 日本文学研究ジャーナル』、古典ライブラリー、17、2021.3

(3) 論文

高木和子、「源氏物語と紫式部学会」、『武蔵野文学』、武蔵野書院、68、p.21-24、2020.12

高木和子、「類話の累積に見る源氏物語の成立と方法」、『日本文学研究ジャーナル』、古典ライブラリー、17、p.134-146、2021.3

- 高木和子、「蜻蛉日記における外出と自然賞美——付、「紅葉狩」考——」、『危機下の中古文学 2020』、武蔵野書院、p.341-353、2021.3
- 高木和子、「風葉和歌集の源氏物語理解——無名草子、物語二百番歌合の系譜から——」、『国語と国文学』、第98巻第5号、p.122-136、2021.5
- 高木和子、「源氏物語の「数まふ」「後見」「絆」考」、『国文論叢（神戸大学）』、57、p.44-55、2021.11
- 高木和子、「解説 古今和歌集 四 平安朝の物語・日記における古今和歌集」、『和歌文学大系5 古今和歌集』、明治書院、p.453-461、2021.12
- 高木和子、「瀬戸内寂聴訳『源氏物語』の生成」、『ユリイカ』、青土社、第54巻第3号（通巻786号）、p.170-177、2022.2
- (4) 解説
高木和子、「日本文学（古典）」、『文藝年鑑 2020』、新潮社、p.40-42、2020.7

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

- 聖心女子大学非常勤講師、2020.4～2021.3
- 連続講座、毎日文化センター・大阪、「源氏物語を読む」、1999.5～現在
- 講演、不識庵青天白雲塾、「源氏物語とは何か」、於セミナーハウスフォーリッジ、2021.6.3
- 特別講演、JPIC オンライン、連続講座「世界の物語を旅する」のうち第二回「源氏物語を読む」、2021.7.10
- 出演、テレビ朝日、「林修の今でしょ！講座 東大の先生の面白い講義」、2021.12.21 放送分

(2) 学会

- 中古文学会、常任委員、編集委員
紫式部学会、理事

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

- 紫式部学術賞（紫式部顕彰会）、審査委員長

准教授 **佐藤 至子** SATO, Yukiko

1. 略歴

- | | |
|---------|--|
| 1994年3月 | お茶の水女子大学文教育学部国文学科卒業 |
| 1994年4月 | 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専攻修士課程入学 |
| 1997年3月 | 同 修了 |
| 1997年4月 | 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻日本語日本文学専門分野博士課程進学 |
| 2000年3月 | 同 修了 |
| 2000年3月 | 博士（文学）学位取得（東京大学） |
| 2000年4月 | 椋山女学園大学人間関係学部専任講師 |
| 2003年4月 | 椋山女学園大学人間関係学部助教授 |
| 2007年4月 | 日本大学文理学部准教授 |
| 2013年4月 | 日本大学文理学部教授 |
| 2018年4月 | 東京大学大学院人文社会系研究科准教授 |

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本近世文学

b 研究課題

近世後期から明治前期の戯作と芸能を主な研究対象としている。作品読解を通じて表現の基底にある価値観や知識を明らかにすること、近世の娯楽文化をめぐる諸事象と現代文化との連続性を考察することを目標としている。

c 概要と自己評価

戯作の文体と表現様式の分析から出発し、長編合巻の翻刻と書誌学的研究、戯作者山東京伝に関する研究などを積み重ねてきた。近年は幕末・明治に活躍した落語家三遊亭円朝の作品研究や、戯作に対する出版統制の実態解明にも力を注いでいる。これまで、近世後期の合巻に関する研究成果をまとめた『江戸の絵入小説—合巻の世界—』（ペリカン社、2001）、山東京伝の評伝をまとめた『山東京伝—滑稽洒落第一の作者—』（ミネルヴァ書房、2009）、古典を中心とする日本文学に描かれた妖術使いについて考察した『妖術使いの物語』（国書刊行会、2009）、戯作に対する出版統制について考察した『江戸の出版統制—弾圧に翻弄された戯作者たち—』（吉川弘文館、2017）などを発表している。

2020・2021年度は合巻に関する研究を進めるとともに、三遊亭円朝の落語を擬人化表現に着目して考察する研究に取り組んだ。

d 主要業績

(1) 論文

佐藤至子、「『桜姫全伝曙草紙』と文化期の京伝・種彦の合巻」、『国語と国文学』、第97巻11号、pp.70-84、2020.11

佐藤至子、「三遊亭円朝『七福神参り』の白鼠について—動物の擬人化に関する考察—」、『東海近世』、28、pp.66-81、2021.2

佐藤至子、「合巻における自主規制—『三国太郎再来伝』から『現世扶桑太郎』へ—」、『書物・印刷・本屋—日中韓をめぐる本の文化史—』、pp.80-94、2021.6

佐藤至子、「『白縫譚』初編・二編の構想について」、『国語と国文学』、第99巻第3号、pp.36-52、2022.3

(2) 啓蒙

佐藤至子、「江戸文学にみる自然」、『和書ルネサンス 江戸・明治初期の本にみる伝統と革新』、pp.6-15、2021.4

佐藤至子、「概観 日本文学〈古典〉」、『文藝年鑑 2021』、pp.43-45、2021.6

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

慶應義塾大学非常勤講師、2020.4～2022.3

講演、「古典文学のなかの自然」、印刷博物館、2021.6.5

講演、すみだ地域学セミナー、「江戸の出版事情と山東京伝」、すみだ生涯学習センター、2021.12.4

(2) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

人間文化研究機構国文学研究資料館古典籍共同研究事業センター、拠点連携委員、2019.6～現在、センター運営委員、2021.4～現在

准教授 **木下 華子** KINOSHITA, Hanako

1. 略歴

1994年4月 東京大学教養学部文科三類入学
1996年4月 東京大学文学部言語文化学科日本語日本文学（国文学）専修課程進学
1998年3月 同 卒業
1998年4月 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻日本語日本文学専門分野修士課程入学
2001年3月 同 修了
2001年4月 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻日本語日本文学専門分野博士課程入学
2006年3月 同 単位取得退学
2009年4月 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻日本語日本文学専門分野博士課程再入学
2010年3月 同 退学 2010年7月 博士（文学）学位取得（東京大学）
2011年4月 ノートルダム清心女子大学文学部 専任講師
2014年4月 ノートルダム清心女子大学文学部 准教授
2019年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本中世文学・和歌文学

b 研究課題

日本の中世文学・和歌文学の研究を専攻している。特に平安時代後期から中世にかけての言説を研究の中心とし、鴨長明の諸作品(『方丈記』『無名抄』『発心集』)と和歌・歌学書・歌論書を主たる分析対象とする。核となる問題意識は、言葉がどのような世界をつくりだすのか、何を実現するのかということにある。その現場を、表現が巧まれる必然性・言説の主体や文化圏の価値観や構想という視点から分析し、特に中世前期における人と言葉の有り様の解明を試みる。言葉によって世界が構築される事例として、新古今時代を描出する『源家長日記』の分析を進めている。また、中世における紀行文学隆盛の基底として、巡礼記や和歌を伴う旅の記・物語といった作品群に着目し、旅・移動をめぐる言葉の動態を表現史・文学史として把握することを目指している。

c 概要と自己評価

鴨長明の諸作品を軸とした研究については、単著『鴨長明研究——表現の基層へ』(2015)にまとめたが、その過程で醸成した新たな問題意識をもとに、引き続き、『方丈記』についての論考を発表した。『方丈記』については、現在の社会情勢との関係も相俟って、国際的にも需要が大きい作品となっており、災害観の視点からの考察を進めることで、『方丈記』という古典が広く享受される文学史的必然性を解明し、現代における古典文学の意義を再考することにつながると考えている。また、近年の研究課題としている旅・移動をめぐる作品群の研究の一環として、『南海流浪記』『東関紀行』についての分析を進めた。

d 主要業績

(1) 論文

木下華子、「『方丈記』「養和の飢饉」に見る疫病と祈り」、ロバート・キャンベル編『日本古典と感染症』、68-91 頁、2021.03

木下華子、「高野山大学蔵(金剛三昧院寄託)『南海流浪記』の翻刻と紹介」、『東京大学国文学論集』、16、123-139 頁、2021.03

木下華子、「早蕨巻の時間意識——回帰する時間・直進する時間」、『源氏物語を開く 専門を異にする国文学研究者による論考 54 編』、603-614 頁、2021.3

木下華子、「『東関紀行』における旅の造型」、『東京大学国文学論集』、17、37-53 頁、2022.3

(2) 啓蒙

木下華子、「「不思議」なる災害観」、『跨境：日本語文学研究』、12、4-7 頁、2021.6

(3) 研究発表

木下華子、「中世日本文学と感染症—『方丈記』『徒然草』を中心に—」、台湾大学日本研究センター主催・国際學術フォーラム「ポストコロナ時代を考える日本研究—人文学と社会科学からのアプローチ—」、2021.10

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

清心女子大学非常勤講師、2021.4~2022.3

(2) 学会

中世文学学会常任委員 (2020、2021 年度)

和歌文学学会委員 (2021 年度)

西行学会常任委員 (2021 年度)

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

筑摩書房教科書編集委員 (2020、2021 年度)

10 日本史学

教授 **加藤 陽子** (戸籍名は野島陽子) KATO, Yoko

1. 略歴

- 1983年3月 東京大学文学部国史学専修課程卒業 (文学士)
- 1985年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了 (国史学)
- 1989年3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得満期退学 (国史学)
- 1989年4月 山梨大学教育学部専任講師 (日本史学)
- 1991年4月 山梨大学教育学部助教授 (日本史学)
- 1992年12月 文部省在外研究員として、スタンフォード大学東アジアコレクション、ハーバード大学ライシャワーセンター研究員
- 1994年4月 東京大学文学部助教授 (日本史学)
- 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授 (日本史学)
- 1997年2月 博士 (文学) 取得
- 2009年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授 (日本史学)

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本近代史

b 研究課題

1930年代の日本の政治と外交、近代日本の天皇制、満州事変・上海事変期の帝国議会議事録を読む、1930年代の史学史

c 概要と自己評価

専門は日本近現代史で、1930年代の外交と軍事を専門としている。近代において起こされた戦争が当該期の政治や社会に持った意味、あるいは、日清・日露・第一次世界大戦など、10年ごとになされた観のある戦争の記憶が総体として国民や国家に対してもたらした影響等について研究してきた。近年は、2011年の公文書管理法施行により利用しやすくなった宮内公文書館や国立公文書館の史料を用い、大正・昭和戦前期の詔書作成過程を研究している。また、昭和戦前期の政治史を専門とする歴史研究者として、日中関係史、日米関係史についても目配りしてきた。史料公開の先進性で知られるアメリカはもとより、近年では中国、台湾等でも史資料の公開が活発になってきたこともあり、内外の研究者との交流に努めている。

d 主要業績

(1) 著書

単著、加藤陽子、『この国のかたちを見つめ直す』、毎日新聞出版、2021.7

共著、半藤一利・加藤陽子・保阪正康、『太平洋戦争への道 1931-1941』、NHK出版、2021.7

(2) 論文

加藤陽子、「南原繁の終戦工作と、その射程」、『思想』、1160、6-15頁、2020.12

加藤陽子、「コロナ禍の世界からみる国家と国民の関係の変容」、歴史学研究会編 中澤達哉、三枝暁子監修『コロナ時代の歴史学』、70-79頁、2020.12

加藤陽子、「行政改革 (1996-1998) と日本学術会議」、『学術の動向』、vol.26 no.11、71-81pp、2021.11

加藤陽子、「現代日本と軍事研究 日本学術会議で何が議論されたのか」、『世界』、no.951、86-97頁、2021.12

(3) 書評

山本貴光、吉川浩満、『その悩み、エピクテトスなら、こう言うね』、筑摩書房、『毎日新聞』、2020.4

小山俊樹、『五・一五事件』、中央公論新社、『毎日新聞』、2020.5

なつかしい一冊、『見る前に跳べ』、新潮文庫、『毎日新聞』、2020.7

杉本恭子、『京大的文化事典』、フィルムアート社、『毎日新聞』、2020.8

藤野裕子、『民衆暴力』、中央公論新社、『毎日新聞』、2020.9

渡部泰明、『和歌史 なぜ千年を越えて続いたか』、角川選書、『毎日新聞』、2021年1月9日、今週の本棚頁、2021.1

波多野澄雄、『「徴用工」問題とは何か 朝鮮人労務動員の実態と日韓対立』、中公新書、『毎日新聞』、2021.2

麻田雅文、『蒋介石の書簡外交 上下』、人文書院、『毎日新聞』、2021.5
益田肇、『人びとのなかの冷戦世界』、岩波書店、『毎日新聞』、2021.7
富田武、『日ソ戦争 1945年8月 棄てられた兵士と居留民』、みすず書房、『ロシア史研究』、no.107、75-82pp、2021.12
国立歴史民俗博物館 性差の日本史展示プロジェクト編、中央公論新社、劉慈欣、『新書版 性差の日本史』、『少女たちの戦争』、『円 劉慈欣短篇集』、インターナショナル新書、中央公論新社、早川書房、『毎日新聞』、2021.12

(4) 解説

加藤陽子、『劇曲平和』を読む—日本と日本人をいかに世界に表象するかという問い—、後藤新平案、平木白星稿
『後藤新平の劇曲 平和』、15-42頁、2020.8
加藤陽子、『解説「日本と中国の過去と未来を考えるための通史」江口圭一『十五年戦争小史』』、ちくま学芸文庫版
解説、377-385頁、2020.10
加藤陽子、『解説 多層的な歴史を文学の力で描く人』、奥泉光『雪の階』上・下（中公文庫、2020年）、414-425頁、
2020.12

(5) 学会発表

国内、加藤陽子、池田嘉郎、中澤達哉、小澤弘明、福士由紀、『コロナ禍の世界が映した「神なき国」の近代と「社会」、
WINE 緊急オンライン対談会 新型コロナウイルス感染症と国民国家／ナショナリズム』、2020.6.27
国内、加藤陽子、『「科学・技術」研究を育む政治文化とは何か—日本学術会議「軍事的安全保障研究」に関する検討
資料を読む』、大阪歴史科学協議会大会 2021年、オンライン、2021.6.12
国内、加藤陽子、書評 富田武『日ソ戦争』、ソビエト史研究会、オンライン、2021.6.19

(6) 啓蒙

加藤陽子、『近代史の扉 コロナ禍めぐる対立』、『毎日新聞』、2020.4
加藤陽子、『近代史の扉 天賦人権論への確信こそ』、『毎日新聞』、2020.5
加藤陽子、『近代史の扉 歴史書くには文脈が必要 議事録の意義』、『毎日新聞』、2020.6
加藤陽子、『近代史の扉 国民感情と検察権力』、『毎日新聞』、2020.7
加藤陽子、『劇曲 平和』(後藤新平案／平木白星作)を読む—日本と日本人をいかに表象するかという問い—、『後藤
新平の会 会報』、No.22、18-23頁、2020.7
加藤陽子、『歴史になぜ学べないのか』、『讀賣新聞』、2020.7
加藤陽子、『近代史の扉 歴史見直し 消極的な日本 「復元ポイント」をめぐる』、『毎日新聞』、7面、2020.8
加藤陽子、『近代史の扉 「手ごわい歴史観」への洞察示せ 対露外交、賢明だったか』、『毎日新聞』、9頁、2020.9
加藤陽子、『近代史の扉 「人文・社会」統制へ触手 [学術会議「6人除外」]』、『毎日新聞』、2020.10
加藤陽子、『近代史の扉 日本側が磨いた学問の自由 [学術会議の自律性保障]』、『毎日新聞』、2020.12
加藤陽子、『近代史の扉 危うし「ボトムアップ型」科学 [学術会議「再定義」のもくろみ]』、『毎日新聞』、2020.12
加藤陽子、『近代史の扉 神話の国で「自分の木」を思う [天皇のありかた熟議のとき]』、『毎日新聞』、2021.1.23、オ
ピニオン頁、2021.1
加藤陽子、『近代史の扉 内外への深い洞察 根底に [無し 許されぬ「五輪プランB」]』、『毎日新聞』、2021.2
加藤陽子、『近代史の扉 権力篡奪へ「正当性」まとう [議会への暴力]』、『毎日新聞 朝刊』、オピニオン面9頁、2021.3
加藤陽子、『近代史の扉 決断は最高度の慎重さ基に [危機の時代、長期消耗戦回避へ]』、『毎日新聞』、2021.4
加藤陽子、『近代史の扉 焦燥感より冷静な「構想」 [新型コロナと対中戦略]』、『毎日新聞』、2021.5
加藤陽子、『近代史の扉 世論が政府の姿勢「変えた」 [学術会議問題の政治過程]』、『毎日新聞』、2021.6
加藤陽子、『近代史の扉 財政上の適切さを問い続けよ [それでも、日本人は「五輪」を選んだ]』、『毎日新聞』、2021.7
加藤陽子、『近代史の扉 外部から調達される危機 [「人ごと感」漂う日本]』、『毎日新聞』、2021.8
加藤陽子、『近代史の扉 行革、どこで誤ったか [官邸は暴走し国民は自宅「療養」]』、『毎日新聞』、2021.9.18、オピ
ニオン欄、2021.9
加藤陽子、『近代史の扉 [謀略と世論] 政治家を葬ろうとした旧陸軍』、『毎日新聞』、2021.10.16
加藤陽子、『近代史の扉 [衆院選を振り返る] 人々の合理的選択を取り込め』、『毎日新聞』、2021.11
加藤陽子、『近代史の扉 東京五輪の下で何が生まれたか [安吾の言葉で振り返る今年]』、『毎日新聞』、2021.12.18、
オピニオン欄

(7) マスコミ

「こういうときこそ本を読もう」、『週刊読書人』、2020.5.1
「非公開の軍法会議で何が争われていたのか」、オンライン版『二・二六事件東京陸軍軍法会議録』パンフレット、丸
善雄松堂、2020.7.26

「知の航海のために必須の羅針盤」、教文館、2020.8.25

「オピニオン&フォーラム 任命拒否する政権 インタビュー」、『朝日新聞』、2021.7.15

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

特別講演、青法協大阪支部、「今と未来を幸せに生きるための歴史教室 憲法と近代史の間」、2021.6

教授 **大津 透** OTSU, Toru

1. 略歴

1983年3月 東京大学文学部国史学専修課程卒業
1985年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程国史学専門課程修了
1987年3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程国史学専門課程中退
1987年4月 山梨大学教育学部講師（歴史学）
1990年9月 山梨大学教育学部助教授（歴史学）
1994年11月 博士（文学）
1997年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2002年10月 スイス、ジュネーブ大学招聘教授（～2003年2月）
2010年7月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本古代史

b 研究課題

古代天皇制、日唐律令制比較研究、摂関期国家の研究

c 概要と自己評価

日本古代の律令制を東アジア世界の中で位置付けることを目的とし、それにとめない古代天皇制の解明、敦煌吐魯番文書の研究、摂関政治期の国制の解明を行っている。科研費をうけて長年続けている天聖令にもとづく律令制の比較研究については2019年の史学会大会でシンポジウム「日本律令制と中国文明」を企画し、その成果に基づいた論文集『日本古代律令制と中国文明』を出版したが、新型コロナウイルス感染症の蔓延によって研究調査活動は大きな制約を受けている。また史学会理事長として、史学会の活動が滞り調に行われるように努力しているが、史学会大会は2020年、2021年ともオンライン開催となった。

d 主要業績

(1) 著書

編著、大津透編、『日本古代律令制と中国文明』、山川出版社、2020.11

(2) 論文

大津透、『令集解』研究の回顧と展望」、小口雅史編『古代東アジア史料論』、同成社、52-70頁、2020.6

大津透、「日唐古文書学比較研究の一視点」、大津透編『日本古代律令制と中国文明』、山川出版社、193-209頁、2020.11

大津透、「二〇二〇年の歴史学界 総説」、『史学雑誌』、130編5号、1-5頁、2021.5

大津透、安洪賛訳、「略論唐令復原与『天聖令』一以『賦役令』为中心」、周東平・朱騰編『法律史訳評』、中西書局（上海）、176-201頁、2021.11

(3) 解説

大津透、『日本書紀』と史実とのあいだ」、井上光貞監訳『日本書紀』上・下、中公文庫、下527-533頁、2020.6

(4) 学会発表

国内、大津透、「藤原道長の史的意義」、東方学会令和三年度秋季学術大会、オンライン、2021.11.7

(5) 座談会

笹山晴生、「国史学界の今昔 戦後歴史学と古代史研究の歩み」(上)(下)、『日本歴史』870号、55-67頁、871号、41-57頁、2020.11

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本歴史学会、評議員、2002.7～

国内、東方学会、常務理事、2019.6～、国際東方学会会議運営委員

国内、公益財団法人史学会、理事・理事長、2020.6～

教授 鈴木 淳 SUZUKI, Jun

1. 略歴

1986年3月 東京大学文学部国史学科卒業
1992年3月 東京大学大学院人文科学研究科国史学専攻博士課程修了
(1995年3月 博士(文学)学位取得)
1992年4月 東京大学社会科学研究所助手
1994年4月 東京大学教養学部助教授
1996年1月 ドイツ、ボーフム大学(Ruhr-Universität Bochum) 客員教授(～1996年10月)
1996年4月 東京大学大学院総合文化研究科助教授(大学院重点化による)
1999年10月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2007年4月 同准教授
2012年8月 同教授
2012年8月 米国、イェール大学(Yale University) 客員研究員(～2013年3月)

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本近代史

b 研究課題

明治期の機械工業が元来の研究課題。新技術の導入が社会をどのように変えて行くのかという問題関心を中心に、史料に即した明治・大正期の再検討を心がけている。

c 概要と自己評価

共同研究や内外のシンポジウム等に参加して、従来より幅広く対象をとらえることができるようになり、産業遺産の研究でも多くの知見を得られたが、手を広げすぎて多忙なため、検討を深め、また体系的に成果を提示することが課題となっている。

d 主要業績

(1) 著書

共著、Erich Pauer, Ruselle Meade、『Technical Knowledge in Early Modern Japan』、Renaissance Books、2020

共著、Jan Schmidt, Katja Schmidtpott、『The East Asian Dimension of the First World War: Global Entanglements and Japan, China, and Korea, 1914-1919』、Campus Verlag、2020

共著、高田馨里編著、『航空の二〇世紀—航空熱・世界大戦・冷戦』、日本経済評論社、2020.3

共著、Erich Pauer, Regine Matthias (eds.)、『Accessing Technical Education in Modern Japan』、Renaissance Books、2021

(2) 論文

鈴木淳、「富岡製糸場における繭乾燥をめぐる」、『群馬県立世界遺産センター紀要』、第2号、13-24頁、2022.3

(3) 書評

高嶋修一、『都市鉄道の技術社会史』、山川出版社、『大原社会問題研究所雑誌』、743・744、73-76頁、2020.10

河本信雄、『田中久重と技術の継承：時計から からくり人形、そして電信機』、思文閣出版、『経営史学』、56 巻 3 号、59-61 頁、2021.12

(4) 学会発表

国内、鈴木淳、「趣旨説明および「乾燥施設」、日本産業技術史学会年会シンポジウム「産業技術史から見た富岡製糸場」、群馬県富岡市 富岡製糸場、2021.9.11

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本産業技術史学会、理事、2009.5～、副会長、2017.5～

国内、政治経済学・経済史学会、編集委員、2009.1～、理事、2017.10～

(2) 行政

省庁、文化庁、文化審議会専門委員、2014.3～

教授 **高橋 典幸** TAKAHASHI, Noriyuki

1. 略歴

1989 年 4 月	東京大学教養学部文科Ⅲ類入学
1991 年 4 月	東京大学文学部国史学専修課程進学
1993 年 3 月	東京大学文学部国史学専修課程卒業
1993 年 4 月	東京大学大学院人文科学研究科国史学専攻修士課程進学
1995 年 3 月	東京大学大学院人文科学研究科日本史学専攻修士課程修了
1995 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻（日本史学）博士課程進学
1997 年 7 月	同 博士課程（日本史学）中退
1997 年 8 月	東京大学史料編纂所助手
2007 年 4 月	東京大学史料編纂所助教
2009 年 1 月	博士（文学）学位取得（東京大学）
2012 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2021 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本中世史

b 研究課題

中世武家政権の研究、14 世紀政治社会史の研究

c 概要と自己評価

もっぱらモンゴル襲来を中心に鎌倉時代後半の外交・政治史研究に取り組んだ。また別に北条時頼政権について検討する機会を得たことにより、13 世紀半ばから一貫する朝幕関係を見通す視座を得ることができた。今後は 14 世紀へと視野を拡大し、室町幕府成立期・南北朝期の政治史研究に進んでいきたいと考えている。また共同研究の一環として『平家物語』に取り組み、歴史学の立場から文学作品にアプローチする方法を模索した。さらに古記録から古文書の作成や授受を読み解くことで、古文書学の新たな一面を開拓することを試みた。

d 主要業績

(1) 著書

編著、高橋典幸、『中世史講義【戦乱篇】』、筑摩書房、2020.4

(2) 論文

高橋典幸、「鎌倉幕府と朝幕関係」、『日本史研究』、695、37-59 頁、2020.7

(3) 書評

河内祥輔、小口雅史、M.メルジオヴスキ、E.ヴィダー編、『儀礼・象徴・意思決定 日欧の古代・中世書字文化』、思文閣出版、『法政史学』、96、87-94 頁、2021.9
榎本涉、『僧侶と海商たちの東シナ海』、講談社、『山川歴史 PRESS』、4、24 頁、2021.10

(4) 解説

高橋典幸、「尊経閣文庫所蔵『建治三年記』解説」、『尊経閣善本影印集成 71 公秀公記 実隆公記 建治三年記』、八木書店、257-264 頁、2020.11
高橋典幸、「治承・寿永内乱と佐竹氏」、『古文書研究』、90、128-129 頁、2020.12
高橋典幸、「解説 人物を通じて荘園を理解する」、工藤敬一『荘園の人々』、筑摩書房、230-242 頁、2022.1

(5) 学会発表

国内、高橋典幸、「小早川氏と楽音寺」、科研費 (B) 「西遷・北遷東国武士の社会的権力化」(課題番号 19H01313、研究代表: 田中大喜) 第 2 回研究会、国立歴史民俗博物館、2020.8

(6) 啓蒙

高橋典幸、「総論」、高橋典幸編『中世史講義【戦乱篇】』、筑摩書房、257-270 頁、2020.4
高橋典幸、「文永・弘安の役」、高橋典幸編『中世史講義【戦乱篇】』、筑摩書房、71-87 頁、2020.4
高橋典幸、「源実朝下文 和田合戦に見る将軍の権威」、日本古文書学会編『古文書への招待』、勉誠出版、109-112 頁、2021.1
高橋典幸、「足利尊氏御判御教書 年号から浮かび上がる尊氏の決意」、日本古文書学会編『古文書への招待』、勉誠出版、128-130 頁、2021.1
高橋典幸、「文永の役」「弘安の役」「嘉元の乱」「正中の変」「御家人」「侍所」「守護」「地頭」「御恩と奉公」「徳政令」「軍事制度」「対外関係」、田中大喜編『図説 鎌倉幕府』、戎光祥出版、2021.6

(7) 会議主催(チェア他)

国内、「第 118 回史学会大会」、実行委員、日本中世史部会、東京大学、2020.11.8
国内、「第 119 回史学会大会」、実行委員、日本中世史部会、東京大学、2021.11.14

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

講演、秋田県生涯学習センター、「鎌倉～南北朝期の佐竹氏」、2020.10、「佐竹文書と南北朝時代」、2021.10
非常勤講師、九州大学(文学部)、「日本史学講義/日本史特論」、2020.12
非常勤講師、放送大学、「日本史のなかの神奈川」、2021.4

(2) 学会

国内、日本古文書学会、学術雑誌編集長、2020.4～2021.3、理事、評議員、2020.8～
国内、日本歴史学会、理事、評議員、2020.7～

准教授 **牧原 成征** MAKIHARA, Shigeyuki

1. 略歴

1994 年 3 月 東京大学文学部国史学専修課程卒業
1996 年 3 月 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻修士課程修了
1999 年 12 月 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻博士課程単位修得の上退学
2000 年 1 月 日本学術振興会特別研究員 (PD)
2003 年 3 月 博士 (文学) (東京大学) (博人社 390 号)
2004 年 4 月 宇都宮大学教育学部助教授 (社会科教育講座)
2007 年 4 月 宇都宮大学教育学部准教授 (同)
2011 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本近世史

b 研究課題

近世前期を中心に、土地制度、身分と身分制、商品流通などの観点から近世社会の特質を検討している。

c 概要と自己評価

2018年度から、私が代表者となって科学研究費補助金による「幕府役所史料の整理・活用による近世法制史・身分論の新展開」、2019年度からは分担者である「戦乱から平和・安定への転換に関する地域比較史研究—九州を中心に」という2つの研究活動に取り組んできた。当初、前者は2020年度までの予定であったが、コロナ禍で2022年度まで延長をくりかえしつつ、ようやく一応の目途をつけることができた。関連する史料翻刻を發表することはできたが、論文・書籍等の刊行はまだできておらず、数年以内に実現したい。後者も2022年度までの予定であるが、延長の見込みであり、コロナ禍で史料調査にも支障が出ているが、これに関する成果の公表も数年以内に進めたい。この2年間、出版企画の遅れなどもあって書籍等の公表ができなかったことは反省点であるが、2022年にはこれまでの近世社会成立史に関する研究成果をまとめた単著論文集を刊行予定であり、そのための準備を進めることはできた。

d 主要業績

(1) 会議主催(チェア他)

国内、「史学会大会近世史部会」、実行委員、オンライン、2020.11.8

国内、「史学会大会近世史部会」、実行委員、2021.11.14

(2) 教科書

『歴史総合 近代から現代へ』、岸本美緒・鈴木淳ほか、執筆、山川出版社、2021

(3) 史料

宮脇啓、牧原成征、『翻刻「公法纂例 乾」(一)』、東京大学日本史学研究室紀要24、p.127-159、2020.3

宮脇啓・牧原成征、『翻刻「公法纂例 乾」(二)』、東京大学日本史学研究室紀要25、p.101-135、2021.3

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本歴史学会、理事、2020.4～

准教授 **三枝 暁子** MIEDA, Akiko

1. 略歴

1995年3月 日本女子大学文学部史学科卒業
1995年4月 東京大学文学部歴史文化学科研究生入学
1996年3月 東京大学文学部歴史文化学科研究生修了
1996年4月 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻(日本史学)修士課程入学
1999年3月 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻(日本史学)修士課程修了
1999年4月 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻(日本史学)博士課程進学
2003年3月 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻(日本史学)博士課程単位取得退学
2003年4月 日本学術振興会特別研究員(PD) (~2005年3月)
2005年4月 立命館大学文学部任期制講師(~2008年3月)
2006年6月 博士(文学)学位取得
2008年4月 立命館大学文学部准教授
2016年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本中世史

b 研究課題

日本中世の身分制、中世都市論、地域社会論

c 概要と自己評価

日本中世の身分制の特質、とくにハンセン病がもたらす身分制への影響について考察を深めた。また、ライフワークとなりつつある京都・「西之京」地域の歴史研究について、現在も中世に由来する神事が地域において存続していることから、祭礼や神饌づくりなどのフィールドワークを行った。さらに、科学研究費による共同研究を通じ、中世村落にかかわるデータベースの作成を進めるとともに、中世村落史研究の研究史について理解を深めた。

d 主要業績

(1) 著書

編著、中澤達哉・三枝暁子監修／歴史学研究会編、『コロナの時代の歴史学』、績文堂出版、2020.12

共著、永村眞編、『中世寺院の仏法と社会』、勉誠出版、376-399 頁、2021.6

共著、松園潤一朗編、『室町・戦国時代の法の世界』、吉川弘文館、174-187 頁、2021.7

(2) 啓蒙

共著、秋山哲雄・野口華世・田中大喜編、『日本中世史入門 増補改訂版』、勉誠出版、415-431 頁、2021.3

三枝暁子、「身分制から見た中世社会」、親鸞佛教センター『親鸞佛教センター通信』79号、4-5 頁、2021.12

(3) 共同研究（産学連携除く）

国内、参画、東京大学史料編纂所、共同利用・共同研究拠点一般共同研究、「賀茂別雷神社文書の調査・研究」、2020.4～2022.4

国内、参画、東京大学ヒューマニティーズセンター、企画研究「行動する人の歴史」、2020.7～2022.6

(4) 会議主催（チェア他）

国内、「第118 回史学会大会」、実行委員、日本中世史部会、東京大学、2020.11.8

国内、歴史学研究会 2020 年度大会全体会・特設部会の運営、歴史学研究会事務所（オンライン開催）、2020.12.5

国内、「第119 回史学会大会」、実行委員、日本中世史部会、東京大学、2021.11.14

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、日本女子大学（文学部）、「日本史講義」、2020.4～2021.3、2021.4～2021.3

その他、浅草寺仏教文化講座、「足利義満と延暦寺—応永元年（1394）の日吉社参詣をめぐる—」2021.4

親鸞佛教センター・親鸞と被差別民に関する研究会、「身分制から見た中世社会」2021.6

(2) 学会

国内、日本古文書学会、評議員、2020.9～

国内、都市史学会、企画委員、編集委員、2020.12～

国内、歴史学研究会、研究部長、2019.6～2020.12

1. 略歴

2002年3月	東京大学文学部歴史文化学科（日本史学専修課程）卒業
2005年3月	東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻（日本史学）修士課程修了
2009年4月	財団法人三井文庫契約研究員
2010年3月	東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻（日本史学）博士課程修了
2010年3月	博士（文学）学位取得
2010年4月	公益財団法人三井文庫研究員
2015年7月	公益財団法人三井文庫主任研究員
2018年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本近世史

b 研究課題

近世の天皇・朝廷の研究、近世都市豪商の研究

c 概要と自己評価

数年来参加してきたジェンダー史、気候変動、豪商廣岡家についての共同研究の成果を発表し始めた。特にジェンダー史については、2016年に共同研究に加わって始めたテーマであったが、ようやく成果が出始めた。日本近世史ではほとんど取り組まれていない男性史の視点をとることで、従来ほぼ注目されていない巨大都市の男性集団と女性集団の共生を見出し、遊郭研究、商家研究、都市社会史研究などにおいても意味のある問題提起ができつつあると考えている。新型コロナウイルス感染症蔓延にともない、新たな史料を探して研究を進めることが著しく困難となり、従来進めてきた朝廷・三井家の史料による研究成果の一部を発表、あるいは依頼されたテーマで元々気になっていた事例を紹介することが中心となった。全体に限界のある状況下でまとめた、雑多な成果が多くなった感があるが、新たな史料に接する機会が激減した分、先行研究と向き合い、課題の所在と今後の研究計画を再考する機会が増えた。また新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、オンラインでの学会・研究会が増えたことで、シンポジウムにおけるコメントを依頼される機会が増え、従来研究してきた、あるいは関心をもってきたテーマについて研究状況を確認する機会となった。

d 主要業績

(1) 著書

共著、福田千鶴・藤実久美子編、『近世日記の世界』、ミネルヴァ書房、2022.3

共著、鎌谷かおる・渡辺浩一・中塚武編、『気候変動から近世をみなおす：数量・システム・技術』、臨川書店、2020.11

(2) 論文

村和明、「一八世紀の三井における印判：個人と印判の分離を中心に」、『日本歴史』884、51-58頁、2022.1

(3) 書評

村和明、「高木まどか著『近世の遊郭と客：遊女評判記にみる作法と慣習』」、『総合女性史研究』39、51-57頁、2022.3

(4) 学会発表

国内、村和明、「近世巨大商家の遊郭利用制度—男性集団の性と階層」、遊郭研究会、2021.9.23

(5) 啓蒙

国立歴史民俗博物館編、『展示図録 性差（ジェンダー）の日本史』、歴史民俗博物館振興会、2020.10

村和明、「三井八郎右衛門宛寺井庄右衛門起請文」、日本古文書学会編『古文書への招待』、勉誠出版、2021.2

(6) 会議主催(チェア他)

国内、「第118回史学会大会」、実行委員、日本近世史部会、東京大学、2020.11.8

国内、「第119回史学会大会」、実行委員、日本近世史部会、東京大学、2021.11.14

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、東京女子大学、「歴史文化演習I」、2020.4～2020.9、2021.4～2021.9

非常勤講師、東京女子大学、「4年次演習」、2020.4～2020.9、2021.4～2021.9

非常勤講師、東京女子大学、「歴史文化演習II」、2020.10～2021.3、2021.10～2022.3

(2) 学会

国内、日本古文書学会、学術雑誌編集委員、2020.4～

1 1 中国語中国文学

教授 大西 克也 ONISHI, Katsuya

1. 略歴

- 1985年3月 東京大学文学部中国語中国文学専修課程卒業
- 1985年4月 東京大学大学院人文科学研究科中国語学専攻修士課程入学
- 1987年3月 東京大学大学院人文科学研究科中国語学専攻修士課程修了
- 1987年4月 東京大学大学院人文科学研究科中国語学専攻博士課程進学
- 1988年9月 中華人民共和国北京大学中国語言文学系留学（～1990年2月）
- 1990年3月 東京大学大学院人文科学研究科中国語学専攻博士課程退学
- 1990年4月 神奈川大学外国語学部専任講師
- 1993年4月 神奈川大学外国語学部助教授（～1995年3月）
- 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
- 1998年3月 文部省在外研究員に採用され、中国広州市中山大学に於いて研修（～1998年12月）
- 2013年1月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（現在に至る）
- 2017年4月 東京大学大学院人文社会系副研究科長（～2019年3月）
- 2019年4月 東京大学大学院人文社会系研究科長・文学部長（～2021年3月）

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国語学、中国古文字学

b 研究課題

(1) 上古中国語の文法研究

構文と文法範疇の相関的変容の諸相、及びそれに関与する様々なファクターの解明を目指している。

(2) 戦国秦漢出土文字資料の研究

戦国秦漢時代の出土文字資料の解読の他、言語がどのように文字化されたかという視点に基づき、地域毎の用字法の相違、秦による文字統一の実態や文字政策に関する探究を行っている。

c 概要と自己評価

研究課題(1)に関しては、上古の中国人が認識した世界をどのように言語化したのか、コーパスと残された文献の背後にはどのような世界が広がっているのかという新たな問題意識から研究を進めている。研究課題(2)に関しては、統一前後の出土資料における漢字の使用実態の解明を進めているが、近年は秦系や楚系の文献に見られる他国の文字影響に着目し、一筋縄ではいかぬ文字の歴史の複雑性に焦点を当てている。

d 主要業績

(1) 著書

共著、阿部公彦、沼野允義、納富信留、大西克也、安藤宏、『ことばの危機』、2020.6

(2) 論文

大西克也、「説“雨”和“雪”——氣象詞語在上古漢語中的語法表現」、『中国古典學』第一卷、50-70頁、2020.5

大西克也、「上古漢語“有”字存在句及其時間性質」、『語苑探蹟——慶祝唐作藩教授九秩華誕文集』、481-494頁、2021.6

大西克也、「也説清華簡从“黽”之字」、『清華簡研究』第四輯、82-93頁、2021.12

(3) 学会発表

国際、大西克也、「上古漢語“矣”非體標記説」、第十届國際古漢語語法研討会、北京語言大学（オンライン）、2021.3.27

国内、大西克也、「上古中国語のヴォイスをめぐる」、日本中国語学会第3回中国語学セミナー、オンライン、2021.9.11

国際、大西克也、「上古漢語「矣」的情態功能」、舊語新知：古代經典的語言新釋 學術工作坊、國立中山大學中國文學系（オンライン）、2021.10.30

(4) 啓蒙

大西克也、「漢字の誕生と変遷——甲骨から近年発見の中国先秦・漢代簡牘まで」、金文京編『東アジア文化講座第2巻 漢字を使った文化はどう広がっていたのか 東アジアの漢字漢文文化圏』、25-33頁、2021.3

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、東方学会学術委員、中国出土資料学会理事、日本中国学会評議員

教授 齋藤 希史 SAITO, Mareshi

1. 略歴

1986年3月 京都大学文学部文学科中国語学中国文学専攻卒業
1986年4月 京都大学文学部聴講生
1988年4月 京都大学大学院文学研究科修士課程中国語学中国文学専攻入学
1990年3月 京都大学大学院文学研究科修士課程中国語学中国文学専攻修了（文学修士）
1990年4月 京都大学大学院文学研究科博士課程中国語学中国文学専攻進学
1991年3月 京都大学大学院文学研究科博士課程中国語学中国文学専攻退学
1991年4月 京都大学人文科学研究所助手
1997年4月 奈良女子大学文学部講師
1999年4月 奈良女子大学文学部助教授
2000年4月 国文学研究資料館文献資料部助教授
2000年4月 奈良女子大学文学部併任助教授
2001年10月 東京大学大学院総合文化研究科併任助教授
2002年10月 東京大学大学院総合文化研究科助教授
2002年10月 国文学研究資料館文献資料部併任助教授
2007年4月 東京大学大学院総合文化研究科准教授
2012年4月 東京大学大学院総合文化研究科教授
2015年5月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国古典文学

b 研究課題

- (1) 中国古典詩文、とりわけ六朝から唐宋にかけての詩賦および文学論。
- (2) 古代から近代にいたる漢字圏の生成と展開、またその言語・文字・文学・出版。

c 概要と自己評価

(1)については、六朝期の文学を『文選』の編纂からふりかえって意義づける試みを行い、2022年刊行予定の共著原稿にまとめた。また、建安期から劉宋期にいたる五言詩の展開において、東晋期の詩文が果たした役割について考察した。
(2)については、『日本思想史事典』の「漢文脈で読む明治」の項目執筆や単著『漢文ノート 文学のありかを探る』等において成果を示し、また科学研究補助金基盤（A）「国際協働による東アジア古典学の次世代展開」等の資金を得て、国内外との共同研究活動を積極的に行った。なお、単著『漢文脈の近代』の中国語訳、『漢文脈と近代日本』の英訳が出版されたことも成果に含めたい。

d 主要業績

(1) 著書

辞書・辞典・事典、日本思想史事典編集委員会 編、『日本思想史事典』、丸善出版、2020.4

単著、齋藤希史、盛浩偉（訳）、『「漢文脈」在近代 中国清末与日本明治重疊的文学圏』、群學出版有限公司、2020.9

単著、Mareshi SAITO、Arthur Defrance（訳）、Jean-Noël Robert（監修）、『Qu'est-ce que le monde sinographique?』、Collège de France, Institut des Hautes Etudes Japonaises、2021.10

単著、Mareshi SAITO、Ross King（編）、Christina Laffin（編）、Sean Bussell（訳）、Matthieu Felt（訳）、Alexey Lushchenko（訳）、Caleb Park（訳）、Si Nae Park（訳）、Scott Wells（訳）、『Kanbunmyaku: The Literary Sinitic Context and the Birth of Modern Japanese Language and Literature』、Brill、2020.11

単著、齋藤希史、『漢文ノート 文学のありかを探る』、東京大学出版会、2021.11

(2) 書評

向嶋成美編著、『李白と杜甫の事典』、大修館書店、『漢文教室』、206、40頁、2020.4

東英寿編、内山精也・浅見洋二・萩原正樹・中本大、『宋人文集の編纂と伝承』、中国書店、『立命館アジア・日本研究 学術年報』、1、144-147頁、2020.6

(3) 啓蒙

齋藤希史、『胡同の文人』、『工芸青花』、14、10-11頁、2020.6

(4) マスコミ

〔翻訳語事情〕【public health→公衆衛生】、『読売新聞』、2020.4.6/同【style→様式】、2020.6.1/同【telephone→電話】、2020.8.3/同【sympathy→同情・共感】、2020.10.5/同【reflection→反省】、2020.12.7/同【thermometer→温度計】、2021.2.1

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、早稲田大学政治経済学部、外国文学、2020-21

(2) 学会

国内、中国社会文化学会理事、東方学会評議員、六朝学会学会理事、日本中国学会評議員、日本近代文学館運営審議委員

教授 鈴木 将久 SUZUKI, Masahisa

1. 略歴

1991年3月	東京大学文学部中国語中国文学専修課程卒業
1991年4月	東京大学大学院人文科学研究科修士課程中国語中国文学専攻入学
1993年3月	東京大学大学院人文科学研究科修士課程中国語中国文学専攻修了
1993年4月	東京大学大学院人文科学研究科博士課程中国語中国文学専攻進学
1993年9月	北京大学中文系留学（高級進修生として）（1994年7月まで）
1997年1月	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程中国語中国文学専攻修了
1997年1月	博士（文学）学位取得
1997年4月	明治大学政治経済学部 専任講師
2002年4月	明治大学政治経済学部 助教授
2007年4月	明治大学政治経済学部 准教授
2010年4月	明治大学政治経済学部 教授
2013年4月	一橋大学大学院言語社会研究科 教授
2018年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国近現代文学

b 研究課題

(1) 中国モダニズム文学の展開

モダニズムを広義にとらえ、中国近現代文学において、西洋の文学技法を学んで中国の現実を描く文学創作がどのように展開したかを解明しようとしている。

(2) 日本人研究者による中国文学研究

日本における中国文学研究が、どのような文脈の中で、いかなる問題意識のもと、どのような成果を生み出してきたかを明らかにしようとしている。

(3) 現在の中国の知的状況

現在の中国の知識界の状況を捉え、その意味を日本に伝えようとしている。

c 概要と自己評価

(1) については、西洋的マルクス主義文芸思想を十分に吸収し、中国の現実に即した理論を構築しようとした胡風およびその周辺の文学活動を総体としてまとめるべく、準備を進めている。また、胡風より一代前前の左翼文芸批評家の彭康の文芸理論について論文を発表した。

(2) については、戦前の中国で「支那通」と呼ばれた井上紅梅の魯迅翻訳について、井上紅梅が目指していた翻訳の方向性を踏まえた上で、実際の魯迅翻訳の細部を検討し、その特徴を論じた。

(3) については、中国を代表する研究者である孫歌氏が日本思想史にとりくんだ研究書『思想史の中の日本と中国』全2部を翻訳、出版した。また中国の建築家であり、建築にとどまらない文化的発言で注目されている王澍著『家をつくる』の共訳に参加した。

d 主要業績

(1) 論文

鈴木将久、「魯迅「狂人日記」日本語訳史考：井上紅梅の場合」、『アジア評論』、第2号、pp.15-31、2020.9

鈴木将久、「中国現代思想の中のウェーバー」、『現代思想』、第48巻第17号、pp.111-119、2020.12

鈴木将久、「革命文学論争における彭康」、『東アジアにおける哲学の生成と発展：間文化の視点から』、pp.344-361、2022.2

(2) 書評

崔元植、『這裡是羅德斯：東亞國際主義的理想與現實』、台湾社会研究雜誌社、『人間思想』、26、pp.146-153、2021

丸尾常喜、『明暗之間：魯迅伝』、上海人民出版社、『上海書評』、2021.9

(3) 学会発表

国際、鈴木将久、「革命文学論争における彭康」、東アジアにおける哲学の生成と発展—間文化の視点から 第四回共同研究会、国際日本文化研究センター、2020.9.27

国際、鈴木将久、「革命文学論争中的彭康」、創造社百年記念学術研討会、中国人民大学文学院、オンライン開催、2021.12.11

(4) 総説・総合報告

鈴木将久、「海外文学二〇一九年 中国文学」、『文芸年鑑2020』、pp.86-88、2020.7

鈴木将久、「“社会史視野”的張力」、『文学評論』、2020年第5期、pp.54-57、2020.9

鈴木将久、「期待良性的対話」、『台湾社会研究季刊』、118、pp.165-169、2021.4

鈴木将久、「海外文学二〇二〇年 中国文学」、『文芸年鑑2020』、pp.86-88、2021.6

鈴木将久、「2021年上半期の収穫から」、『週刊読書人』、1面、2021.7.23

鈴木将久、「劉志偉＋孫歌『歴史の中に中国を探る』」、『現代思想』、第50巻第1号、pp.170-176、2022.1

(5) 翻訳

個人訳、孫歌、「思想史中的日本与中国」、鈴木将久、『思想史の中の日本と中国：第I部 歴史の「基体」を尋ねて』、東京大学出版会、2020.11

個人訳、孫歌、「思想史中的日本与中国」、鈴木将久、『思想史の中の日本と中国：第II部 歴史と人間』、東京大学出版会、2020.12

共訳、王澍、「造房子」、市川絃司、鈴木将久、松本康隆、『家をつくる』、みすず書房、2021.6

(6) マスコミ

「方方『武漢日記』が語る中国の深い傷痕」、『論座』、2020.11.27

「文庫×世界文学28 普遍的な「内なる弱さ」『阿Q正伝』」、『読売新聞』、9面書評面、2021.5.2

「1950年代日本の魯迅研究」、『文芸報』、第2版、2021.12.3

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、早稲田大学文学学術院、中国文学研究、2021～現在

セミナー、明治大学教養デザイン研究科、「社会の傷痕の語り方：方方『武漢日記』とその周辺」、2020.10

セミナー、華東師範大学、「淺析瞿秋白《赤都心史》」、2021.5

セミナー、北京大学、「竹内好与中国」、2021.12

(2) 学会

国内、中国社会文化学会理事、2021.4～、日本中国学会理事、2021.4～

12 東洋史学

教授 佐川 英治 SAGAWA, Eiji

1. 略歴

- 1990年3月 岡山大学文学部史学科卒業
- 1990年4月 大阪市立大学文学研究科修士課程東洋史学専攻入学
- 1992年3月 同上 修了。文学修士の学位を取得
- 1992年4月 大阪市立大学文学研究科博士課程東洋史学専攻入学
- 1994年9月 武漢大学（中国）にて歴史系高級進修生として在外研究（～1996年7月）
- 2001年3月 大阪市立大学文学研究科博士課程東洋史学専攻修了。大阪市立大学文学研究科より博士（文学）の学位を取得
- 2001年10月 岡山大学文学部助教授
- 2006年4月 岡山大学大学院社会文化科学研究科助教授
- 2007年4月 岡山大学大学院社会文化科学研究科准教授
- 2010年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授
- 2018年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国古代史

b 研究課題

皇帝権力の形成と展開、4～5世紀の遊牧民族の南下と社会変容、都城史、石刻資料を用いた社会史

c 概要と自己評価

科研費、基盤研究（B）「東アジア史における「古代末期」の研究」を中心に、都城や軍事の分野でも研究を進めた。これらの研究活動の中で、著書、論文、学会発表、学会の主催をおこなうなどして積極的に研究活動を進めた。一方、コロナのために海外調査ができなくなるなどの影響で、石刻資料の研究は進展が遅れた。

d 主要業績

(1) 著書

- 佐川英治・杉山清彦・小野寺史郎、『中国と東部ユーラシアの歴史』、東京：放送大学出版社、2020.3
- 南川高志編、佐川英治ほか5名、『崩壊の古代帝国秩序 378年』、新北：臺灣商務印書館、2021.7
- 荒川正晴編、佐川英治ほか15名、『岩波講座世界歴史 第6巻 中華世界の再編とユーラシア東部 4～8世紀』、東京：岩波書店、2022.1
- 佐川英治・岸本美緒監修、『ビジュアル大図鑑 中国の歴史』、東京：東京書籍、2022.3

(2) 論文

- 佐川英治、「中国古代都城の客館とそこに現れた天下観」、『都城制研究』、14、27-48頁、2020.4
- 佐川英治、「鄴城所見中国都城制度的転換」、楼勁主編『魏晋南北朝時代の政治与社会』、北京：中国社会科学出版社、98-110頁、2020.6
- 佐川英治、「董仲舒災異説における宮室の問題について」、『中国—社会と文化』、36、3-11頁、2021.7

(3) 書評、その他

- 佐川英治、「書評：魏斌著『“山中”の六朝史』」、『中国—社会と文化』、35、180-190頁、2020.7
- 佐川英治、「報告1（郭曉濤等）「漢魏洛陽城跡北魏宮城の考古学的新展開と意義」並びに報告2（何利群等）「鄴城における近年の考古学上の主要な発見と成果」へのコメント」、『アジア流域文化研究』XII、63-64頁、2021.3
- 佐川英治、ほか4名「座談会：天災と人禍—思想と宗教、そして文学と歴史から考える—」、『中国—社会と文化』、36、49-66頁、2021.7
- 佐川英治、「書評：氣賀澤保規編著『隋唐洛陽と東アジア—洛陽学の新天地—』」、『中国研究月報』75(11)、40-41頁、2021.11
- 佐川英治、「均田制—その実像やいかに—」、吉澤誠一郎監修『論点・東洋史学』、ミネルヴァ書房、50-51頁、2022.1

木村靖二・岸本美緒・小松久男編、佐川英治ほか 18 名、『もういちど読む』山川世界史 PLUS アジア編』、山川出版社、2022.2

(4) 学会発表

国内、佐川英治、「董仲舒災異説における宮室の問題について」、中国社会文化学会・東京大学東アジア藝文書院主催
“天災と人禍—思想と宗教、そして文学と歴史から考える—”、東京、2020.11.17

国際、佐川英治、郭晓濤等「漢魏洛陽城遺址北魏宮城考古新進展及其意義」、何利群等「近年来鄴城考古的主要発見与收穫—以核桃園北齊大莊嚴寺の勘探与発掘为中心—」へのコメント、東北学院大学アジア流域文化研究所・中国社会科学院考古研究所“中国都城考古の最前線 1”、仙台（オンライン参加）、2020.12.20

国際、佐川英治、「關於董仲舒災異説中的宮室問題」、北京大学中国古代史研究センター“中国古代考古与文献研究”、北京（オンライン参加）、2021.5.21

国際、佐川英治、「東アジア都城の系譜—『周礼』から平城京まで—」、東亜大学“インフラからみた東アジア都市の発展”、下関（オンライン参加）、2021.7.17

国際、佐川英治、魏晋南北朝史国際学術講演会「東アジアの「古代末期」」の主催、東京（オンライン開催）、2021.9.21

国内、佐川英治、東方学会令和3年度秋季学術大会シンポジウム「中華の多元化—東アジアの「古代末期」—」の主催、東京（オンライン開催）、2021.11.6

(5) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 (B)、佐川英治、研究代表者、「東アジア史における「古代末期」の研究」、2018～

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 (B)、佐川英治、分担者（代表者は東大外）、「中国古代軍事史の多角的検討—「公認された暴力」のありか」、2018～

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 (A)、佐川英治、分担者（代表者は東大外）、「南縁・東縁地域における郡県都市の変容からみた「漢帝国の遺産」の東アジア史的意義」、2021～

公益財団法人三菱財団法人科学研究助成、佐川英治、研究代表者、「中国古代の立碑習慣と社会結合」、2021～

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、東北大学、「中国古代都城の設計と思想」、2020.11

非常勤講師、早稲田大学、「アジア史学発達史 1」、2020.4～2020.9、2021.4～2021.9

講演、甲南大学、「『史記』はなぜ面白いのか—中国人の歴史観—」、2021.11

(2) 学会

国内、東方学会、学術委員、2019.6～2021.6

国内、中国社会文化学会、理事、2017～

国内、史学会、理事、2020.6～

国内、東方学会、理事、2021.6～

国内、「文明動態」編集委員会編集協力委員、2021.6～

国内、東洋史研究会、評議員、2021.11～

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

教育機関、放送大学、客員教授、2018.4～

民間企業、東京書籍株式会社、教科書「新しい社会」専門委員、2020.4～2021.3

民間企業、東京書籍株式会社、「世界史探究」教科書の編集委員、2020.4～2021.3

1. 略歴

- 1991年3月 東京大学文学部東洋史学専修課程卒業
1993年3月 東京大学大学院人文科学研究科（東洋史学）修士課程修了
1995年3月 東京大学大学院人文科学研究科（東洋史学）博士課程退学
1995年4月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手
1999年4月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所情報資源利用研究センター助手
[2000年5月に、東京大学より博士（文学）の学位を取得]
2001年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2018年9月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国近代史

b 研究課題

主な研究課題は、近代中国における政治体制の模索、都市政治、経済建設、ナショナリズム、日中関係史。最近では、近代中国における歴史学の形成と日本の「東洋史学」の交流の考察にも関心がある。

c 概要と自己評価

中国近代における政治体制、中国沿海部と内陸部の経済的関係、知識人の国際関係認識など、複数の研究課題を並行して進めている。それらの成果の一部は論文にまとめて発表することができたが、それぞれのテーマに即した著作としてまとめていく作業も進行中である。

d 主要業績

(1) 著書

吉澤誠一郎、『愛国とボイコット——近代中国の地域的文脈と対日関係』、名古屋大学出版会、2021.11

(2) 編著

吉澤誠一郎監修、『論点・東洋史学——アジア・アフリカへの問い158』、ミネルヴァ書房、2022.1

(3) 論文

吉澤誠一郎、「白鳥庫吉と東洋史学の始源」、吉見俊哉・森本祥子編『東大という思想——群像としての近代知』、東京大学出版会、2020.8

吉澤誠一郎、「先行研究と向き合う」、飯島渉編『大国化する中国の歴史と向き合う』、研文出版、2020.9

吉澤誠一郎、「日本語ガイドブックに見る華北・華中・華南」、久保亨、瀧下彩子編『戦前日本の華中・華南調査』、東洋文庫、2021.3

3. 主な社会活動

(1) 学会等の委員

国内、日本学術会議、連携会員、2014.1月～現在

国内、東洋文庫、兼任研究員、2009.4～現在

国内、中国社会文化学会、理事、2001.7～現在

国内、東方学会、学術委員、2013.6～現在

国内、東洋史研究会、評議員、2008.11～現在

国内、史学研究会、評議員、2013.6～現在

国内、史学会、評議員、2020.6～現在

国内、歴史学研究会、委員、2021.6～現在

1. 略歴

1996年3月	早稲田大学政治経済学部経済学科卒業
1998年3月	早稲田大学大学院経済学研究科理論経済学・経済史専攻修士課程修了
2001年11月	ライデン大学アジア・アフリカ・アメリンディア研究センター上級修士課程修了
2005年12月	ライデン大学より博士学位 (Doctor) 取得
2006年3月	早稲田大学大学院経済学研究科理論経済学・経済史専攻博士後期課程退学
2006年4月	西南学院大学経済学部講師
2007年4月	西南学院大学経済学部准教授
2012年4月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

東南アジア史、海城アジア史、アジア経済史

b 研究課題

アジア域内貿易史、オランダ東インド会社史、グローバル・ヒストリーと歴史叙述

c 概要と自己評価

2012年4月に着任して10年が経過した。2020年度は新型コロナウイルスの蔓延により研究活動には一般的に遅れが見られたが、2021年度になると研究活動は転じて復調に向かった。とりわけZoomなどのオンライン会議システムを利用した国際共同研究が一般的となり、以前に増して容易かつ緻密に国際共同研究を進めることが可能となった。なお、2022年度以降には、こうした新たな研究スタイルに基づく成果が見込まれる。

d 主要業績

(1) 論文

Ryuto Shimada, "Introduction: Perspectives for Viewing Maritime Asian Society during the "Long Eighteenth Century," *Acta Asiatica: Bulletin of the Institute of Eastern Culture*, 122, iii-xv, 2022.2

(2) 口頭発表

国際、Ryuto Shimada, "Junk Trade between Japan and Southeast Asia during the Ming-Qing Transition Period in the Mid-seventeenth Century," An International Workshop to Celebrate the 25th Anniversary of the Journal *Ming Qing Yanjiu: China in the 17th Century: Trauma, Transition and Global Transformations*, Online, 2021.10.22

国際、Ryuto Shimada, "Rhythm of International Trading Business in Early Modern Nagasaki: A Seasonal Analysis," 16th International Conference of the European Association for Japanese Studies, Online, 2021.8.26

国内、島田竜登、「グローバル・ヒストリーのなかのオランダ東インド会社」、第52回北海道高等学校世界史研究大会(オンライン)、2021.8.6

国際、Ryuto Shimada, "Slavery in the Dutch East India Company: A Case Study of the Slavery at the Dutch Trading Post in Nagasaki in the Late Eighteenth Century," Sixth European Congress on World and Global History, Turku, Finland, Online, 2021.6.16

国際、Ryuto Shimada, "Persian, Armenian, and Dutch Merchants in the Trade between India and Siam during the Early Modern Period," Tokyo Session, 65th International Conference of Eastern Studies (ICES), The Tōhō Gakkai, Tokyo, Online, 2021.5.15

(3) その他

島田竜登、「世界システム論」、金澤周作監修『論点・西洋史学』、ミネルヴァ書房、126-127頁、2020.4

島田竜登、「特許会社」、社会経済史学会編『社会経済史学事典』、丸善出版、56-57頁、2021.6

島田竜登、「人の移動と経済史」、社会経済史学会編『社会経済史学事典』、丸善出版、418-419頁、2021.6

島田竜登、「大航海時代」、社会経済史学会編『社会経済史学事典』、丸善出版、426-427頁、2021.6

島田竜登、「オランダ東インド会社の役割：アジアでどのような活動をしたのか」、吉澤誠一郎監修『論点・東洋史学：アジア・アフリカへの問い158』、ミネルヴァ書房、188-189頁、2022.1

(4) 高等学校教科書

岸本美緒、鈴木淳、池田嘉郎、老川慶喜、小松久男、島田竜登、古川隆久、牧原成征、小豆畑和之、仮屋園巖、中家健、野崎雅秀、松本英治、『歴史総合：近代から現代へ』（文部科学省検定済教科書）、山川出版社、2022.3

久保文明、中村尚史、小田中直樹、塩出浩之、島田竜登、守川知子、吉澤誠一郎、荒木圭子、島津聡、高橋哲、津野田興一、藤本和哉、山川志保、『現代の歴史総合：みる・読みとく・考える』（文部科学省検定済教科書）、山川出版社、2022.3

(5) 研究テーマ

科学研究費補助金、島田竜登、研究代表者、基盤研究 (C) 「グローバル商品の誕生：世界の一体化初期局面の主要 15 品目の生産と多様な消費文化」、2016 年度～

科学研究費補助金、島田竜登、研究代表者、基盤研究 (B) 「近世海上貿易ネットワークの構造と変容：アジアの季節変動とグローバル・ヒストリー」、2019 年度～2021 年度

科学研究費補助金、島田竜登、研究代表者、基盤研究 (C) 「18 世紀アジア域内貿易と季節変動調整メカニズム：オランダ東インド会社を事例として」、2021 年度～

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

客員准教授、放送大学、「グローバル経済史」、2020 年度、2021 年度

非常勤講師、立教大学法学部、「世界史概説」、2020 年度、2021 年度

非常勤講師、立正大学経済学部、「アジア経済史」、2020 年度、2021 年度

(2) 学会等

史学会、大会実行委員、2012～、理事、2018～2020

社会経済史学会、幹事、2014～2020、常任理事、2021～

東方学会、学術委員、2019～

東洋学・アジア研究連絡協議会、幹事、2018～

比較文明学会、理事、2017～、編集委員、2014～、編集委員会委員長、2017～

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

東洋文庫、研究員(客員)、2013～

准教授 **守川 知子** MORIKAWA, Tomoko

1. 略歴

1994 年 3 月 京都大学文学部史学科(西南アジア史学専攻)卒業
1996 年 3 月 京都大学大学院文学研究科東洋史学(西南アジア史学)専攻修士課程修了
1996 年 4 月 京都大学大学院文学研究科歴史文化学専攻(西南アジア史学専修)博士後期課程進学
1997 年 11 月 テヘラン大学文学部史学科博士課程留学
2002 年 3 月 京都大学大学院文学研究科博士後期課程研究指導認定退学
2002 年 4 月 京都大学研修員
2002 年 8 月 バンベルク大学人文学部イラン学科留学
2003 年 4 月 日本学術振興会特別研究員 PD
2005 年 11 月 博士(文学)学位取得(京都大学)
2006 年 4 月 北海道大学大学院文学研究科歴史地域文化学専修・東洋史学講座 助教授
2007 年 4 月 北海道大学大学院文学研究科 准教授
2016 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

西アジア史、イラン史、宗教社会史

b 研究課題

シーア派の聖地巡礼や死者を聖地に埋葬する「移葬」など、西アジアの宗教社会史的研究を主たる研究課題としている。近年は、アルメニア人などの宗教マイノリティにみるイスラーム社会や、ムスリム側から見た仏教やキリスト教といった異文化接触に関心があり、また、多様な人びとからなる西アジアの都市社会の比較検討を行っている。

c 概要と自己評価

2018年度から始まった新学術領域研究「都市文明の本質」の計画研究班代表として、イスラーム時代の西アジア都市に関する研究を進めている。2021年12月には、論文12本、コラム3本をおさめた編著『都市からひもとく西アジア』（勉誠出版）を共同研究の成果として刊行した。個人研究では、都市イスファハーンに関して商業や職人工芸、および墓地といった様々な観点から考察するとともに、聖廟をもつ聖都アルダビールについても専論を発表した。また、西アジア・イスラーム社会の中の異教徒に関する研究を進めるとともに、ライフワークでもある「移葬」や「聖地巡礼」に関して研究成果の発表に努めている。

d 主要業績

(1) 著書

共著、上島享・吉田一彦、『日本宗教史2 世界のなかの日本宗教』、吉川弘文館、2021.2

辞書・辞典・事典、社会経済誌学会編、『社会経済史学事典』、丸善出版、2021.6

編著、守川知子、『都市からひもとく西アジア——歴史・社会・文化』、勉誠出版、2021.12

辞書・辞典・事典、吉澤誠一郎監修、『論点・東洋史学：アジア・アフリカへの問い158』、ミネルヴァ書房、2022.1

(2) 論文

守川知子、「イスラーム教の聖地巡礼とその多層性——日本の巡礼との比較研究に向けて」、上島享・吉田一彦編『日本宗教史2 世界のなかの日本宗教』、吉川弘文館、121-144頁、2021.2

守川知子、「隔離される巡礼者たち——シーア派聖地巡礼と検度制度の近代——」、『歴史学研究』、1011、26-37頁、2021.7

守川知子、「西アジアの“ねずみ”をめぐる文化誌」、『BIOSTORY』、36、46-53頁、2021.12

守川知子、「イスファハーンは世界の半分？」、『都市からひもとく西アジア——歴史・社会・文化』、194-215頁、2021.12

守川知子、「聖都アルダビールとサファヴィー朝下のサフィー廟」、『アジア・アフリカ言語文化研究 別冊』、2022年1、213-230頁、2022.3

(3) 学会発表

国際、Tomoko Morikawa, “An Armenian Merchant Family from New Julfa in Isfahan under the Safavid Empire: A Case Study of the Valijanian Family,” 65th International Conference of Eastern Studies, 2021.5.15

国際、Tomoko Morikawa, “Non-Muslim Minorities and a Shi’ite Empire: Armenians and Jews in Safavid Persia,” Sixth European Congress on World and Global History: Minorities, Cultures of Integration, and Patterns of Exclusion, 2021.6.16

国内、守川知子、「西アジアの“ねずみ”をめぐる文化誌」、生き物文化誌学会第82回例会「人と“ネズミ”の片思いの関係史から人類史を読み解く」、2022.1.29

(4) 研究報告書

守川知子、「職人のまちイスファハーン——19世紀の手工業者一覽にみる伝統産業」、『新学術領域研究「都市文明の本質——古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究3」研究成果報告2020年度』、3(2020年度)、255-265頁、2021.3

守川知子、「イスファハーンの歴史的墓地にみる都市と墓地の空間構造」、『新学術領域研究「都市文明の本質——古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究4」研究成果報告2021年度』、4(2021年度)、205-216頁、2022.3

(5) 予稿・会議録

国際会議、Tomoko Morikawa, “<Symposium III> Armenian Communities and Their Global Network from the Seventeenth to the Early Twentieth Centuries,” 65th International Conference of Eastern Studies

Transactions of the International Conference of Eastern Studies, 65, pp. 148-152, 2021

(6) 会議主催（チェア他）

国際、Panel Symposium: Armenian Communities and Their Global Network from the Seventeenth to the Early Twentieth Centuries, 65th International Conference of Eastern Studies, Online, 2021.5.15

国際、Panel Session: Minorities in Eurasian Empires: Their functions for the survival of empires, Sixth European Congress on World and Global History: Minorities, Cultures of Integration, and Patterns of Exclusion, Online, 2021.6.16

(7) 教科書

『現代の歴史総合：みる・読みとく・考える』、久保文明・中村尚史、執筆、山川出版社、2021

『わたしたちの歴史：日本から世界へ』、市川大祐・長井伸仁・吉澤誠一郎、執筆、山川出版社、2021

(8) 研究テーマ

科学研究費補助金、守川知子、研究代表者、基盤研究 (B)、「近世ユーラシアにおける宗教・交易ネットワークとアルメニア人」、2017 年度～

科学研究費補助金、守川知子、研究代表者、挑戦的研究 (萌芽)、「シーア派イスラームの聖廟・墓地の形成と発展：法理論と地理空間情報による総合的研究」、2017 年度～

新学術領域研究 (研究領域提案型)「都市文明の本質——古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究」(領域代表・山田重郎・筑波大学)、守川知子、研究代表者、計画研究 05「中世から近代の西アジア・イスラーム都市の構造に関する歴史学的研究」、2018 年度～

3. 主な社会活動

(1) 学会等

国内、東洋史研究会、評議員、2016.11～

国内、日本中東学会、評議員、2017.4～

国内、東方学会、学術委員、2019.6～

国内、史学会、編集委員、2019.7～

国内、東洋文庫、兼任研究員

国内、内陸アジア史学会、理事、2018.10～

13 中国思想文化学

教授 **小島 毅** KOJIMA, Tsuyoshi
29 次世代人文学開発センター《文化交流学部門》参照

教授 **横手 裕** YOKOTE, Yutaka

1. 略歴

1988年3月 東京大学文学部中国哲学専修課程卒業
1990年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程（中国哲学専攻）修了
1991年8月 東京大学大学院人文科学研究科第一種博士課程（中国哲学専攻）中退
1991年9月 京都大学人文科学研究所助手
1997年4月 千葉大学文学部助教授
2003年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2015年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国思想、道教、中国医学

b 研究課題

- (1) 道教思想、道教史の解明
- (2) 道教と中国医学の関係史
- (3) 儒・仏・道の三教交渉史を中心とする中国思想史

c 概要と自己評価

研究の中心は道教であるが、道教と中国仏教との関係、および儒・仏・道の三教の影響関係からみた中国思想史についても考察を進めている。三教についてはこれまで道・仏の関係を論じることが多く、とくに道教の内丹説と仏教とのかかわり方について多角的な考察を行ってきたが、三教みつどもえの関係についてはあまり論ずることができなかったため、本期間では新たに儒教知識人の考える仏教・道教関係などについても考察を試みた。さらに道教と中国医学、およびアジア医学との関係の研究にも着手し、アジア医学研究者たちと科学研究費補助金によるプロジェクトを立ち上げて共同で研究に取り組んだ。

d 主要業績

(1) 論文

横手裕、「蘇軾の内丹説：その特徴と意義」、伊東貴之編『東アジアの王権と秩序：思想・宗教・儀礼を中心として』、汲古書院、2021.10、pp.465-480

(2) 書評

横手裕、神塚淑子著『道教經典の形成と佛教』、『東方宗教』137号、2021.11、pp.75-79

(3) 学会発表等

国際、横手裕、「《道藏》日本宮内廳藏本成書相關問題一考：從圖像資料談起」、「道教與物質文化：圖像、藝術、神話與文學論壇」、台湾・國立政治大學（オンライン）、2020.12.11

国内、横手裕「達磨の導引：易筋経と三教交渉」、シンポジウム「儒・道二教と仏教：三教交渉を再考する」、東方学会（オンライン）、2021.11.6

国内、立石和子、大沼由香、浦山きか、横手裕「看護系大学における「倫理」教育の現状」、第3回日本伝統医療看護連携学会学術大会、仙台赤門短期大学（ハイブリッド）、2021.11.28

国内、横手裕「身中洞天説続考」、シンポジウム「中国の洞窟信仰とその展開」、専修大学（オンライン）、2021.12.18

(4) 研究テーマ

科学研究費補助金、基盤研究（A）、横手裕、研究代表者、「アジアの伝統医学における医療・医学の倫理と行動規範、及びその思想史的研究」、2019～

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

国際日本文化研究センター、研究員、2020.4～

京都大学人文科学研究所、研究員、2020.4～

(2) 学会

日本道教学会、理事、論文審査員、2020～

中国社会文化学会、理事、2020～

日本中国学会、論文審査委員、2020～

東方学会、学術委員、2021～

教授 陳 捷 CHEN, Jie

1. 略歴

- | | |
|---------|--|
| 1985年7月 | 北京大学中国語言文学系古典文献専攻卒業 |
| 1988年7月 | 北京大学中国語言文学系古典文献専攻修士課程修了 |
| 1988年7月 | 北京大学中国語言文学系・古文献研究所助手 |
| 1990年8月 | 北京大学中国語言文学系・古文献研究所専任講師（～1995年3月） |
| 1994年2月 | 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫訪問研究員（～1995年1月） |
| 1994年8月 | 東京大学東洋文化研究所外国人研究員（～1995年3月） |
| 1998年3月 | 東京大学大学院人文社会系研究科アジア文化研究専攻（東アジア思想文化専門分野）
博士課程単位取得退学 |
| 1998年4月 | 文部省学術振興会特別研究員PD |
| 1999年4月 | 日本女子大学人間社会学部文化学科専任講師（～2003年3月） |
| 2001年4月 | 東京大学大学院人文社会系研究科博士（文学）学位取得 |
| 2003年4月 | 日本女子大学人間社会学部文化学科助教授 |
| 2004年4月 | 国文学研究資料館研究部助教授 |
| 2007年4月 | 国文学研究資料館研究部准教授 |
| 2013年4月 | 国文学研究資料館研究部教授 |
| 2017年4月 | 東京大学大学院人文社会系研究科 教授 |

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国書籍史 東アジアの書籍交流史 日中文化交流史

b 研究課題

1. 明清時代の中国における叢書出版について
2. 江戸時代の詩経学と博物学
3. 江戸～明治時代の日中学术交流

c 概要と自己評価

東アジアの文化交流を視野に入れながら、日本と中国の書籍文化と学術交流史を研究している。本期間では引き続き江戸時代の中国文化の受容と多元文化を中心に研究を進め、引き続き詩経学と博物学との関係に注目し、また、江戸時代中後期における「好古家」の活動について研究を着手した。なお、近代における日中学術交流に関する新資料の整理研究を行い、当該分野における基本資料の整備に貢献した。

d 主要業績

(1) 論文

陳捷、「乾隆・嘉慶期における叢書の編纂と出版についての考察」、川原秀城編『漢学とは何か—漢唐および清中後期の学術世界』(アジア遊学 249)、pp.148-172、勉誠出版、2020.7

陳捷、「An Examination of the Compilation and Publication of Collectanea during the Ch'ien-lung and Chia-Ch'ing Reigns」、*What Is Han Scholarship?: With a Focus on the Han-Tang and Mid-to Late Ch'ing Periods, ACTA ASIATICA: Bulletin of the Institute of Eastern Culture*, No.120, The Tōhō Gakkai、pp.51-72、2021.2

陳捷、「ベトナム使節阮輝僊の漢詩『餞日本使回程』の積読について」、『東洋文化研究所紀要』第187冊(2021年度第2期)、pp.1-28、東京大学東洋文化研究所、2022.3、査読あり

陳捷、「服部繁子撰『(清国家家庭及学堂用)家政学』における西洋料理とそのエチケットについて」、『環日本海研究年報』第27号、pp.64-84、新潟大学大学院現代社会文化研究科環日本海研究室、2022.3、査読あり

(2) 学会発表等

国際、陳捷、「日本江戸中後期好古家對古代書籍裝訂形式和裝具的研究」、台湾東吳大學文獻學會議、2020.12.6

国際、陳捷、「一位清末外交官眼中的明治日本」、「日照高山」青年學者論壇、台灣中央研究院文哲研究所・清華大学共催、2020.12.11-12(主題講演)

国際、陳捷、「江戸博物学与詩経名物学研究浅談」、首都医科大学中医薬学院主催「亚洲医学文献与医学史」專題論壇、2021.3.13

国際、陳捷、「江戸博物学与詩経名物学研究」、司会・研究発表、北京大学国際漢学家研修基地東亞漢籍傳播研究工作坊、2021.4.3

国際、陳捷、「『(清国家家庭及学堂用)家政学』中の西洋飲食及西餐礼儀」、「近代の“西餐”、“洋飯書”及び“大餐館”」国際シンポジウム、2021.11.18-19

(3) 研究テーマ

1、科研費の研究代表者(1件)

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究(C)、研究代表者:陳捷

研究テーマ:「明清時代における滄湾(江西金溪)の出版業に関する総合的研究」

2、科研費の研究分担者(3件)

1. 2019~2022年度(研究種目:国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B)、研究代表者:住吉朋彦)

「在米日本漢籍の蔵書学—今関天彭菟集書を事例として—」

2. 2020~2024年度(研究種目:基盤研究(A)、研究代表者:住吉朋彦)

「江戸幕府紅葉山文庫の再構と発信—宮内庁書陵部収蔵漢籍のデジタル化に基づく古典学—」

3. 2020~2022年度(研究種目:挑戦的研究(開拓)、研究代表者:伊東乾)

「機械学習を用いた東アジア数理調和思想の実証的研究と共生倫理の検討」

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

国際日本文化研究センター、研究員、2020.4~

(2) 学会

中国社会文化学会、理事

日本中国学会、会員

14 インド語インド文学

教授 梶原 三恵子

KAJIHARA, Mieko

1. 略歴

- 1989年3月 大阪大学文学部哲学科インド哲学専攻卒業
- 1991年3月 大阪大学大学院文学研究科哲学哲学史専攻博士前期課程修了
- 1996年3月 大阪大学大学院文学研究科哲学哲学史専攻博士後期課程単位取得退学
- 1996年9月 米国ハーヴァード大学大学院サンスクリット・インド学科留学
- 2002年6月 博士 (Ph.D.) 学位取得 (ハーヴァード大学)
- 2009年10月 京都大学人文科学研究所助教
- 2012年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授
- 2021年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

ヴェーダ学、インド学

b 研究課題

古代インドの家庭儀礼と社会文化史

c 概要と自己評価

紀元前インドを専門とし、ヴェーダ宗教儀礼からみる古代インドの社会と文化を研究テーマとしている。2020年度には、過去20年にわたって研究してきた、ヴェーダ聖典学習者の入門儀礼に関する単著を上梓した。インド最古のテキストから出発して紀元前の文献を通時的にたどりつつ、古代インドの入門儀礼の成立史、儀軌の変遷と詳細、「入門」という行為が内包する観念と機能を、総合的に論じたものである。ヴェーダの宗教の入門儀礼に加え、初期仏教の受戒儀礼の源流をも探った。2021年度は、ヴェーダ聖典学習者をさす単語の初期仏典における用法と、ヴェーダ学習システムの規定の研究を行った。

d 主要業績

(1) 著書

【単著】梶原三恵子、『古代インドの入門儀礼』、法藏館、2021.2

【共編著】斎藤明、丸井浩、下田正弘、藁輪顕量、梶原三恵子、高橋晃一、加藤隆宏編、『仏典解題事典 第三版』、春秋社、2020.12

(2) 論文

「パーリ語初期仏教経典における brahmacarin- の語について」、『東洋文化研究所紀要』181: 261-278 頁、2022.3

“The Observances or vedavratas for Learning of the Veda.” *Studies in Indian Philosophy and Buddhism* 30: 1-25、2022.3

(3) その他

「サンスクリット語と文字」、東京大学アジア研究図書館ニューズレター 第4号、5-7 頁、2021.7

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、インド思想史学会、理事、2016.4～

国内、日本印度学仏教学会、理事、2017.9～

国内、日本南アジア学会、会員

国内、東方学会、会員

国際、American Oriental Society, Member

(2) 行政

日本学術会議 連携会員、2017.10～

15 インド哲学仏教学

教授 下田 正弘 SHIMODA, Masahiro

1. 略歴

- 1981年3月 東京大学文学部印度哲学印度文学専修課程卒業
- 1981年4月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程（印度哲学）入学
- 1984年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程（印度哲学）修了
- 1984年4月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程（印度哲学）進学（～1989年3月）
- 1985年7月 インド・デリー大学大学院留学（文部省国際交流計画）（～1986年5月）
- 1988年4月 日本学術振興会特別研究員（～1990年3月）
- 1994年6月 博士（文学）（東京大学）
- 1994年10月 東京大学文学部（インド哲学仏教学）助教授
- 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科（インド哲学仏教学）助教授
- 2006年1月 School of Oriental and African Studies (University College of London) 教授（～2006年3月）
- 2006年4月 東京大学大学院人文社会系研究科（インド哲学仏教学）教授
- 2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科（次世代人文学開発センター兼任）教授
- 2011年3月 Stanford University 客員教授（～2011年4月）
- 2012年2月 University of Virginia 客員研究員（～2012年5月）
- 2013年6月 東京大学大学院人文社会系研究科（次世代人文学開発センター配置換、インド哲学仏教学兼任）教授
- 2017年3月 University of Vienna (Faculty of Philology and Cultures) 教授（～2017年5月）
- 2021年4月 東京大学大学院人文社会系研究科（インド哲学仏教学配置換、次世代人文学開発センター兼任）教授

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題

専門はインド仏教聖典形成史、および人文情報学 (Digital Humanities)。前者については、経 sūtra と 律 vinaya を中心とするテキストの形成過程の解明を通し、初期仏教から大乘仏教にいたる思想史の構築を図る。研究テーマの詳細は、(1)大乘経典の形成過程と思想的特徴の解明、(2)近代仏教学における仏教研究方法の問いなおし、(3)仏教思想の現代的意義の考究、という3点に集約される。西洋近代に生まれ、200年の歴史を有する仏教学の方法論について、人文学の方法論全体のなかで再検証し、同時に現代の倫理として機能する可能性を考慮に入れつつ解明を進めている。後者の課題、人文情報学については、大蔵経という歴大な漢語仏教文献コーパスを中心として仏教学の国際的デジタル知識基盤形成を進め、デジタル媒体における人文学研究の方法論構築をめざしている。

c 概要と自己評価

仏教史最大のなぞとされる大乘仏教成立問題について、テキストから想定される当時の社会背景に成立要因を還元するという、これまで主流をなしてきた研究のもつ問題点を洗いなおし、テキスト研究として的大乗仏教研究の方法を追究してきた。1960年代以降、歴史学における言語論的転回を経た人文学において課題化されたテキスト論は、古代インド仏教における諸文献、ことに初期大乘経典を解明するさいに重要な主題となる。最近は、ポスト構造主義以降のテキスト研究批判を踏まえ、大乘経典の特性の解明を進めるなかで、大乘仏教運動は、外部の制度的変化に反映することのない経典制作運動として既存の仏教制度内部で進められ、その成立には口伝から書写へという伝承の媒体の変化が大きく関与していた、という新たな仮説を提示しえた。同時に、近代仏教学方法論全般を問いなおし、イデオロギーに先導されがちな欧米起源のオリエンタリズム論の影響下に留まる仏教学批判を超え、資料の特性と仏教伝統の形成方法とに照合せつつ批判をする方法の樹立をめざし、一定の成果を挙げつつある。

人文情報学にかんしては、ことにこの10年に蓄積した成果を国際学界において積極的に検証したことによって、Digital Humanities という人文学新領域の構築と推進において仏教研究が果たすべき役割を顕在化させた。文字レベルにおける Unicode への登録と ISO 漢字委員会 (IRG) への参加、テキストレベルにおける TEI (Text Encoding Initiative) コンソーシアムでの東アジア日本研究会の設置、画像レベルにおける IIF (International Image Interoperability Framework) への参画は、日本の人文学全体に資する企図である。これらの成果を総合し科学研究費基盤 S「仏教学術新知識基盤」の構

築」の成果として出版した『デジタル学術空間の作り方』においては、デジタル媒体における人文学のありようについて、その原理的次元から具体的適用例までを提示した。

d 主要業績

(1) 著書

下田正弘 (単著)、『仏教とエクリチュール：大乘経典の起源と形成』、東京大学出版会、2020.4

下田正弘 他 (共著)、『親鸞と私』、武蔵野大学出版会、2020.10

下田正弘 他 (共編著)、『仏典解題事典 第3版』、春秋社、2020.12

下田正弘 (分担執筆)、「三宝」「西洋の仏教研究・受容」日本佛教学会 (編集)『仏教事典』丸善出版、28-31 頁、484-485 頁、2021.1

(2) 論文

(単著)

Shimoda, Masahiro. (単著)、“Reconsidering the Methodologies for the Study of Mahayana Sutras,” The Buddha's Words and Their Interpretations, The Shin Buddhist Comprehensive Research Institute, 1-18 頁, 2021

下田正弘 (単著)、「宗教的多様性の時代に求められる倫理——現象学的考察」、『宗教研究』別冊、67-68 頁、2021

Shimoda, Masahiro. (単著)、“East Asia as a Method of Research,” Illustrated by an Interpretation of Japanese Edo-Period Haiku by a Western Art Historian,” International Journal of Buddhist Thought and Culture, 31(2), 15-27 頁, 2021.12

Shimoda, Masahiro. (単著)、“Guest Editor’s Introduction: East Asia as a Method of Research and History Behind the publication of This Issue,” International Journal of Buddhist Thought and Culture, 31(2), 7-12 頁, 2021.12

(共著) (first author を () 内に印し下線を付す)

下田正弘 (渡邊要一郎他と共著)、「Pali Text Society 版パリー語文献を対象としたテキスト検索システムの構築」、『研究報告人文科学とコンピュータ (CH)』2020-CH-124, no. 4, 1-4 頁、2020.8

下田正弘 (大向一輝他と共著)、「仏教文献研究のための IIF の活用における諸課題の解決に向けて」、『じんもんこん論文集』(2020)、75-80 頁、2020.12

下田正弘 (渡邊要一郎他と共著)、「大正新脩大蔵経の構造的記述に向けて」、『じんもんこん論文集』(2020)、61-66 頁、2020.12

下田正弘 (永崎研宣他と共著)、「仏教学のためのデジタル学術編集システムの構築に向けたモデルの提案と実装」、『情報処理学会論文誌』63(2)、324-334 頁、2022.2

下田正弘 (渡邊要一郎他と共著)、「デジタル法寶義林における研究データの共同構築」、『研究報告人文科学とコンピュータ (CH)』2021-CH-128, no. 9, 1-4 頁、2021.2

下田正弘 (王一凡他と共著)、「『續一切経音義』からみる漢文文献の TEI マークアップの課題」、『じんもんこん論文集』(2021)、234-239 頁、2021.12

下田正弘 (左藤仁宏他と共著)、「仏教思想の概念体系の記述手法としての TEI マークアップの現状と課題」、『じんもんこん論文集』(2021)、288-293 頁、2021.12

(3) 解説・その他

下田正弘、「大乘経典の形成と浄土経典」、『和合』46号、4-6 頁、2020.10

(4) 主な学会等発表

国内、下田正弘、「宗教的多様性の時代に求められる倫理——現象学的考察」、日本宗教学会第79回学術大会、オンライン：駒澤大学、2020.9.20

国際、Shimoda, Masahiro. “East Asia as a Method of Research: Illustrated by a Haiku Interpretation, an Edo Period Japanese Literary Formula, Offered by a Western Art Historian,” The 4th Biannual International Conference of the Group of 4 Universities in East Asia on Buddhist Studies. 2021.3.14

国際、下田正弘、「人文情報学による仏教知識構造化の新潮流」、シンポジウム「人文情報学による仏教知識構造化の新潮流」、オンライン：東京大学、2021.11.27

国内、下田正弘・永崎研宣、「デジタル時代におけるアジア研究からの発信——仏教学を事例として」、東洋学・アジア研究連絡協議会シンポジウム「研究環境の変貌と東洋学・アジア研究」、東方学会、2021.12.18

国内、下田正弘、「痕跡、代補、授記：「三宝」再考」、EAA シンポジウム「仏教と哲学の対話」、オンライン：東京大学、主催：東京大学東アジア藝文書院、2022.1.26

(5) 会議主催(チェア他)

国際、「The 4th Biannual International Conference of the Group of 4 Universities in East Asia on Buddhist Studies」、主催、2021.3.14

国際、「人文情報学による仏教知識構造化の新潮流」、主催（科学研究費基盤 A「仏教学デジタル知識基盤の継承と発展」）、2021.11.27

(6) 受賞

国内、下田正弘・永崎研宣編『デジタル学術空間の作り方 仏教学から提起する次世代人文学のモデル』、「デジタルアーカイブ学会学会賞、学術賞（著書）」、デジタルアーカイブ学会、2021.3.18

国内、下田正弘、「第 31 回中村元東方学術賞」、中村元東方研究所、2021.10.8

(7) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 A、下田正弘、研究代表者、「仏教学デジタル知識基盤の継承と発展」、2019～現在

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 A、下田正弘、分担者（代表者は東大外）、「バウッダコーシャの総括的研究—仏教用語の日英基準訳語集の次世代モデル構築に向けて」、2019～

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 C、下田正弘、分担者（代表者は東大外）、「仏教生死観を用いた生涯発達心理学の再考—ターミナルケアと生死観教育への応用」、2019～

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

東京都高等学校公民科「倫理」現代社会研究会第 1 回講演会、「仏教思想のエッセンスを辿る」（オンライン）、2021.6.12

東洋哲学研究所、2021 年連続公開講演会、「法華経展とその世界—思想と伝播の系譜から」（オンライン）、2021.12.3
朝日カルチャーセンター新宿校、「仏教思想と西洋哲学—仏教の哲学的解明」2021.3.12、「原始仏教から大乘仏教まで—経典の様相の差異と意味—」、2021.12.10

(2) 学会

国際、The Eastern Buddhist Society, Board Member、編集顧問、2005～現在

国際、Japanese Association for Digital Humanities（日本デジタル・ヒューマニティーズ学会）、理事、2011～現在

国内、日本印度学仏教学会、理事長、2017～現在

国内、日本宗教学会、常務理事、評議員

国内、一般財団法人東方学会、理事

国内、仏教思想学会、理事

国内、パリー学仏教文化学会、会長

国内、比較思想学会、理事

国内、日本学術会議連携会員、2011～現在

国内、日本西藏学会運営委員

(3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

大蔵経テキストデータベース研究会（SAT）、代表委員、1995～現在

一般財団法人人文情報学研究所、評議員、上席連携研究員

大蔵経研究推進会議、常任議員、議長

公益財団法人仏教伝道協会、英訳大蔵経編集委員会委員

一般財団法人石原奨学育英会、評議員

一般財団法人仏教学術振興会、理事、選考委員

公益財団法人国際宗教研究所、顧問

一般財団法人東京大学仏教青年会、理事

宗教教育研究センター、連携委員

公益財団法人三菱財団、選考委員

1. 略歴

1983年3月	東京大学文学部印度哲学印度文学専修課程卒業(学士)
1983年4月	東京大学大学院人文科学研究科印度哲学印度文学専攻修士課程入学
1986年3月	同大学院(印度哲学印度文学専攻)修士課程修了(修士)
1986年4月	東京大学大学院人文科学研究科印度哲学印度文学専攻博士課程進学
1990年3月	東京大学大学院人文科学研究科印度哲学印度文学専攻博士課程単位取得退学
1991年4月	日本学術振興会特別研究員(～1993年3月)
1998年4月	愛知学院大学文学部日本文化学科 助教授(～2004年1月)
1998年10月	博士(文学)の学位取得
2004年1月	愛知学院大学文学部日本文化学科 教授
2010年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

仏教学、東アジアの仏教及び日本仏教に関する研究及び瞑想に関する研究。

b 研究課題

東アジアにおける仏教の研究。特に日本仏教における修行、学問に関する研究を行っている。学問に関わるところでは、古代の論義に関する研究を南都に残された法会資料、具体的には『法勝寺御八講門同記』を用いながら考察を進めており、古代から中世に掛けて行われた仏教教理に関する論争に焦点を当てている。また修行道に関する研究は、東南アジアや東アジア世界に伝わる止観と呼ばれる修行の実際に注意を払いながら、東アジア世界に残された文献資料を用いて、修行道の内容を明らかにすることを目指して研究を進めている。さらには心理学、脳科学の分野の先生方と共同することで、仏教の伝えた修行の現代的な意義を明らかにするべく研究を進めている。

c 概要と自己評価

2020年4月からは2022年3月までの間は、科学研究費(挑戦的研究)で研究代表者を務め、「仏教学、心理学、脳科学の協同による仏教の止観とマインドフルネスの実証的研究」と題して、三年間の予定で研究を進めた。これはコロナのために一年延長したが、2022年3月で終了することができた。この成果を公にするために2021年3月には臨川書店から編著として『仏典とマインドフルネス』を刊行した。本書は観察を行っている際に生じる負の反応に、どのように対応するのかを軸に論じたものである。そのほかにも、『心理学評論』にも、依頼論文であるが仏教の観察について論じたものを掲載することができた。このように、仏教の伝える瞑想(心身の観察)に関する研究は、順調に進めることができたと思うが、それ以外の領域に対する研究が、若干、遅れ気味であると言わざるを得ない。また、2016年度からアジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門の部門長としての任務が続いており、こちらに多くの時間を割かざるを得ない事態が続いている。たとえば、『法勝寺御八講問答記』の翻刻研究はOCRを用いた入力研究も兼ねているが、若干の進展しかできていない。日本の戒律に関する研究は、唐招提寺を中心に思想的な展開を再考している。多少、仕事が過剰気味と思われ、また広げた仕事が多くなりすぎている感があるので、この点を調整することを、同じく今後の課題としたい。

d 主要業績

(1) 著書

- 共著、伊藤邦武/山内志朗/中島隆博・納富信留、『世界哲学史4』、「鎌倉時代の仏教」、筑摩新書、2020.4
共著、船山徹監修、『シリーズ実践仏教5 現代社会の仏教』、「瞑想のダイナミズム—初期仏教から現代へ」、臨川書店、2020.5
共著、蓑輪顕量、『村上專精と日本近代仏教』、「(大乘非仏説論争)再考—村上專精の意図」、法蔵館、2021.2
編著、『仏典とマインドフルネス』、臨川書店、2021.3
共著、蓑輪顕量、『日本宗教史2 世界の中の日本宗教』、「仏教と妻帯」、吉川弘文館、2021.3
単著、蓑輪顕量、『瞑想でたどる仏教—心と身体を観察する』、NHK出版、2021.4

(2) 論文

- 蓑輪顕量、「中世における仏身論の展開」、『仏教文化研究論集』、20、40-61頁、2020.3
蓑輪顕量、「禅観経典に見る心の負の反応に対する対処法」、『宗教研究』、94別冊、169頁、2020.12

袁輪頭量、「天台智顛に見る心の負の反応への対処法」、『インド哲学仏教学研究』、第29号、1-26頁、2021.3
袁輪頭量、「日本における玄奘の門下生に見る修行道—道昭と行基」、佐久間秀範等編『玄奘三蔵—新たなる玄奘蔵を求めて』、259-271頁、2021.12

袁輪頭量、「仏教学から見たマインドフルネス」、『心理学評論』、Vol64, No.3, 354-362頁、2022.2

袁輪頭量、「日本の初期法相宗に見る修行道—行基・徳一を中心に」、『日本印度学仏教学研究』、vo.72, No.2, 2022.3

(3) 学会発表

国内、袁輪頭量、「古代法相宗に見る修行道—道昭、行基、徳一を中心に」、日本印度学仏教学会第72回学術大会、オンライン形式（大谷大学開催）、2021.9.4

(4) 啓蒙

袁輪頭量、「仏教における身体性について」、『参禅の道 曹洞宗参禅道場の会 会報』、76、5-21頁、2022.3

(5) 会議主催（チェア他）

国際、「Mindfulness and Cognition」、実行委員長、online、2021.3.15

(6) マスコミ

「瞑想でたどる仏教」、NHK Eテレ、『こころの時代—宗教・人生』、日本放送協会（NHK）、2021.4.18

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、放送大学、「仏教思想—原典に学ぶ」、2020.11、2021.11

セミナー、公益財団法人 JR 東海生涯学習財団、「第85回「歴史の歩き方」秘密の教え—最澄と空海の伝えたもの」、2020.11

特別講演、韓国・金剛大学校、「The Development of the practice in the Buddhism」、2021.12

特別講演、駒沢女子大学、「瞑想でたどる仏教—心と体を観察する」、2021.12

特別講演、龍谷大学世界仏教文化研究センター、「最澄の考える菩薩道」、2021.12

特別講演、日本マインドフルネス学会第八回大会（於琉球大学）、「マインドフルネスと慈悲」、2021.12

(2) 学会

国内、日本印度学仏教学会、理事

国内、日本宗教学会、理事

国内、比較思想学会、理事

国内、日本仏教総合研究学会、理事

准教授

高橋 晃一

TAKAHASHI, Kouichi

1. 略歴

1991年4月	東京大学教養学部文科三類	入学
1993年4月	東京大学文学部印度哲学専修課程	進学
1995年3月	同上	卒業
1995年4月	東京大学大学院人文社会系研究科アジア文化研究専攻修士課程	入学
1998年3月	同上	修了
1998年4月	東京大学大学院人文社会系研究科アジア文化研究専攻博士課程	進学
2002年3月	同上	単位取得退学
2002年4月	東京大学大学院人文社会系研究科	助手（～2005年3月）

2004年9月	博士(文学) (東京大学)
2005年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 学術研究支援員 (～2005年9月)
2005年10月	日本学術振興会海外特別研究員 (ハンプルク大学アジア・アフリカ研究所) (～2007年9月)
2007年10月	東京大学大学院人文社会系研究科 学術研究支援員 (～2008年3月)
2008年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 特任研究員 (～2012年3月)
2012年4月	筑波大学大学院人文社会科学研究科 助教 (～2013年3月)
2013年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 特任研究員 (～2017年3月)
2017年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

- (1) インド仏教の論書研究
- (2) チベット撰述の注釈文献に関する研究
- (3) サンスクリット語およびチベット語文献のXMLによるマークアップ方法の研究

b 研究課題

(1) インド仏教の文献は、大きく経・律・論の三つの分野に分けられる。そのうち、論は仏教思想家が著した哲学文献であり、論書と呼ばれる。この論書を主な研究対象としている。特にインド大乘仏教の一学派である瑜伽行派の論書を分析し、その思想形成の過程を考察している。この学派の思想は唯識思想として知られているが、最初期の文献では唯識思想は説かれず、モノの实在を前提にして思想が構築されている。この最初期の思想形態の分析と、唯識思想へ展開した過程を解明し、仏教における唯識説の意義を考察することを課題としている。特にこのような哲学的思想と、菩薩としての倫理的実践に関する六波羅蜜の関係に着目して、瑜伽行派の思想を包括的に明らかにすることを目指している。

(2) (1)と関連して、チベット人によって著された瑜伽行派文献に対する注釈書の内容分析を行う。近年、発見・公刊された『カダム全書』という著作群には瑜伽行派文献に対する注釈が数多く含まれており、その内容の解明は喫緊の課題となっている。特に瑜伽行派の思想との関係では、唯識思想の大成者の一人であるアサンガ(5世紀頃)の著作『阿毘達磨集論』に対して、『カダム全書』には十数点の注釈が収録されている。現在、その全容を解明するために調査している。

(3) こうしたテキスト分析に関しては、電子化テキストによるデータベースの作成が効率の良い方法と考えられる。近年ではXMLを用いたテキスト分析が盛んに行われるようになってきたが、既存のガイドラインであるTEI P5は、サンスクリット語およびチベット語の仏教文献の分析に関しては、改良の余地がある。実際に文献をエンコーディングしながら、具体的な問題提起をすることを目指す。特に(2)と関連して、『阿毘達磨集論』の複数の注釈を分析するためのテキスト・データベースの構築作業を行っている。

c 概要と自己評価

『カダム全書』は近年になって発見・公刊されたもので、カダム派をはじめとするチベットの学僧が残した著作が数多く収録されているが、その全体像は明らかになっていない。2020年度までは科学研究費基盤(B)の助成を受けて基礎的な調査を行い、それを引き継いで2021年度からは科学研究費基盤(A)の助成により、『カダム全書』所収の『阿毘達磨集論』の複数の注釈を整理し、より綿密な分析を行っている。この調査を通じて、『カダム全書』所収のチベット語文献資料が、インドの仏教思想の問題点を探るうえで重要な視点を提示するものであることが明らかになってきた。

そもそも研究対象である『阿毘達磨集論』は、サンスクリット語では「アビダルマ・サムッチャヤ」という。この「アビダルマ」という概念は、本質的には「無漏の智慧」を意味するものであるが、通俗的にはその智慧を獲得するための方法を説く論書がアビダルマであると解され、その結果、アビダルマは論書であるという理解が通説となっていた。これはインドの古典文献にみられる解釈なので、ある意味では正しいが、現代の研究者は後者に重きを置き過ぎたため、アビダルマの本来の意味を考えることから遠ざかってしまった。しかし、チベットの学僧であったチョンデン・レルティ(13世紀頃)は、むしろアビダルマの本質的な意味である「無漏の智慧」を再考し、核心に迫る解釈を示した。すなわち、無漏の智慧は独立して存在するようなものではなく、人間として活動する修行者に備わる本質であり、仏道修行に励む人間から離れた、抽象的な「智慧」というものはあり得ないことを明らかにしたのである。このように、インド仏教の本質に触れる解釈が、『カダム全書』所収の文献を調べることで明らかになった。

また、特任研究員の協力を得て、このようなチベット語の注釈文献をXMLで構造化し、チベット仏教文献に特有の詳細な段落構成を忠実に分析するための手法を、TEIガイドラインに基づいて提案している。これらの成果は主に業績にあげた著書において公開している。

d 主要業績

(1) 著書

編著、高橋晃一・根本裕史、『『阿毘達磨集論』の伝承：インドからチベットへ、そして過去から未来へ』、文学通信、2021.3

(2) 論文

高橋晃一、「唯識思想における他者」、『哲学』71、96-106頁、2020.4

(3) 学会発表

国内、高橋晃一、パネル企画「『阿毘達磨集論』の伝承 —インドからチベットへ、そして過去から未来へ—」、日本印度学仏教学会第71回学術大会、2020.7.5

国際、Takahashi Koichi, "The Inexpressibility of the Vastu in Early Yogācāra Philosophy", 2020 Virtual Annual Meetings of SBL and AAR, November 29-December 10, 2020.12.8

(4) 書評

『大乘莊嚴經論』研究会、『『大乘莊嚴經論』第II章の和訳と注解—大乘への帰依—』（龍谷大学仏教文化研究叢書40）、『インド学チベット学研究』24、317-323頁、2020.12

(5) 監修

斎藤明／丸井浩／下田正弘／蓑輪頭量／梶原三恵子／高橋晃一／加藤隆宏、『仏典解題辞典』、春秋社、2020.12

(6) 研究テーマ

科学研究費補助金、基盤（B）、高橋晃一、研究代表者、『『阿毘達磨集論』に対するチベットの注釈伝承に関するXMLによるテキスト分析』、2018.4～2021.3

科学研究費補助金、基盤（A）、高橋晃一、研究代表者、『カダム全集』所収『阿毘達磨集論』注釈群のXML電子テキスト構築』、2021.4～2026.3

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義など

非常勤講師、大正大学

非常勤講師、武蔵野大学、「人間倫理特論」

非常勤講師、放送大学、「仏教思想—原典に学ぶ」

講演、「唯識思想における他者の存在」、第625回武蔵野大学日曜講演会、2021.11.21

講演、『瑜伽師地論』の伝承について」、第52回オープンセミナー・東京大学ヒューマニティーズセンター（オンライン）、2022.1.28

(2) 学会

日本印度学仏教学会、評議員、常務委員

仏教思想学会、幹事

東方学会

日本チベット学会

日本南アジア学会

International Association of Buddhist Studies

Japanese Association for Digital Humanities

1. 略歴

- 1993年4月 東京大学教養学部文科三類入学
- 1995年4月 東京大学文学部思想文化学科インド哲学仏教学専修課程進学
- 1997年3月 同 卒業
- 1997年4月 東京大学大学院人文社会系研究科アジア文化研究専攻インド文学・インド哲学・仏教学専門分野
修士課程入学
- 2000年3月 同 修士課程修了
- 2000年4月 東京大学大学院人文社会系研究科アジア文化研究専攻インド文学・インド哲学・仏教学専門分野
博士課程進学
- 2003年11月 プネー大学（インド）サンスクリット高等研究科研究生
（平成15年度文部科学省アジア諸国等派遣留学生、～2005年9月）
- 2006年9月 東京大学大学院人文社会系研究科アジア文化研究専攻インド文学・インド哲学・仏教学専門分野
博士課程単位取得退学
- 2006年10月 マルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルク（ドイツ） インド学科博士候補
- 2006年10月 マルティン・ルター大学インド学研究所助手（～2007年8月）
- 2007年9月 （財）恵光日本文化センター客員研究員（～2008年8月）
- 2008年9月 ドイツ学術振興会（DFG）常勤研究員（マルティン・ルター大学、～2011年8月）
- 2011年6月 博士号最終試験合格（Dr. Phil, magna cum laude, マルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルク）
- 2011年9月 マルティン・ルター大学日本学科 講師（～2012年3月）
- 2012年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 助教（～2016年3月）
- 2016年4月 中部大学人文学部 准教授（～2018年3月）
- 2018年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

六派哲学を中心としたインド哲学、サンスクリット文献学、写本学

b 研究課題

主たる研究領域はヴェーダーンタ派の思想で、同派において聖典とされるウパニシャッド文献、『ブラフマ・スートラ』、『バガヴァッド・ギーター』に対する註釈文献などの分析を通じて、現代にまで脈々と受け継がれるヴェーダーンタ思想の展開について研究を進めている。

近年は、古文学書的に文献を扱うというスタンスで、写本の収集、テキスト校訂、訳註研究という基礎的な研究を続けている。現在取り組んでいるプロジェクト「バースカラ」はヴェーダーンタ派の聖典『ブラフマ・スートラ』、『バガヴァッド・ギーター』に対するバースカラ註の校訂テキストを作成し、それにもとづいて訳註研究を行うというものである。

以上のような写本研究や校訂訳註研究など基礎的な研究を地道に続けながら、同時に、社会の動向に注意し、現実の様々な問題解決に向けてインド哲学からどのような貢献ができるのかを常に意識した思想研究を目指している。

c 概要と自己評価

引き続き、中心課題である「バースカラ」研究に従事している。『ブラフマ・スートラ註解』については、すでに公開済みの第1章と第2章に加え、後半部分の第3章・第4章についてもほぼ完成しており、新たに発見された写本の異読情報をアップデートし、近年中の刊行を目指している。『バガヴァッド・ギーター註解』のテキスト作成についても少しずつ進めており、写本との照合が終わり次第順次公開をしていきたい。

科研プロジェクトでは、「井筒俊彦の思想形成期における東洋思想とその学問的視座」、「インド哲学における無の思想」に分担研究者として参加し、思想研究に積極的に取り組んだ。

また、研究代表者を務める科研プロジェクト「デーヴァナーガリー文字 OCR の開発とサンスクリット文献データベースの構築」では、多くのインド諸語表記に用いられる文字であるデーヴァナーガリー文字を読み取るための光学文字認識（OCR）ソフトウェアを開発するために、くずし字 AI-OCR 開発などを手がける凸版印刷株式会社との間で共同研究を行った。

今後も文献学を研究の基本としながら、現代における様々な課題にも積極的に取り組んでいきたい。

d 主要業績

(1) 監修

斎藤明／丸井浩／下田正弘／蓑輪頭量／梶原三恵子／高橋晃一／加藤隆宏、『仏典解題辞典』、春秋社、2020.12

(2) 論文

Takahiro Kato, 「The Concept of Responsibility in Indian Tradition.」、『Journal of International Philosophy』、10、37-44 頁、2021.3
[共] 加藤隆宏・友成有紀・谷口力光・大澤留次郎・藤巻聡・岡田崇・橋本江美、「デーヴァナーガリー文字 OCR の開発」、『研究報告人文科学とコンピュータ』127/1、1-4 頁、2021

加藤隆宏、「井筒俊彦とウパニシャッド」、『理想』、706 号、17-30 頁、2021.9

(3) 学会発表

国内、加藤隆宏、「因果応報と業・輪廻説」、第 10 回 RSIS 研究会「人と機械の協働を考える」、オンライン会議、2020.8.2

国内、加藤隆宏、「井筒俊彦とウパニシャッド」、「井筒俊彦の思想形成期における東洋思想とその学問的視座」研究会、オンライン会議、2021.7.3

国内、加藤隆宏、「デーヴァナーガリー文字 OCR の開発」、第 127 回人文科学とコンピュータ研究会発表会、オンライン会議、2021.8.28

国際、Takahiro Kato, 「Again on anvayavyatireka in Early Advaita Vedānta」、Philosophy and the Method: Phenomenology and Indian Philosophy、Online Conference hosted by Assam University (India)、2021.12.7

国内、加藤隆宏「ヴェーダーンタ派の「無」をめぐる諸議論」、「無の探求」科研 2021 年度第 3 回全体研究会、ハイブリッド会議（松江）、2022.3.11

(4) 会議主催（チェア他）

国内、「インド思想研究の最前線」、チェア、オンライン開催（早稲田大学高等研究所）、2020.9.12

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、学習院大学、「思想史講義—インド思想史」「思想史演習—サンスクリット語入門」

短期講座、東京大学仏教青年会「仏典とインドの古典を読む会『アートマボーダ』」、2020.8～2020.9、「仏典とインドの古典を読む会『ヴァーキヤ・ヴリッティ』」、2020.11～2021.3

(2) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

東京大学仏教青年会、理事、2020.5～

16 イスラム学

教授 柳橋 博之 YANAGIHASHI, Hiroyuki

1. 略歴

1980年3月 東京大学文学部東洋史学専修課程卒業
1983年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（東洋史学）
1988年9月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得満期退学（東洋史学）
1988年10月 茨城大学教養学部専任講師
1989年4月 同 助教授
1993年4月 東北大学大学院国際文化研究科助教授
1997年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（1997年度は東北大学大学院と併任）
2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2010年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

イスラーム法、法学ハディース

b 研究課題

法学に関わるハディース（預言者ムハンマドの言行の記録）の形成過程を研究している。

c 概要と自己評価

最近の5年間は、法学的な内容を含むハディース（預言者伝承）を研究しており、その成果として、2019年に英文による単著を公刊した。その後は、ハディースの計量分析に研究の重点を移し、英文による単行本を刊行する予定である。一区切りをつけようかというところである。

d 主要業績

(1) 論文

Hiroyuki Yanagihashi, 「A Note on the Quantitative Analysis of Hadith」、『Journal of Islamic Law』、2:1、250-257 頁、2021
柳橋博之、「ムフリムの婚姻と終身贈与をめぐる学説とハディースの間の対応関係について」、『イスラム世界』、96、1-33 頁、2022.1

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、一般社団法人日本イスラム協会、代表理事、2021.4～2022.4

1. 略歴

- 1992年3月 東京大学文学部イスラム学専修課程卒業
- 1992年4月 東京大学大学院人文科学研究科イスラム学修士課程入学
- 1994年3月 同修了
- 1994年4月 東京大学大学院人文科学研究科イスラム学博士課程進学
- 1998年3月 博士（文学）の学位取得
- 1998年4月 東京大学東洋文化研究所研究機関研究員（～2000年3月）
- 2000年4月 日本学術振興会特別研究員（PD）（～2003年3月）
- 2004年4月 神田外語大学外国語学部専任講師
- 2008年4月 神田外語大学外国語学部准教授
- 2013年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

シーア派思想史

b 研究課題

9世紀以降のシーア派思想史における「極端派」思想と十二イマーム派、イスマール派の形成過程との関係について研究している。

c 概要と自己評価

主流シーア派の自己形成、およびそれに呼応する形で成立したアラウィー派、ドゥルーズ派の初期思想について研究し、その成果を単著一冊、共著一冊、学会発表（2回）で公開することができた。研究はおおむね順調に進んでいる。

d 主要業績

(1) 著書

共著、鈴木董（編）、『侠の歴史 西洋編+中東編』、清水書院、2020.7

単著、菊地達也、『ドゥルーズ派の誕生』、刀水書房、2021.7

共著、Yohei KONDO (ed.)、『Survival Strategies of Minorities in the Middle East: Studies on Religious and Politico-Social Minority Groups in Middle Eastern Societies』、Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies、2021.12

(2) 書評

『大学生・社会人のためのイスラーム講座』、小杉泰・黒田賢治・二ツ山達郎（編）、ナカニシヤ出版、『イスラーム世界研究』、13、248-252頁、2020.3

(3) 解説

八尾師誠・菊地達也・吉田京子、「J. L. エスポジト編『オックスフォード イスラームの辞典』（朝倉書店）に寄せて」、『図書新聞』、3444、1頁、2020.4

(4) 学会発表

国内、菊地達也、「イスラーム思想の中のギリシア哲学」、連続シンポジウム「世界哲学・世界哲学史を再考する」、第3回「哲学の領域横断的対話を求めて」（東京大学東アジア藝文書院主催）、オンライン、2021.4.30

国内、菊地達也、「イスラーム教分派学と異端／異教」、シンポジウム「異端の眼、異端を見る眼」（コーディネーター：草生久嗣・有田豊）西洋中世学会第13回大会、オンライン、2021.6.19

国内、菊地達也、「イスラーム思想における極端派的伝統：ヌサイル派（アラウィー派）の源流思想に関する研究序説」、東洋哲学研究所イスラーム・レクチャー、オンライン、2021.12.14

(5) 翻訳

共訳、John L. Esposito (ed.)、八尾師誠（監訳）、菊地達也・吉田京子（訳）、『オックスフォード イスラームの辞典』、朝倉書店、2020.6

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本オリエント学会、理事、2020.6～2022.3

国内、日本イスラム協会、理事、2020.4～2022.3

国内、日本中東学会、理事、2020.4～2022.3

17 西洋古典学

教授 葛西 康德 KASAI, Yasunori

1. 略歴

- 1978年3月 東京大学法学部第一類（私法コース）卒業
- 1986年8月 連合王国ブリストル大学古典学・考古学科留学（～1988年7月）
- 1992年2月 Ph.D.学位取得（連合王国ブリストル大学）
- 1978年4月 東京大学法学部助手
- 1982年4月 新潟大学教養部講師
- 1986年4月 新潟大学法学部助教授
- 1992年4月 新潟大学法学部教授
- 1993年11月 オクスフォード大学クライスト・チャーチ客員研究員（～1995年1月）
- 1995年4月 新潟大学大学院現代社会文化研究科担当（「古典社会文化論」担当）
- 1999年9月 オクスフォード大学ベイリオル・コレッジ客員フェロー（～2000年9月）
- 2002年4月 新潟大学法学部法政コミュニケーション学科長（～2003（平成15）年3月）
- 2004年4月 新潟大学大学院実務法学研究科教授
- 2006年4月 大妻女子大学文学部コミュニケーション文化学科教授
- 2011年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授
- 2021年3月 定年退職

2. 主な研究活動

a 専門分野

西洋古典学 ギリシア・ローマ法

b 研究課題

- 1 古代ギリシア人の「対立状況における行動様式」の特徴を、compliance と defiance という概念枠組を用いて、経済、法、宗教、哲学等の諸側面から総合的に考察する。そして、それらを、The Greeks on Compromise というタイトルで一冊にまとめたと考えている。
- 2 古代ギリシア法をローマ法およびそのほかの西洋法の中に、総合的に位置づける。具体的には、古代ギリシア法入門のような形でまとめたと思っている。
- 3 西洋学問の近世・近代の日本への移入を「文化転移」として、「普及」と「翻訳」という視点から総体的に把握する。

c 概要と自己評価

上記の研究課題に関して今期は以下のような具体的な研究作業を実施した。

- 1 課題1に関して、特に宗教と法の側面から、全般的な話を公開講演で行うとともに、学会で研究発表を行った。
- 2 課題2に関しては、デモステネスの私訴弁論の翻訳解説（36-38）を継続して行い、2019年5月に『デモステネス弁論集5』として出版した。また、科研費研究として「法学提要」の歴史的・総合的研究を開始し、その中にギリシア法を位置付ける可能性を探っている。ギリシア法・ローマ法に関する研究発表を行い、論文を公刊した。
- 3 課題3に関して、2014年度から続いている大学院演習「他分野交流演習」を2018年度で終了し、その成果を報告集として公刊した。

d 主要業績

(1) 著書

- 編著、葛西康德、『藤花のたわむれ—久保正彰先生の卒寿を祝して』全2巻、2020.10
- 編著、葛西康德・ヴァネッサ・カッツァート、『古典の挑戦』、2021.3
- 編著、葛西康德、『新版 文化転移—混合・普及・界面』、2022.3
- 共著、葛西康德・松本英実共訳、フランソワ・アルトーグ著、『新版オデュッセウスの記憶—古代ギリシアの境界をめぐる物語—』、2021.3

(2) 論文

Yasunori Kasai, 「Bogisic and ‘Ancient Law’」, 『Montenegrin Academy of Sciences and Arts』、2020.6

(3) 翻訳

個人訳、ゲーアハルト・チュール「デモステネスは弁護士か?」、葛西康徳、『デモステネス弁論集6』月報146、2020.9

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、青山学院大学法学部、「基礎特法論」、2018.4～

非常勤講師、青山学院大学法学部、「法と社会」、2018.9～

(2) 学会

「日本西洋古典学会（委員）」「日本法制史学会」「日本宗教学会」「19世紀学会」

「法とコンピュータ学会（理事）」

The Hellenic Society, The Selden Society, World Society of Mixed Jurisdiction Jurists

International Academy of Comparative Law (Associate member)

(3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

日本学術会議連携会員

新潟大学超域学術院運営委員会委員

教授 **日向 太郎** HYUGA, Taro

1. 略歴

1985年4月 東京大学教養学部文科三類入学

1987年4月 東京大学文学部西洋古典学専修課程進学

1989年3月 同専修課程卒業

1989年4月 東京大学大学院人文科学研究科西洋古典学専攻修士課程入学

1992年3月 同修士課程修了, 修士（文学）取得

1992年4月 同博士課程進学

1994年10月 イタリア, フィレンツェ大学文学哲学部留学（～1996年9月. なお1994～1995年はイタリア政府奨学金給費留学生）

1999年3月 東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻博士課程（専門分野：西洋古典学）単位取得満期退学

1999年9月 博士（文学）取得

2009年10月 東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻准教授

2019年4月 同教授

2020年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

西洋古典学

b 研究課題

1. ラテン詩文研究

2. ギリシア・ローマ文化におけるオーラリティとリテラシー、とりわけホメロス叙事詩の伝承について関心がある。

3. ヨーロッパ文化における西洋古典の受容

c 概要と自己評価

上記bの1については、下記のd(1)の3点が該当する。「ラテン詩文研究」とはいつても、相変わらず論ずる作家が、アウグストゥス時代の詩人に限定されているので、研究範囲を少しずつ拡張したい。2については、(3)②が当てはまるだろうか。『オデュッセイア』第19巻のエクフラシスの演劇的機能、さらにこれにかかわりがあると思しきエウリピデスの『イオン』と『タウリケのイピゲネイア』におけるエクフラシスについて論じた。3については、ささやかな成果であるが、(2)と(3)①が相当する。

d 主要業績

(1) 著書

共著、日向太郎、「波打ち際の語りーオウィディウス『恋愛術』第2巻123-144行」、葛西康徳編著『藤花のたわむれー久保正彰先生の卒寿を祝して』第1巻、159-176、2020.10

共著、日向太郎、「プロペルティウスのアポロロ詣ープロペルティウス第2巻第31歌」、浜本裕美・河島思朗編著『西洋古典学アプローチー大芝芳弘先生退職記念論集』、晃洋書房、121-139、2021.1

共著、日向太郎、「アウグストゥスと詩人たち」、葛西康徳／ヴァネッサ・カツァート編『古典の挑戦ー古代ギリシア・ローマ研究ナビ』知泉書館、159-192、2021.3

(2) 翻訳

個人訳、日向太郎、フランチェスコ・パトリーツィ Francesco Patrizi 著「ルドヴィーコ・アリオスト擁護 *Parere in difesa di Ludovico Ariosto*」、池上俊一監修『原典ルネサンス・イタリア芸術論』(下)名古屋大学出版会、895-916、2021.6

(3) 論文

①日向太郎、「ボッカッチョの古典研究」、『文化交流研究』34(2021)49-56、2021.3

②日向太郎、「オデュッセウスのブローチー『オデュッセイア』第19巻225-235行一」、『慶應義塾大学言語文化研究所』53(2022)297-310、2022.3

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、実践女子大学文学部、「西洋古典a」および「西洋古典b」、2021.4～

非常勤講師、九州大学大学院人文科学府・文学部、「西洋古典学講義II」／「西洋古典文学特論III」、2022.3

(2) 学会

日本西洋古典学会(委員)、地中海学会、イタリア学会(幹事)、「古典文献学研究会 Philologica」

18 フランス語フランス文学

教授 塚本 昌則 TSUKAMOTO, Masanori

1. 略歴

- 1982年3月 東京大学文学部第三類フランス語フランス文学専修課程卒業
- 1984年4月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程入学（仏語仏文学）
- 1987年4月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程進学
- 1988年10月 パリ第12大学博士課程（～1991年9月）（フランス文学、フランス政府給費留学生）
- 1992年3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程退学
- 1992年4月 東京大学文学部助手
- 1994年4月 白百合女子大学文学部専任講師（フランス文学）
- 1997年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（フランス語フランス文学）
- 2010年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（フランス語フランス文学）

2. 主な研究活動

a 専門分野

フランス近代文学。

b 研究課題

- (1) ポール・ヴァレリー研究。「夢」というトポス、断章という形式からの検討。
- (2) クレオール文学研究。エキゾティシズムとは無縁の、活力にあふれたその作品美学の研究を、セゼール、グリッサン、シャモワゾー、コンフィアンなどの作品読解を通して進めている。
- (3) 20世紀フランス文学における散文の研究。小説全盛の19世紀とは異なり、20世紀には、詩的強度を備えたさまざまな散文作品が書かれるようになった。とりわけ、時間意識、夢と覚醒というテーマ、イメージの活用法、さらに人文科学との接点という視点から、その特質の一端を捉えようと試みている。

c 概要と自己評価

(1)については、長年の課題として研究を続けている。昨年、ヴァレリー後期の代表作『ドガ ダンス デッサン』の翻訳を出版、またヴァレリーとメルロ＝ポンティの比較研究を二本発表した。メルロ＝ポンティが1953年コレージュ・ド・フランスで行ったヴァレリーに関する講義（『言語の文学的使用法の研究』）には、なお多様な読解の可能性が秘められている。この講義録の読解を通して、詩人と哲学者への理解を深めていきたいと考えている。

(2)については、グリッサンの小説『マホガニー』の翻訳を出版した。また、項目執筆等を通して、クレオール文学の意義を俯瞰的な立場から考えた。

(3)については、20世紀文学と人文科学の境界を探る一連の研究会（人文知研究会）を終え、共催者である早稲田大学・鈴木雅雄教授とともに、現在書籍版の準備を進めている。これ以外に、文学作品に写真を取りこんだ〈写真小説〉に関する研究を行っている。この分野に関する全体的な考察、また谷崎潤一郎『吉野葛』に関する個別研究を発表した。

d 主要業績

(1) 論文

Masanori Tsukamoto, 「Le support de la lumière : une théorie virtuelle du cinéma chez Valéry」、『仏語仏文学研究 (Revue de Langue et Littérature françaises)』、54、p.11-21、2020

Masanori Tsukamoto, 「Qu'est-ce que «l'usage littéraire du langage»? La parole à l'état naissant chez Valéry et chez Merleau-Ponty」、『仏語仏文学研究 (Revue de Langue et Littérature françaises)』、54、225-242、2020

塚本昌則、「クレオール文学を翻訳する」、『クレオールの想像力——ネグリチュードから群島の思考へ』（立花英裕編）、p.171-188、2020.4

Masanori Tsukamoto, 「Breton au Japon, une passivité créatrice」、『La pensée-Breton. Art, magie, écriture chez André Breton, L'Œil d'Or』、p.313-328、2021.5

塚本昌則、「メランコリーの織物——〈写真小説〉論にむけて——」、『思想』、n° 1165、p.24-48、2021.5

Masanori Tsukamoto, 「L'usage de la photographie documentaire - Autour de Yoshino kuzu de Jun'ichirô Tanizaki et d'« Ambros Adelwarth » de Sebald」、『Revue internationale de la photolittérature』、n° 4, 2022

http://phlit.org/press/?post_type=articlerevue&p=3408

Masanori Tsukamoto, 「Mishima et la poésie de l'inhumain」、『Revue des Sciences Humaines』、N° 345, Janvier-mars 2022, p.31-41

Masanori Tsukamoto, 「Poétique de l'inhumain : De « La Désumanisation de l'art » d'Ortega y Gasset à « L'Institution » de Merleau-Ponty」、『Zinbun, Annals of the Institute for Research in the Humanities, Kyoto University』、n. 52、p.44-52、2022.3

(2) 書評

2021年回顧・外国文学（フランス）、『2021年回顧・外国文学（フランス）』、『週刊読書人』、2021.12.17

恒川邦夫、『サン＝ジョン・ペルスと中国——〈アジアからの手紙〉と『遠征』』、法政大学出版局、『ヴァレリー研究』、n° 10、p.62-69、2022.3

(3) 解説

塚本昌則、「ポール・ヴァレリー「テスト氏との一夜」／「エメ・セゼール『帰郷ノート』」／「旧植民地のフランス語圏文学」、『フランス文学の楽しみ方——ウエルギリウスからル・クレジオまで』（永井敦子・畠山達・黒岩卓編）、p.82-83; p.106-107; p.160-163、2021.4

塚本昌則、「「失われた時」とは何か」、『図書』、p.30-34、2022.3

(4) 予稿・会議録

国内会議、塚本昌則、「非人間の詩学——オルテガ・イ・ガセット「芸術の非人間化」からメルロ＝ポンティ「制度化」まで」、「〈ポスト＝ヒューマン〉の人文学」、京都大学人文科学研究所／アンスティチュ・フランセ関西＝京都、オンライン開催、2020.11.14

(5) 翻訳

個人訳、Édouard Glissant, "Mahagony"、塚本昌則、『マホガニー——私の最期の時』、水声社、2021.6

個人訳、Paul Valéry, "Degas Danse Dessin"、塚本昌則、『ドガ ダンス デッサン』、岩波書店、2021.11

3. 主な社会活動

(1) 学会

日本フランス語フランス文学会会員

(2) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

日仏会館フランス語コンクール審査員

教授 塩塚 秀一郎 SHIOTSUKA, Shuichiro

1. 略歴

1989年4月	東京大学教養学部理科一類入学
1993年3月	東京大学教養学部教養学科第二（フランスの文化と社会）卒業
1993年4月	東京大学大学院人文科学研究科修士課程（仏語仏文学専攻）入学
1995年3月	同 修了
1995年4月	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程（欧米系文化研究専攻）進学
1995年10月	パリ第三大学博士課程入学（フランス文学・文化）
2000年7月	同 博士学位（文学）取得
2001年3月	東京大学大学院博士課程単位取得退学
2001年4月	北海道大学大学院文学研究科 助教授
2005年4月	早稲田大学理工学術院理工学部 助教授
2007年4月	早稲田大学理工学術院創造理工学部 准教授
2010年4月	早稲田大学理工学術院創造理工学部 教授
2012年4月	京都大学大学院地球環境学堂 准教授

2015年4月	京都大学大学院人間・環境学研究科 准教授
2016年4月	京都大学大学院人間・環境学研究科 教授
2018年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授
2021年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

フランス近現代文学

b 研究課題

- (1) ジョルジュ・ペレック研究。制約下の創作や日常の探求という観点から検討している。
- (2) レーモン・クノー研究。特異な〈知〉の概念の検討。
- (3) 都市や集合住宅をめぐるドキュメンタリー文学の研究。

c 概要と自己評価

(1) ペレックの文字落とし小説『煙滅』において、ピオイ＝カサーレスの小説『モレルの発明』が構造的な発想源として機能していることを示した仏語論文を発表した。また、経路があらかじめ定められた移動の表象について考察し、仏語論文として刊行した。

(2) クノーとペレックがフロベールによる百科全書的小説をいかに受容し自らの創作に取り入れたかを考察する学会発表を行い、論文として刊行した。

(3) ジュリアン・グラックの都市論『ひとつの町のかたち』について、そこに認められる変化を肯定する価値観について論文を発表した。また、集合住宅を主題とするドキュメンタリー文学を〈調査〉の潮流の中に位置づける発表を行った。

d 主要業績

(1) 著書

共著、松澤和宏・小倉孝誠編、『フローベール 文学と〈現代性〉の行方』、水声社、2021.10

(2) 論文

塩塚秀一郎、「ジュリアン・グラック『ひとつの町のかたち』における変化の肯定—モノメントと空き地をめぐる」、『文学と環境』、no. 24、p.30-38、2021.6

Shuichiro SHIOTSUKA、「Bioy Casares, source de l'imaginaire lipogrammatique」、『Cahiers Georges Perec』、no. 14、p.313-322、2021.10

Shuichiro SHIOTSUKA、「La potentialité des voyages contraints : Bon, Gracq, Butor」、『Contemporary French and Francophone Studies』、vol.25, no.5、p.648-656、2021.12

(3) 書評

フィリップ・フォレスト『洪水』書評、『図書新聞』、2021.2.13

(4) 学会発表

国内、塩塚秀一郎、「物語の彼方と手前：クノーとペレックにおけるフロベールの遺産」、日本フランス語フランス文学会 2021 年度春季大会ワークショップ「生誕 200 年 フロベールを読み直す」、上智大学（オンライン開催）、2021.5.23

国内、塩塚秀一郎、「調査の文学と集合住宅という装置：現代文学の結節点をめぐって」、「文学としての人文知」第8回「文学を問う知／知を問う文学」、早稲田大学（オンライン開催）、2021.12.18

3. 主な社会活動

(1) 学会

日本フランス語フランス文学会幹事長、2021.6～2022.6

文学・環境学会評議員、2019.4～現在

(2) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

小西国際交流財団日仏翻訳文学賞選考委員、2019.4～現在

1. 略歴

1988年4月	東京大学教養学部文科3類入学
1992年3月	東京大学文学部第3類（語学文学）仏語仏文学専修課程卒業
1992年4月	東京大学大学院人文科学研究科修士課程（仏語仏文学専攻）入学
1993年10月	ストラスブール第2大学修士課程（近代文学）入学
1994年10月	パリ第7大学高等研究課程入学（～1995年9月 修了）
1996年3月	東京大学大学院人文社会系研究科修士課程（欧米系文化研究専攻）修了
1996年4月	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程（欧米系文化研究専攻）進学
1996年10月	パリ第7大学博士課程（テキストと資料の科学）入学（～2004年12月）
1996年10月	高等師範学校外国人聴講生（～1997年7月）
1997年4月	日本学術振興会特別研究員（DC2）（～1999年3月）
2000年3月	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程単位取得退学
2000年4月	日本学術振興会特別研究員（PD）（～2003年3月）
2005年1月	京都大学人文科学研究所 助教授
2007年4月	京都大学人文科学研究所 准教授
2008年8月	ライデン大学図書館スカリゲル・フェロー
2009年10月	パリ第1大学（哲学科）外国人研究員（～2010年9月）
2012年7月	パリ西大学博士号（仏語仏文学）取得
2019年9月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

フランス近現代思想

b 研究課題

- (1) フランスを中心とする18世紀西洋思想——フランス啓蒙期の歴史叙述・政治思想・経済思想の交錯に焦点を当てる。
- (2) フランス20世紀思想——1960年代以降の構造主義・ポスト構造主義の諸潮流と、西欧近世思想史ならびに同時代の左翼政治との関係に焦点を当てる。
- (3) 日本の近現代思想・批評——とくに西洋の同時代の思想との関連に焦点を当てる。

c 概要と自己評価

- (1) 『両インド史』批評校訂版共同ディレクターとして、この批評校訂版第四巻（近刊予定）のうち、アメリカ合衆国独立に捧げられた第18篇の批評校訂及びプレゼンテーションの執筆を行なった。他に、啓蒙期の政治思想史についての概観的叙述やモンテスキュー『ペルシャ人の手紙』論にも取り組んだ。
- (2) ミシェル・フーコーの初期作品から『狂気の歴史』と『カント『人間学』への序文』までのフーコーの人間主義批判を検討する論文を執筆した。またウェーバー没後100周年に際して、ウェーバーの新カント主義との関係について論文を執筆した。
- (3) （68年）前後の精神医学批判以後、近年までの精神医学・精神医療体制の変遷について書かれた石原孝二『精神障害を哲学する』（2018）と小泉義之『あたらしい狂気の歴史』（2018）を素材として、現在の哲学と狂気をめぐる議論に対して批判的な議論を展開した。

d 主要業績

(1) 著編著

共編著、伊藤邦武・山内志朗・中島隆博・納富信留編、『世界哲学史 6—近代I 啓蒙と人間感情論』、ちくま書房新書、2020.6

共著、小泉義之・立木康介編、『フーコー研究』岩波書店、2021.3

共著、相澤伸依・市田良彦他30名、『狂い咲く、フーコー 京都大学人文科学研究所 人文研アカデミー『フーコー研究』出版記念シンポジウム全記録+（プラス）』、週刊読書人、2021.8

(2) 主要論文

王寺賢太、「啓蒙から革命へ」、伊藤邦武・山内志朗・中島隆博・納富信留編『世界哲学史 6』ちくま書房新書、99-119 頁、2020.6

王寺賢太、「〈ポスト 68 年〉の狂気と哲学」、哲学会編『哲学雑誌』第 134 巻第 807 号、33-47 頁、2020.10

王寺賢太、「批判と啓蒙—ウェーバーとフーコーにおける学問・政治・主体」、『現代思想』第 48 巻 17 号、133-143 頁、2020.12

王寺賢太、「二重化するフーコー —1961 年の人間学批判とヘーゲル・ハイデガー・カント」、小泉義之・立木康介編『フーコー研究』京都大学人文科学研究所共同研究成果報告書、岩波書店、286-335 頁、2021.3

王寺賢太、「18 世紀フランス政治思想史をどう読むか—政治的自律の諸相」、『文化交流研究』第 34 号、65-77 頁、2021.3

(3) 学会発表など

国内、王寺賢太、「18 世紀政治思想史をどう読むか」、東京大学文学部文学部茶話会、2020.11.5

国内、王寺賢太（ディスカッサント）、「狂い咲く、フーコー 小泉義之・立木康介共編『フーコー研究』出版記念シンポジウム」、コメンテーター：重田園江・森元庸介、京都大学人文科学研究所主催（オンライン開催）、2021.3.27

国内、王寺賢太、「フランス啓蒙から見た世界・〈われわれ〉・歴史」、連続シンポジウム「世界哲学・世界哲学史を再考する」第三回、東京大学東アジア藝文書院（オンライン開催）、2021.4.30

国内、王寺賢太（コメンテーター）、村山祐紀「機械・調和・瞬間—17 世紀後半から 18 世紀フランスにおける絵画言説史—」へのコメント、日本フランス語フランス文学会ビデオセッション、上智大学主催（オンライン開催）、2021.5.23

国内、王寺賢太、「歴史とユートピア 『両インド史』のパラグアイ布教区叙述をめぐって」、塚本昌則・鈴木雅雄主催「文学としての人文知」科学研究会第 6 回（オンライン開催）、2021.7.20

国内、王寺賢太（ディスカッサント）、齋藤晃編『宣教と適応』合評会、コメンテーター：横山和加子・吉田一彦・小俣ラポー日登美・安平弦司、国立民族学博物館主催（オンライン開催）、2022.3.20

3. 主な社会活動

(1) 学会

日本 18 世紀学会幹事、2007 年～現在

日本フランス語フランス文学会常任幹事、2020 年～2021 年、同編集担当幹事、2021 年～現在

(2) 学術委員

Diderot Studies (Université Laval, Canada) 日本通信員、2007 年～現在

Guillaume-Thomas Raynal, *Histoire philosophique et politique des établissements et du commerce des Européens dans les deux Indes* 批評校訂版 (Fernay-Voltaire, Suisse, Centre international d'étude du 18e siècle) 編集委員、2013 年～現在、共同ディレクター、2016 年～現在

Cromohs (*Cyber Review of Modern Historiography*, Firenze University Press) Editorial Board メンバー、2014 年～現在

ENCCRE (Édition Numérique Collaborative et CRitique de l'Encyclopédie de Diderot), Académie des Sciences (France) 編集チームメンバー、2016 年～現在

19 南欧語南欧文学

教授 浦 一章 URA, Kazuaki

1. 略歴

1982年3月	東京大学教養学部教養学科イギリス科卒業
1984年3月	同 文学部イタリア語イタリア文学専修課程卒業
1987年3月	東京大学大学院人文科学研究科フランス語フランス文学専門課程(イタリア語イタリア文学専攻)修士課程修了
1987年4月	東京大学大学院人文科学研究科フランス語フランス文学専門課程(イタリア語イタリア文学専攻)博士課程進学
1988年3月	東京大学大学院人文科学研究科フランス語フランス文学専門課程(イタリア語イタリア文学専攻)博士課程中途退学
1988年4月	東京芸術大学音楽学部一般学科専任講師
1990年4月	同 助教授
1994年4月	東京大学文学部南欧語南欧文学科助教授
1995年4月	同 大学院人文社会系研究科助教授
2010年4月	同 教授、現在に至る。

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題

(ダンテを中心とした) イタリア文学、中世オック語文学

c 概要と自己評価

概要

『ダンテ研究 I』(東京、東信堂、1994年)以降も、『神曲』以前のダンテ、恋愛詩人としてのダンテを研究の中心に据え、1230年頃からホーエンシュタウヘン家の宮廷で花開いたシチリア派の詩人たちや、それに続くシチリア・トスカーナ派の詩人たちについての知識を深め、さらには南仏トルバドールたちの詩に対する理解を深めること。ダンテは少なくとも8名のトルバドールに言及しており、そのうちアルナウト・ダニエルを「煉獄篇」第26歌に登場させるに際しては、わざわざオック語で語らせるという念の入りようである。そのため、ダンテとトルバドールとの関係に対する興味が現在では次第に大きくなりつつある。また、恋愛詩の伝統はペトラルカをへて、時と地域、個性の壁を超越した一種の文学的コイナーを形成してゆくため、ダンテ以降の恋愛詩をも視野に含めるよう努め、ダンテの受容史という観点から、その最初の崇拜者ともいべきボッカッチョおよび騎士道物語詩(とりわけタツソ)にも関心を寄せている。

自己評価

『神曲』とも対照させながら、『キタ・ノワ』に収録された韻文のスタイルの変化を跡づけることが現在の主要な課題であるが、文体を問題とする困難な研究は少しずつ前進を続けている。トスカーナ地方の文学(とりわけダンテ)がアペニン山脈以北の地方、たとえばボローニャを中心としたエミリア・ロマーニャ地方や、パドヴァ、ヴェネツィア、トレヴィーゾなどを含むヴェネト地方でどのように受容されたかについても知見を深めるべく努めている。教育面では、現在、効果的な文学史教育を模索中であるが、必要な講義資料の整備を進めつつ、19-20世紀の作家にも取り組むべく努力している。すでに中世オック語入門に関してはルーティーン化が完了したといってよい状況だが、入門を終えた後の教育体制の改善を検討している。また、イタリアの「詩的言語」の特徴を語学的な観点から体系的に教育すべく資料を整理しつつ、機会を見て講義で話している。また、研究面でも教育面でも、体制を整えるためにすべきことは多大にあるが、2018年2月14日21時半頃に交通事故に遭い、半年にわたる入院生活を余儀なくされ、前進が困難になりつつある。

d 主要業績

(1) 学会発表

国際、浦一章、「限界の彼方への旅」、『日本におけるダンテ700年』、イタリア文化会館(東京) アニェッリ・ホール、2021.6.23

国際、浦一章 (URA Kazuaki)、「Dante ed il Giappone」、Ricezione e conoscenza di Dante in Giappone、Chiostrò di San Matteo (Genova)、2021.8.12

国際、浦一章、「『テキスト』の記憶と『出来事』の記憶」、「国際ダンテ・シンポジウム—今、ダンテを問う—詩人没後 700 周年・学会創立 70 周年を記念して」、京都産業大学、2021.10.24

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

特別講演、集英社（および東京大学文学部）、「恋愛における最大の悲しみ——ダンテと宮廷風恋愛の伝統」、2014.12

特別講演、群馬県立土屋文明記念文学館、「『神曲』に描かれた中世イタリア——ダンテ生誕 750 周年に寄せて」、2015.12

20 英語英米文学

教授 後藤 和彦 GOTOU, Kazuhiko

1. 略歴

1979年4月	九州大学文学部 入学
1983年3月	同大学同学部英語学英米文学専門課程 卒業
1983年4月	東京大学大学院人文科学研究科英語英米文学専攻修士課程 入学
1986年3月	同大学院同研究科同専攻修士課程 修了
1986年4月	東京大学大学院人文科学研究科英語英米文学専攻博士課程 入学
1988年3月	同大学院同研究科同専攻博士課程 中退
1988年4月	東京女子大学文理学部英米文学科 専任講師
1992年4月	同大学同学部同学科 助教授
1993年9月	ノースカロライナ大学チャペルヒル校 フルブライト交換研究員（～1994年9月）
1997年4月	立教大学文学部英米文学科 助教授
1999年4月	同大学同学部同学科 教授
2003年9月	ノースカロライナ大学チャペルヒル校 交換研究員（～2004年9月）
2007年4月	立教大学文学部文学科英米文学専修 教授
2017年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

アメリカ文学、特にアメリカ南部文学

b 研究課題

アメリカ南部文学の総体的特徴のひとつとして「戦後性」に着目し、ドイツの文化史家ウォルフガング・シヴェルプッシュが2002年に唱えた「敗北の文化」の概念を枠組みとして、日本の近代文学、あるいは所謂「戦後文学」との相対的比較を行う。

c 概要と自己評価

2005年に出版した著書『敗北と文学——アメリカ南部文学と日本近代文学』においてその概要を提示した、19世紀中葉の南北戦争以降の「敗北の文学」としてのアメリカ南部文学と、所謂「戦後文学」を含む日本近代文学の比較検討に関するおおまかな定式ないし視座にしたがって、対象となる両文学それぞれのより細かい時代区分における比較検証を継続的に行っている。

2020年度は科研基盤研究C「戦後的思考」の文学的ディレンマについて——アメリカ南部文学と日本近代文学の相違」を取得、その初年度にあっており、南部文学における開花期（20世紀第1四半世紀から第2四半世紀までと目される）前後に活躍した作家たちのうち、特に女性作家、たとえばKate Chopin、Ellen Glasgow、Eudora Welty、Zora Neale Hurston、Lee SmithさらにBobbie Ann Masonらの作物を集中的に取り上げ、南部という「敗北の文化」圏にすぎた女性作家が多く輩出した歴史的・文化的背景について検討した。

2021年度も上記研究計画にのっとり、19世紀後半、Mark Twain（もともと初期の本格的南部作家）と同時代に活躍し、Twainに比して研究対象として昨今、必ずしも情熱的な対象とは目されなくなったGeorge Washington Cable、Twainとは対象的にきわめて南北戦争従軍後、政治姿勢を明確に「反南部」へと転向させた作家の作品のうち、その戦後的思考の文学化として特に注目すべきJohn March, Southernerを取り上げ詳細に吟味するとともに、一転、南部文学21世紀の作物のうち注目すべきものを複数（Jesmyn Ward、Ron Rash、Kevin Wilsonなど）取り上げてその最新動向を検討した。

20年度、21年度ともに日本文学については島崎藤村をはじめとする近代文学草創期の作家に加え、小島信夫、三島由紀夫、大江健三郎、村上春樹などのいわゆる「戦後文学」に関してさらに知見を深めるよう意を用いた。また21年度後半からは、先の「無条件降伏」により「大日本帝国」の瓦解によって消滅し、以降、日本の戦後史において閑却される傾向のあった旧帝国領地（満洲あるいは朝鮮半島など）の文学状況を朴裕河ならびに加藤聖文の先行研究に依拠しつつ着目することにより、より重層的な戦後文化の様相を検討する可能性について追究することが、戦後日本に

関して注目すべき発言を行ってきた思想家（たとえば橋川文三、竹内好、吉本隆明、柄谷行人など）を再評価する契機を提供しうるか、考量継続中である。

以上の研究成果は以下に記したような論文・学会発表等に反映されている。

d 主要業績

(1) 著書

共著、竹内理矢・山本洋平編、後藤和彦ほか 58 名、『深まりゆくアメリカ文学——源流と展開』、ミネルヴァ書房、2021.4

共編著、巽孝之監修、下河辺美知子・越智博美・後藤和彦・原田範行編、『脱領域・脱構築・脱半球——二一世紀人文学のために』、小鳥遊書房、2021.10

(2) 論文

後藤和彦、「女・性と歴史—『響きと怒り』と『或る女』より」、巽孝之監修、下河辺美知子・越智博美・後藤和彦・原田範行編『脱領域・脱構築・脱半球——二一世紀人文学のために』（小鳥遊書房）所収、374-91 頁、2021.10

後藤和彦、「サムとリヴィ、マーク・トウェイン」とエルマイラ、『フォークナー』、第 24 号、29-41 頁、2022.4

(3) 書評

Benjamin Griffin, ed., 『Mark Twain's Civil War: The Private History of a Campaign That Failed』、U of California P, 『マーク・トウェイン——研究と批評』、第 20 号、51-55 頁、2021.6

(4) 学会発表

国内、後藤和彦（司会・講師）、佐々木徹・佐藤泉・藤井光、「小説家と歴史——認識と方法、解釈と欲望」、日本英文学会、オンライン、2021.5.23

国内、後藤和彦・相田洋明（司会）・城戸光世・梶原照子、「作家とその妻／夫」、日本ウィリアム・フォークナー協会、オンライン、2021.9.11

(5) 啓蒙

後藤和彦、『ハックルベリー・フィンの冒険』とふたつの自由、『図書館教育ニュース』第 1528 号付録、p.1、2020.4

(6) 監修

後藤和彦、『はるかな川に自由を求めて』、少年写真新聞『図書館教育ニュース』第 1528 号、2020.4

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

立教大学大学院文学研究科、「米文学特殊研究」、2017.4～現在

東北学院大学大学院文学研究科、「現代英米文学演習」、2020.8、2021.8

(2) 学会

国内、日本英文学会評議員、2017.4～2021.3

国内、日本アメリカ文学学会副会長、2018.4～2022.3

国内、日本アメリカ文学学会会長、2022.4～現在

(3) 学外組織

国内、日米教育交流振興財団（フルブライト記念財団）、審査委員長、2020.9～現在

1. 略歴

1979年 9月	国際基督教大学 教養学部 人文科学科 入学
1984年 3月	国際基督教大学 教養学部 人文科学科 卒業
1984年 4月	東京大学大学院 総合文化研究科 比較文学比較文化専攻 修士課程入学
1987年 3月	東京大学大学院 総合文化研究科 比較文学比較文化専攻 修士課程修了
1987年 4月	東京大学大学院 総合文化研究科 比較文学比較文化専攻 博士課程入学
1990年 3月	東京大学大学院 総合文化研究科 比較文学比較文化専攻 博士課程単位 取得満期退学
1990年 4月	東邦大学薬学部 専任講師
1992年 4月	中央大学法学部 専任講師
1993年 4月	中央大学法学部 助教授
1998年 4月	中央大学法学部 教授
2014年 4月	上智大学文学部英文学科 教授
2016年 3月	東京大学大学院 総合文化研究科 比較文学比較文化専攻博士号（学術）取得
2017年 4月	日本学術振興会学術システム研究センター専門研究員（～現在）
2019年 4月	東京大学大学院人文社会系研究科 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

イギリス文学、比較文学

b 研究課題

イギリス文学、文化における「階級」の表象が研究の中心である。小説や演劇、詩、そして音楽や視覚芸術、映像作品、そしてアダプテーションも含む幅広いテキストにおける「階級」の概念とイメージ、ステレオタイプの考察と分析を行っている。

c 概要と自己評価

2020年度から2021年度にかけては英国における「アッパー・クラス」の表象を、主に18世紀から21世紀までの文学テキスト、そして映画、ドラマといったポピュラーカルチャーの媒体をとりあげ、分析を行なった。さらに、英国における「階級」の概念の研究においてきわめて重要な「言葉」と「階級意識」をとりあげ、小説、演劇、映画等のテキストの考察をとおして、それらのテキストに書かれている「言葉」がいかにつねに「階級」を意識したものであるかを考察した。2021年度にはさらに、イギリス文学、文化における「ミドル・クラス」の表象を、「郊外」、そして「観光」をキーワードとして進めていった。

d 主要業績

(1) 著書

共著、『文学とアダプテーションII——ヨーロッパの古典を読む』、小川公代、吉村和明、新井潤美ほか、春風社、2021.11
単著、新井潤美、『ノブレス・オブリージュ イギリスの上流階級』、白水社、2021.12

(2) 論文

坂下史、新井潤美、顚原澄子、「大石和欣著『家のイングランド——変貌する社会と建築物の詩学——』をめぐって」、
『都市史研究』、8、107-08頁、2021.11

(3) 書評

Haru Takiuchi、*British Working-Class Writing for Children: Scholarship Boys in the Mid-Twentieth Century*、Palgrave、『英文學研究』、Vol. XCVII、24-30頁、2020.12

(4) 解説

新井潤美、チャールズ・ディケンズ（原作）、アーマンド・イアヌッチ（監督）、映画『どん底作家の人生に幸あれ！』、
『ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報』、第44号、3-7頁、2022.1

(5) 学会発表

国内、新井潤美、「‘The Young Gentleman’ —チャールズ・ディケンズと「階級」」、19世紀イギリス文学合同研究会準備大会シンポジウム「現代を生きる19世紀イギリスの作家たち」、19世紀イギリス文学合同研究会準備大会、オンライン、2021.9.18

(6) マスコミ

「メイドの謎を解明せよ!」、『超人女子戦士ガリベンガーV』、テレビ朝日、2021.1.7

(7) 翻訳

共訳、Jane Austen、*Mansfield Park*、新井潤美・宮丸裕二、『マンスフィールド・パーク（上）』、岩波書店、2021.11

共訳、Jane Austen、*Mansfield Park*、新井潤美・宮丸裕二、『マンスフィールド・パーク（下）』、岩波書店、2021.12

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

セミナー、「イギリス文化に親しむ会 イザベラ・バードの見た「日本」——ヴィクトリア朝の牧師の娘の一人旅」、2022.3
朝日カルチャーセンター、2020.11～

(2) 学会

国内、日本比較文学会、理事、2018.6～2020.6

国内、日本英文学会関東支部、理事、2019.4～

国内、日本比較文学会東京支部、幹事、2019.6～

(3) 行政

法務省、考査委員、2018.10～2021.10

(4) 学外組織

日本学術振興会学術システム研究センター専門研究員、2017.4～2021.3

教授 渡邊 明 WATANABE, Akira

1. 略歴

1987年3月 東京大学文学部英語英米文学専修課程卒業
1989年3月 東京大学大学院人文科学研究科英語英米文学専攻修士課程修了
1993年9月 マサチューセッツ工科大学大学院言語・哲学博士課程修了
博士号 (Ph.D. in Linguistics) 取得
博士論文 AGR-Based Case Theory and Its Interaction with the A-bar System
1994年4月 神田外語大学外国語学部英米語学科専任講師
1997年4月 同 大学院言語科学研究科助教授
1998年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2016年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

英語学／理論言語学

b 研究課題

程度表現の構造と意味

c 概要と自己評価

2020年度は科研費基盤 (C) の課題「日英語の程度表現の微細構造および不定語のシステムとの関係」の初年度にあたる。前年度で終了した課題の最終段階で手をつけた程度変項の全称量化と関連して、最小量表現と結びつく際の極性効果について検討した論文の草稿執筆に着手し、2021年度末までに一応の草稿をまとめた。現在、出版に向けての最終調整を行なっているところである。英語に見られる特殊な最上級の形で最小量表現が否定文に用いられるときに、主部名詞が指し示す個体が存在しないというニュアンスが生じるという Fauconnier (1975) の古典的研究で観察された現象自体は、肝心の特殊な最上級が日本語に存在しないために、日英比較ができないのだが、Fauconnier が取り上げている最上級の極性現象と類似のことが不定語による程度修飾で見られるので、日本語特有のこの表現パターンと英語に見られる特殊な最上級での比較を行った。英語の場合と異なり、不定語による程度修飾で不在のニュアンスが生じないとい

うのが得られた結果で、その原因として、不定語による程度修飾が一定以上の程度に限定されて程度についての全称量化を行うことがあげられる、という仮説を提出した。全称量化に課せられている限定が、具体的にどの程度をもって最小量とみなすか、という基準をもとにし、この基準自体が最小量表現を伴う名詞が意味する個体の存在を前提としている、というのがカギとなる論理構造である。

また、2021年度は、数詞関係も取り上げ、日本語の数詞自体の形態に関しては、分散形態論の枠組みによる分析が和漢の形態の使い分けを極めて効果的に説明できることを論証した。論文草稿をまとめるところまで進んでいる。学会発表は日本語の複合数詞について、英語と比較しながら新たな分野を開拓した。なお、論文集所収の形で刊行された論文は2019年度に完成させたものである。

上記のほか、生成文法関連の重要論文の翻訳の監修に時間を取られた。そのイントロダクションでは、フンボルトの時代から現在までを概観し、言語の多様性についての関心が生物の多様性の認識と並行して流れていると論じた。

d 主要業績

(1) 監修

渡辺明・福井直樹、『言語 フンボルト／チョムスキー／レネバーク』、岩波書店、2020.10

(2) 論文

渡辺明、「イントロダクション」、『言語 フンボルト／チョムスキー／レネバーク』、岩波書店、13-42頁、2020.10

渡辺明、「サイズ修飾の形態特性」、『レキシコン研究の現代的課題』岸本秀樹 [編]、くろしお出版、107-133頁、2021.4

(3) 学会発表

国内、渡辺明、「Indeterminate Complex Numerals,」シンポジウム「不定語研究の展開と展望」、日本英文学会北海道支部第66回大会、オンライン、2021.11.7

3. 主な社会活動

(1) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

Linguistic Inquiry（出版元 MIT Press）、editorial board member、2020.4～2022.3

Journal of East Asian Linguistics（出版元 Springer）、editorial board member、2020.4～2022.3

Acta Linguistica Academica、editorial board member、2020.4～2022.3

the Language Faculty and Beyond (John Benjamins)、advisory board member、2020.4～2022.3

(2) 学会

日本英語学会理事、2020.4～2022.3

教授 **阿部 公彦** ABE, Masahiko

1. 略歴

1985年3月 静岡県静岡聖光学院高等学校卒業
1985年4月 東京大学教養学部文科三類入学
1989年3月 同 文学部英語英米文学科専修課程卒業
1989年4月 東京大学大学院人文科学研究科（英語英米文学専攻）入学
1992年3月 同 修士課程修了・修士（文学）
1993年10月 連合王国ケンブリッジ大学大学院博士課程入学（英米文学専攻）
1997年5月 同博士課程修了 博士号取得（文学）
タイトル：‘Wallace Stevens and the Aesthetic of Boredom’
1992年4月 東京大学文学部英語英米文学科助手
1993年4月 帝京大学文学部助手
1997年4月 帝京大学文学部専任講師
2001年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2018年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

英米文学

b 研究課題

英語圏の詩や小説の研究を中心とする。個々の作品の緻密な解釈と、作品を作品たらしめる力学の解明に向けた努力を研究の中心としつつ、同時に、「なぜ詩でなければならないか?」「なぜ小説なのか?」という素朴な疑問との取り組みをも課題とする。詩や小説を自足的なジャンルとみなすのではなく、「問答形式」「ポライトネス」「言語運用能力」「事務能力」「胃弱」といった周辺テーマとからめた研究を行う。

c 概要と自己評価

概要

2020年度から2021年度にかけては、言語運用能力が文学作品のキャラクター造型や語りのスタンスの設定にどのような役割を果たしているかを研究しつつ、「胃弱」「事務能力」といった要因にも注目した。

自己評価

19年までの活動で中心的な位置をしめていたポライトネス研究は、まだ一般的にも広がりを見せているとは言えないので、今後も協同研究のような形でネットワークを広げ、より広範にわかる対象をとりあげながら理論の洗練をめざしたい。言語運用能力がどのように表彰されてきたかといった視点を立てた研究ははかかなり具体的な成果を生み出している。

d 主要業績

(1) 著書

共著、阿部公彦、沼野充義、納富信留、大西克也、安藤宏、『ことばの危機 大学入試改革・教育政策を問う』、集英社 240pp、2020.6

単著、阿部公彦、『理想のリスニング —「人間的モヤモヤ」を聞きとる英語の世界』、東京大学出版会、2020.10

共著、平野啓一郎、阿部公彦、ロバート キャンベル、鴻巣友季子、田中慎弥、中島京子、飯田橋文学会、『名場面で味わう日本文学60選』、徳間書店、2021.3

辞書・辞典・事典、竹内理矢・山本洋平編著、『深まりゆくアメリカ文学 源流と展開』、ミネルヴァ書房、2021.4

共著、読売新聞文化部「本よみうり堂」編、『キリンが小説を読んだら サバンナからはじめる現代文学60』、書肆 侃侃房、2021.4

単著、阿部公彦、『英文学教授が教えたがる名作の英語』、文藝春秋、2021.4

石井千湖、『名著のツボ』、文藝春秋、2021.8

共著、松岡亮二(編)、『教育論の新常識』、中公新書ラクレ、2021.9

共著、都甲幸治(編)、『ノーベル文学賞のすべて』、立東舎、2021.9

共著、巽孝之監修、下河辺美知子・越智博美・後藤和彦・原田範行編集、『脱領域・脱構築・脱半球——二一世紀人文学のために』、小島遊書房、2021.10

単著、阿部公彦、『病んだ言葉 癒やす言葉 生きる言葉』、青土社、2021.11

編著、野崎歓・阿部公彦編著、『新訂 世界文学への招待』、放送大学教育振興会、2022.3

(2) 論文

阿部公彦、「森鷗外と事務能力 —『洪江抽斎』の言葉と物」、『すばる』、2020年4月号、pp.140-150、2020.3

阿部公彦、「日本語「深」読みのススメ——学習指導要領の「形」を考える」、『kotoba』(集英社)、2021年春号、pp.140-147、2021.3

阿部公彦、「日本語「深」読みのススメ——告げ口、引用、注釈」、『kotoba』(集英社)、2022年春号、pp.182-189、2021.3

阿部公彦、「日本語「深」読みのススメ——料理本と善意」、『kotoba』(集英社)、2022年夏号、pp.162-169、2021.6

阿部公彦、「叫びとしての言語」、『Media, English and Communication -- A Journal of the Japan Association for Media English Studies』、No11(通巻第60号)、pp.1-6、2021.8

阿部公彦、「日本語「深」読みのススメ——料理本と善意」、『kotoba』(集英社)、2022年秋号、pp.164-171、2021.9

阿部公彦、「日本語「深」読みのススメ——断片とその先の世界」、『kotoba』(集英社)、2022年冬号、pp.166-173、2021.12

阿部公彦、「リベラルアーツと語学教育と自由間接話法」、石井洋二郎編『リベラルアーツと外国語』(水声社)、pp.283、pp.111-123、2022.2

(3) 書評

東山彰良他、『「猿を焼く」他』、『群像』、『文學界』、『新潮』、『群像』、2020年2月号、561-576頁、2020.1

西村賢太、『瓦礫の死角』、講談社、『群像』、2020年2月号、548-549頁、2020.1

大江健三郎、『懐かしい年への手紙』、講談社、『読売新聞』、2020年1月19日朝刊、2020.1

村上龍他、『MISSING 失われているもの』他』、『新潮』、『文學界』、白水社、『共同通信』（各地方紙）、2020.1
 紅野謙介、『国語教育 混迷する改革』、ちくま新書、『ちくま』、2020年2月号、6-7頁、2020.2
 岡本学他、『「アウア・エイジ」他』、『群像』、『文藝』、『新潮』、『群像』、2020年3月号、496-511頁、2020.2
 崔実（チェシル）他、『Pray human』、『群像』、『新潮』、『新潮』、『すばる』、『共同通信』（各地方紙）、2020.2
 辻原登、『「社どもえ」』、中央公論新社、『文学界』、2020年4月号、322-323頁、2020.3
 崔実（チェシル）他、『「Pray Human」他』、『群像』、『新潮』、『群像』、2020年4月号、544-560頁、2020.3
 辻原登、『冬の旅』、集英社文庫、『読売新聞』、2020年3月15日朝刊、9頁、2020.3
 吉田修一、『怒り』、新潮文庫、『読売新聞』、2020年3月29日朝刊、2020.3
 江田孝臣、『エミリー・ディキンソンを理詰めで読む——新たな詩人像をもとめて』、春風社、『アメリカ文学研究』、第56号（2019）、76-81頁、2020.3
 原成吉、『アメリカ現代詩入門——エズラ・パウンドからボブ・ディランまで』、勉誠出版、『現代詩手帖』、2020年5月号、166-167頁、2020.4
 エリック・マコーマック、柴田元幸訳、『雲』、東京創元社、『群像』、2020年6月号、88頁、2020.5
 J.M.クツェー、『恥辱』、早川書房、『春風新聞』、2020年春夏号、8頁、2020.5
 佐伯一麦、『空にみずうみ』、中央公論新社、『読売新聞』、2020年5月31日朝刊、2020.5
 浅田次郎、『終わらざる夏』（上・中・下）、集英社文庫、『読売新聞』、2020年7月26日朝刊、11頁、2020.6
 岡本学、『アウア・エイジ(Our Age)』、講談社、『文学界』、2020年9月号、330-331頁、2020.8
 吉本ばなな、『どんぐり姉妹』、新潮文庫、『読売新聞』、2020年9月27日朝刊、11頁、2020.9
 J・M・クツェー／鴻巣友季子訳、『恥辱』、早川epi文庫、『読売新聞』、2020年10月25日朝刊、11頁、2020.10
 都甲幸治、『引き裂かれた世界の文学案内 境界から響く声たち』、大修館書店、『図書新聞』、2020年11月7日号、4頁、2020.11
 金原ひとみ、『fishy』、朝日新聞出版、『新潮』、2020年12月号、318-319頁、2020.11
 伊藤亜紗、『手の倫理』、講談社、『クロワッサン』、2021年1月10日号、111頁、2020.12
 戌井昭人、『さのよいよい』、新潮社、『すばる』、2021年3月号、306-307頁、2021.2
 イーヴリン・ウォー、小野寺健訳、『回想のブライズヘッド』、岩波文庫、『読売新聞』、2021年2月14日朝刊、11頁、2021.2
 アンナ・バーンズ、榎木玲子訳、『ミルクマン』、河出書房新社、『日本経済新聞』、2021年2月20日朝刊、28頁、2021.2
 鴻巣友季子、『翻訳教室 はじめの一步』、ちくま文庫、『群像』、5月号、596-597頁、2021.4
 カズオ・イシグロ、土屋政雄訳、『クララとお日さま』、早川書房、『東京新聞』、2021年4月17日朝刊、11頁、2021.4
 レイモンド・カーヴァー、『大聖堂』、中央公論新社、『読売新聞』、2021年6月6日、11頁、2021.6
 内田樹、『街場の芸術論』、青幻社、『週刊読書人』、2021年8月27日号、6頁、2021.8
 颯木あやこ、『名づけ得ぬ馬』、思潮社、『現代詩手帖』、9月号、71頁、2021.9
 佐久間文子、『ツボちゃんの話——夫・坪内祐三』、新潮社、『中央公論』、2021年11月号、240-241頁、2021.10
 三浦雅士、『スタジオジブリの想像力 地平線とは何か』、講談社、『群像』、2021年12月号、604-605頁、2021.11
 刀祢館正明、『英語が出来ません』、KADOKAWA、『カドブン（ウェブマガジン）』、2022年1月31日、2022.1
 佐伯一麦、『アスベストス』、文藝春秋、『文学界』、2022年3月号、304-305頁、2022.2
 シェイマス・ヒーニー、『全詩集』、国文社、『読売新聞』、2022年3月13日朝刊、2022.3

(4) 解説

阿部公彦、『疾走する、にぎやかなヴィクトリア朝』、映画『どん底作家の人生に幸あれ！』パンフレット、15-16頁、2021.1
 阿部公彦、『解説』、鳥飼玖美子『通訳者たちの見た戦後史 月面着陸から大学入試まで』、389-398頁、2021.6
 阿部公彦、『解説』、竹内康浩『謎ときサリンジャー 「自殺」したのは誰なのか』、259-269頁、2021.8
 阿部公彦、『解説』、志賀直哉『日曜日・蜻蛉 生きものと子どもの小品集』、236-243頁、2021.12

(5) 学会発表

国内、阿部公彦、『ポスト「4技能」時代の英語：〈お悩み解決型〉学習に必要な力を身につけよう』、フェリス女学院大学・英語英米文学科・学生会フェリス女学院大学（緑園都市キャンパス）、2020.1.10
 国内、阿部公彦、『ディケンズと事務能力』（シンポジウム「今に生きるディケンズ」）、ディケンズ・フェロウシップ日本支部 2020年度秋季総会—ディケンズ没後150年記念大会、オンライン、2020.10.3
 国内、阿部公彦、『「叫び」としての言語』、日本メディア英語学会第10回年次大会、オンライン、2020.10.25

国内、阿部公彦、「大津起夫先生、渡部良典先生のご発表をうけて」、日本テスト学会第19回大会・公開シンポジウム
「大学入試の「英語」はどこに向かうのか」、2021.9.25
国内、阿部公彦、『4技能均等』の限界とその先」、第39回日本英語学会大会・特別公開シンポジウム（日本英文学
会との共催）「今、英語教育を考える—英語にかかわる研究の視点から」、オンライン、2021.11.13

(6) マスコミ

「識者に聞く：大学入試の英語民間試験導入は「延期」ではなく中止を」、『ニッポンドットコム』、2020.1.28
「4技能「均等育成」は幻想」、『中日新聞』、2020.1.31
「名著のツボ：ディケンズ『大いなる遺産』」、『週刊文春』、2020.2.19
「英検面接問題 持ち出す」、『読売新聞 大阪版朝刊』、2020.2.21
「共通テスト作問委員の関与が疑われる例題集 「実用的な文章」に言及」、『アエラ』、2020.2.22
「名著のツボ：ディケンズ『荒涼館』」、『週刊文春』、2020.2.26
「大学英語入試、センター試験廃止の弊害は明白 新共通テストの奇妙さを考える【上】」「英語入試「4技能」に惑
わされず、力をつける道は 新共通テストの奇妙な出題方針を考える【下】」、『ウェブ論座』、2020.3.14
「都が2018年に江東区に開設「英語村」 評判上々も利用少なく」、『東京新聞朝刊』、2020.3.21
「すばらしい英語学習」の落とし穴 —大学入試混乱と「4技能の迷走」が教えてくれること」、『現代思想』2020年
4月号、2020.3.27
「大学入試・英語民間試験大混乱 —その三つの要因」、『全国学者・研究者後援会ニュース』、2020.3.28
「沼野さんとへその話」、『れにくさ』、2020.3.28
「入試政策と「言葉の貧しさ」」、『科学』2020年4月号、2020.3.28
「日本人はなぜ長い間、英語を話せないのか」、『朝日新聞 EduA』、2020.5.6
「オンライン授業について」、『朝日新聞 EduA vol.26』、2020.5.24
「英文学にデコピン12 「J.M.クツュー『恥辱』の回復」」、『春風新聞』、2020.5.29
「英語と大学入試の問題点」、『朝日新聞 EduA vol.28』、2020.6.28
「書物悠遊 読書とからだ」、『究（ミネルヴァ通信）』、2020.8.1
「詩が聞こえてくるとのこと」、『延河』（中国語）2020年9月号、2020.9
「アエラ」、2020.9.25
「NHK」、2020.10.5
「毎日新聞」、夕刊 p.2、2020.11.10
「週刊文春」、2020.12.10
「日本経済新聞」、2020.12.12
「週刊文春」、2020.12.17
「アエラ」、2021.1.4
「言葉は技能なのか ～『嘘の効用』から考える」、東京大学文学部 HP「学問と社会の現在とこれからを考える」Vol.4、
2021.1.11
「国策は学問を育てられるのか——「親子関係」の行き着くところ」（「自由」の危機 第2回）、『集英社新書プラス』、
2021.2.1
「朝日新聞デジタル」、2021.2.3
「読売新聞」、2021.2.3
「毎日新聞」、2021.2.12
「春風新聞」、2021年春夏号 vol.27、2021.4.2
「本の話（文藝春秋ウェブサイト）」、2021.5.12
「本の話（文藝春秋ウェブサイト）」、2021.5.13
「読売新聞」、2021.5.30
「朝日新聞 EduA」、2021.6.7
「しんぶん赤旗」、2021.6.12
「ポストセブン」、2021.6.13
「読売新聞」、2021.6.15
「Times Higher Education」、2021.7.9
「Asahi Weekly」、2021.7.11
「週刊読書人」、2021.9.3

「New York Times」、2021.9.29
「週刊新潮」、2021.9.30
「読売新聞」、朝刊、2021.10.10
「東大新聞オンライン」、2021.11.23
「読売新聞」、夕刊、2022.2.12
「群像」、2022年4月号、2022.3.7
「文藝春秋」、2022年4月号、2022.3.10

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

国内、阿部公彦、『ことばの危機』刊行記念、「本の場所」企画、「本の場所」（無料オンライン配信あり）、2020.9.5
国内、阿部公彦、「英語ができるとはどういうことか?」、東京理科大学・教養教育センター主催セミナー、東京理科大学（Zoom オンライン）、2020.9.12
国内、阿部公彦、「報告」、緊急トーク企画「大学はどこへ向かうのか」、オンライン、2020.10.18
国内、阿部公彦、「報告」、「大学はどこへ向かうのかII」、オンライン、2021.1.10
国内、阿部公彦、「これからの言語教育 ―混乱をへてあらためて考えたいこと」、春季ゼミナール、市ヶ谷グラウンド ヒル 翡翠の間（ハイブリッド）、2021.3.16
国内、阿部公彦、日本文藝家協会企画「言葉を知る。言葉を学ぶ。言葉を教える 鼎談・第1回大学入学共通テストを振り返る」、日本文藝家協会事務局、2021.3.30
国内、阿部公彦、オンライン読書イベント「現代VS文芸」、オンライン、2021.5.20 国内、阿部公彦、「日本語話者の英語と日本語 これからの言語教育」、日本学術会議 言語・文学委員会 文化の邂逅と言語分科会、オンライン、2021.7.11
国内、阿部公彦、「「耳」からはじめる英語の体幹トレーニング」、2021 河合塾文化講演シリーズ、河合塾大阪校、2021.8.22
国内、阿部公彦、「(理想のリスニング) とこれからの英語教育」、Festina Lente 講演会、オンライン、2021.9.5
国内、阿部公彦、『『英語的身体』の鍛え方』、五月祭 公開講座、オンライン、2021.9.19
国内、阿部公彦、日本文藝家協会企画「言葉を知る。言葉を学ぶ。言葉を教える 鼎談・第2回大学入学共通テストを振り返る」、日本文藝家協会事務局、2022.3.30

(2) 学会

国内、一般財団法人日本英文学会、理事、副会長、2021.5～
国内、一般財団法人日本英文学会関東支部、理事、2021.5～
国内、日本アメリカ学会、編集委員（英文号）、～2022.3
国内、日本T.S.エリオット協会、委員、2021.4～2023.3
国内、ポエティカ、編集委員、2020.4～2021.3

1. 略歴

- 1994年3月 上智大学文学部英文学科卒業
1997年3月 東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻修士課程修了
2002年3月 東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻博士課程単位取得退学
2004年4月 東京学芸大学教育学部講師
2004年6月 ニューヨーク州立大学バッファロー校大学院英文科博士課程修了
2006年4月 東京学芸大学教育学部助教授
2007年4月 東京学芸大学教育学部准教授
2007年10月 東京大学大学院総合文化研究科准教授
2010年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

アメリカ文学

b 研究課題

モダニズム文学を中心とするアメリカ小説研究

c 概要と自己評価

主たる研究対象は、ウィリアム・フォークナーを中心としたアメリカにおけるモダニズム期の小説である。個々の作品を、大戦間という時代的文脈と小説の発展という美学的問題とあわせて、包括的に考察し、理解することを目標としている。そうした目的のために、近年においては「純文学」だけではなく、「大衆文学」と見なされている作品をも研究対象としてきた。2020～21年度は、フォークナーへの関心を発展させる一方、第2次世界大戦以降の現代小説を広く視野に取めた研究を継続的にこなした。

d 主要業績

(1) 著書

共著、巽孝之監修、下河辺美知子他編、『脱領域・脱構築・脱半球——二一世紀人文学のために』、小鳥遊書房、2021.10

(2) 論文

諏訪部浩一、「F・スコット・フィッツジェラルドと南部——距離の詩学」、『フォークナー』、第22号、89-110頁、2020.7

諏訪部浩一、「Thank You for Your Service——アメリカ戦争小説の系譜」、『群像』、第76巻第9号、197-208頁、2021.9

(3) 書評

岡本正明、『アルタモント、天使の詩——トマス・ウルフを知るための10章』、『アメリカ文学研究』、第57号、117-18頁、2021.3

(4) 学会発表

国内、諏訪部浩一、「ナサニエル・ホーソーンの二つの時間」、科学研究費・基盤研究(B)(メイフラワー・コンパクトにおける排除/包括の理論と環大西洋文化の再定位)研究会、Zoom、2021.7.31

(5) 啓蒙

諏訪部浩一、「薄れゆく境界線——現代アメリカ小説探訪 ①風俗小説」、『群像』、第75巻第6号、169-72頁、2020.6

諏訪部浩一、「薄れゆく境界線——現代アメリカ小説探訪 ②リージョナリズム/南部小説」、『群像』、第75巻第7号、516-19頁、2020.7

諏訪部浩一、「アメリカ文学」、『文藝年鑑2020』、68-70頁、2020.7

諏訪部浩一、「薄れゆく境界線——現代アメリカ小説探訪 ③「ラフ・サウス」の文学」、『群像』、第75巻第8号、395-98頁、2020.8

諏訪部浩一、「薄れゆく境界線——現代アメリカ小説探訪 ④郊外小説」、『群像』、第75巻第9号、464-67頁、2020.9

諏訪部浩一、「「普通」ではない「普通小説」」ジム・トンプソン、真崎義博訳『雷鳴に気をつけろ』、文遊社、395-403頁、2020.9

諏訪部浩一、「薄れゆく境界線——現代アメリカ小説探訪 ⑤ノワール小説」、『群像』、第75巻第10号、399-402頁、2020.10

- 諏訪部浩一、「薄れゆく境界線——現代アメリカ小説探訪 ⑥ゴシック小説」、『群像』、第75巻第11号、444-47頁、2020.11
- 諏訪部浩一、「薄れゆく境界線——現代アメリカ小説探訪 ⑦ロード・ノヴェル」、『群像』、第75巻第12号、509-12頁、2020.12
- 諏訪部浩一、「薄れゆく境界線——現代アメリカ小説探訪 ⑧ドロップアウト小説」、『群像』、第76巻第1号、451-54頁、2021.1
- 諏訪部浩一、「薄れゆく境界線——現代アメリカ小説探訪 ⑨戦争小説」、『群像』、第76巻第2号、426-29頁、2021.2
- 諏訪部浩一、「薄れゆく境界線——現代アメリカ小説探訪 ⑩メタフィクション」、『群像』、第76巻第3号、517-20頁、2021.3
- 諏訪部浩一、「薄れゆく境界線——現代アメリカ小説探訪 ⑪歴史小説(1)」、『群像』、第76巻第4号、575-78頁、2021.4
- 諏訪部浩一、「薄れゆく境界線——現代アメリカ小説探訪 ⑫歴史小説(2)」、『群像』、第76巻第5号、523-26頁、2021.5
- 諏訪部浩一、「薄れゆく境界線——現代アメリカ小説探訪 ⑬女性文学」、『群像』、第76巻第6号、572-75頁、2021.6
- 諏訪部浩一、「アメリカ文学」、『文藝年鑑2021』、68-70頁、2021.6
- 諏訪部浩一、「薄れゆく境界線——現代アメリカ小説探訪 ⑭ゲイ/レズビアン小説」、『群像』、第76巻第7号、517-20頁、2021.7
- 諏訪部浩一、「薄れゆく境界線——現代アメリカ小説探訪 ⑮ユダヤ系文学」、『群像』、第76巻第8号、497-500頁、2021.8
- 諏訪部浩一、桐山大介、「若きフォークナーの豊かさと面白さ」、『週刊読書人』、2021年9月10日号、第1-2面、2021.9
- 諏訪部浩一、「薄れゆく境界線——現代アメリカ小説探訪 ⑯黒人文学」、『群像』、第76巻第10号、487-90頁、2021.10
- 諏訪部浩一、「薄れゆく境界線——現代アメリカ小説探訪 ⑰先住民文学」、『群像』、第76巻第11号、450-53頁、2021.11
- 諏訪部浩一、「薄れゆく境界線——現代アメリカ小説探訪 ⑱アジア系文学(1)」、『群像』、第76巻第12号、556-59頁、2021.12
- 諏訪部浩一、「薄れゆく境界線——現代アメリカ小説探訪 ⑲アジア系文学(2)」、『群像』、第77巻第1号、464-67頁、2022.1
- 諏訪部浩一、「薄れゆく境界線——現代アメリカ小説探訪 ⑳アジア系文学(3)」、『群像』、第77巻第2号、484-87頁、2022.2
- 諏訪部浩一、「薄れゆく境界線——現代アメリカ小説探訪 ㉑アジア系文学(4)」、『群像』、第77巻第3号、516-19頁、2022.3
- (6) マスコミ
「リレーおひこおん ハードボイルド、将棋に通ず」、『朝日新聞』、2021年5月11日朝刊第15面
「名著60——『アブサロム、アブサロム!』」、『読売新聞』、2021年8月29日朝刊第9面
- (7) 翻訳
個人訳、William Faulkner、*Flags in the Dust*、諏訪部浩一、『土にまみれた旗』、河出書房新社、2021.6

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

- 非常勤講師、学習院大学、「英語文化コース演習D」、2020.4~2022.3
- 非常勤講師、早稲田大学、「英米文学特殊研究3」、2020.4~2020.9、2021.4~2021.9
- 非常勤講師、東北学院大学、「現代英米文学演習II」、2020.8~2020.8、2021.8~2021.9
- 非常勤講師、高知大学、「アメリカ文学論I」、2020.8~2020.9
- 非常勤講師、関西学院大学、「比較文学特殊講義1」、2021.8~2021.8

(2) 学会

- 国内、日本アメリカ文学学会、編集委員、2020.4~2022.3、代議員、2020.4~2022.3
- 国内、日本英文学会、編集委員、2020.4~2021.3
- 国内、日本英文学会関東支部、監事、2020.4~2022.3
- 国内、日本アメリカ文学学会東京支部、評議員、2020.4~2022.3、支部会報編集委員、2020.4~2022.3、副支部長、2020.4~2021.3、支部長、2021.4~現在
- 国内、日本ウィリアム・フォークナー協会、編集委員、2020.4~2022.3、評議員、2020.4~2022.3

1. 略歴

1997年4月	東京大学教養学部文科Ⅲ類入学
1999年4月	東京大学文学部言語文化学科英語英米文学専修課程進学
2001年3月	東京大学文学部言語文化学科英語英米文学専修課程卒業
2001年4月	東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻英語英米文学専門分野修士課程入学
2003年3月	東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻英語英米文学専門分野修士課程修了
2003年4月	東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻英語英米文学専門分野博士課程入学
2004年8月	米国メリーランド大学大学院言語学科博士課程入学
2004年10月	東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻英語英米文学専門分野博士課程休学
2007年9月	東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻英語英米文学専門分野博士課程退学
2009年8月	米国メリーランド大学大学院言語学科博士課程修了 博士号 (Ph. D. in Linguistics) 取得
2010年4月	大東文化大学外国語学部英語学科 専任講師
2018年4月	大東文化大学外国語学部英語学科 准教授
2020年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

英語学／理論言語学

b 研究課題

焦点移動が関わる諸構文を主とした比較統語論研究

c 概要と自己評価

2020～2021年度は、研究分担者となっている科研費基盤研究(C)の研究課題「機能範疇を伴う依存関係の包括的研究：『構造』『意味』『語用』の観点から」の初年度および二年目にあたる。

2020年度には、自身の日本語の語の移動と省略に関する二つの過去の研究を比較対照しながら、紀要の形にまとめて発表した。扱った構文の一つは「太郎は納豆を食べたが、私はなぜ納豆を(太郎が食べたの)か分からない」のような文において、下線部の「なぜ(why)＋構成素」が残り、()内が省略されるという「why剥ぎ取り構文」であり、「なぜ」と共に削除を免れる構成素(例：「納豆を」)は焦点移動をするという分析を提案した。この構文についての焦点移動の考察が、次年度に分裂文における焦点移動について考える契機ともなった。

2021年度には、「統語と意味のインターフェイス」のコラムで、英語の「剥ぎ取り構文」(“John ate an apple, but not an orange.”のbut以下の部分のような省略形)が焦点移動と削除からなるという分析、英文学会の発表においては、日本語の分裂文が焦点移動を含むという分析の妥当性とその帰結を論じた。科研の研究代表者小畑美貴氏との共同研究において、日本語分裂文における焦点の「主格制限」に注目し、ラベル付けアルゴリズム及び格付与のタイミングによって、なぜ日本語分裂文では主格制限が観察されるのか、また複数の要素が焦点移動される場合は主格制限が消失するののかの説明を行った。

2020～2021年度には招待講演、学会発表、論文出版などによる成果発表を複数行うことができた。研究代表者との共同研究も一定の成果をあげており、科研の研究課題のプロジェクト全体としても概ね順調に進行している。

d 主要業績

(1) 著書

共著、大津由紀雄・今西典子・池内正幸・水光正則(監修)、「言語研究の世界：生成文法からのアプローチ」、研究社(pp151-153、「コラム3：統語と意味のインターフェイス」を担当)、2022.3

(2) 論文

単著、中尾千鶴、「日本語における語の移動と省略」、『文化交流研究第34号』、東京大学文学部次世代人文学開発センター、pp57-64、2021.3

共著、中尾千鶴、小畑美貴、「日本語の分裂文における素性値のタイミングと焦点移動」、Proceedings of Sophia University Linguistic Society、上智大学言語学会、pp42-55、2022.1

(3) 学会発表

国内、中尾千鶴、「日本語における語の移動と省略」、東京大学次世代人文学開発センター・文化交流茶話会、オンライン、2020.10.22

国内、中尾千鶴、「Considering Saito (2017) Notes on the Locality of Anaphor Binding and A-Movement」、慶應言語学コロキウム、Zoom with a Minimalist View #1 第3回、オンライン、2020.11.14

海外、共同発表、Miki Obata and Chizuru Nakao, “The Nominative Constraint in Japanese Cleft Constructions: Agreement, Labeling and Timing of Feature-Valuation”, Move and Agree: Forum on the formal typology of A'-agreement, the University of British Columbia and McGill University、オンライン、2021.5.31

国内、共同発表、小畑美貴、中尾千鶴、「Timing of Feature Valuation and Focus Movement in the Japanese Cleft Construction」、上智言語学会第35回年次大会、オンライン、2021.7.17

国内、中尾千鶴、「日本語の削除構文と分裂文における焦点移動」、東京大学英文学会、オンライン、2022.3.19

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、大東文化大学、「ゼミナールⅡA・B」「リーディング1A・B」、2020.4～2021.3、「ライティング1A・B」、2020.4～2022.3

(2) 学会

日本英語学会、編集委員、2021.7～

2 1 ドイツ語ドイツ文学

教授 大宮 勸一郎 OHMIYA, Kanichiro

1. 略歴

- 1984年3月 東京大学教養学部教養学科第2・ドイツの文化と社会卒業
1986年3月 東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻修士課程修了
1986年 ローター財団奨学生としてドイツ連邦共和国ミュンヘン大学留学（～1988年）
1991年4月 共立女子大学国際文化学部専任講師
1992年 ドイツ学術交流会（DAAD）奨学金によりドイツ連邦共和国マンハイム大学留学（～1993年）
1996年4月 共立女子大学国際文化学部助教授
2001年 アレクサンダー・フォン・フンボルト財団研究奨学金によりドイツ連邦共和国ベルリン自由大学研究滞在（～2002年）
2002年4月 慶應義塾大学文学部助教授
2005年4月 慶應義塾大学文学部教授
2007年4月 慶應義塾大学大学院文学研究科委員兼任
2011年4月 東京大学文学部・大学院人文社会系研究科教授（現職）
2013年9月 文化技術研究・メディア哲学国際研究コレク（IKKM）上級フェローとしてドイツ連邦共和国ヴァイマル市研究滞在（～2014年3月）

2. 主な研究活動

a 専門分野

ドイツ近現代文学

b 研究課題

ヴァルター・ベンヤミン研究、ハインリッヒ・フォン・クライスト研究

c 概要と自己評価

ベンヤミン研究は、同時代の作家フーゴ・フォン・ホーフマンスタールやエルンスト・ユンガーらの、いわゆる保守革命運動との関係を考察する作業を進めている。科研費による研究プロジェクトに関しては、「情動と技術の人間学的考察」（2013～2015年度）、「抗争」言説の再検討（ドイツ文学の場合）（2016～18年度）に引き続き、「ドイツ文芸における「古典」概念の再検討」（2019年度～）を進め、内外の研究者との議論を行っており、「国語」の規範性とその解体に関する論文『「国語」形成の一断面』を共編著『ノモスとしての言語』に発表した。クライスト研究としては、編著『ハインリッヒ・フォン・クライスト―「政治的なるもの」をめぐる文学』（2020.3）を上梓し、導入、論文と重要論考の翻訳を掲載した。「双務的秩序」の喪失と回復の試みとしてドイツ文学を読み直す試みは継続中である。また、ドイツ・メディア論の重要著作であるフリードリヒ・キッラー『書き取りシステム 1800・1900』を翻訳し上梓した。さらに、近代文芸における「供犠」の変容をテーマとした国際学会（ハーゲン大学主催）に基調報告者として招待され、リモートにて発表を行なっている。

d 主要業績

(1) 著書

共編著『ハインリッヒ・フォン・クライスト ―「政治的なるもの」をめぐる文学』、インスクリプト、2020.3

共編著『ノモスとしての言語』、ひつじ書房、2022.5

(2) 論文

「『ペンテジレーア』―「政治的なるもの」と「愛」」、『ハインリッヒ・フォン・クライスト ―「政治的なるもの」をめぐる文学』、79-111 頁、インスクリプト、2020.3

"Von kokugaku zur Japanischen Romantik", Jahrbuch für Internationale Germanistik. JG LII/Heft 2, 185-210 頁、Bern (Peter Lang)、2020

「『国語』形成の一断面」、『ノモスとしての言語』、7-39 頁、ひつじ書房、2022.5

(3) 書評

磯崎康太郎、香田芳樹、『晩年のスタイル 老いを書く 老いて書く』、松籟社、『週間読書人』、2020.7.3

田中純、『デヴィッド・ボウイ 「無」を歌った男』、岩波書店、『週刊読書人』、2021.3.26

(4) 学会発表

国際、OMIYA, Kanichiro, "Hofmannsthals Opferdiskurs im Gespräch über Gedichte und in der Elektra", Opferdramaturgie nach dem bürgerlichen Trauerspiel. Zur Viktimologie der Geschlechter in Drama, Libretto und Prosa- 19. Jh. bis zur Gegenwart, Regionalzentrum Berlin der FernUniversität in Hagen, 2021.10.9

(5) 翻訳

個人訳、Gerhard Neumann, "Das Stocken der Sprache und das Straucheln des Körpers. Umriss von Kleists kultureller Anthropologie", 大宮勘一郎、「口ごもる言葉と躓く身体 クライストの文化的人間学概要」、『ハインリッヒ・フォン・クライスト — 「政治的なるもの」をめぐる文学』、191-218 頁、インスクリプト、2020.3

共訳、Werner Hamacher, "Das Beben der Darstellung. Kleists Erdbeben in Chili", 「描出の揺らぎ—クライストの『チリの地震』」、『ハインリッヒ・フォン・クライスト — 「政治的なるもの」をめぐる文学』、219-282 頁、インスクリプト、2020.3

共訳、Friedrich Kittler, "Aufschreibesysteme 1800・1900", 大宮勘一郎・石田雄一、『書き取りシステム 1800・1900』、インスクリプト、2021.5

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、慶應義塾大学、東京外国語大学

教授 宮田 眞治 MIYATA, Shinji

1. 略歴

1987年3月 京都大学文学部卒業（文学士）
1989年3月 京都大学大学院文学研究科修士課程（ドイツ語学・ドイツ文学専攻）修了（文学修士）
1990年3月 京都大学大学院文学研究科博士後期課程（ドイツ語学・ドイツ文学専攻）退学
1990年4月 神戸大学教養部助手
1991年10月 神戸大学教養部講師
1992年10月 神戸大学文学部講師
2000年10月 神戸大学文学部助教授
2000年4月 文部省在外研究員としてドイツベルリン自由大学に留学（2001年2月まで）
2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2018年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（現職）

2. 主な研究活動

a 専門分野

近代ドイツ語圏文学

b 研究課題

18世紀の文学と思想が研究の中心にある。もともと初期ロマン主義研究から出発し、ノヴァーリスを中心に仕事を進めてきた。とくに超越論哲学および自然科学との関係において初期ロマン主義が展開した独自の表現技法と、その背景にある言語観と芸術観が興味を中心にあった。また、その問題意識を継承する20世紀の文学者や思想家の系譜も研究の対象となった。現在は、啓蒙期の文学と思想を、ロマン主義の前史という観点に限定されることなく研究している。また、18世紀以後、ドイツ語圏にあって、自然科学者であり、あるいは自然科学研究から出発しつつ、文学者であった人々—ハーラー、リヒテンベルク、ノヴァーリス、アルニムから現代にいたるまで—の営みを〈実験者の文学〉という観

点から跡付ける作業を進めている。同時に18世紀から19世紀初頭における古典古代の受容にも関心があり、現在はヴィーラントを中心に検討している。

c 概要と自己評価

『リヒテンベルクの雑記帳』刊行後も継続中のG.Ch.リヒテンベルク(1742-1799)研究の成果の一端として、独文学会主催の文化ゼミナールで「リヒテンベルクにおける〈幻想的なもの〉」についての発表を行った。

ドイツロマン主義・啓蒙主義をさまざまなコンテキストにおいて検討するという年来の研究方針は継続中であり、今期は、ノヴァーリスの最初期の哲学ノートの抜粋を翻訳・解説し、Ch.M. ヴィーラント(1733-1813)についての研究発表を行った。また、このプロジェクトから派生した〈18世紀のドイツとイギリスの知的・文化的交流〉に関する研究プロジェクトは、ひとまずシェリング協会におけるシンポジウムの企画・司会・発表という形をとった。このプロジェクトは今後も継続していく予定である。また、新たなプロジェクトとして、18世紀ドイツにおけるAntike受容の再検討を進めているが、ヴィーラントについての発表はその成果でもある。

『文藝年鑑』においてドイツ語圏の現代文学概観を2年間担当したが、これはこれまでになかったタイプの仕事であった。

2019年6月より勤めていた日本独文学会の会長職は2021年6月で任期を終えた。コロナと重なり学会運営にも多くの困難があったが、理事の皆さんのご尽力によって何とか職務を全うすることができた。

d 主要業績

(1) 翻訳

個人訳『『フィヒテ研究』抜粋』(翻訳・注釈・解説、『多様体』第3号、月曜社、2020年11月、338-366頁)

(2) 学会発表

国内、ゲストスピーカーとしての講演：

Shinji Miyata : „Durch das Planlose Umherstreifen durch die planlosen Streifzüge der Phantasie wird nicht selten das Wild aufgejagt, ...“ Einige Bemerkungen zum Phantastischen bei Lichtenberg

2021年3月15日(日曜)ドイツ文化ゼミナール・オンライン代替企画

Die Online-Alternative zum Tateshina-Seminar 2020: Die Phantastische Literatur

日本独文学会(主催)ドイツ学術交流会(DAAD)共催

国内、シンポジウム「シェリングの時代におけるイギリスとドイツ —その知的交流と交響の諸相—」企画・司会および発表：

「宇宙・相貌・人間—18世紀ドイツ文藝・思想と〈イギリス〉」

日本シェリング協会、2021年7月4日、東京大学/オンライン開催

科研費研究会での発表：

研究課題「ファウスト文学に見る「神の死」の系譜」(研究課題/領域番号20K00511 研究代表者:高橋義人 平安女学院大学, 国際観光学部, 教授)

「進歩・知識欲・人間 について—リヒテンベルクの考えていたこと—」、2021年4月25日

「Wieland ともうひとつの Antike (1)」、2022年1月8日

「Wieland ともうひとつの Antike (2)」、2022年3月28日

(3) その他

「海外文学2019年・ドイツ文学」、日本文藝家協会編『文藝年鑑2020』、2020年7月、74-76頁

「海外文学2020年・ドイツ文学」、日本文藝家協会編『文藝年鑑2021』、2021年6月、74-76頁

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本独文学会、会長、~2021.6、監事、2021.6~

国内、日本シェリング協会、理事、2008~

1. 略歴

- 1995年4月 東京大学文科Ⅲ類入学
- 1999年3月 東京大学文学部言語文化学科ドイツ語ドイツ文学専修課程卒業
- 1999年4月 東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻ドイツ語ドイツ文学専門分野修士課程入学
- 2001年3月 東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻ドイツ語ドイツ文学専門分野修士課程修了
- 2001年4月 東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻ドイツ語ドイツ文学専門分野博士課程進学
- 2003年10月 ドイツ学術交流会 (DAAD) 奨学生としてルートヴィヒ・マクシミリアン大学 (ドイツ・ミュンヘン) に留学 (～2006年3月)
- 2009年3月 東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻ドイツ語ドイツ文学専門分野博士課程単位取得満期退学
- 2010年4月 博士 (文学) 取得 (東京大学大学院人文社会系研究科)
- 2011年4月 首都大学東京都市教養学部 准教授
- 2018年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授 (現職)

2. 主な研究活動

a 専門分野

ドイツ中世文学

b 研究課題

口伝の英雄詩を素材とし、ドイツ語圏俗語文芸の初の興隆期とされる12世紀末から13世紀前半にかけて詩作された叙事文学を主たる研究対象としている。声の文化の領域における記憶伝承を担っていた英雄詩の英雄叙事詩化による記憶の変容の問題を出発点に、匿名性を基本とする英雄詩／英雄叙事詩の語り手の問題や (科研費若手研究「メディアの転換と記憶の変容—中世英雄叙事文学を対象に—」、2012～14年度)、英雄叙事詩の歴史性の問題 (同「作者性の諸相—中世ドイツ英雄叙事詩における歴史性と虚構性の問題」、2016～19年度) に取り組んできた。また、中世文芸のアクチュアリティの問題も考察の射程に入れ、現在中世後期における英雄叙事詩の変容をはじめ、近代以降の中世文芸受容史を主たる研究対象としている。

c 概要と自己評価

2020年度には西洋中世学会第12回大会シンポジウム「中世の感情」にパネリストとして登壇し、近年中世史研究において注目を集めている感情史の視点から、ドイツ語圏中世宮廷叙事詩および英雄叙事詩における感情表現に関する考察を行った。2021年度には西洋中世史や西洋美術史の研究者と協同で公開セミナーを行った他、シンポジウム「東西中世における修道院・寺社の書物文化—制作・教育・世界観の変容」において、パネリストとして口頭発表を行った。これらの研究活動を通して、学際的な視野を広げることができたものと考えている。同発表ではゲルマン民族にとっての「英雄時代」以来の英雄伝承の、中世盛期という時代における受容の様相の一端を明らかにすることを試みた。これは2020年度から取り組んでいる科研費プロジェクト「ドイツ英雄詩の受容史研究—英雄詩素材の歴史的アクチュアリティ」(基盤C, 2023年度まで)の一部をなすものである。現在、上述の口頭発表を論文として公表するための作業を行っている。

d 主要業績

(1) 著書

[共著]『ドイツ文化事典』、石田勇治他編、丸善出版、2020.10

(2) 学会発表

国内、山本潤、「怒り」と「敵意」—中世叙事文学に見る感情の表象するもの」、西洋中世学会第12回大会シンポジウム「中世の感情」、オンライン、2020.10.4

国内、山本潤、「中世俗語文芸における「水を灌ぐ」行為—ハルトマン・フォン・アウエ『イーヴェイン』を題材に」、ReMo 研公開セミナー2021「アクアマニーレと典札空間の形成」、オンライン、2021.10.30

国内、山本潤、「ドイツ語圏英雄伝承の教化素材化—ニーベルンゲン伝説およびディートリヒ伝説を題材に」、ReMo 研シンポジウム2021「東西中世における修道院・寺社の書物文化—制作・教育・世界観の変容」、東京都立大学、2021.12.19

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、首都大学東京／東京都立大学、「ドイツ語学特殊講義」

非常勤講師、お茶の水女子大学、「ヨーロッパ言語文化論」

(2) 学会

国内、日本独文学会、企画理事、2019.6～2021.5、機関誌常任理事、2021.6～

国内、西洋中世学会、常任委員、2019.12～

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

DAAD 友の会、理事、2019.9～

2 2 スラヴ語スラヴ文学

教授 三谷 恵子 MITANI, Keiko

1. 略歴

1981年3月 東京大学文学部露語露文学専攻卒業
1983年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士修了（露語露文学）
1983年4月 東京大学人文科学研究科博士課程進学
1986年10月 ザグレブ大学哲学部留学（～1988年9月）
1989年3月 東京大学文学部人文科学研究科博士課程修了
1990年4月 東京大学文学部助手（ロシア語ロシア文学研究室）
1993年6月 筑波大学文芸言語学系講師
1997年7月 同助教授
1999年4月 京都大学人間・環境学研究科助教授
2005年4月 同教授
2013年4月 東京大学人文社会系大学院教授（スラヴ語スラヴ文学科）
2022年1月 逝去

2. 主な研究活動

a 専門分野

スラヴ語学、スラヴ語歴史文法、中世スラヴ文献学；旧ユーゴ圏の言語文化；スラヴ語圏の少数言語；言語接触と言語維持。

b 研究課題

以下の事柄を研究課題としている。すなわち、共通スラヴ語から現代のスラヴ諸言語にいたる変化のプロセスを、文献学的に解明にすること。スラヴ語間の類似性と共通性、また個別のスラヴ語における言語特徴とくに形態統語論的特徴について実証的に分析すること。旧ユーゴ圏における言語と文化の諸相、とりわけ言語と社会や歴史の関係に注目し社会言語学的視点を取り入れた言語研究を行うこと。またスラヴ文献学、スラヴ語史、中世スラヴ文化研究の融合的研究としての中世スラヴ比較文献研究を行うこと。

c 概要と自己評価

スラヴ語史、スラヴ語文法論とくにロシア語およびボスニア・クロアチア・セルビア語の通時的および共時的研究を進めている。また中世文献を言語学、翻訳理論、比較テキスト研究などを融合された新たなアプローチで分析する試みに着手し、この成果は海外の国際学会、国内で自ら開催した国際シンポジウムで発表している。さらに法学・法制史の研究者と共同研究を行い、近代スラヴ地域と近代日本における法と言語、法における用語の問題の比較研究にも着手している。これらの成果を論文として刊行し、またスラヴ語学概論やボスニア・クロアチア・セルビア語の授業に反映させている。

d 主要業績

(1) 著書

三谷恵子、『クロアチア語のしくみ 新版』、白水社、146p、2021

(2) 共編著

Zoran Rašović, Keiko Mitani, Yasunori Kasai, Emi Matsumoto (eds.) Comparative Studies of Civil Law between Modern South Slavic Regions and Japan: Structure, Origin and Language. Podgorica: Montenegrin Academy of Sciences and Arts. 2020.

羽場久美子（編集代表）、井口壽乃、大津留厚、桑名映子、田口雅弘、中澤達哉、長與進、三谷恵子、山崎真一（編集委員）、『中欧・東欧文化事典』、丸善出版、2021

[三谷恵子（執筆項目）「セルビア、コソヴォ、モンテネグロ」 pp.32-33; 「クロアチアのジェンダー」 pp.270-271; 「東欧の文学」 pp.360-361; 「東欧の言語と国家」 pp.404-405; 「東欧のマイノリティ言語」 pp.408-409; 「バルカンの言語・南スラヴ諸語」 pp.422-423; 「セルビア、クロアチア、ボスニアの食文化」 pp.498-499; 「セルビア、モンテネグロと日本」 pp.684-685.]

(3) 論文

Keiko Mitani, "Slavonic Tradition of the Apocryphal Acts of Thomas in India and the MS 1789/700 of the Dragomirna Monastery (Moldavia, Romania)", *Scripta & e-Scripta*, Vol.20. 2020, pp.199-226

三谷恵子、『『ヨブの遺訓』スラヴ語版 言語の変異性とテキスト属性の関係』、『SLAVISTIKA』35号、2020、471-486頁

Keiko Mitani, "Formation of Legal Language in the Nineteenth-Century South Slavic Lands and Japan," in Zoran Rašović, Keiko Mitani, Yasunori Kasai, Emi Matsumoto (eds.) *Comparative Studies of Civil Law between Modern South Slavic Regions and Japan: Structure, Origin and Language*. Podgorica: Montenegrin Academy of Sciences and Arts. 2020, pp.11-32

Keiko Mitani, "The Twelve Dreams of King Shahaisha: Comparison of early Russian and South Slavonic copies," in Japanese Association of Slavists (ed), *Comparative and Contrastive Studies in Slavic Languages and Literatures. Japanese contributions to the Sixteenth International Congress of Slavists*. Tokyo: European Institute, Jōchi University, 2021, March, pp.55-86

三谷恵子、「中世スラヴ世界における「疫病」の表現と表象」、『スラヴ学論集』24号、日本スラヴ学研究会、pp.105-126、2021

Keiko Mitani, "Linguistic Analysis of the Slavonic Translation of the Testament of Job," in Anisava Miltenova, Maria Ciotă, Emamuela Timotin (eds.) *Biblical Apocrypha in South-Eastern Europe and Related Areas*. Bucharest: Brăila, 2021, pp.89-108

Keiko Mitani, *The Twelve Dreams of King Shahaisha: Comparison of early Russian and South Slavonic copies, Comparative and Contrastive Studies in Slavic Languages and Literatures. Japanese contributions to the Sixteenth International Congress of Slavists*, 2021, pp.55-86. 2021

(4) 発表・講演

三谷恵子、「旧ユーゴスラヴィアの言語と国家」、ロシアユーラシア研究会（オンライン）、2020.12.15

三谷恵子、『『シャハイシャ王の12の夢』—スラヴ世界の孤児のアポクリファの研究—』、『スラヴ語・スラヴ文学の比較対照研究—第16回国際スラヴィスト会議への日本の寄与—』、上智大学ヨーロッパ研究所主催、日本スラヴィスト協会共催（オンライン）、2021.1.9

三谷恵子、「旧約聖書『ヨブ記』と旧約偽典『ヨブの遺訓』：スラヴ語訳の比較研究」、日本ロシア文学会第71回全国大会（筑波・オンライン大会）、2021.10.30、筑波大学・オンライン

(5) 翻訳

ミロラド・パヴィッチ（三谷 恵子訳）、『十六の夢の物語：M・パヴィッチ幻想短編集』、松籟社、210p.（2021）

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内

日本ロシア文学会会長、2017.10～2021.10

日本スラヴ学研究会企画編集委員長、2019.6～2021.6

(2) 学術誌国際編集委員

Rasprave, Institute of Croatian Language (Zagreb), International board（2018.4～2020.4）

1. 略歴

- 1987年4月 東京大学教養学部文科Ⅲ類入学
1990年10月 第二回ソ連給費留学生としてロシア国立レニングラード大学留学（～1992年9月）
1993年3月 東京大学教養学部教養学科第二地域文化学科（ロシアの文化と社会）卒業
1996年3月 東京大学大学院人文社会系研究科（スラヴ語スラヴ文学）修士課程修了
1996年4月 東京大学大学院人文社会系研究科（スラヴ語スラヴ文学）博士課程進学
1999年9月 東京大学大学院人文社会系研究科（スラヴ語スラヴ文学）博士課程単位取得退学
1999年10月 北海道大学スラブ研究センター・COE 講師
2000年4月 神戸大学国際文化学部・講師
2001年4月 神戸大学国際文化学部・助教授
2001年8月 ロシア国立人文大学人文歴史学部（モスクワ）にて研修
（文部省派遣若手在外研修 ～2002年4月）
2003年1月 学位・博士（文学）取得
2007年4月 神戸大学大学院国際文化学研究科・准教授
2010年8月 イギリス・ケンブリッジ大学ウルフソン・コレッジおよびロシア国立人文大学人文歴史学部にて
研修（神戸大学若手教員長期海外派遣プログラム ～2011年4月）
2016年4月 東京大学大学院人文社会系研究科（スラヴ語スラヴ文学）准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

ロシア・ソ連の文学、ロシア・ソ連文化論、ロシア・ソ連演劇史。

b 研究課題

主としてロシア語による文学・演劇・映画を素材として、芸術表現の特質と可能性、時代や社会による価値体系の変容や人間関係の諸相を明らかにすることを目的とする。

c 概要と自己評価

ロシア・ソ連では、文学と共に演劇・映画がメディアとしても重要な社会的機能を担っている。これらのジャンルの創作が歴史的および現在の社会においてどのように受容されているのかを、笑い話や起源などの民衆文化も含め、現地調査と文献調査を平行して研究を行っている。近年の研究関心は翻案研究とロシア語をドミナントとするソ連文化形成との二つの領域にわたる。

ポストモダン以降の文化潮流においては、狭義の意味での作品のオリジナリティを論じることは難しくなっている。個別創作者の独創性や表現力がどのように評価されるのかを、文学と演劇・映画といった異なるメディアによる翻案作品を比較検証する。感情など視覚化言語化の難しいものが、メディアの変更にともない、どのようなメカニズムで情報が付与され/欠落する者に注目することで、演劇や文学それぞれのジャンル固有の表現特性の有無について考察を行っている。

さらに、ロシア連邦外の旧ソ連圏におけるロシア語文化の形成プロセスの再検討とポストソ連期における継承と離反の現況についての研究を進めている。特にコーカサス地域出身の創作者の活動に注目し、従来は画一的に中心から周縁へと一方的に伝達されたと考えられてきたソ連文化の多様性について再検討することを目指し、現地調査および文献調査をベースとした研究を行っている。

これらの成果は国内外の研究会、シンポジウムの企画し、参加することで国際的に専門の研究者間での交流を図り、論文及び共著書等において刊行している。現場で活動する創作者とも研究成果の共有をはかるために上映や講演の企画を実施し、学生にも授業等の場において成果を還元している。

d 主要業績

(1) 評論等

- 楯岡求美、「ロシア・ソ連研究から考える『分断と共感』」、第20回東京大学ホームカミングデー文学部企画『『共感』と『分断』』、東京大学文学部、pp.25-34 およびディスカッション部分（p.47、pp.53-54）、2021.2
楯岡求美、「キリル・セレブレンニコフ監督『レット』2018」、『ロシア映画のひそかな愉しみ』、ロシア映画を勉強する会編、2021.1、pp.31-34

楯岡求美、『地下室の人々』のナルシシズムと自己喪失』、『AC²』、青森公立大学国際芸術センター青森（ACAC）、
2022.3.31、pp.110-114

(2) 発表・講演

a. 学会・研究会発表

楯岡求美「20世紀文学としてのソ連文化史：再考のための一助として」、第2回社会主義リアリズム文学研究会、
2021.2.4、(東京大学・慶応大学リモート開催)

b. 講演等

楯岡求美、劇団地点「ドストエフスキー『地下室の手記』上演アフタートーク」、吉祥寺シアター、2021.11.27

楯岡求美、劇団地点「マヤコフスキー『これについて/私自身』リーディング公演アフタートーク」、劇団地点アトリエ「アンダースロー」、2022.2.13

(3) 共同研究

科学研究費基盤 B (18H00655) 「ロシアとコーカサス諸地域の文化接触：受容と変容と離反のダイナミズム」(2018-2021)：研究代表

科学研究費基盤 B (16H05657) 「オーラルヒストリーによる旧ソ連ロシア語系住民の口頭言語と対ソ・対露認識の研究」(研究代表：柳田賢二・東北大学教授、2016-2019)：分担者

国際共同研究加速基金(国際共同研究強化 (B)) 「多言語多文化芸術運動としてのトビリシ・アヴェンギャルドの歴史的資料調査と考察」(研究代表：増本浩子・神戸大学教授、2019-21)：分担者

3. 主な社会活動

(1) 学会

日本ロシア文学会、理事、2016.10～2022.10、国際交流委員長、2016.10～2021.10

23 現代文芸論

教授 柳原 孝敦 YANAGIHARA, Takaatsu

1. 略歴

- 1989年3月 東京外国語大学外国語学部スペイン語学科 卒業
1989年4月 東京外国語大学大学院外国語学研究科修士課程入学（ロマンス系言語専攻）
1991年3月 同 修了
1991年4月 Centro de Estudios Literarios, Instituto de Investigaciones Filológicas de la Universidad Nacional Autónoma de México [メキシコ国立自治大学文献学研究所文学研究センター]
訪問研究生（メキシコ政府交換留学生として、～1992年2月）
1992年4月 東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程進学（地域文化専攻）
1995年3月 同 単位取得退学
1996年4月 法政大学経済学部助教授
2002年4月 Centro de Estudios Latinoamericanos Rómulo Gallegos [ロムロ・ガリェーゴス・ラテンアメリカ研究センター、ベネズエラ] 客員研究員（～2003年3月）
2004年4月 東京外国語大学外国語学部助教授
2007年4月 同 准教授
2009年4月 東京外国語大学大学院総合国際学研究院准教授（大学院重点化による）
2012年4月 同 教授
2013年10月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2017年4月 同 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

スペイン語圏の文学、ラテンアメリカ思想文化論。

b 研究課題

知識人たちの環大西洋的ネットワークの形成。

c 概要と自己評価

研究課題である環大西洋地域を横断する知識人たちのネットワークの形成と個々の活動、その表現の様態についての研究は、2020年3月まで科学研究費の研究助成を受けていた。2019年11月に刊行した『テキストとしての都市 メキシコ DF』の一部はこの助成の成果でもある。助成期間は終わったものの、研究はなお進行中である。

d 主要業績

(1) 著書

柳原孝敦、『テキストとしての都市 メキシコ DF』、東京外国語大学出版会、2019、全272頁

柳原孝敦、『映画に学ぶスペイン語』（増補再版）、教育評論社、2021、全160頁

共著、野崎歓・阿部公彦、『新訂 世界文学への招待』、放送大学教育振興所、2022、全284頁中141-174頁担当

共著、越前敏弥ほか、『はじめて読む！ 海外文学ブックガイド——人気翻訳家が勧める世界が広がる48冊』、河出書房新社、2022、全224頁中94-97頁担当

(2) 論文

柳原孝敦、「キャラクター小説論再考——『騎士団長殺し』と上田秋成」、『2020年第9回村上春樹国際シンポジウム 村上春樹における「運命」(Fate) 国際会議予稿集』、淡江大学村上春樹研究センター・淡江大学日本語学科、146-153頁、2020.6

柳原孝敦、「ガルシア=マルケスは誰が読んでいたのか？——1983年、日本」、『れにくさ』11号、82-87頁、2021.3

(3) 研究ノート

柳原孝敦、「ジヨルディ・ソレル『負け戦』三部作をめぐる」、『れにくさ』12号、37-52頁、2022.3

(4) 総説・総合報告

柳原孝敦、「マリオ・バルガス=リョサ」、都甲幸治編著『ノーベル文学賞のすべて』、立東舎、2021.9、110-113頁

3. 主な社会活動

(1) 学会

日本ラテンアメリカ学会理事（研究年報編集担当）、2012.6～2014.5、2020.6～2022.5

准教授 **阿部 賢一** ABE, Kenichi

1. 略歴

1995年3月 東京外国語大学外国語学部ロシア・東欧語学科チェコ語専攻卒業
1999年3月 東京外国語大学大学院地域文化研究科博士前期課程修了
2002年6月 パリ第4大学第3課程スラヴ研究科DEA取得
2003年3月 東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程修了
2003年10月 北海道大学スラブ研究センターCOE 研究員
2004年4月 東京外国語大学大学院国際文化講座助手
2005年4月 武蔵大学人文学部ヨーロッパ比較文化学科専任講師
2008年4月 同准教授
2010年4月 立教大学文学部文学科文芸・思想専修／文学研究科比較文明学専攻准教授
2016年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

中東欧文学、比較文学

b 研究課題

20世紀プラハの文学・美術。翻訳研究。比較文学。

c 概要と自己評価

現在、主に以下のテーマに基づき、研究を進めている、

(1) 20世紀チェコ文学

(2) 中東欧における文学史記述

(3) 翻訳の諸問題

(1)に関しては、近年、戯曲家・政治家ヴァーツラフ・ハヴェルを中心に研究を行なっている。社会主義体制下におけるハヴェルの戯曲と政治の関係を、翻訳、論文を通して検討を行ない、その成果は単著にまとめられた。

(2)に関しては、文学理論の観点からの考察を共著で行ない、今後はさらに複数言語の文学史記述の可能性を探索する予定である。

(3)については、(2)とも関連する文学史のレベルの問題、世界文学的な文脈での問題（これについて論文「翻訳における時差——「世界文学」と「時間」を参照）、さらには文芸翻訳の実践の3つの問題系から研究を進めており、その成果の一部は着実に論文として発表している。

d 主要業績

(1) 著書

共著、小川公代・吉村和明、『文学とアダプテーションII ヨーロッパの古典を読む』、春風社、2021.11

共著、白水社編集部 編、『「その他の外国文学」の翻訳者』、白水社、2022.2

共著、野崎歓・阿部公彦、『新訂 世界文学への招待』、放送大学教育振興所、2022.3

(2) 論文

阿部賢一、「カレル・チャペックの『ロボット』におけるロボットの言語」、『れにくさ』、12、206-221頁、2022.3

(3) 書評

ミルチャ・カルタレスク、『ノスタルジア』、山梨日日新聞、愛媛新聞など、2022.1

(4) 学会発表

国内、阿部賢一、「わが祖国はいずこに チェコにおけるロマ作家の作品から」、ワークショップ「《ロマ》から《ワタシ (Home/land)》を考える」、京都大学、2021.3.17

国内、阿部賢一、「ヨゼフ・ユングマンの翻訳『アタラ』の社会的機能について」、2020年度日本スラヴ学研究会研究発表会、2021.3.27

国内、阿部賢一、「ミラン・クンデラと翻訳」、日本ロシア文学会・日本スラヴ学研究会共催シンポジウム、2021.6.26

国内、阿部賢一、「ウランの記憶：ヤーヒモフの事例」、日本スラヴ学研究会・研究発表会、オンライン、2022.3.30

(5) 啓蒙

阿部賢一、「バスク語に宿された、魂の物語」、『英語教育』、2021年2月号、2021.1

阿部賢一、「創造か破滅か 理性の行方…『ロボット』カレル・チャペック著」、『読売新聞』、2021年7月18日朝刊、2021.7

(6) 会議主催(チェア他)

国際、「第5回ボヘミア・フォーラム」、実行委員、オンライン、2021.12.18

(7) 翻訳

共訳、アンナ・ツィマ、「Probudím se na Šibuji」、阿部賢一・須藤輝彦、『シブヤで目覚めて』、河出書房新社、2021.4

個人訳、ヘレナ・チャブコヴァー、「Architekt Bedřich Feuerstein-Cesta do nejvýtvamější země světa」、阿部賢一、『ベドジフ・フォイエエルシュタインと日本』、成文社、2021.6

共訳、ヴァーツラフ・ハヴェル、「Vyrozumění, Audience」、阿部賢一・豊島美波、『通達・謁見』、松籟社、2022.3

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

セミナー、NHK文化センター、「カレル・チャペックを読む」、2021.4~2021.7

セミナー、日本チェコ友好協会、「ボフミル・フラバルの辿った道」、2021.11~

セミナー、日本チェコ友好協会、「ヴァーツラフ・ハヴェルの戯曲世界」、2022.2~

准教授 **藤井 光** FUJII, Hikaru

1. 略歴

1998年4月 北海道大学文学部人文科学科 入学
2002年3月 同 卒業
2002年4月 北海道大学大学院文学研究科修士課程 入学
2004年3月 同 修了
2004年4月 北海道大学大学院文学研究科博士後期課程 進学
2007年3月 同 修了 博士(文学)
2007年4月 日本学術振興会特別研究員(PD)
2009年4月 同志社大学文学部助教
2013年4月 同志社大学文学部准教授
2018年4月 同志社大学大学院文学研究科博士前期課程准教授
2019年4月 同志社大学大学院文学研究科博士前期課程教授
2021年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

現代アメリカ文学、英語圏文学、翻訳論

b 研究課題

現代アメリカ小説における「偶然の土着性」

c 概要と自己評価

21世紀の英語圏文学、特にアメリカの小説をめぐる、1)移民系作家における戦争や紛争の記憶の表象、2)新自由主義経済における文学の役割に対する各作家の距離感、の2点を中心に研究を進めている。2019～2022年度は上記の研究課題名で科研費の助成を受け、論文発表および口頭発表を行っている。

d 主要業績

(1) 論文

藤井光、「ポール・ユーンにおけるディアスポラの記憶と物語の空白——「ウラジオストク駅」とサハリンをめぐって——」、『わにくさ』、12、19-36頁、2022.3

(2) 解説

藤井光、「パンデミックと『つながり』の物語——『デカメロン・プロジェクト』と『最後のライオン』を巡って」、『文藝』、2022年春季号、438-444頁、2022.1

藤井光、「翻訳と「裏切り」をめぐる」、『群像』、77巻4号、185-195頁、2022.3

藤井光、「2018年の小説が想像する、資本主義と物語の感染性」、『文化交流研究』、35号、19-28頁、2022.3

(3) 学会発表

国内、藤井光、「歴史と物語が21世紀に創出するステージの内と外」、日本英文学会第93回全国大会シンポジウム第7部門、オンライン、2021.5.23

国内、藤井光、「2010年代のアメリカ小説における「病」の感染性」、第66回日本英文学会北海道支部大会シンポジウム「アメリカ文学と病」、2021.11.7

(4) 翻訳

個人訳、Colson Whitehead, "The Nickel Boys"、藤井光、『ニッケル・ボーイズ』、早川書房、2020.11

個人訳、Ling Ma, "Severance"、藤井光、『断絶』、白水社、2021.3

個人訳、Alfian Sa'at, "Malay Sketches"、藤井光、『マレー素描集』、書肆侃侃房、2021.10

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、同志社大学文学部、「Senior Seminar I」「Senior Seminar II」「英米文学演習 I」「英米文学演習 II」、2021.4～

2 4 西洋史学

教授 高山 博

TAKAYAMA, Hiroshi

HP: <http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~tkymh/index.html>

1. 略歴

- 1980年3月 東京大学文学部西洋史学科卒業
- 1980年4月 東京大学大学院人文科学研究科西洋史学修士課程入学
- 1982年3月 東京大学大学院同研究科同修士課程修了（文学修士）
- 1982年4月 東京大学大学院同研究科同博士課程進学
- 1984年9月 アメリカ、エール大学大学院歴史学博士課程入学
(Harvard Yenching Institute, Doctoral Scholarship for Junior Faculty, 1984-88 による)
- 1986年5月 アメリカ、エール大学大学院 M.A. (Master of Arts) 取得
- 1987年9月 アメリカ、エール大学 teaching assistant (12月まで)
- 1988年3月 東京大学大学院人文科学研究科西洋史学博士課程単位取得退学
- 1989年6月 イギリス、ケンブリッジ大学客員研究員 (1990年3月まで)
- 1990年5月 アメリカ、エール大学大学院歴史学博士課程修了、Ph.D.取得
Robert S. Lopez Memorial Prize (最優秀中世史博士論文賞)
- 1990年4月 一橋大学助教授 (経済学部) (1993年4月から1994年3月まで併任助教授)
- 1993年4月 東京大学文学部助教授 (文化交流研究施設)
- 12月 サントリー学芸賞
- 1994年6月 地中海学会賞
- 10月 マルコ・ポーロ賞
- 1995年10月 フランス、国立社会科学高等研究院客員研究員 (1996年9月まで)
(国際交流基金フェローシップによる)
- 1998年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授 (文化交流研究施設・基礎部門)
- 2001年10月 (西洋史学助教授を併任)
- 2002年4月 21世紀COEプログラム委員会分野別審査・評価部会委員 (人文科学) (2005年まで)
- 2002年10月 イタリア、American Academy in Rome, R.A.A.R. (Resident of American Academy in Rome), (12月まで)
- 2004年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授 (西洋史学) 現在に至る
- 2004年4月 日本学術振興会 学術システム研究センター研究員 (人文学) (2007年3月まで)
- 2008年4月 文部科学省、科学官 (2012年3月まで)
- 2009年10月 アメリカ、UCLA, CMRS Distinguished Visiting Scholar
- 2015年6月 西洋中世学会会長 (~2019年6月まで)
- 2016年4月 紫綬褒章
- 2016年6月 史学会理事長 (~2020年6月まで)
- 2019年9月 アメリカ、Institute for Advanced Study (Princeton), Willis F. Doney Member 2019-2020 (12月まで)
- 2021年10月 地中海学会 副会長 (~現在)
- 2022年3月 東京大学定年退職 (6月 東京大学名誉教授)

2. 主な研究活動

a 専門分野

西洋中世史、地中海史

b 研究課題

- (1) 古代から現代に至る諸国家の形態、組織、統治システムの比較を行う。
- (2) 西洋中世の主要な君主国の統治システムを比較・検討し、その異同を明らかにする。
- (3) 異なる文化・宗教を背景に持つ様々な人間集団が、地中海を舞台にどのように接触・対応していったかを通時的に見通すとともに、地中海の回りに形成された三大文化圏 (ラテン・キリスト教文化圏、ギリシャ・ビザンツ文化圏、アラブ・イスラム文化圏) 研究の接合を目指す。

- (4) 上記三大文化が併存する十二世紀ノルマン・シチリア王国の解明を行う。
- (5) 異文化交流によって生じる様々な現象を分析し、人間集団が持つ特性と多様性を考える。
- (6) グローバル化が社会や国家形態に及ぼす影響を考察する。

c 概要と自己評価

教育・研究上の義務は滞りなく果たすことができたと思う。

d 主要業績

(1) 著書

本村凌二・高山博著、『衝突と共存の地中海世界』、左右社、2020年10月30日、300頁

Hiroshi Takayama, *Sicily and the Mediterranean in the Middle Ages*, Paperback Edition, Routledge, 30 June 2021, 414p. (xx+394 p.)

デイヴィッド・アブラフィア著『地中海と人間 原始・古代から現代まで』全2分冊、高山博監訳、高山博・佐藤昇・田瀬望・藤崎衛訳、藤原書店、2021年11月29日、1048(536+512)頁

高山博・亀長洋子編、『中世ヨーロッパの政治的結合体 統治の諸相と比較』、東京大学出版会、2022年3月7日、648頁

ジャネット・L・アブー＝ルゴド著、『ヨーロッパ覇権以前 もう一つの世界システム』、佐藤次高・斯波義信・高山博・三浦徹訳、岩波書店、2022年4月15日、上巻278+28頁、下巻224+110頁、岩波現代文庫

(2) 論文など

高山博、「文明の交流と衝突～中世、十字軍から現代を見る」、『Aspen Fellow』(日本アスペン研究所) No.36 (2020春)、8-11頁

高山博、「ノルマン朝シチリア王国」、『世界歴史大系 イタリア史2』、山川出版社、2021年3月、106-125頁

高山博、「歴史学 概説」、『Guideline』(河合塾) 7・8号 (2021年7月)、45-47頁

(3) 学会発表

国内、シンポジウム講演、高山博、「中世パレルモとシチリア～異文化の重なりと謎解きの愉しみ」、地中海学会大会、Zoom オンライン、2020年11月22日(日)、シンポジウム「地中海都市の重層性」

国内、講演、高山博、「研究者としての道～私の研究と院生時代の体験～」、千葉大学卓越大学院プログラム、Zoom オンライン、2021年9月24日(日)、卓越教養特論

国内、講演、高山博、「中世シチリア王国：ヨーロッパ、ビザンツ、イスラム文化の十字路」、日本女子大学史学研究学会大会、Zoom オンライン、2021年11月20日(土)、基調講演(公開講演)

国内、講演、高山博、「ヨーロッパ、ビザンツ、イスラム文化が並存した中世シチリア王国の研究」、東京大学大学院人文社会系研究科、Zoom オンライン、2022年1月27日(木)、文化交流研究懇談会

国内、講演、高山博、「最終講義 グローバル化する世界と中世ヨーロッパ研究」、高山博教授最終講義実行委員会+東京大学大学院人文社会系研究科西洋史学研究室、対面とZoom オンライン、2022年3月17日(木)15時～18時

国内、講演、高山博、「ノルマン・シチリア王国の研究：ヨーロッパ、ビザンツ、イスラム文化の十字路」、第72回日本西洋史学会大会、Zoom オンライン(東洋大学)、2022年5月21日(土)、記念講演

(4) 総説・総合報告

高山博、「2019年の歴史学界：総説」、『史学雑誌』、127編5号、1-5頁、2020年5月

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、地中海学会、副会長、2021.10～現在

国内、史学会、理事長、2016.6～2020.6

国内、史学研究会、評議員、2004年度～現在

(2) 学術雑誌編集

国際、*Spicilegium* (Japan Society for Medieval European Studies, Japan), Editor, 2019-present; Editorial Board, 2015-2021

国際、*Corpus Membrarum Capuanarum* (Edizioni Scientifiche Italiane, Italy), Comitato Scientifico Onorario, 2014-present

国際、*Archivio Normanno-Svevo* (Centro Europeo di Studi Normanni, Italy), Comitato Scientifico, 2008-present

国際、*International Medieval Bibliography* (Brepols, UK): Regular Contributor for Japan, 1995-2021

(3) その他の委員等

公益財団法人 高梨学術奨励基金、選考委員、2017.5.12～現在

公益財団法人 東洋文庫、研究員、2020.1.16～現在

1. 略歴

- 1991年 東京大学大学院人文科学研究科博士課程博士・博士（文学）
1991年11月 東京大学文学部助手
1993年4月 大阪外国語大学外国語学部助教授
2002年3月 ケンブリッジ大学古典学部客員研究員、クレアホール客員フェロー（～2003年2月）
2006年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2010年11月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

古代ギリシア史

b 研究課題

古代ギリシア国制史研究、アテナイ民主政史研究、伝アリストテレス『アテナイ人の国制』研究、古代ギリシア歴史家断片研究

c 概要と自己評価

研究・教育及びこれに関わる学内外の諸活動に従事し、責務を果たした。

d 主要業績

(1) 著書

編著、橋場弦・桜井英治（共編）、『中学歴史 日本と世界』、山川出版社、2021.4

(2) 論文

橋場弦、「直接民主政＝衆愚政は方便 古代ギリシアが射抜く本質」、『月刊ジャーナリズム』、368、22-27頁、2021.1

橋場弦、「賄賂研究の射程」、『歴史評論』、861、6-19頁、2022.1

橋場弦、「シンポジウム：オリンピアー—古典古代のからだところ 趣旨説明」、『西洋古典学研究』、69、81-84頁、2022.3

(3) 書評

栗原麻子、『互酬性と古代民主制——アテナイ民衆法廷における「友愛」と「敵意」——』、京都大学学術出版会、『史林』、104-2、57-63頁、2021.3

(4) 解説

橋場弦、「驚くことから歴史学は始まる」、村川堅太郎『オリンピアー 遺跡・祭典・競技』、ちくま学芸文庫、233-242頁、2020.6

(5) 学会発表

国内、橋場弦、「オリンピアー・古典古代のからだところ（趣旨説明）」、日本西洋古典学会第71回大会シンポジウム、オンライン開催、2021.6.5

(6) 啓蒙

橋場弦、「古代オリンピックの知られざるリアル」、『淡青』、40、11頁、2020.3

(7) マスコミ

「古代五輪、聖なる価値目指した」、『朝日新聞（朝刊）』、2020.4.5

「余録」、『毎日新聞（朝刊）』、2021.7.28

「天声人語」、『朝日新聞（朝刊）』、2021.12.21

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、御茶ノ水女子大学、「西洋社会史」、2020.4～2020.8、2021.4～2021.8

(2) 学外組織

公益財団法人史学会、理事、2020.4～2022.6

日本西洋古典学会、常任委員、2020.4～

1. 略歴

- 1986年4月 東京大学教養学部文科Ⅲ類 入学
1991年3月 東京大学文学部西洋史学専修課程 卒業
1991年4月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程西洋史学専攻 入学
1994年3月 同 修了
1994年4月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程西洋史学専攻 進学
1995年10月 アイルランド共和国ダブリン大学留学（～1997年9月）
（1996年9月まではアイルランド政府給費留学生）
1999年3月 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程西洋史学専攻 単位取得退学
1999年4月 東京大学大学院人文社会系研究科西洋史学研究室 助手
2002年3月 博士（文学）学位取得
2002年4月 岐阜大学教育学部社会科教育講座（史学） 助教授
2007年4月 同 准教授
2012年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授
2018年9月 東京大学大学院人文社会系研究科 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

アイルランド近代史、近代ブリテン世界史、近代コスモポリタニズム

b 研究課題

19世紀アイルランド農村史、近代ダブリン都市史、近代ブリテン世界史、近代コスモポリタニズム

c 概要と自己評価

教育・研究・学内業務において、基本的責任を果たした。

d 主要業績

(1) 著書

- 共著、勝田俊輔（監修 金澤周作、編者 藤井崇／青谷秀紀／古谷大輔／坂本優一郎／小野沢透）、『論点・西洋史学』、ミネルヴァ書房、2020.4
共著、勝田俊輔（編者 秋田茂／脇村孝平）、『人口と健康の世界史』、ミネルヴァ書房、2020.8
Shunsuke Katsuta, 『Foreword to Louis Cullen's Early Japanese Trade, Administration and Interactions with the West』、Renaissance Books, 2020.12
共著、勝田俊輔（編者 岩井淳／竹澤祐丈）、『ヨーロッパ複合国家論の可能性——歴史学と思想史の対話』、ミネルヴァ書房、2021.5

(2) 論文

“Aggregate meetings” and politics in early nineteenth-century Dublin’, LEAVES, N°12 (Sociability and democratic practices in Britain and Ireland, 1789-1832), July 2021, pp. 87-106

(3) 学会発表

- 国内、勝田俊輔、「スコットランド史とアイルランド史：共通の視座の構築に向けて」、日本カレドニア学会 2020 年度大会、オンライン、2020.10.3
国内、勝田俊輔、「コメント」『デジタル史料とパブリック・ヒストリー——1641 年アイルランド反乱被害者による証言録取書（1641 Depositions）』、2021 年度歴史学研究会総合部会例会、オンライン、2021.6.19
国際、Shunsuke Katsuta, 「Aggregate meeting and popular politics in late eighteenth and early nineteenth-century Dublin」、Irish Historical Society、オンライン、2021.10.12
国内、勝田俊輔、「世界主義の諸様相——コスモポリタニズム・アジア主義・国際主義」、第 119 回史学会大会公開シンポジウム、オンライン、2021.11.13

(4) 予稿・会議録

- 国内会議、勝田俊輔、「スコットランド史とアイルランド史：共通の視座の構築に向けて」
『日本カレドニア学会 Newsletter』、69、2021.10

(5) 会議主催（チェア他）

国内、「都市史学会」、チェア、シンポジウム 疫病と都市、オンライン、2020.12.20

(6) 総説・総合報告

勝田俊輔、「疫病と都市——史学史的イントロ」、『都市史研究』、8、35-48 頁、2021.10

3. 主な社会活動

(1) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

任意団体、史学会、評議員、2014.5～

都市史学会、企画委員、編集委員

准教授 **長井 伸仁** NAGAI, Nobuhito

1. 略歴

- 1989年3月 大阪大学文学部史学科西洋史学専攻 卒業
- 1991年3月 大阪大学大学院文学研究科博士前期課程史学専攻 修了
- 1997年9月 同 博士後期課程 単位修得退学
- 1997年11月 パリ第1大学 博士（歴史学）学位取得
- 1999年10月 大阪大学大学院文学研究科 助手
- 2000年4月 徳島大学総合科学部 助教授
- 2012年4月 上智大学文学部史学科 准教授
- 2014年4月 同 教授
- 2016年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

フランス近現代史

b 研究課題

19世紀パリの政治社会史、フランス共和主義の政治文化、近代フランスにおけるカトリシズム

c 概要と自己評価

2020～2021年度は、近代パリ史を主題とする単著を完成させた（刊行は2022年5月）。同書は一部に課題を残すかたちになり、とくにブーランジスムについては2022年度以降も研究を継続する必要がある。政治文化に関しては、箕作元八が留学時代にフランス革命期の図像の研究に着手していたことを明らかにした。カトリシズムに関しては、両大戦間期フランスにおける生殖をめぐる議論について研究を進めた（2022年度中に論文として公表予定）。自身の研究課題のうち政治文化とカトリシズムについては研究をさらに進め、いずれ全体的な論を提示できるように努めたい。

d 主要業績

(1) 著書

共著、金澤周作編、『論点・西洋史学』、ミネルヴァ書房、2020.4

(2) 論文

長井伸仁、「箕作元八の見たフランス革命」、『一滴』、第28号、1-26頁、2021.3

(3) 解説

長井伸仁、「『わたしたちの歴史 日本から世界へ』の編修に関わって」、『山川歴史PRESS』、第3号、6-8頁、2021.8

長井伸仁、「資料読み解き！ 日露戦争の風刺画」、『山川歴史PRESS』、第8号、10-12頁、2022.2

(4) 教科書

橋場弦、桜井英治編、長井伸仁ほか著『中学歴史 日本と世界』、山川出版社、2022.3

市川大祐、吉澤誠一郎、長井伸仁編『わたしたちの歴史 日本から世界へ』、山川出版社、2022.3

(5) 翻訳

共訳、Philippe Boutry、"Le mariage, le divorce et le "mariage pour tous". Les mutations des formes de l'alliance en France du XVIIIe au XXIe siècle"、前田更子、長井伸仁、「結婚、離婚、『みんなのための結婚』：18～21世紀のフランスにおける婚姻形態の変化」、『日仏歴史学会会報』、第35号、35-62頁、2020.6

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日仏歴史学会、理事、2005.04～

国内、日本西洋史学会、『西洋史学』編集委員、2017.4～

国内、史学会、『史学雑誌』編集委員、2021.6～

准教授 **池田 嘉郎** IKEDA, Yoshiro

1. 略歴

1994年3月	東京大学文学部西洋史学専修課程 卒業
1994年4月	東京大学大学院人文科学研究科修士課程西洋史学専攻 入学
1996年3月	東京大学大学院人文社会系研究科修士課程西洋史学専攻 修了
1996年4月	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程西洋史学専攻 進学
1998年10月	ロシア連邦ロシア科学アカデミー・ロシア史研究所留学（文部省アジア諸国等派遣留学生） （～2000年9月）
2003年3月	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程西洋史学専攻 単位取得退学
2005年10月	博士（文学）学位取得
2006年9月	新潟国際情報大学情報文化学部情報文化学科 専任講師
2010年4月	東京理科大学理学部第一部教養学科 准教授
2013年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

近現代ロシア史

b 研究課題

ヨーロッパの周縁としてのロシアから、20世紀史を捉え直すこと。

c 概要と自己評価

コロナ禍によって研究計画が大幅に遅れたが、ロシア革命・内戦期の政治史について、国際的な視点に立って検討するいくつかの論稿を発表することができた。コロナ禍について、日本の西洋史学研究はこれをどう受け止めるのかという観点からの論稿も発表した。2022年2月末にロシア・ウクライナ戦争が勃発してからは、JCREES（日本ロシア・東欧研究連絡協議会）の代表理事および ICCEES（国際中欧・東欧研究協議会）日本代表として、国内の関係団体および各国のロシア・東欧研究者と頻りに連絡をとり、学界としての対応に努めた。この戦争について、いくつかのインタビューにも応じ、社会に向けて一研究者としての考えを伝えた。

d 主要業績

(1) 著書

池田嘉郎、「コロナ禍と現代国民国家、日本、それに西洋史研究」、歴史学研究会編、中澤達哉・三枝暁子監修『コロナの時代の歴史学』、績文堂出版、2020.12、80-87頁

池田嘉郎、「ソヴィエト・ロシアにおける「人民の武装」——全般的軍事教練と特別任命部隊」、鍋谷郁太郎編『第一次世界大戦と民間人——「武器を持たない兵士」の出現と戦後社会への影響』、錦正社、2022.3、169-203 頁
池田嘉郎、「挫折した帝政の体制内改革と「共和制の帝国」ソ連への連続——ロシア帝国の崩壊」、鈴木董編『帝国の崩壊 下 歴史上の超大国はなぜ滅びたのか』、山川出版社、2022.5、89-115 頁
池田嘉郎、「パリ講和会議とロシアの内戦」、木村靖二編『1919年 現代への模索 (歴史の転換期 11)』、山川出版社、2022.7、22-72 頁

(2) 論文

Yoshiro Ikeda, Time and the Comintern: Rethinking the Cultural Impact of the Russian Revolution on Japanese Intellectuals, Christopher Balme, Burcu Dogramaci, Christoph Hilgert, Riccardo Nicolosi, Andreas Renner (eds.): Culture and Legacy of the Russian Revolution: Rhetoric and Performance – Religious Semantics – Impact on Asia (Berlin: Frank and Timme: 2020), pp. 227-240

池田嘉郎、「V.D. ナボコフとロシア革命」、『SLAVISTIKA』35号、2020.8、187-203 頁

(3) 学会発表

国内、池田嘉郎、「第一次世界大戦期ロシアにおける保養地をめぐる政治」、日本西洋史学会大会 (大阪大学)、2020.12.12 (オンライン)

国際、Yoshiro Ikeda, The Sanatorium Movement, the Union of Towns and the Envisioning of Post-War Russia, 1914-1917, NYU Jordan Center for the Advanced Study of Russia, April 26, 2021 (online)

国際、Yoshiro Ikeda, Why Jellinek? Why Germany? Russian liberals' quest for a constitutional monarchy in the early 20th century, Higher School of Economics (St. Petersburg), Center for Historical Research, November 25, 2021 (online)

(4) 啓蒙

池田嘉郎 (インタビュー)、「〈ウクライナ 相克の近現代史〉(上): ロシア「帝国」の幻影 復活」、「同 (下): 「帝国」衝突の最前線に」、『日本経済新聞』2022.3.3、48 面、2022.3.4、44 面

Yoshiro Ikeda, Reviving the empire: Putin follows the path of Stolypin and Stalin, Nikkei Asia. Mar. 28-Apr. 3, 2022, pp. 8-9

池田嘉郎 (インタビュー)、「ロシア 強権の歴史」、『朝日新聞』2022.5.11、13 面

池田嘉郎 (インタビュー)、「ウクライナ侵攻 映画「ドンバス」が映し出すもの」、『毎日新聞』(夕刊)、2022.7.11、2 面

(5) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 C、池田嘉郎 (研究代表者)、「第一次世界大戦から 1930 年代までのロシアにおける身体——労働・医療・モラル」、2019~2021

3. 主な社会活動

(1) 学会

ICCEES (International Council for Central and Eastern European Studies), member of the Executive Committee

JCREES (日本ロシア・東欧研究連絡協議会) 代表幹事、ICCEES 日本代表

25 社会学

教授 佐藤 健二 SATO, Kenji

1. 略歴

1981年3月	東京大学大学院社会学研究科修士課程修了
1983年3月	東京大学大学院社会学研究科博士課程中退
1983年4月	東京大学教養学部助手
1986年4月	法政大学社会学部専任講師
1988年4月	法政大学社会学部助教授
1994年10月	東京大学文学部助教授（東京大学大学院社会学研究科担当）
1995年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授（文学部担当）
1997年4月	オックスフォード大学オリエンタル・インスティテュート研究員（海外研修）
2000年4月	同研究科文化資源学専攻助教授（形態資料学専門分野）併任
2005年3月	博士（社会学）学位 東京大学
2005年9月	東京大学大学院人文社会系研究科教授（文学部担当）
2009年6月	濱田総長下での東京大学「行動シナリオ」プロデュース会議メンバー
2011年4月	東京大学人文社会系研究科副研究科長（～2013年3月）
2015年4月	五神総長下での「東京大学ビジョン2020」起草会議メンバー
2017年4月	東京大学文学部長・人文社会系研究科長（～2019年3月）
2019年4月	東京大学執行役・副学長、文書館長、高大接続研究開発センター長（現在に至る）
2021年4月	藤井総長下での「UTokyo Compass」総長ビジョンタスクフォース座長
2022年3月	文学部を定年退職
2022年4月	東京大学未来ビジョン研究センター特任教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

文化の社会学、歴史社会学、社会意識論、社会学方法論、社会調査史

b 研究課題

概要

- (1) 歴史社会学の思想と方法。柳田国男の方法論。見田宗介の比較＝歴史社会学の再検討。
- (2) モノとしての書物をモデルとしたメディア文化の地層分析。読書空間論。絵はがき論。ケータイ電話論。個人雑誌論など。
- (3) 社会調査の社会史。日本近代における調査の実践史と方法意識の展開。
- (4) 文字テキスト以外の資料へのテキスト概念の可能性の拡大。かわら版・新聞錦絵データベースの実験、浅草公園十二階凌雲閣の研究、万年筆の歴史など。

c 概要と自己評価

2019年度からの学部演習においては、これまで私が書いてきた論考などを素材にしつつ、社会学における研究の作法などについて、三浦倫平横浜国立大学准教授とともに指導した。また大学院の演習においては、ひきつづき実践的な論文執筆をめぐる教育をおこない、本研究科の社会学・文化資源学専門分野の学生だけでなく、学際情報学府や総合文化研究科等の多様な学生の論文指導を、当該学生が自発的に選んだテーマにそって実施した。また、かねてその総体を論じる必要があると考えていた、戦後社会学における見田宗介の仕事の意義について、『真木悠介の誕生』の一冊にまとめる作業を進めることができた。学部長時代に着手したがその職務にまぎれ、続く執行役・副学長としての業務にも時間を奪われたが、コロナ禍での在宅勤務やリモート授業が増加したことが追い風になった。その草稿の一部は、学部・大学院の演習でもとりあげ、討議の素材とした。その前提となる徹底した文献収集と書誌学的な確認は、方法論として学生たちから想定外の関心をもたれたが、自分の仕事の整理でもあった『葦を編む』の編集にも活かされ、愛書家の個人雑誌復刻に寄せた解説でもその重要性の一端に触れた。見田宗介先生のだれも予測していなかった突然の逝去の前に、

『真木悠介の誕生』の一冊をお目にかけることができたのは、駒場での全学一般教養ゼミナールで教えを受けて以来の学恩に対する、私自身のせめてもの報恩であったと感じている。

d 主要業績

(1) 著書

単著、佐藤健二、『真木悠介の誕生：人間解放の比較=歴史社会学』、弘文堂、2020.11

単著、佐藤健二、『문화자원학』、朴東誠訳、보고사、2021.2

単著（編）、佐藤健二、『葦を編む：佐藤健二の仕事』、自刊、2022.3

(2) 論文

佐藤健二、「公共圏ともうひとつの身体」、花田達朗『公共圏』（花田達朗ジャーナリズムコレクション第3巻）、彩流社、pp.396-406、2020.5

佐藤健二、「戸田貞三と日本の社会学：家族研究と社会調査」、吉見俊哉・森本祥子編『東大という思想：群像としての近代知』、東京大学出版会、pp.183-202、2020.8

佐藤健二、「文化資源学の作法：「個室」の成立と変貌に焦点をあてて」、東京大学文科資源学研究室編『文化資源学：文化の見つけかたと育てかた』、新曜社、pp.50-66、2021.10

佐藤健二、「序に代えて：歴史社会学・再考」、赤川学・祐成保志編『社会の解読力（歴史編）：現在せざるものへの経路』、新曜社、pp.i-x、2022.3

佐藤健二、「序に代えて：文化社会学の力」、出口剛司・武田俊輔編『社会の解読力（文化編）：生成する文化からの参照』、新曜社、pp.i-x、2022.3

(3) 解説・啓蒙

佐藤健二、「千字で語るコロナ論：社会不安とは異なるアマビエ・ブームの理由」、『淡青』、41号、p.23、2020.9

佐藤健二、「研究助成プログラム「社会の新たな価値の創出をめざして」が踏みこんだもの」、『研究助成プログラム総括報告書：社会の新たな価値の創出をめざして』、公益財団法人トヨタ財団、pp.25-30、2021.6

佐藤健二、「もしもしの変貌／The Transmutation of Moshi Moshi」、『KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭 2021 Autumn』実行委員会事務局、2021.9

佐藤健二、「「民間学」の水脈に向けたボーリング調査」、『斎藤昌三編集『おいら』→『いもづる』：郷土研究的趣味雑誌の1920～1941年』、パンフレット、金沢文圃閣、2022.1

佐藤健二、『「文化資源学講義」／"Lectures and Essays in Cultural Resource Studies"』UTokyo BiblioPlaza (https://www.u-tokyo.ac.jp/biblioplaza/ja/E_00082.html)

佐藤健二、『「真木悠介の誕生」／"The Birth of Yusuke Maki - A Comparative-Historical Sociology of Human Liberation"』、UTokyo BiblioPlaza (https://www.u-tokyo.ac.jp/biblioplaza/ja/G_00069.html)

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

静岡県立大学非常勤講師、2019～2021年度

(2) 学会

日本社会学会、文化資源学会、関東社会学会、都市社会学会、社会調査協会

教授 白波瀬 佐和子

SHIRAHASE, Sawako

1. 略歴

1997年	オックスフォード大学 University of Oxford (社会学)・社会学博士
1997年4月	国立社会保障・人口問題研究所室長
2003年4月	筑波大学大学院システム情報工学研究科助教授
2006年4月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授 (社会学)
2010年8月	東京大学大学院人文社会系研究科教授 (社会学)

2. 主な研究活動

a 専門分野

社会階層論、人口社会学、計量分析

b 研究課題

主な研究課題として次の4つに取り組んでいる。

- (1) 少子高齢社会の不等構造
- (2) 社会的、私的移転に関する実証研究
- (3) 資産の不平等に関する実証研究
- (4) 社会階層と移動に関する実証研究

c 概要と自己評価

人口高齢化と階層格差に関する研究を中心に進めている。2015年に実施した「社会階層と社会移動に関する全国調査」(SSM調査)プロジェクトの成果として、3巻本のシリーズとして『少子高齢社会の階層構造』(東京大学出版会)を2021年に刊行した。また、成果の国際発信のため、英文書籍 *Social Stratification in the Aged Society with a Low Fertility, Japan* の刊行に向けて作業をしている。2010年以来追跡をしている「中高年者の生活実態に関する継続調査」を、特別推進研究(18H05204)のもと、第6ウェーブを2020年に実施し、新型コロナ・ウイルス感染症拡大に伴う変化を明らかにするため、2020年5月に追加調査を実施した。

また、2021年10月からは、国連大学との関連でSDGsに関連する政策研究も企画を進めている。以上、研究活動は予定どおり進行している。

d 主要業績

(1) 著書

白波瀬佐和子(監修)、『シリーズ 少子高齢社会の階層構造 1~3』、東京大学出版会、2021

(2) 論文

Shirahase, Sawako, 「Social Stratification Theory and Population Aging Reconsidered」、『Social Science Japan Journal』24(2): 277-288、2021

白波瀬佐和子、「超高齢社会の不等 富からみる階層格差」、有田・数土・白波瀬(編著)『人生後期の階層構造』(東京大学出版会)、pp. 217-234、2021

白波瀬佐和子、「超高齢社会の再分配と包摂的成長」、『経済分析』第203号、252-281、2021年

(3) 学会発表

国内、白波瀬佐和子、「超高齢社会の経済格差—富の不等に着目して—」、数理社会学会、オンライン、2020.9.21

国内、白波瀬佐和子、「私的移転からみる階層格差—親子の仕送りに着目して—」、日本社会学会、オンライン、2020.10.31

国内、白波瀬佐和子、「コロナ禍での生活変化に関する認識のジェンダー差に関する一考察」、家族社会学会、オンライン、2021.9.4

国内、白波瀬佐和子、「再分配政策からみた超高齢社会の包摂への課題」日本社会学会、オンライン、2021.11.13

国際、Shirahase, Sawako, 「Families and Wealth Accumulation in Japan: How Is Wealth Passed on between Generations?」、the Forum of Sociology, International sociological association、on line、2021.2.23

国際、Shirahase, Sawako, Ryota Mugiya, and Hiroshi Ishida, 「Do the Impacts of Class Origin on Class Destination Persist throughout the Life Course? Gender Differences in Intergenerational Mobility in Japan」、The International Sociological Association, RC28、on line、2021.6.2

(4) 啓蒙

白波瀬佐和子、「世帯の縮小と社会保障」、『企業年金』、4月号、16-19頁、2021.4

白波瀬佐和子、「コロナ禍で浮き彫りになった男女共同参画の課題」、『法律のひろば』、7月号、45-52頁、2021.7

白波瀬佐和子、「人口減少する格差社会」、『世界』、8月号、111-119頁、2021.8

白波瀬佐和子、「コロナ禍で女性が置かれた状況と課題」、『Business Labor Trend』10月号、11-14頁、2021.10

(5) 会議主催(チェア他)

国内、国際シンポジウム「持続可能な社会のための科学と技術に関する国際会議2020」、実行委員長、「グローバル時代の包摂を考える—COVID19後の持続可能な社会—」、日本学術会議 オンライン、2020.9.3~2020.9.4

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

特別講演、日独センターベルリン (JDZB)、「Impact of COVID-19 Pandemic on Gender Equality in Japan」、2021.3

特別講演、日仏会館 (Lunch Seminar on Japanese Economy and Society)、「Women and COVID-19: A Serious Impact on Work and Family」、2021.3

特別講演、日本学術会議東北地区、「人生 100 年時代の高齢就労：格差拡大か縮小か」、2021.9

内閣府男女共同参画局「コロナ下の女性への影響と課題に関する研究会」座長

教授 **赤川 学** AKAGAWA, Manabu

1. 略歴

1990年3月 東京大学大学院社会学研究科社会学修士課程修了
1995年4月 東京大学大学院社会学研究科社会学博士課程単位取得退学
1995年4月 信州大学人文学部人間情報学科文化情報論講座助手
1999年4月 岡山大学文学部行動科学科社会学・文化人類学講座講師
2001年4月 岡山大学文学部行動科学科社会学・文化人類学講座助教授
2002年4月 信州大学人文学部人間情報学科文化情報論講座助教授
2006年4月 東京大学大学院人文社会系研究科社会学専門分野助教授
2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科社会学専門分野准教授
2018年11月 東京大学大学院人文社会系研究科社会学専門分野教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

社会問題の社会学

歴史社会学

b 研究課題

セクシュアリティの歴史社会学

人口減少社会論

社会問題の構築主義アプローチ

社会関係資本の実証的分析

c 概要と自己評価

概要:以下の領域を中心に研究を進めている。

- (1) 社会問題プロセスの理論化
- (2) 近代日本におけるセクシュアリティをめぐる言説の変容
- (3) 歴史社会学の方法論
- (4) 猫社会学の理論と方法の確立
- (5) 社会関係資本の測定

自己評価

(1)に関しては、少子化問題に関する単著『少子化問題の社会学』を2018年に刊行したあと、少子化対策の形成プロセスや評価に関する社会的発信を試みている。また少子化の発生するメカニズムを高田保馬の理論に基づいて説明する単著論文「高田少子化論の進化論的基盤」を公刊した。少子化問題の理論的検討については、これで一区切りできたと考えている。(2)に関しては、明治期初頭の性科学書『造化機論』に関する研究を継続しつつ、オナニーに関する言説の歴史に関する単著『なぜオナニーはうしろめたいのか』を公刊した。この課題は今後も継続していく。(3)については、歴史社会学の方法論として、佐藤健二の『流言蜚語』を評価する論考を執筆するとともに、歴史社会学に関する論文集『社会の解読力 (歴史編)』を編集した。(4)については、猫と人間の関係の進化を文明論・ポストヒューマン社

会学の観点から分析する、猫社会学の理論と方法の確立を目指した取り組みに着手した。(5)については社会関係資本が健康や幸福感に与える影響を測定しつつ、これが福祉社会学にとって有する意味について解説した。

d 主要業績

(1) 著書

共著、赤川学、「ソーシャル・キャピタルと福祉」(単著)、武川正吾他編『よくわかる福祉社会学』138-139、ミネルヴァ書房、2020.10

共著、赤川学、「猫ブームの理由」(単著)、東京大学広報部編『猫と東大。』116-119、ミネルヴァ書房、2020.11

編著、桜井芳生・赤川学・尾上正人、『遺伝子社会学の試み』、日本評論社、2021.3

共著、赤川学、「高田少子化論の進化論的基盤」(単著)、桜井芳生・赤川学・尾上正人、『遺伝子社会学の試み』61-76、日本評論社、2021.3

共著、赤川学・小堀善友・シオリヌ、『なぜオナニーはうしろめたいのか』、2021.10

共著、赤川学、「猫と人間の未来を構想する猫社会学」(単著)、松原宏・地下誠二編『日本の先進地域と地域の未来』82-84、東京大学出版会、2022.2

編著、赤川学・祐成保志編、『社会の読解力〈歴史編〉』、新曜社、2022.3

共著、赤川学、「歴史社会学の作法の凄み—『流言蜚語』について」(単著)、赤川学・祐成保志編、『社会の読解力〈歴史編〉』201-217、新曜社、2022.3.9

(2) 論文

赤川学、「「オナニーの自由」考」、『月刊WILL』、2、298-306頁、2021.12

(3) 書評

ジョン・グレイ、『猫に学ぶ』、みすず書房、『沖繩タイムス』、2022年1月15日、16面頁、2022.1

(4) 学会発表

国内、赤川学、「「川崎市の地域包括ケアシステムに関する市民意識・実態調査」の新展開?——社会関係資本は孤立を防ぐか——」、日本社会関係資本学会、A4【公募パネル】、コミュニティ・カルテ調査が明らかにした幼児期から高齢期までのリスク連鎖と対応策、オンライン、2021.3.20

国内、赤川学、小西祥子、仮屋ふみ子、森木美恵、「日本人の性行動の経時的変化」、第73回日本人口学会企画セッション2、2021.6.5、東京大学

国内、赤川学、「自殺に関する指定発言」、新型コロナウイルス(COVID-19)の世界的流行下における自殺予防・自死遺族支援のための学際的・共同研究集会、統計数理研究所、2021.10.30

国際、Akagawa, Manabu “The transformation of sexual behaviours after COVID-19”, The 1st UN-TNU sociology joint Forum, Online, 2021.11.6

国内、赤川学、「アイデンティティへの自由/アイデンティティからの自由」、日蓮宗現代宗教研究所発表大会、オンライン、2021.11.26

国内、赤川学、「社会関係資本は性行動を活発化するか」、日本社会関係学会第2回研究大会(JASR2022)、C2【公募報告4】、ソーシャル・キャピタルと健康・福祉、オンライン、2022.3.17

(5) 啓蒙

赤川学、「少子化は国難ではない」、『文藝春秋オピニオン:2021年の論点100』、166-7、2021.1

赤川学、「研究内容:オリジナリティの見つけ方」、国際交流基金次世代日本研究者協働研究ワークショップ、オンライン、2022.1.28

(6) マスコミ

「なぜ日本の少子化対策は「大失敗」だったのか?」、『現代ビジネス』、講談社、2020.9.29

「女性活躍推進も効果なし、「少子化対策」が少子化を加速?」、『日経ビジネス』Web版、2020.10.23

「官製の脅し、逆効果の恐れ」、『朝日新聞』、朝日新聞社、2020.11.7

「少子化、解決策はあるか 東大教授が勧める明石家さんまの名言」、『毎日新聞』、2022.1.1

(7) 翻訳

監訳・個人訳、ジョエル・ベスト、“Social Problems”、赤川学、『社会問題とは何か』、筑摩書房、2020.11

監訳・個人訳、ケン・プラマー、“Sociology: the basic”、赤川学、『21世紀を生きる社会学の教科書』、筑摩書房、2021.1

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本社会学会、庶務理事、2021.11~

(2) 他機関での講義等

非常勤講師、慶應義塾大学文学部「社会問題の社会学」、2016.9～

教授 出口 剛司 DEGUCHI, Takeshi

1. 略歴

1993年3月 一橋大学社会学部卒業
1994年4月 東京大学大学院 社会学研究科社会学専攻 修士課程入学
1996年3月 同 人文社会系研究科社会文化研究専攻 修士課程修了
1996年4月 同 博士課程進学
2001年3月 同 博士課程単位取得退学
2001年4月 博士(社会学)学位取得(東京大学)
2001年4月 立命館大学産業社会学部助教授(～2007年3月)
2005年9月 フランクフルト大学社会研究所客員研究員(～2006年9月)
2007年4月 立命館大学産業社会学部准教授(～2008年3月)
2008年4月 明治大学情報コミュニケーション学部准教授
2011年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2020年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

理論社会学 社会学史研究

b 研究課題

- (1) フランクフルト学派の学説史研究
- (2) コミュニケーション理論、承認理論に基づく批判的社会理論の展開
- (3) 日本の社会学史の再評価と海外への紹介

c 概要と自己評価

- (1) エーリッヒ・フロムの理性概念とそれに基づく社会批判の再構成を行っている。その成果を国際エーリッヒ・フロム協会主催の国際会議で報告、論文として発表した。現在は後期フロムのナルシシズム論の再評価を行う一方、後期ヒューマニズムを生成の哲学の観点から再構成する作業に取り組んでいる。
- (2) 現代資本主義の構造的特質を理論的に解明する。「資本主義的近代化のパラドックス」や現代社会がかかえる社会病理の諸相を承認論、コミュニケーション論の観点から分析している。
- (3) 欧米の社会学理論を背景に戦後日本で発展した社会学理論の独自性に注目し、その現代的意義を再評価すると同時に、国際会議の場で世界に発信している。

d 主要業績

(1) 論文・著作

『東大教授十小時教會你大學四年的社會學』、五南出版、2020年、226頁

(2) 学会発表

「社会認識のアーカイヴスとしての日本社会学史一家族・地域・市民社会から戦後日本を読み解く」(コーディネーター及び司会)、2021年6月、第60回日本社会学史学会・大会シンポジウム(東京大学・オンライン開催)

「世界関係の社会学とポスト・ヒューマン社会における猫社会学」、2021年11月、第94回日本社会学会大会・テーマセッション「猫社会学の理論と方法」(東京都立大学・オンライン開催)

(3) 翻訳

Stephan Moebius, "History of Sociology in German Speaking Countries since 2000" 「2000年以降のドイツ語圏諸国における社会学史」、『社会学史研究』43号、2021年：59-79(高艸賢との共訳)

(4) その他

- 「理論はいかにして自由な空間を切り拓くのか」(書評 榎村愛子著『この社会で働くのはなぜ苦しいのか』)、『現代社会学理論研究』14号、2020年:113-117
- 「大会シンポジウム『ヨーロッパ社会学』に寄せて」、『社会学史研究』第42号、2020年:3-6
- 「座談会」『今、学説史研究の未来と可能性を考える 齋藤史朗・佐藤典子・橋本直人・渡會知子・出口剛司』(司会)、『社会学史研究』43号、2021:19-40

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

- 非常勤講師、明治大学大学院情報コミュニケーション研究科、「社会的人間論」、2013.4～
- 非常勤講師、明治大学情報コミュニケーション学部、「コミュニケーション基礎」、2013.4～
- 非常勤講師、立教大学社会学部、「社会学史」、2013.4～
- 非常勤講師、中央大学法学部、「現代社会理論」、2013.9～2021.3

(2) 学会

- 日本社会学理論学会理事・編集委員会委員長(2020～2022年)、編集委員会専門委員(2018～2020年)
- 日本社会学史学会研究担当理事(2017～2020年)、同開催校理事(2020～2021年)
- 関東社会学会理事・研究委員会委員(2019～2020年)、同大会開催校理事(2021年)
- 関東社会学会編集委員会委員(2017～2019年)
- 日本社会学会研究委員会委員(2017年(開催校)、2019～2021年)日本社会学会代議員(2020年～)

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

- 明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター、運営委員(学外委員)、2012.1～

准教授 祐成 保志 SUKENARI, Yasushi

1. 略歴

- 1997年3月 東京大学文学部行動文化学科社会学専修課程卒業
- 1997年4月 東京大学大学院人文社会系研究科社会文化研究専攻修士課程入学
- 1999年3月 同 人文社会系研究科社会文化研究専攻修士課程修了
- 2001年4月 日本学術振興会特別研究員(DC2、～2003年3月)
- 2002年3月 東京大学大学院人文社会系研究科社会文化研究専攻博士課程単位取得退学
- 2004年4月 札幌学院大学社会情報学部講師
- 2005年5月 博士(社会学)学位取得(東京大学)
- 2006年4月 札幌学院大学社会情報学部助教授
- 2007年4月 信州大学人文学部准教授
- 2012年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授
- 2019年4月 ブリストル大学政策研究院客員研究員(～2019年9月)

2. 主な研究活動

a 専門分野

コミュニティの社会学、ハウジングの社会学、社会調査史

b 研究課題

- (1) 建造環境と社会構造の関係についての理論的・経験的研究
- (2) 国際的な社会調査史

c 概要と自己評価

(1) 2000年代半ばに日本の住宅政策に導入された「居住支援」の概念を中心に研究を進めた。この概念は、居住保障におけるサービスの重要性を示唆している。そこで、「ベーシックサービス」あるいは「ベーシックアセット」という政策構想において居住がどのように扱われているのかを検討し、共著書、論文、報告書等で成果を発表した。(2) 社会学において経験的な調査の方法が形成される過程で、ハウジングとコミュニティがどのように対象化されてきたかを、長期的な研究課題としている。今期は、1940～50年代のアメリカにおける計画的コミュニティの調査について、とくに戦時期の強制移住に着目して探索を進め、編著のなかで成果を発表した。

d 主要業績

(1) 著書

共著、Judd, B., Tanoue, K. and Liu, E.(eds), Ageing in Place, Edward Elgar, Sukenari, Yasushi, Ageing and the Concept of Fair Housing in the Japanese Context, pp.180-193, 2020.11

共著、上村泰裕・金成垣・米澤旦編、『福祉社会学のフロンティア：福祉国家・社会政策・ケアをめぐる想像力』ミネルヴァ書房、祐成保志「社会政策としての住宅政策・再考」、139-155頁、2021.11

編著、赤川学・祐成保志編、『社会の読解力（歴史編）』、新曜社、祐成保志、「コミュニティを統治する」、177-200頁、2022.3

(2) 論文

祐成保志、「居場所を支える多様なアセット」、『DIO：連合総研レポート』、連合総合生活開発研究所、34(9)、14-18頁、2021.9

祐成保志、「変化に抗する都市」、『建築雑誌』、日本建築学会、1756、9-10頁、2021.12

(3) 学会発表

国内、祐成保志、「移民の社会的統合に向けた課題」、2020年度日本不動産学会シンポジウム「国際化に対応した不動産政策」、オンライン、2020.9.16

国内、祐成保志、「討論者からのコメント」、第73回早稲田社会学学会シンポジウム「東日本大震災後10年間の被災地、住民と社会学」、オンライン、2021.7.3

(4) その他

インタビュー、古橋広樹・祐成保志、「多文化共生都市・浜松市の取り組み」、『都市住宅学』、都市住宅学会、110、45-50頁、2020.7

シンポジウム記録、阿部治子・井出多加子、祐成保志、藤井さやか、板垣勝彦、「国際化に対応した不動産政策」、『日本不動産学会誌』、日本不動産学会、34(3)、4-19頁、2020.12

座談会、祐成保志・山道拓人・千葉元生・西川日満里、「インフォーマルな場のつくり方」、『新建築』、新建築社、96(2)、37-41頁、2021.2

シンポジウム記録、祐成保志、「まちづくりの重層的な文脈」、『関東都市学会年報』、関東都市学会、22、6-8頁、2021.3
書評、大谷信介著『都市居住の社会学』、『地域社会学年報』、地域社会学会、33、77-78頁、2021.6

シンポジウム記録、祐成保志、「復興過程における居住の社会学的研究の課題」、『社会学年誌』、早稲田社会学会、63、61-65頁、2022.3

報告書、祐成保志、「対話記録(3)」、「『居住支援の相談体制の充実に向けた調査研究』地方公共団体における福祉部局・住宅部局の連携による住まいに関するモデル事業報告書」、大牟田市、98-107頁、2022.3

報告書、「イギリスのハウジングマネジメント」「住宅政策から居住保障政策へ」、『『包括的居住支援の確立に向けた調査及び研究』2021年度報告書』、全国居住支援法人協議会、50-54・87-96頁、2022.3

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、日本女子大学大学院家政学研究科、「住居学特論Ⅲ」、2020.10～2021.3

非常勤講師、中央大学法学部、「社会学1・2」、2021.4～2022.3

非常勤講師、早稲田大学教育学部、「公共市民学研究（社会調査）」、2021.4～2021.9

(2) 学会

国内、日本生活学会、編集委員、2014～

国内、日本社会学会、『社会学評論』編集委員、2021～

国内、日本生活学会、理事、2016～

国内、都市住宅学会、編集委員、2018～、理事、2020～

1. 略歴

1998年3月	東京大学文学部行動文化学科社会学専修課程卒業
1998年4月	東京大学大学院人文社会系研究科社会文化研究専攻修士課程入学
2000年3月	同 人文社会系研究科社会文化研究専攻修士課程修了
2000年4月	同 博士課程進学
2003年3月	同 博士課程単位取得退学
2003年4月	日本学術振興会特別研究員 (PD)
2006年3月	博士 (社会学) 学位取得
2006年4月	お茶の水女子大学文教育学部 講師
2007年4月	信州大学医学部保健学科 講師
2011年5月	奈良女子大学生活環境学部生活文化学科 准教授 (～2012年3月)
2012年4月	奈良女子大学大学院生活環境科学系生活文化学領域 准教授
2018年10月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

医療社会学 ケアの社会学 認知症研究

b 研究課題

- (1) 認知症をめぐるケア・支援・運動の展開に関する経験的研究
- (2) 障害学・医療社会学と批判的老年学の接点に関する理論的研究
- (3) 遺伝性疾患保因者の経験・アイデンティティ・社会関係に関する経験的研究

c 概要と自己評価

(1) に関しては、日本における認知症ケア実践や当事者を中心とした活動に関するデータを医療社会学や障害学の概念を援用しながら分析して、2020年度に単著の形で出版し、ここ10年にわたる研究成果をいったん総括することができた。(2) に関しては、(1) で援用した障害学や医療社会学における障害の社会モデルや医療化などの枠組みの理論的再検討や、国際的な認知症研究の動向把握を行いながら、日本における現象の国際的な批判的認知症研究・老年学研究の問題設定の中への位置付けを試み始めており、今後の国際発信の一歩を踏み出した。(3) に関しては、以前の患者調査を踏まえ、血友病患者の家族・親族における推定保因者に対するインタビュー調査を患者団体・関連研究者と2019年度から継続しており、2020年度と21年度は最終成果報告に向けて研究グループ内での研究会を行ってきた。2022年度以降により詳細な分析と成果報告を行っていく予定である。

d 主要業績

(1) 著書

単著、井口高志、『認知症社会の希望はいかにひらかれるのか：ケア実践と本人の声をめぐる社会学的探求』、晃洋書房、284頁、2020.8

共編著、武川正吾・森川美絵・井口高志・菊地英明、『よくわかる福祉社会学』、218頁、ミネルヴァ書房、2020.10 (執筆担当箇所：井口高志「ケアとはなにか」「親密圏とケアラー支援」「社会運動と福祉」「当事者参加」「セルフヘルプグループとピアサポート」「質的研究」「当事者研究とアクションリサーチ」「研究倫理」)

(2) 論文

井口高志、「ケアできない『原罪』：家事・育児をめぐる煩悶とこの10年」、『支援』編集委員会、『支援 vol.10』、生活書院、4-22頁、2020.5

井口高志、「認知症との共生の社会学：予防と備えの対比から考える」、『老年精神医学雑誌』、32(2)、200-6、2021.3

井口高志、「認知症の人による〈当事者宣言〉は何に對抗し誰を包摂するのか？：分断に抗することと認知症カテゴリーの行方」、櫻田美雄・小川伸彦編、『〈当事者宣言〉の社会学：言葉とカテゴリー』、東信堂、202-26頁、2021.4

井口高志、「認知症新時代の福祉社会学的課題：ケアと承認をめぐる」、上村泰裕・金成垣・米澤旦編、『福祉社会学のフロンティア：福祉国家・社会政策・ケアをめぐる想像力』、ミネルヴァ書房、175-90頁、2021.11

井口高志、「認知症ケアにおける「地域社会」：介護・介助の範囲をいかに見るべきか?」、『都市問題』、112(12)、50-8頁、2021.12

(3) 書評

猪瀬浩平、『分解者たち：見沼たんぼのほitoriを生きる』（書評タイトル：『声を聴く』）のではなく：遍在する分解を呼び起こすために）、『支援』編集委員会、『支援 vol.10』、生活書院、240-7 頁、2020.5

木下衆、『家族はなぜ介護してしまうのか：認知症の社会学』、『ソシオロジ』、126-134、2020.10

海老田大五朗、『デザインから考える障害者福祉：ミシンと砂時計』（書評タイトル：「ブックガイド：デザインの門を恐る恐るくぐってみると」）、『支援』編集委員会、『支援 vol.11』、生活書院、226-8 頁、2021.5

(4) その他

井口高志、『よくわかる福祉社会学』／”An introduction to Welfare Sociology”、UTokyo BiblioPlaza (https://www.utokyo.ac.jp/biblioplaza/ja/G_00071.html)

井口高志、『血友病患者を家族にもつ女性のケア経験の諸相』、患者・家族調査研究委員会編著、『血友病と周辺女性の経験に関する研究：中間報告書』、特定非営利活動法人ネットワーク医療と人権〈MERS〉、16-18 頁、2021.4

井口高志、『新幹線はいちばんはやい？』、『支援』編集委員会、『支援 vol.11』、生活書院、226-28 頁、2021.5

鈴木雄、井口高志、岩永理恵、土屋葉、『移動という自由を得る難しさ』（鈴木雄へのインタビュー）、『支援』編集委員会、『支援 vol.11』、生活書院、155-61 頁、2021.5

(5) 学会発表

国際、Iguchi Takashi, Rethinking the Conflict between Prevention and Preparedness: Toward a Sociology of Living with Dementia, UT-NTU Sociology Forum 2021, 2021.11.6

国内、井口高志、『認知症社会の希望はいかにひらかれるのか：認知症の予防・備え・共生をめぐる議論から考える』、日本認知症ケア学会 2021 年度東北ブロック大会、2021.11.19

(6) 会議主催（チェア他）

国内、『福祉社会学学会第 19 回大会』、チェア、支援と支援者、2021.6.19～2021.6.20

国内、認知症政策プロジェクト 専門家会合、『介護保険制度創設から 20 年を経て考える「健康長寿社会に求められる介護システム」の在り方』、2021.12.20

(7) マスコミ

町永俊雄、『認知症社会』を読み解く人たち ふたりの研究者がすごい』、『認知症 EYES 第 153 回、認知症フォーラム.com』、2020.9.25

「東京大学人文社会系研究科社会学研究室准教授の井口高志先生にインタビューしました！」、『きらケア きらっこノート』、2020.10.1

大治朋子、『火論 『する』から『ある』へ』、『毎日新聞 東京朝刊』、2021.3.16

(8) 受賞

国内、第 6 回福祉社会学学会賞・学術賞、福祉社会学学会、2021.8

(9) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、研究代表者、『地域共生社会における『意思』と『主張』をめぐる人びとの『支援実践』の領域横断研究』、2020～

文部科学省科学研究費補助金、研究分担者、『100 年人生対応の包摂型地域創出のための統合型地域診断に基づく地域再生手法の研究』、2021～

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

特別講演、信州大学医学部保健学科、『ヒューマンセクシュアリティ』、2020.11.19

セミナー、塩飽海賊団、『認知症社会の希望はいかにひらかれるか？（書評セッション）』、2021.1.25

セミナー、塩飽海賊団、『認知症の予防・備え・共生について、社会学の視点から考える』、2021.3.12

セミナー、塩飽海賊団、『ケアと家事を考える：感覚的活動 (Sentient Activity)、認知的労働 (Cognitive Labor) という概念から』、2021.4.26

国内、認知症政策プロジェクト 専門家会合、『介護保険制度創設から 20 年を経て考える『健康長寿社会に求められる介護システム』の在り方』、シンポジスト、2021.12.20

国内、コロナ ELSI ナイト：みんなで倫理的法的社会的課題を考える、地域包括ケア班スピーカー、2021.3.25

(2) 学会

国内、関西社会学学会、機関誌『フォーラム現代社会学』専門委員（査読委員）、2020.4～

国内、日本保健医療社会学会、学術雑誌専門委員（査読委員）、2020.9～2021.3、『保健医療社会学論集』編集委員・理事、2021.5～

国内、福祉社会学会、副事務局長・理事、2021.6～

国内、日本社会学会、社会学評論編集委員会専門委員、2022.3～

(3) 行政

省庁、日本学術会議、科学技術政策、第24期外部評価有識者、2020.4～2022.3

省庁、日本学術会議、科学技術政策、国際委員会国際対応戦略立案分科会外部有識者、2022.3～

(4) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

日本総合研究所、経済産業省サービス強化事業費補助金（認知症共生社会に向けた製品・サービスの効果検証事業）における審査委員会および評価委員会委員、2020.6～2022.3

日本医療政策機構、認知症政策プロジェクト「健康長寿時代の介護システムの構築に向けた『介護』の再定義」2021年度タスクフォースメンバー、2021.8～2022.3

准教授 高谷 幸 TAKAYA, Sachi

1. 略歴

- 2001年3月 神戸大学法学部法律学科卒業
- 2001年4月 京都大学大学院人間・環境学研究科環境相関専攻博士前期課程入学
- 2003年3月 同修了
- 2003年4月 京都大学大学院人間・環境学研究科共生文明学専攻博士後期課程進学
- 2007年3月 同 研究指導認定退学
- 2007年7月 移住労働者と連帯する全国ネットワーク専従事務局員（～2009年3月）
- 2009年4月 日本学術振興会特別研究員（PD）（～2011年9月）
- 2010年3月 博士（人間・環境学）学位取得
- 2011年10月 岡山大学大学院社会文化科学研究科准教授（～2016年9月）
- 2016年10月 大阪大学大学院人間科学研究科准教授（～2021年3月）
- 2021年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

国際社会学・移民研究

b 研究課題

- (1) 在日移民の帰属と排除に関する経験的・理論的研究
- (2) 日本における移民政策・実践についての経験的・理論的研究

c 概要と自己評価

(1) に関しては、移民女性の帰属についてこれまで実施してきたインタビューをまとめつつ、理論的検討を行い、その成果を学会で報告した。また非正規移民の帰属と排除に関する論文を執筆した。(2) については、2018年の入管法改正の政策過程に関してインタビュー調査を実施するとともに、学会報告を行った。また移民の共生/統合をめぐる関連論文を執筆するとともに、ジャーナルの特集号を企画した。さらに2021年度は、大阪の多文化共生施策と実践について主催してきた共同研究の最終年度にあっていた。そのため、研究の集大成としてオンラインシンポジウムを実施するとともに、編著を発行した。

d 主要業績

(1) 論文・著作

- 単著、高谷幸、「移民・多様性・民主主義——誰による、誰にとっての多文化共生か」岩渕功一『多様性との対話』、青弓社、pp.68-92、2021
- 単著、高谷幸、「移民の統合／共生をめぐる理念・再考」『理論と動態』13、pp.9-11、2021
- 単著、高谷幸、「時間への関与と現代日本におけるメンバーシップの境界」『対抗言論』2、pp.344-352、2021
- 編著、高谷幸編著、『多文化共生の実験室：大阪から考える』青弓社、p.298、2022
- 共著、Higuchi, Naoto, Takaya, Sachi and Inaba, Nanako, “Poverty of migrants in Japan,” Sakai, Kazunari and Lanna, Noemi eds., *Migration governance in Asia: A multi-level analysis*, Routledge, pp.61-80, 2022
- 単著、高谷幸、「入管収容所とは何か」『文化交流研究』35、pp.59-67、2022

(2) 学会・研究会報告

- 高谷幸、「移民の帰属に関する理論」日本社会学会、2020年11月1日、オンライン
- TAKAYA Sachi, “A Place of belonging or experiencing domination?: Negotiating making a "home" for migrant women with intermarriage status in Japan,” *IVISA Forum of Sociology*, 21. 2. 26, online.
- TAKAYA Sachi, “A step to liberal democratic membership or refinement of developmental membership?: The meaning of new residential status in Japan,” 16th International Conference of the *European Association of Japanese Studies*, 2021. 8. 26, online.
- TAKAYA Sachi, “Stepped developmental membership and its effects: Considering the new residential status in Japan,” *The 2nd Congress of East Asian Sociological Association*, 21.10.30, online.
- 高谷幸、「多文化共生の大阪モデルとは」『多文化共生の実験室：大阪から考える』出版記念シンポジウム 大阪の教育、子ども・若者支援から「多文化共生」を考える、2022.3.27、オンライン

(3) その他

- 高谷幸、「共感と想像力のあわいで」、『We learn』801、p.3、2020.8
- TAKAYA, Sachi, “Japan today and the German experience,” *MINPAKU Anthropology Newsletter*, 50, pp.6-7、2020.10
- 高谷幸、「公正な移民社会を実現するために」、『労働の科学』75(10)、pp.4-38、2020.10
- 高谷幸、「外国人市民の安全・安心な暮らしのために—検討会議委員長からの意見」、八尾市人権文化ふれあい部 文化国際課『八尾市外国人市民情報提供等ニーズ調査報告書』、pp.61-64、2021.3
- 高谷幸、「“the people”を考えませんか」、『BIG ISSUE』406、p.10、2021.4
- 高谷幸、「(ひもとく) 入管行政を問う 民主的統制難しい 構造的欠陥」、『朝日新聞』、2021.5.29
- 高谷幸、「働くことの豊穡な糧」、『BIG ISSUE』421、p.11、2021.12
- 高谷幸、書評・清水睦美他著『日本社会の移民第二世代——エスニシティ間比較でとらえる「ニューカマー」の子どもたちの今』、『図書新聞』、2022.1
- 高谷幸、「外国人市民の経済生活におけるコロナの影響」豊中市・財団法人とよなか国際交流協会『コロナ禍における外国人市民の生活等への影響に関する調査研究報告書』 pp.112-118、2022.2
- 高谷幸、書評・川本綾著『移民と『エスニック文化権』の社会学』、『市大社会学』17、pp.28-31、2022.3

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

- 非常勤講師、大阪大学大学院人間科学研究科、2021.4～9、2022.4～9
- 講演、「移民・移民ルーツの人びとが暮らしやすい社会に変えていくために」、福岡県人権啓発情報センター 県民講座 2020、2020.8.29
- 講演、「移民・移民ルーツの人びとが暮らしやすい社会とは」、近畿大学 近畿大学人権講演会、2020.10.5-16、オンライン
- 講演、「移住(外国人)労働者の受け入れと、今後の地域まちづくり」、徳島県立人権教育啓発推進センター 人権教育啓発リーダー養成講座、2021.2.10
- 講演、「現代日本における移民の貧困」、総務省地方行財政ビジョン研究会、2021.12.13、オンライン
- 講演、「移民社会のジェンダーと貧困」、外国人住民基本法の制定を求める全国キリスト教連絡協議会(外キ協) 2022年「移民社会からのメッセージ」、2022.1.21、オンライン
- 講演、「外国人市民の経済生活におけるコロナの影響」、大阪府豊中市「コロナ禍を乗り越えるには～コロナ禍における外国人市民の生活等への影響に関する調査研究報告書から」、2022.2.20、オンライン
- 講演、「日本の移民政策の課題・未来」、ME-net フォーラム、2022.3.20、オンライン

(2) 学会

国内、社会理論動態研究所、『理論と動態』編集委員、～2020

国内、日本社会学会、社会学評論専門査読委員、2021.11～

(3) 行政

大阪府八尾市外国人市民会議副座長及び外国人市民情報提供ニーズ等調査委員会委員長、～2021.3

大阪府豊中市コロナ禍における外国人の生活等への影響に関する調査研究のための専門部会副会長、2021.4～2022.3

(4) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

特定非営利活動法人 移住者と連帯する全国ネットワーク理事、2021～

26 社会心理学

教授 亀田 達也 KAMEDA, Tatsuya

1. 略歴

1982年	東京大学文学部卒業（社会心理学専修課程）
1989年	University of Illinois at Urbana-Champaign, Ph.D. (Department of Psychology)
1989年	東京大学大学院社会学研究科博士課程退学
1989年4月	東京大学文学部助手
1991年4月	東洋大学社会学部講師
1994年4月	北海道大学文学部助教授
1997年7月	Fulbright fellowship (University of Colorado at Boulder, Northwestern University)
2000年4月	北海道大学大学院文学研究科教授
2001年8月	Deutscher Akademischer Austausch Dienst Research Fellow (Max Planck Institute in Berlin, Center for Adaptive Behavior and Cognition)
2008年8月	Residential Fellow, Center for Advanced Study in the Behavioral Sciences at Stanford University
2012年4月	北海道大学社会科学実験研究センター長（兼務）
2014年10月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

社会心理学、実験社会科学、行動生態学

b 研究課題

社会的意思決定

c 概要と自己評価

概要

人が社会場面で行うさまざまな意思決定について、以下の3つのテーマを中心に研究している。

(1) 「集合知」の認知・生態学的基盤の理解

個人のもつさまざまな情報をよりよい社会的決定のためにどのように集約するのかという問いは、21世紀の社会科学の直面する重要課題の1つである。本プロジェクトでは、近年、生物学領域と情報科学領域で大きな注目を集めている社会性昆虫の「群知能」(swarm intelligence)に関する知見を参考にしながら、人間の集合行動における「集合知」の発生可能性について検討している。人間集団において集合知の生まれる認知的・生態学的な条件について、数理モデル、コンピュータ・シミュレーション、種間比較実験、インターネット実験などを用い理論的・実証的に明らかにする。

(2) 「正義」の脳科学的・行動的基盤の理解

富や権利の配分を含む「社会のあり方」に関する価値対立は、“Occupy Wall Street”運動に示されるように、喫緊の政治的・社会的課題になっている。本プロジェクトは、「社会のあり方」に関する人間の価値判断がどのような行動・認知・神経科学的メカニズムを持つのかを検討する。人文学・社会科学で蓄積されてきた規範的理論（「あるべき行為・社会とは何か」に関する論考）との対応関係を視野に入れながら、計算論的モデリング、MRIを用いた脳画像計測、eye-trackerを用いた視線計測、末梢自律神経反応の計測、内分泌反応計測などを含む、行動・認知・神経科学の研究手法を用いて、「社会価値」がどのように獲得され、私たちの心にどのように実装されるのかを実証的に探る。

(3) 「共感性」の認知・神経基盤の理解

「ヒトの共感能力とは何か」という問いは、社会的存在としての人間を考える上で極めて重要である。痛みや恐れ・興奮が集団内で伝搬するといった「原初的な共感」は、群れ生活を営む動物が同種他個体の反応をモニターし、その反応を自らも引き受けることで、捕食者の出現などの環境変化に直ちに反応できるように身体的に準備するといった適応的機能をもつだろう。一方、ヒトに特徴的とされる「高次共感」の機能的意義についてはほとんど分かっていない。本プロジェクトでは、「痛み反応の同期化現象」を軸に、ヒトの原初的な共感と高次共感の相互作用を調べる。また、相手との関係に応じて共感性がどのように変化するのかについて、注意配分や情報探索行動、自律神経系反応の計測を軸に解析し、得られた結果を他の動物種と比較する。さらに、課題遂行中の脳活動をfMRIにより計測することで、共感の質・

量の違いと相関する脳部位を特定し、これらの脳部位の賦活パターンが行動の個人差とどのように連動するのかについても併せて解明しようとする。

自己評価

上記の3つのプロジェクトは、

- (a) 基盤研究S「集合行動の認知・神経・生態学的基盤の解明」（平成28-令和2年度）
 - (b) JST 戦略的創造研究推進事業（CREST）「脳領域／個体／集団間のインタラクション創発原理の解明と適用」（平成29年9月-令和5年3月 研究代表 津田一郎・中部大学教授）
 - (c) 科学研究費・新学術領域研究（研究領域提案型）「ヒト社会における共感性」（平成25-29年度）
- の支援を受けて行われた。いずれも、生物学・脳科学・情報科学・複雑系科学・経済学・倫理学・法哲学の研究者とのコラボレーションを軸に、PD・大学院生などの若手をチームメンバーとするプロジェクト型研究である。数年間に亘る密接な協同の結果、文理あるいは専門の壁を超えた共通理解が大きく進み、共通概念のもとに研究を展開できる段階に達している。下記に見るように、その成果の一端は、国際誌の論文や、ハンドブック・辞典のチャプターとして公刊されている。今後は新しい計測・モデル技法を取り入れつつ、コラボレーションをさらに拡充する。

d 主要業績

(1) 著書

単著、亀田達也、『連帯のための実験社会科学』、岩波シリーズソーシャルサイエンス、2022.1

(2) 論文

Murata, A., Nishida, H., Watanabe, K. & Kameda, T., 「Convergence of physiological responses to pain during face-to-face interaction」、『Scientific Reports』、10、450 頁、2020

亀田達也、「行動科学の視点から見た行動経済学」、『日本労働研究雑誌』、714、28-38 頁、2020

Jayles, B., Escobedo, R., Cezera, S., Blanchet, A., Kameda, T., Sire, C., & Theraulaz, G., 「The impact of incorrect social information on collective wisdom in human groups」、『Journal of The Royal Society Interface』、170、2020

Ogura, Y., Masamoto, T., & Kameda, T., 「Mere presence of co-eater automatically shifts foraging tactics toward 'Fast and Easy' food in humans」、『Royal Society Open Science』、7(4)、200044 頁、2020

Ueshima, A., Mercier, H., & Kameda, T., 「Social deliberation systematically shifts resource allocation decisions by focusing on the fate of the least well-off」、『Journal of Experimental Social Psychology』、92、104067 頁、2021

Ueshima, A. & Kameda, T., 「Reducing variance or helping the poorest? A mouse tracking approach to investigate cognitive bases of inequality aversion in resource allocation」、『Royal Society Open Science』、8、201159 頁、2021

小谷侑輝・齋藤美松・金恵璘・小川昭利・上島淳史・亀田達也、「分配の正義とリスク下の意思決定:効用モデルと瞳孔反応による検討」、『社会心理学研究』、37 巻第1号、2021

Kuroda, K., Kamijo, Y., & Kameda, T., 「Investor's Pessimistic and False Belief About Trustworthiness and Stake Size in Trust Decision」、『Japanese Psychological Research』、2021

Kuroda, K., & Saito, Y., 「Inequality biases third-party evaluation of decision-making for others」、『Kuroda, K., Letters on Evolutionary Behavioral Science』、12、34-38 頁、2021

亀田達也・森隆太郎、「分配の正義の社会生物学的基盤」、『日本ロボット学会誌』、40、25-28 頁、2022.1

Kameda, T., Toyokawa, W., & Tindale, R.S., 「Information aggregation and collective intelligence beyond the wisdom of crowds」、『Nature Reviews Psychology』、1、3435-357、2022

Naito, A., Katahira, K., & Kameda, T., 「Insights about the common generative rule underlying an information foraging task can be facilitated via collective search」、『Scientific Reports』、12、8047、2022

内藤碧・亀田達也、「集合知を支える社会学習過程の合理的基礎」、『認知科学』、2022

(3) 学会発表

国内、亀田達也、利他行為と外部性—「善意」が集合的福利を下げるとき 大会企画シンポジウム「自己—他者—社会の意思決定」、日本心理学会第84回大会・東洋大学、2020.9.8

国内、黒田起吏・伊藤真利子・大槻久・亀田達也、「Speed-accuracy tradeoff 状況における社会情報処理の認知過程」、日本心理学会第84回大会、2020.9.8

国内、黒田起吏・伊藤真利子・大槻久・亀田達也、「Speed-accuracy tradeoff 状況下で社会情報どのように処理されるか」、日本社会心理学会第61回大会、2020.11.7

国内、内藤碧・亀田達也、「集団での情報探索は、探索の効率性と環境の全体構造に関するメタ知識を同時に向上させるか?」、日本社会心理学会第61回大会、2020.11.7

国内、黒田起史・高橋茉優・亀田達也、「自信のないメンバーの投票による集合愚の発生」、第13回日本人間行動進化学会、2020.12.12

国内、高橋茉優・黒田起史・亀田達也、「経済格差の大小は再分配意思決定に影響するか」、第13回日本人間行動進化学会、2020.12.12

国内、金恵璘・内藤碧・犬飼佳吾・亀田達也、「罰は両刃の剣：公共財供給場面における罰システムの効果」、第13回日本人間行動進化学会、2020.12.12

国際、Kiri Kuroda, Mayu Takahashi, Tatsuya Kameda、「Unconfident voters undermine the accuracy of majority decision-making」、The 15th Annual Conference of European Human Behaviour and Evolution Association、2021.3.24

国際、Aoi Naito, Naoki Masuda & Tatsuya Kameda、「Social Network and Collective Intelligence under Non-stationary Uncertain Environment: A Group Experiment and Computer」、The 15th Annual Conference of European Human Behaviour and Evolution Association、2021.3.24

(4) 総説・総合報告

亀田達也、「行動科学の視点から見た行動経済学」、『日本労働研究雑誌』、714、28-38頁、2020

(5) 受賞

国内、亀田達也・犬飼佳吾・小川昭利・坂上雅道、日本行動経済学会 第3回ヤフー株式会社コマースカンパニー金融統括本部優秀論文賞、2020.12.13

国内、黒田起史・伊藤真利子・大槻久・亀田達也、日本心理学会第84回大会 学術大会特別優秀発表賞、日本心理学会、2020.10.20

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

理化学研究所、「人間集団の集合知をどう考えるか：実験社会科学の視点」、理研CBS-トヨタ連携センター、2020.7.16
理化学研究所、「理化学研究所における人文学・社会科学に係る科学技術の推進について：実験社会科学の視点から」、理化学研究所科学者会議、2020.10.29

法政大学、キャリアデザイン学研究会「モラルの起源を考える～実験社会科学の視点から」、2020.6.12

The 14th Biennial Conference of the Asian Association of Social Psychology Keynote address、Reducing Variance or Helping the Worst-Off? Behavioral and Neurocognitive Bases for Distributive Norms、July 30, 2021、Seoul, Korea

Virtual East Asia Experimental and Behavioral Economics Seminar Series、Invited talk、Reducing Variance or Helping the Worst-Off? Behavioral and Neurocognitive Bases for Distributive Norms、October 13, 2021、Online

東京大学ホームカミングデイ・文学部企画、「「共感」と「分断」 共感と呼ばれる現象群：認知科学・実験社会科学の視点から」、2021.10.16

Kyungpook National University, School of Economics and Trade, BK21 Seminar、Invited talk、Reducing Variance or Helping the Worst-Off? Behavioral and Neurocognitive Bases for Distributive Norms、December 22, 2021、Online

第24回実験社会科学カンファレンス・基調講演、「実験社会科学を展望する」、2022.1.23、Online

(2) 学会

社会心理学会理事、2017.3～2019.3

人間行動進化学会理事

国立研究開発法人科学技術振興機構の領域アドバイザー

(3) 行政

学術会議（第一部）、会員、2014～2020

学術会議・心理学教育学委員会、科学者委員会、心理学教育学委員会委員長、科学者委員会委員、2018～2020

学術会議（第一部）、連携会員、2020～

学術会議・心理学教育学委員会、実験社会科学分科会委員長、2018～

(4) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

Psychological Review (American Psychological Association)、Consulting Editor、2018～2021

1. 略歴

1992年	University of California, Los Angeles Ph.D
1992年	京都大学大学院文学研究科博士後期課程
1992年4月	名古屋明德短期大学講師
1995年4月	日本福祉大学情報社会科学部助教授
1999年6月	名古屋大学情報文化学部助教授
2001年4月	名古屋大学大学院環境学研究科助教授
2006年10月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2010年8月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

社会心理学

b 研究課題

- 1) 心の知覚と道徳的判断
- 2) スマートシティにおける諸技術への態度
- 3) 学際研究における社会心理学の役割—科学技術の ELSI を事例として

c 概要と自己評価

概要

- 1) 心の知覚と道徳的判断：近年の社会心理学は、私たちが道徳的事柄、公正さに関心を抱く「モラル・エージェント」であるという人間観を提出している。この研究課題は、他者の心的状態（意図・動機・態度・感情など）の推論に基づき他者を「裁き」の視線で評価し、そこでの評価に基づき、「援助、非難、許し」などの道徳的な態度・行動を他者に向けての点に着目し、モラル・エージェントを支える社会的認知過程を解明することを目指す。またその過程で、ステレオタイプの対人判断にも着目する。ステレオタイプは偏見の認知的基盤であり、しばしば他者を善悪の観点から評価することにつながる。その過程に関連する諸要因を解明し、心的状態の認知の変容が偏見的態度の低減につながる可能性、またそれを媒介する社会的認知過程を探求する。この課題については、科学研究費（基盤研究（B））により推進しており、対象を対人判断のみならず AI に対する心の知覚にも拡張している。また、ステレオタイプについては障害者、高齢者、性別に焦点を当てた検討を行っている。
- 2) スマートシティにおける諸技術への態度：本研究課題は、Society 5.0のもと、スマートシティ政策の中で導入される諸技術に焦点を当て、それに対する受容的（または非受容的）態度形成に影響する諸要因を明らかにすることを主な目的としている。日立東大ラボ・京大ラボの活動とも連携し、国内外のスマートシティ政策に関する情報収集、また、監視カメラ、健康サポートなど、プライバシー情報の収集につながる AI 活用技術や、自動運転車を対象とした調査研究を進めている。
- 3) 学際研究における社会心理学の役割—科学技術の ELSI を事例として：本研究課題では、「科学知・実践知・人文知」の融合領域として社会心理学を位置づけた上で、その立ち位置からの方法論の批判的検討を行うとともに、展開の可能性として「科学技術の ELSI」をとりあげ、主には工学や哲学領域と連携し、知見の健全な活用、成果を人々に伝達する際の諸問題についての検討を行う。本研究課題は、RISTEX でプログラム総括を務めている「科学技術の倫理的・法制度的・社会的課題（ELSI）への包括的実践研究開発プログラム（RInCA）」での活動とも連携しており、それを通じた総合知に関わる議論形成にも携わっている。

自己評価

以上の研究課題は、科学研究費、外部資金、外部法人組織での活動と連携しており、有機的に研究活動を進めている。1)については「ロボット」「人工知能」など、人以外の対象に対する心的状態の推論に議論を拡張し、応用可能性を検討するための研究プロジェクトを工学関係の研究者と遂行しているが、そこでの知見は2)での社会受容研究や、3)での科学技術の ELSI 研究とも融合させることで、社会心理学に閉じない研究活動を心掛けている。得た研究成果は学会発表、論文という形で発信しているが、その多くは大学院生との共同研究であり、後継者育成についても努力している。特に、日立東大ラボ・京大ラボなどの産学連携研究には、学部生や大学院生も参画しており、企業に所属する主には理系の研究者と共に活動することを通して、視座を広めながら、社会心理学の知見がどのように社会貢献する

ことが可能なのかについても洞察する機会を提供している。研究活動は、科学哲学、工学などの研究者と進めているが、今後は、さらに研究のネットワークを広げるとともに、他分野に対しても積極的な研究の成果発信に努め、融合的領域としての社会心理学の基盤形成に尽力したい。

d 主要業績

(1) 著書

編著、唐沢かおり、『社会的認知—現状と展望』、ナカニシヤ出版、2020

(2) 論文

Kato, T., Kudo, Y., Miyakoshi, J., Otsuka, J., Saigo, H., Karasawa, K., Yamaguchi, H., Hiroi, Y., Yasuo, D., 「Sustainability and fairness simulations based on decision-making model of utility function and norm function」、『Applied Economics and Finance』、7、96-114 頁、2020

Kato, T., Kudo, Y., Miyakoshi, M., Otsuka, J., Saigo, H., Karasawa, K., Yamaguchi, H., & Deguchi, Y., 「Rational choice hypothesis as X-point of utility function and norm function」、『Applied Economics and Finance』、7、63-77 頁、2020

唐沢かおり、「データ駆動型社会における「人間中心」に向けた課題」、『横幹』、14、24-32 頁、2020

白岩祐子・栗本真奈・唐沢かおり、「形見の意味と故人との継続する絆」、『社会心理学研究』、36、49-57 頁、2020

清水佑輔・橋本剛明・唐沢かおり、「ギャンブル障害というラベリングがもたらす否定的態度への効果」、『認知科学』、28、161-167 頁、2021.1

清水佑輔・橋本剛明・唐沢かおり、「ステレオタイプ・エンボディメント理論における理論的補完の試み—社会的アイデンティティ理論に着目して—」、『人間環境学研究』、19、9-14 頁、2021

清水佑輔・橋本剛明・唐沢かおり、「多様な精神障害に対する人々の認知：ステレオタイプ内容モデルに着目して」、『社会心理学研究』、37、36-42 頁、2021

Tham, Y. J., Hashimoto, T., & Karasawa, K., 「The effect of impression formation on rejection in the ultimatum game.」、『Letters on Evolutionary Behavioral Science』、12、12-17 頁、2021

Tham, Y. J., Hashimoto, T., & Karasawa, K., 「Social rewards in the volunteer's dilemma in everyday life」、『Asian Journal of Social Psychology』、25、117-125 頁、2021

谷辺哲史・唐沢かおり、「自動運転による事故とメーカー、ユーザーに対する責任帰属」、『実験社会心理学研究』、61、10-21 頁、2021

Shimizu, Y., Osaki, S., Hashimoto, T., & Karasawa, K., 「The social acceptance of collecting and utilizing personal information in smart cities」、『Sustainability』、13、9146 頁、2021

Shimizu, Y., Osaki, S., Hashimoto, T., & Karasawa, K., 「How do People View Various Kinds of Smart City Services? Focus on the Acquisition of Personal Information」、『Sustainability』、13、11062 頁、2021

Tham, Y. J., Hashimoto, T., & Karasawa, K., 「Underlying dimensions of benefit and risk perception and their effects on people's acceptance of conditionally/fully automated vehicles」、『Transportation』、2021

Hashimoto, T., & Karasawa, K., 「Are the powerful retributive, forgiving, or both? Moderating role of power on people's responses to norm-violation.」、『Asian Journal of Social Psychology』、2021

清水佑輔・岡田謙介・唐沢かおり、「愛好家サブカテゴリーの顕現化によるギャンブラーへの潜在的態度の肯定化」、『実験社会心理学研究』、60、113-124 頁、2021.3

唐沢かおり、「自動運転に対する受容的態度とは：リスク・ベネフィット 認知に焦点を当てた調査からの示唆」、『自動車技術』、75、23-28 頁、2021.4

Shimizu, Y., Hashimoto, T., & Karasawa, K., 「Influence of contact experience and germ aversion on negative attitudes toward older adults: Role of youth identity」、『Frontiers in Psychology』、13、829742 頁、2022.3

Shimizu, Y., Ishizuna, A., Osaki, S., Hashimoto, T., Tai, M., Tanibe, T., & Karasawa, K., 「The social acceptance of smart health services in Japan」、『Journal of Environmental Research and Public Health』、19、1298 頁、2022.1

Shimizu, Y., Hashimoto, T., & Karasawa, K., 「Decreasing anti-elderly discriminatory attitudes: Conducting a 'Stereotype Embodiment Theory'-based intervention」、『European Journal of Social Psychology』、3、174-190 頁、2022.2

(3) 学会発表

国内、橋本剛明・ターン有加里ジェシカ・唐沢かおり・田井光春、「『データ駆動型社会』に対する人々の態度構造」、日本心理学会第 84 回大会、2020.9.8

国内、ターン有加里ジェシカ・橋本剛明・唐沢かおり、「自動運転車に対する受容の規定因の検討」、日本心理学会第 84 回大会、2020.9.8

- 国内、清水佑輔・岡田謙介・唐沢かおり、「愛好家の存在を意識させギャンブラーへの潜在的態度を肯定化できるか」、日本認知科学学会第37回大会、2020.9.17
- 国際、Shimizu, Y., Hashimoto, T., & Karasawa, K., 「How Do People View Various Mental Illnesses?: A Preliminary Analysis to Classify the Stereotype of Illnesses into Four Categories Using the Stereotype Content Model.」、The 59th Annual Conference of Taiwanese Psychological Association、2020.10.17
- 国内、唐沢かおり、「人間中心な人と人工物との関係をめぐって」、第3回人工物工学コロキウム、2020.11.5
- 国内、ターン有加里ジェシカ・橋本剛明・唐沢かおり、「日常的なボランティアのジレンマ状況における対人認知」、日本社会心理学会第61回大会、2020.11.7
- 国内、清水佑輔・ターン有加里ジェシカ・橋本剛明・唐沢かおり、「日本における障害者の象徴的偏見を測定する尺度の開発」、日本社会心理学会第61回大会、2020.11.7
- 国内、原惇一郎・鈴木昂・長倉由佳・谷辺哲史・飯田倫崇・唐沢かおり、「VRはコミュニケーションの質を高めるか? : 企業の1 on 1 ミーティング場面における実証的検討」、日本社会心理学会第61回大会、2020.11.7
- 国内、谷辺哲史・唐沢かおり、「人工知能による助言と自己決定: 就職活動を題材とした場面想定実験」、日本社会心理学会第61回大会、2020.11.7
- 国内、清水佑輔・橋本剛明・唐沢かおり、「ギャンブル障害者への否定的態度の軽減を目指して: ラベリングがもたらす影響の包括的検討」、日本健康心理学会第33回大会、2020.11.16
- 国内、ターン有加里ジェシカ・橋本剛明・唐沢かおり、「スキルを必要としない協力行動は女性が行う傾向にあるのか? コストリー・シグナリング理論に基づいた検討」、日本人間行動進化学会第13回大会、2020.12.12
- 国際、Numata, T., Asa, Y., Hashimoto, T., Karasawa, K., 「Gender differences of emotion perception and subjective feelings induced by animated expressions of a non-human virtual agent」、The 22th Annual Convention of the Society for Personality and Social Psychology、2021.2.13
- 国際、Tham, Y. J., Hashimoto, T., & Karasawa, K., 「Who incurs a cost for her group and when? The effect of justice sensitivity and previous interactions with other members on people's behavior in a volunteer's dilemma」、The 22th Annual Convention of the Society for Personality and Social Psychology、2021.2.13
- 国際、Shimizu, Y., Hashimoto, T., & Karasawa, K., 「A Preliminary Analysis of the Factors Related to Negative Attitudes Toward Elderly People」、The 11th Asian Conference on Psychology & the Behavioral Sciences, poster presentation、2021.3.29
- 国際、Shimizu, Y., Osaki, S., Tai, M., Hashimoto, T., Ito, K., Kaji, T., & Karasawa, K., 「What is important for promoting the social acceptance of Smart Cities?」、The 2021 Association for Psychological Science Virtual Convention、2021.5.26
- 国際、Hashimoto, T., & Karasawa, K., 「Justice beliefs, intervention, and apology affect people's attitudes toward target of injustice」、the 32nd International Congress of Psychology、2021.7.18
- 国際、Shimizu, Y., Hashimoto, T., & Karasawa, K., 「Observing a "desirable" elderly person develops positive attitudes toward elderly adults: Focusing on prescriptive stereotypes」、The 14th Biennial Conference of Asia Association of Social Psychology、2021.7.29
- 国際、Tham, Y. J., Hashimoto, T., & Karasawa, K., 「People prefer equity in asymmetric volunteer's dilemmas.」、The 14th Biennial Conference of the Asian Association of Social Psychology、2021.7.29
- 国際、Hashimoto, T., & Karasawa, K., 「Power and apology affects aggression toward a norm-violator: Analysis using the voodoo doll paradigm」、14th Biennial Conference of the Asian Association of Social Psychology、2021.7.29
- 国内、谷辺哲史・唐沢かおり、「人工知能の判断が生む差別と不公正認知」、日本社会心理学会第62回大会、2021.8.26
- 国内、苔米地飛・唐沢かおり、「遺伝子への原因帰属が社会的排斥に与える影響: 異質性の認知に着目して」、日本社会心理学会第62回大会、2021.8.26
- 国内、ターン有加里ジェシカ・橋本剛明・唐沢かおり、「集団内の仕事分担の理想と現実: 非対称ボランティアのジレンマゲームを用いた検討」、日本社会心理学会第62回大会、2021.8.26
- 国内、清水佑輔・橋本剛明・唐沢かおり、「「あなたが抱く高齢者偏見はあなたの将来に悪影響をもたらす」: ステレオタイプ・エンボディメント理論を活用した高齢者偏見の軽減」、日本社会心理学会第62回大会、2021.8.26
- 国内、唐沢かおり・田井光春・橋本剛明・清水佑輔・尾崎信・藤井聡、「スマートシティにおける社会受容と ELSI」、日本社会心理学会第62回大会、2021.8.26
- 国内、川原瞳・橋本剛明・唐沢かおり、「日本語版 Career Aspiration Scale-Revised (J-CASR) の作成」、日本社会心理学会第62回大会、2021.8.26
- 国内、ターン有加里ジェシカ・橋本剛明・唐沢かおり、「相手のネガティブな印象の確かさが不公平な分配を拒否する動機に与える影響: 繰り返しの最後通牒ゲームを用いた検討」、日本心理学会第85回大会、2021.9.1

- 国内、清水佑輔・竹内真純・唐沢かおり、「高齢者は「高齢者」や「若者」をどう捉えているのか」、日本心理学会第85回大会、2021.9.1
- 国内、ターン有加里ジェシカ・橋本剛明・唐沢かおり、「How much should and does the “strongest” member incur a cost for the group in an asymmetric volunteer’s dilemma?」、日本グループ・ダイナミクス学会第67回大会、2021.9.11
- 国内、清水佑輔・橋本剛明・唐沢かおり、「若者アイデンティティと感染嫌悪が及ぼす高齢者偏見への影響」、日本グループ・ダイナミクス学会第67回大会、2021.9.11
- 国際、Shimizu, Y., Hashimoto, T., & Karasawa, K., 「What makes elderly people view themselves negatively?」、Aging & Social Change: 11th Interdisciplinary Conference、2021.9.23
- 国際、Shimizu, Y., Hashimoto, T., & Karasawa, K., 「Ageism and related factors: Focusing on the social identity theory and disease avoidance mechanisms」、Society for Personality and Social Psychology: 2022 Annual Convention、2022.2.16
- 国際、Shimizu, Y., Hashimoto, T., & Karasawa, K., 「Implicit anti-elderly attitudes and subjective time to become elderly」、The 12th Asian Conference on Psychology and the Behavioral Sciences、2022.3.29

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

- 「人が主役となる人工物との関係性構築について～社会心理学的見地から」、HCMi コンソーシアム2021年新春セミナー、2021.1.22
- 「デジタルは『ちょうどいい道具』になれるのか～個人データと自己の関係～」、『混沌(カオス)を生きる』〈デジタルの日イベント〉RISTEX、2021.10.10
- 「科学技術の倫理的・法制度的・社会的課題(ELSI)への包括的実践研究開発プログラム(RInCA)～ELSI/RRRにとってなにが重要か…自動運転に関する議論の貢献にむけて～」、日本学術会議学術フォーラム:ELSIを踏まえた自動運転の社会実装、2021.12.13
- 「新たな価値を協創するための人文・社会科学と自然科学の知の融合「総合知」を考える」、CRDS俯瞰ワークショップ、2021.12.22

(2) 学会

- 日本心理学会代議員、2021.4～
- 科学基礎論学会理事、2020.4～
- 科学哲学会理事、2020.4～

(3) 行政

- 学術会議(第一部)、連携会員、2020～
- 学術会議、自動運転の社会実装と次世代モビリティによる社会デザイン検討委員会、2020～
- 東京都火災予防審議会委員、2020～
- 大学設置・学校法人審議会専門委員、2021.11～

(4) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

- 独立行政法人日本学術振興会・学術システム研究センター専門研究員、2020.4～
- 独立行政法人、科学技術振興機構、RISTEX 研究開発プログラム総括、2020.4～
- 独立行政法人大学改革支援・学位授与機構、国立大学教育研究評価委員会専門委員、2020.2～2021.3
- 自動車技術会モビリティ社会部門委員会委員、2021.4～
- 公益財団法人国際科学振興財団、学術審査検討委員会委員、2021.1～
- 早稲田大学高等研究所人事委員、2020.4～
- 国立研究開発法人・科学技術振興機構 創発的研究支援事業アドバイザー、2021.6～

1. 略歴

1984年4月	東京大学文科Ⅲ類入学
1988年3月	東京大学文学部社会心理学専修課程卒業
1988年4月	株式会社 日本長期信用銀行 入行
1992年4月	東京大学大学院社会学研究科社会心理学専攻修士課程入学
1994年3月	同 修了(修士(社会心理学))
1994年4月	東京大学大学院社会学研究科社会心理学専攻博士課程進学
1997年3月	東京大学大学院人文社会系研究科社会文化研究専攻博士課程単位取得退学
1998年4月	京都大学総合人間学部基礎科学科 助手(2000年3月迄)
1999年3月	東京大学大学院人文社会系研究科 博士(社会心理学)取得
2000年4月	岡山大学文学部行動科学科 助教授
2001年4月	岡山大学大学院文化科学研究科産業社会文化学専攻 助教授(兼任)
2004年4月	横浜国立大学経営学部 助教授
2005年4月	横浜国立大学大学院国際社会科学研究科 助教授
2007年4月	横浜国立大学大学院国際社会科学研究科 准教授
2011年4月	横浜国立大学大学院国際社会科学研究科 教授
2011年10月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授
2018年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

社会心理学

b 研究課題

心と社会環境の相互構成過程の探究

- 1) 多元的無知による集団規範の維持過程
- 2) 文化的慣習の社会生態学的基盤、「心の文化差」の規定因の探究
- 3) 組織文化・風土をめぐる諸問題

c 概要と自己評価

概要

1) 集団規範の生成と再生産過程…人は周囲の他者の行動を観察し、特定の行動が共有されていると感じることによって、「規範」の存在を知覚する。人はその知覚に基づき、たとえそれが自らの選好とは異なっても、規範にしたがった行動をとる傾向がある。この行動がさらに他者によって観察されることで、やがて、実際には誰も望んでいないはずの規範が予言の自己成就的に維持・再生産される。こうした「多元的無知」現象の共同主観的な相互規定メカニズムを検討することは、心の社会・文化的起源を探るうえで重要な意味をもつと考えられる。本研究では、実験室内にミニマルな規範伝達の連鎖を作り出すことで、このメカニズムに迫る試みを行っている。また、多元的無知の生起や伝播に影響を及ぼす社会環境の特質の探究も進めている。

2) 文化的慣習の社会生態学的基盤、「心の文化差」の規定因の探究…ある社会や集団において、特定の慣習や思考様式が共有され、維持されている理由について体系的な検討を行うには、その慣習や思考様式を取り巻く生態環境の特質と歴史、環境に適応する過程で作り出された特有の社会構造や人間関係のありよう、それらの維持・再生産に寄与する個人々の心理や行動の特質、といった諸変数間の関係を丹念に探り、描き出すことが必要となる。本研究では、社会の現場における慣習や思考様式の「事例」に焦点を当て、マイクロ・エスノグラフィーの研究方法论を用いてその生成・維持過程を継時的に追跡している。また、共有信念や心理・行動傾向の異文化間での差異(心の文化差)に着目し、その規定因たる社会環境の特質を明らかにするための比較文化(比較社会)実験・調査研究も推進している。

3) 組織文化・風土をめぐる諸問題…国や民族といった大きなレベルの文化に比して、小規模で人の入れ替わりが頻繁に行われる企業組織の文化は、変化プロセスの把握が比較的容易であるため、心と文化に関わる理論構築に向けた検証が行いやすいという利点がある。本研究では、強い組織文化は組織変革にとって正負両面の効果をもつ(生産性向上のための学習を促進する一方で、環境変化に対応した柔軟な変革を抑制しうる)ことを明らかにしてきた。現在はさらに

視野を広げ、各種の人事制度（ハード）と文化・風土（ソフト）の相互作用の様相や、それらが従業員の心理・行動に与える多面的な影響過程についての検討を行っている。

自己評価

以上の研究の多くは、文部科学省科学研究費（『集団規範の形成・維持に関わる自他の相互作用過程の探究』）、企業との共同研究契約に基づく研究助成などの外部資金を得て実施されている。研究室所属の大学院生、研究室出身の若手研究者はもとより、国内外の研究者（経営学・社会学・人類学等の関連他領域を含む）とも広く連携して、国際的・学際的な視野に立つ共同研究プロジェクトとしての展開に努めている。研究成果を学会発表および学術論文として発信する際には、個々の研究を主導した若手研究者（大学院生を含む）のサポートに尽力している。また、企業や地域共同体など、社会の現場に根差した研究を手がけていることから、実社会への研究成果の還元と、産学連携にも努めている。

d 主要業績

(1) 著書

分担執筆、村本由紀子、「心の文化差」はあるのか：個人へのアプローチ、社会へのアプローチ（繁樹算男（編）『心理学理論バトル：心の疑問に挑戦する理論の楽しみ』 pp.101-118）、新曜社、2021

辞書・辞典・事典、村本由紀子、「文化心理学；エスノメソドロロジー」ほか（子安増生・丹野義彦・箱田裕司（監修）『現代心理学辞典』）、有斐閣、2021

(2) 論文

Keita Suzuki, Tomoya Yoshino, and Yukiko Muramoto, 「The effects of a selection system and implicit theories on individual effort.」、『Japanese Journal of Experimental Social Psychology』、60 (1)、50-55 頁、2020

正木郁太郎・村本由紀子、「性別ダイバーシティの高い職場における感謝の役割：集合的感謝が情緒的コミットメントに及ぼす効果」、『組織科学』、第54巻3号、20-31頁、2021

正木郁太郎・村本由紀子、「ダイバーシティ信念をめぐる多元的無知の様相：職場におけるズレの知覚と誤知覚」、『社会心理学研究』、第37巻1号、1-14頁、2021

Keita Suzuki, Naoki Aida, and Yukiko Muramoto, 「Effect of implicit theory on effort Allocation strategies in multiple task-choice situations: An investigation from a socio-ecological perspective.」、『Frontiers in Psychology』、Dec 3; 12:767101、2021

(3) 解説

村本由紀子、「社員の自律と職場の空気の心理学」、リクルートマネジメントソリューションズ（編）『RMS Message』、59、18-20頁、2020

(4) 学会発表

国内、鈴木啓太・村本由紀子、「“一生懸命にやってみるまで分からない”：情報としての努力を重視する実体理論者」、日本社会心理学大会第61回大会、学習院大学（Web開催）、2020.11.7

国内、仲間大輔・村本由紀子、「流動性と貢献能力の格差が協力行動に及ぼす影響：社会的ジレンマ状況を用いたインターネット実験」、日本社会心理学大会第61回大会、学習院大学（Web開催）、2020.11.7

国際、Keita Suzuki & Yukiko Muramoto, 「How do incremental and entity theorists react to other's failure?: A cross-cultural comparison.」、The 25th Congress of the International Association of Cross-Cultural Psychology、Web開催、2021.7.27

国内、鈴木啓太・村本由紀子、「暗黙理論と教育制度における課題変更の困難さが学業パフォーマンスに与える影響」、日本社会心理学大会第62回大会、帝京大学（Web開催）、2021.8.26

国内、仲間大輔・村本由紀子、「メンバーシップの流動性と能力格差が職場の協調に及ぼす影響」、日本社会心理学大会第62回大会、帝京大学（Web開催）、2021.8.26

国内、渡壁政仁・仲間大輔・村本由紀子、「規範遵守行動の成立における他者の行動と選好の推測の影響：COVID-19流行に伴うマスク着用行動に注目して」、日本社会心理学大会第62回大会、帝京大学（Web開催）、2021.8.26

国内、村本由紀子、「組織における制度と文化：社会心理学の視点から」（招待講演）、日本産業保健法学会第1回学術大会、一橋大学（Web開催）、2021.9.23

国際、Shuma Iwatani & Yukiko Muramoto, 「The effect of individual mobility on the motivation to avoid reputation loss among ingroup and outgroup members.」、2022 Annual Convention of the Society for Personality and Social Psychology、Web開催、2022.2.20

(5) 会議主催(チェア他)

国内、東京大学文学部ホームカミングデー・パネルディスカッション「文学部が見てきた「女性と社会」、東京大学、2020.10.17

(6) 予稿・会議録

国内会議、東京大学文学部広報委員会（編著）『文学部が見てきた「女性と社会』』、2021

国内会議、東京カレッジブックレットシリーズ 16『連続シンポジウム・人文社会科学の未来：「東京大学における人文社会科学の振興とその展望報告書」をうけて (1)』、2021

(7) 共同研究・受託研究

共同研究、村本由紀子・岩谷舟真・今城志保、株式会社リクルートマネジメントソリューションズ、「多元的無知の維持メカニズムの調整要因の検討」、2020.4～

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

東京カレッジ・シンポジウム「人文社会科学の未来：文系・理系という区分の再考」、東京大学 (Web 開催)、2021.7.12
筑波大学附属高等学校「進路説明会 (社会学系分科会)」、2020.7、2021.7
東京大学高大接続研究開発センター「キミの東大」東大ゼミ訪問 第1回～第3回、2021.12.21

(2) 学会

国際、Asian Association of Social Psychology、Editorial Board Members、2018.1～2020.12
国内、日本心理学会、国際賞選考委員、2020.11～2022.10
国内、日本社会心理学会、常任理事、編集委員長、2019.4～2021.3
国内、日本社会心理学会、常任理事、大会運営委員長、2021.4～

准教授 **大坪 庸介** OHTSUBO, Yohsuke

1. 略歴

1990年4月 北海道大学文II系入学
1994年3月 北海道大学文学部行動科学科卒業
1994年4月 北海道大学大学院文学研究科行動科学専攻修士課程入学
1996年3月 同 修了 (修士 (行動科学))
1996年4月 北海道大学大学院文学研究科行動科学専攻博士課程進学
1997年8月 北イリノイ大学大学院心理学研究科博士課程入学
2000年3月 北海道大学大学院文学研究科行動科学専攻博士課程退学
2000年6月 北海道大学大学院文学研究科 助手 (～2002年3月)
2000年8月 北イリノイ大学大学院心理学研究科博士課程修了 (Ph. D. in Psychology)
2002年4月 奈良大学社会学部 講師 (～2006年3月)
2006年4月 奈良大学社会学部 (大学院兼任) 助教授 (～2007年3月)
2007年4月 神戸大学大学院人文学研究科 准教授 (～2019年3月)
2019年4月 神戸大学大学院人文学研究科 教授 (～2021年3月)
2021年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

社会心理学, 進化心理学

b 研究課題

- 1) 和解の進化社会心理学的研究
- 2) コミットメント・シグナルに関する研究
- 3) 評判・罰に基づく協力行動の進化に関する研究

c 概要と自己評価

1) **和解の進化社会心理学的研究**: 和解プロセスを加害者による謝罪と被害者による赦しという2つの側面をもつプロセスとして研究している。謝罪に関しては、シグナルの進化という観点から、どのような謝罪が誠意のある謝罪とみなされるのか、そして加害者はどのような状況で誠意のある謝罪を行おうとするのかを検討している。赦しに関して

は、霊長類学の知見などを踏まえて、人々がどのような場合に加害者を赦してもよいと考えるのかを検討している。対人的な和解についてよりよく理解することは、組織の謝罪（リスク・コミュニケーション）、国家間の和解等の理解も促進すると考えて研究を進めている。

2) **コミットメント・シグナルに関する研究**：二者関係において関係にコミットしているというのは、親友同士が決して裏切ることではない、恋人が浮気をしないといったことを意味する。しかし、ここにはコミットメント問題が存在する。なぜなら、今の相手よりも魅力的なパートナーが現れたときに、今の相手との関係に留まる必然性がないからである。その一方、特定の相手との関係にコミットできなければ、より利益の大きい協力関係を構築することもできない。そのため、自分は相手との関係にコミットしていて、簡単に裏切ることはないということを伝えるコミットメント・シグナルがコミットメント関係の形成・維持のために必要となる。対人関係で、どのようなシグナルがあり得るのか、そしてそれによってどの程度コミットメント問題が解決されているのかを研究している。

3) **評判・罰に基づく協力的行動の進化に関する研究**：二者関係に閉じない大規模な協力関係を維持することはヒトという種の特徴と言われている。このような大規模な協力を維持するメカニズムとして、評判と罰が注目されている。評判に基づく大規模な協力の維持は間接互惠性と言われる。従来の間接互惠性の研究では、他者に評判を割り振る側の評判割り振り戦略に焦点が当てられていたが、評判を割り振られる側の評判維持戦略に着目した研究を行っている。また、非協力者を罰する傾向と規範違反者への義憤の関係など、大規模な協力関係の維持を可能にする至近メカニズムの研究を行っている。

d 主要業績

(1) 著書

編著、小田亮・橋瀬和秀・大坪庸介・平石界（編）、『進化でわかる人間行動の事典』、朝倉書店、2021

単著、大坪庸介、『仲直りの理—進化心理学から見る機能とメカニズム』、ちとせプレス、2021.10

(2) 論文

Smith, A., McCauley, T. G., Yagi, A., Yamaura, K., Shimizu, H., McCullough, M. E., & Ohtsubo, Y., 「Perceived goal instrumentality is associated with forgiveness: A test of the valuable relationships hypothesis」、『Evolution and Human Behavior』、41(1)、56-68 頁、2020

Ohtsubo, Y., 「Does financial compensation need to be accompanied by verbal apologies?」、『Peace and Conflict: Journal of Peace Psychology』、26(1)、96-99 頁、2020

Himichi, T., & Ohtsubo, Y., 「An inverted U-shaped relationship between heart rate deceleration and empathic emotions」、『Biological Psychology』、150、107828 頁、2020

Xue, J., & Ohtsubo, Y., 「Altruistic preferences in the dictator game: Replication of Andreoni and Miller (2002) in Japan」、『Letters on Evolutionary Behavioral Science』、11(1)、17-21 頁、2020

Ohtsubo, Y., Matsunaga, M., Himichi, T., Suzuki, K., Shibata, E., Hori, R., Umemura, T., & Ohira, H., 「Costly group apology communicates a group's sincere "intention"」、『Social Neuroscience』、15(2)、244-254 頁、2020

Konishi, N., Himichi, T., & Ohtsubo, Y., 「Heart rate reveals the difference between disgust and anger in the domain of morality」、『Evolutionary Behavioral Sciences』、14 (3)、284-298 頁、2020

Komiya, A., Ozono, H., Watabe, M., Miyamoto, Y., Ohtsubo, Y., & Oishi, S., 「Socio-ecological hypothesis of reconciliatory tactics: Cultural, individual, and situational variations in willingness to accept apology or compensation」、『Frontiers in Psychology』、11、1761 頁、2020

Pedersen, E. J., McAuliffe, W. H. B., Shah, Y., Tanaka, H., Ohtsubo, Y., & McCullough, M. E., 「When and why do third parties punish outside of the lab? A cross-cultural recall study」、『Social Psychological and Personality Science』、11(6)、846-853 頁、2020

Forster, D. E., Billingsley, V. J., Russell, M., McCauley, T. G., Smith, A., Bumette, J. L., Ohtsubo, Y., Schug, J., Lieberman, D., & McCullough, M. E., 「Forgiveness takes place on an attitudinal continuum from hostility to friendliness: Toward a closer union of forgiveness theory and measurement」、『Journal of Personality and Social Psychology』、119 (4)、861-880 頁、2020

Ohtsubo, Y., Matsunaga, M., Himichi, T., Suzuki, K., Shibata, E., Hori, R., Umemura, T., & Ohira, H., 「Role of the orbitofrontal cortex in the computation of relationship value.」、『Social Neuroscience』、15 (5)、600-612 頁、2020

Zheng, S., Masuda, T., Matsunaga, M., Noguchi, Y., Ohtsubo, Y., Yamasue, H., & Ishii, K., 「Oxytocin receptor gene (OXTR) and childhood adversity influence trust」、『Psychoneuroendocrinology』、121、104840 頁、2020

Ishii, K., Masuda, T., Matsunaga, M., Noguchi, Y., Yamasue, H., & Ohtsubo, Y., 「Do culture and oxytocin receptor polymorphisms interact to influence emotional expressivity?」、『Culture and Brain』、9 (1)、20-34 頁、2021

Kawamura, Y., Ohtsubo, Y., & Kusumi, T., 「Effects of cost and benefit of prosocial behavior on reputation」、『Social Psychological and Personality Science』、12(4)、452-460 頁、2021

- Ohtsubo, Y., & Lyu, F., 「Is country-level extraversion associated with the number of COVID-19 cases and deaths?」、『Letters on Evolutionary Behavioral Science』、12 (2)、39-45 頁、2021
- Ohtsubo, Y., Inamasu, K., Kohama, S., Mifune, N., & Tago, A., 「Resistance to the six elements of political apologies: Who opposes which elements?」、『Peace and Conflict: Journal of Peace Psychology』、27 (3)、449-458 頁、2021
- Apostolou, M., Birkás, B., da Silva, C. S. A., Esposito, G. Hsu, R. M. C. S., Jonason, P. K., Karamanidis, K., O, J., Ohtsubo, Y., Putz, A., Szyzycer, D., Thomas, A., Valentova, J. V., Varella, M. A. C., Kleisner, K., Flegr, J., & Wang, Y., 「Reasons of singles for being single: Evidence from Brazil, China, Czech Republic, Greece, Hungary, India, Japan and the UK」、『Cross-Cultural Research』、55 (4)、319-350 頁、2021
- Matsunaga, M., Ohtsubo, Y., Masuda, T., Noguchi, Y., Yamasue, H., & Ishii, K., 「A genetic variation in the Y chromosome among modern Japanese males related to several physiological and psychological characteristics」、『Frontiers in Behavioral Neuroscience』、15、Article 774879 頁、2021
- Zheng, S., Masuda, T., Matsunaga, M., Noguchi, Y., Ohtsubo, Y., Yamasue, H., & Ishii, K., 「Cultural differences in social support seeking: The mediating role of empathic concern」、『PLoS ONE』、16(12)、Article e0262001 頁、2021
- Ishii, K., Masuda, T., Matsunaga, M., Noguchi, Y., Yamasue, H., & Ohtsubo, Y., 「A reexamination of the effects of culture and dopamine D4 receptor gene interaction on social orientation」、『Psychologia』、16(12)、137-150 頁、2021
- de Groot, M., Schaafsma, J., Castelain, T., Malinowska, K., Mann, L., Ohtsubo, Y., Wulandari, M. T. A., Bataineh, R. F., Fry, D. P., Goudbeek, M., & Suryani, A., 「Group-based shame, guilt and regret across cultures」、『European Journal of Social Psychology』、51 (7)、198-1212 頁、2021
- Forster, D. E., Billingsley, J., Bumette, J. L., Lieberman, D., Ohtsubo, Y., & McCullough, M. E., 「Experimental evidence that apologies promote forgiveness by communicating relationship value」、『Scientific Reports』、11、Article 13107 頁、2021.6
- Van Bavel, J. J., Cichocka, A., Capraro, V., Sjästad, H., Nezelek, J. B., Pavlović, T., Alfano, M., Gelfand, M. J., Azevedo, F., Birtel, M. D., Cislak, A., Lockwood, P. L., Ross, R. M., Abts, K., Agadullina, E., Aruta, J. J. B., Besharati, S. N., Bor, A., Choma, … Boggio, P. S., 「National identity predicts public health support during a global pandemic」、『Nature Communications』、13、Article 517 頁、2022
- Han, J. Y., Lee, H., Ohtsubo, Y., & Masuda, T., 「Culture and stress coping: Cultural variations in the endorsement of primary and secondary control coping for daily stress across European Canadians, East Asian Canadians, and the Japanese」、『Japanese Psychological Research』、64(2)、141-155 頁、2022
- Matsunaga, M., Ohtsubo, Y., Masuda, T., Noguchi, Y., Yamasue, H., & Ishii, K., 「Serotonin receptor (HTR2A) gene polymorphism modulates social sharing of happiness in both American and Japanese adults」、『Japanese Psychological Research』、64(2)、181-192 頁、2022
- Ohtsubo, Y., Matsunaga, M., Masuda, T., Noguchi, Y., Yamasue, H., & Ishii, K., 「Test of the serotonin transporter gene × early life stress interaction effect on subjective well-being and loneliness among Japanese young adults」、『Japanese Psychological Research』、64(2)、193-204 頁、2022

(3) 学会発表

- 国際、Ohtsubo, Y., & Yamaura, K., 「Prestige and reconciliation in the workplace」、Society for Personality and Social Psychology、2021.2.12
- 国際、Yamaguchi, M., & Ohtsubo, Y., 「Effects of the self-partner gender combination on the source effect of disgust」、Society for Personality and Social Psychology、2021.2.12
- 国際、Kometani, A., & Ohtsubo, Y., 「Impulsivity does not increase fitness in response to childhood environmental harshness」、Human Behavior and Evolution Society、2021.6.25
- 国際、Ohtsubo, Y., 「Continuity and discontinuity between interpersonal and international apologies」、The 14th Biennial Conference of the Asian Association of Social Psychology、2021.7.29
- 国内、大坪庸介・日道俊之・稲増一憲・小浜祥子・三船恒裕・多湖淳、「政治的謝罪への抵抗緩和要素の効果の検討」、日本グループ・ダイナミックス学会第67回大会、手塚山大学主催（オンライン開催）、2021.9.11
- 国内、大坪庸介・樋口美佑、「加害意図がなければコストのかからない謝罪でも赦してもらえるのか?」、日本人間行動進化学会第14回大会、オンライン開催、2021.12.4
- 国内、坂本遼太郎・米谷充史・大坪庸介、「若年成人期のリスク傾向と中年期の社会的成功との関係：生活史理論の前提の再検討」、日本人間行動進化学会第14回大会、オンライン開催、2021.12.5

(4) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 (B)、大坪庸介、研究代表者、「関係価値と和解のミクロ・マクロ・ダイナミックスに関する研究」、2021～

文部科学省科学研究費補助金、挑戦的研究 (萌芽)、大坪庸介、研究代表者、「協力シグナルの進化に関する理論・実証的研究」、2021～

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

神戸大学文学部 心理学特殊講義 (2021 年)

(2) 学会

国内、日本社会心理学会、常任理事、『社会心理学研究』編集委員長、2021.4～

国内、日本グループ・ダイナミックス学会、理事、2021.4～

国内、日本人間行動進化学会、常務理事、2019.1～

(3) 行政

学術会議 (第一部)、連携会員、2020.10～

27 文化資源学

《文化資源学専門分野》

教授 **中村 雄祐** NAKAMURA, Yusuke

1. 略歴

1980年4月 東京大学教養学部理科I類、入学
1982年4月 同学部教養学科第一文化人類学学科、進学
1984年3月 同学科、卒業
1984年4月 東京大学大学院社会学研究科修士課程文化人類学専攻、入学
1986年3月 同修士課程、修了
1986年4月 同研究科文化人類学専攻博士課程、進学
1988年4月 社会学研究科より総合文化研究科へ移管
1990年8月 東京大学大学院総合文化研究科博士課程文化人類学専攻、中途退学
1995年11月 東京大学大学院総合文化研究科、博士号(学術)取得
1994年4月 東京大学教養学部専任講師(～1997年3月)
1996年4月 大学院総合文化研究科超域文化科学専攻専任講師に配置換
1997年4月 東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻助教授(～2004年9月)
2004年10月 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻助教授
2005年4月 国立民族学博物館文化動態研究部門客員研究員(～2009年3月)
2009年4月 東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻准教授
2014年9月 東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻教授

2. 主な研究活動

多様な状況における文書・読み書き、その人間・社会との関係の研究

a 専門分野 b 研究課題

文化資源学(文書文化論)

主に発展途上国を念頭に置きつつ、広く文書・読み書きと人間・社会の関係について研究している。また、調査研究方法の検討、改善にも強い関心を持っている。様々なフィールド調査で得られるデータや知見を、言語能力、数的能力、道具使用等に関する認知科学や、文書をはじめとする認知的人工物(cognitive artifacts)の変化に関する歴史学的研究と有機的に接合することを目指して、隣接諸分野の研究者との共同研究にも積極的に取り組んでいる。

c 概要と自己評価

以下の3つの課題を意識しつつ、相互に関連しあう複数の研究を並行して進めた。

- ・文化資源としての文書文化の考察
- ・デジタル技術と文書文化の関係の考察
- ・文書・読み書きに関する多様な領域の専門家との共同作業の推進

(1) 歴史学者と共同で16世紀スペイン会計文書を対象として人文情報学のアプローチを用いた研究を進めており、途中経過の学会報告を行った。

(2) 2017年5月より幹事を務める東京文化資源会議において、地域の文化資源の調査、活用にも積極的に取り組んでおり、2021年4月にはデジタルアーカイブ学会で企画セッションを行った。関連する活動の概要は東京文化資源会議ホームページ(<https://tcha.jp/>)で発信している。

(3) 文化資源学研究室で編集した論集『文化資源学—文化の見つけかたと育てかた』を刊行した。

(4) 東京大学ヒューマニティズセンター公募研究(A)個人研究に採択され、2021年9月より1年間、「デジタル技術を用いた文化資源の多次元アノテーションの研究」に取り組んでいる。

以上のように、歴史学、情報学、国際協力、地域開発・まちづくりなど多様な分野の専門家との共同作業を積極的に行い、成果を発信するという基本方針に沿った活動を継続している。引き続き、学際性、社会連携、情報技術の積極的活用を重視した文化資源の分析を進めていく。

d 主要業績

(1) 著書

共著、東京大学文化資源学研究室、『文化資源学—文化の見つけかたと育てかた』、新曜社、2021.10

(2) 学会発表

国内、小風尚樹（千葉大学）、伏見岳志（慶応義塾大学）、中村雄祐（東京大学）、「財務記録史料の構造化記述に向けて：近世スペイン・ブルゴス県のサラマンカ商会の複式簿記を事例に」、UTDH アンカンファレンス、2020.4.26

国内、小風尚樹（千葉大学）、伏見岳志（慶応義塾大学）、中村雄祐（東京大学）、「近世スペイン会計史料のマークアップ：16世紀北スペイン・サラマンカ商会の元帳を事例に」、人文科学とコンピュータシンポジウム2020、オンライン、2020.12.13

国内、中村雄祐、真鍋陸太郎（東京大学）、鈴木親彦（人文学オープンデータ共同利用センター）、栗生はるか（文教建築会ユース）、三文字昌也（東京大学）、松尾遼（東京ケーブルネットワーク）、「都市における文化資源のアーカイビング：地図、記憶、映像における取り組みから考える」、デジタルアーカイブ学会第6回研究大会企画セッション（サテライト・プログラム）、オンライン、2021.4.25

国内、中村雄祐、「デジタル・ネットワーク化が進む世界における読み書き算術」、日本英文学会第94回全国大会 特別シンポジウム、オンライン、2022.5.22

(3) 研究報告書

「Sustainability と人文知」プロジェクトチーム、東京大学総長裁量経費プロジェクト「Sustainability と人文知」（2015年度～2020年度）報告書、pp.67-76、2020.3

(4) マスコミ

「フィールド調査のニューノーマルについて考える」、『月刊みんぱく2020年9月号』、国立民族学博物館、2020.9.1

(5) データベース

中村雄祐・鈴木親彦・真鍋陸太郎、「崖東夜話ぶらり」、2020.8

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

セミナー、東京文化資源会議／アッサラームファンデーション／寛永寺／神田明神／ニコライ堂／湯島聖堂／湯島天満宮、「崖東夜話」、2020.10

准教授 **野村 悠里** NOMURA, Yuri

1. 略歴

2000年3月 慶應義塾大学法学部法律学科卒業
2000年4月 慶應義塾大学大学院法学研究科公法学専修修士課程入学
2002年3月 慶應義塾大学大学院法学研究科公法学専修修士課程修了、修士（法学）
2006年4月 東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻文書学専門分野修士課程入学
2008年3月 東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻文書学専門分野修士課程修了、修士（文学）
2008年4月 東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻文書学専門分野博士課程入学
2012年3月 ポーラ美術振興財団若手芸術家在外研修員

2013年9月	文化庁新進芸術家在外研修員
2014年3月	東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻文書学専門分野博士課程単位取得満期退学
2014年4月	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程学位取得、博士（文学）
2015年4月	東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻助教
2019年4月	日本学術振興会海外特別研究員、ロンドン大学客員研究員
2020年4月	東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

文化資源学

b 研究課題

ヨーロッパ製本史、装幀史、書物史

ヨーロッパでは伝統工芸として、山羊革や仔牛革で装幀することが行われている。フランスでは二十世紀に至るまで、書物は仮綴本で販売され、読者は購入した本を製本工房に依頼して革装本に綴じ直し、箔押しで装飾するという読書文化が根づいてきた。フランスの製本工芸は高度な装飾技術が発達したことで知られ、製本史では王侯貴族の金箔紋章本を時系列的に分析する研究が行われてきた。ドゥヴォシエル『フランスの製本』（1959-61）、ドゥヴォー『製本の十世紀』（1977）によって製本の通史的分析が行われ、表紙のデザインに関してはエスメリアン『十七世紀における製本工房の装幀』（1972）、ミション『十八世紀のモザイク製本』（1956）により装幀様式の分類が試みられてきた。しかしながら、表紙デザインや金箔紋章による所蔵者の特定が重視され、製本の技術については十分に分析されてこなかった。装飾的に優れた装幀が研究対象とされ、意匠の分析は表紙の全体的印象や主観的見解に依拠してきたという問題点がある。これらの先行研究を踏まえ、より広範な読者層の装幀を研究対象とし、製本工房における技術の継承や製本職人の製作工程を解明する研究課題に取り組んでいる。また、書物を次世代に継承していくための保存修復の問題についても考察を行っている。

c 概要と自己評価

これまでの研究として、製本職人の記録や技術書等の文化資源学的資料を考察し、主として十七世紀から十九世紀におけるフランスの工芸製本史に取り組んできた。以下四点が研究経過である。第一に、製本工房の継承に関する分析である。王室製本師の一族や製本職人組合監督官の家系図を作成し、世代間における工房の継承について考察した。同業者組合が解体された後、製本職人の多くはイギリスに亡命したが、十九世紀以降に活躍した製本職人についても分析を行っている。第二に、製本技術書の考察である。十八世紀以前に出版された技芸書や百科全書を検証し、十九世紀以降の製本職人による手引き書との相違を明らかにした。また、イギリス、ドイツ、オランダ等のヨーロッパ諸国で出版された製本技術書との比較を進めている。第三は、製本の技術的解明である。王令によって認められた「ヴレ・ネール」、非合法の「フォー・ネール」、目引きをした「ア・ラ・グレック」という技法について分析を行った。また、どのように量産に適した製本技法が開発されていったのか、産業革命に至る各国の技術的変容の解明に取り組んでいる。第四は、装幀のデザインの変遷である。手工業製本においてどのように箔押し技術が発展してきたか、型の組み合わせによる模様のパターンを検証している。

d 主要業績

(1) 著書

共著、東京大学文化資源学研究室編、『文化資源学——文化の発見かたどりと育てかた』、2021.10

単著、野村悠里、『書物と製本術——ルリユール／綴じの文化史』三刷改訂、2022.3

(2) 論文、論稿

野村悠里、「マイケル・ファラデーと製本術」、『文化交流研究』、34、2021.3

野村悠里、「点と点を結ぶ想像力」、『技術史教育学会誌』、22(1・2)、2021.4

野村悠里、「本の技術と歴史を伝えるビブリオテカ・ウィトキアーナ」、『技術史教育学会誌』、23(1)、2021.10

(3) 解説

Yuri Nomura, Reliure traditionnelle (Masuji Ibuse), Les 4 éléments: création de reliures contemporaines, 2021.5

野村悠里、英国製初期クロス装幀の損傷調査、『文化庁 DOMANI・明日記録集/The Art of Tomorrow 1998-2021』、2022.2

(4) 学会発表

国内、講演：ライアン・ホームバーグ、木下直之、企画進行：野村悠里、「文化資源 IN THE アメリカ南部—Graham 市での南北戦争記念像の反対運動」、文化資源学会特別講演会、2021.3

国内、講演：川瀬さゆり、中野芳彦、司会：福島勲、企画進行：野村悠里、「文化資源としてのノートルダム」、文化資源学会特別講演会、2021.12

(5) 教科書、教材

『本の未来』、2021 年度文化資源学入門編、監修、文化資源学研究室、2021.1

(6) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、野村悠里、研究代表者、「製本術の工程分析に関する基礎的研究：東京大学所蔵「英国書史関係集書」を対象として」、2020～

東京大学女性教員スタートアップ研究費、野村悠里、研究代表者、2020

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、文化資源学会理事、2020.7～

教授 **大西 克也** ONISHI, Katsuya

11 中国語中国文学 参照

教授 **佐藤 健二** SATO, Kenji

25 社会学 参照

教授 **小林 真理** KOBAYASHI, Mari

27 文化資源学《文化経営学専門分野》 参照

准教授 **松田 陽** MATSUDA, Akira

27 文化資源学《文化経営学専門分野》 参照

准教授 **高岸 輝** TAKAGISHI, Akira

03 美術史学 参照

准教授 **西村 明** NISHIMURA, Akira

06 宗教学宗教史学 参照

准教授 **吉田 寛** YOSHIDA, Hiroshi

07 美学芸術学 参照

《文化経営学専門分野》

教授 **小林 真理** KOBAYASHI, Mari

1. 略歴

1987年3月	早稲田大学教育学部社会科社会科学専修卒業
1987年4月	早稲田大学大学院政治学研究科修士課程政治学専攻入学
1990年3月	早稲田大学大学院政治学研究科修士課程政治学専攻修了（政治学）
1990年4月	早稲田大学大学院政治学研究科博士後期課程政治学専攻入学
1993年5月	早稲田大学人間科学部助手（～1996年3月）
1996年3月	早稲田大学大学院政治学研究科博士後期課程政治学専攻単位取得満期退学
1998年4月	昭和音楽大学音楽学部助手
2000年4月	静岡文化芸術大学文化政策学部講師
2001年1月	博士（人間科学）
2004年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教
2007年4月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授（職名変更）
2016年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

文化資源学、文化経営学、文化政策学

b 研究課題

文化を支える諸制度、それと反対のベクトルである文化の発展を阻害する制度について関心をもってきた。研究の中心を法制度においてきたが、最近では国や自治体の文化政策の動向に対応して、文化にとってよりよい政策の企画、立案、執行のあり方について考えている。とくに行政改革が現実に行われ、市町村合併の推進及び2003年に地方自治法改定で施行された指定管理者制度が導入される状況の中で、公立文化施設（美術館、文化ホール等）の望ましい運営方法とそれを管理する文化政策のあり方を研究の対象としてきた。

近年では、文化政策の制度化によって計画化が進み、それらの評価のあり方が課題となってきた。文化政策に関する独自の評価というのが可能なのかという点が目下の研究課題と考えている。

c 概要と自己評価

これまでに自治体文化政策の現場において、条例制定、計画策定、そして事業展開の基盤づくりに携わってきたが、それらを検証し、記述する作業に入っている。また政策形成過程の観察を通じて、文化政策の企画立案や方法を関心を持っている人たちに、普及していく必要性を強く感じるようになった。それらを、形にしたのが、『新時代のミュージアム』であり、『法から学ぶ文化政策』であった。日本の文化政策が拡大を続けていく中で、それをどのように行っていくか、またどのような制度を整えていくかを改めて考える上で重要な示唆を与えると考える。さらに、文化芸術、アート・プロジェクト、フェスティバル、創造都市、おもてなし、クール・ジャパン、観光立国、文化外交、知的財産立国、オリンピックの文化プログラム等々、直接的に文化という名称を冠していなくとも文化的事象に関係する政策、施策、そして事業が様々なレベルで展開されるようになってきている。これらの問題を研究対象として考察していく上での基礎的な知識を提供するという意味で、東京大学出版会から『文化政策の現在』シリーズ3巻を刊行してきたが、これらに続く内容についての調査研究については行えたと考えているので、次期はこれらをさらに発信していく作業に入りたいと考えている。また、このような潮流を捉えつつ、もう一度個別の具体的な文化事業、文化施設の持続可能性について考察を深めていきたいと考えている。

d 主要業績

(1) 著書

- 共著、小林真理、『新時代のミュージアム』、ミネルヴァ書房、2020.6
- 共著、東京大学文化資源学研究室、『文化資源学—文化の見つけかたと育てかた』、2021.10
- 共著、小林真理、小島立他、『法から学ぶ文化政策』、有斐閣、2021.12
- 共著、小林真理、鬼木和浩他、『自治体文化行政のレッスン55』、美学出版、2022.2

(2) 論文

- 小林真理、「行政改革と自治体文化政策」、『文化政策研究』、2020.6

小林真理、「芸術祭や美術館を豊かな表現の場にしていくために」、『アートマネジメント研究』、2020.6

(3) 学会発表

国内、小林真理、「公共政策における価値対立と合意形成～文化政策という領域」、日本公共政策学会、2020.6.5

(4) 啓蒙

小林真理、「自治体文化行政とはどのような領域か」、『自治大学校からの情報発信』、2020.7

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、成蹊大学、「文化政策と法」、2021

非常勤講師、東京藝術大学、「文化政策」、2020

非常勤講師、早稲田大学、「法学」、「文化政策」、2020、2021

(2) 行政

滋賀県文化審議会、立案、委員、2020、2021

高知県文化芸術振興ビジョン評価委員会、委員、2020、2021

三重県評価推進会議、委員、2020、2021

奈良県文化財保存活用認定会議、委員、2020、2021

東京都「神宮前五丁目地区まちづくりに向けた有識者会議」、立案、委員、2021

杉並区文化芸術審議会、立案、委員、2020、2021

小金井市第二次芸術文化振興計画策定委員会、立案、委員、2020

小金井市市民交流センター運営協議会、委員長、2020、2021

足立区文化芸術劇場運営評価委員会、副委員長、2020、2021

文化庁文化審議会文化政策部会、臨時委員、2020、2021

文化庁文化審議会博物館部会、臨時委員、2020、2021

文化庁文化審議会文化財分委会、立案、企画調査会委員、2021.11～

(3) 学会

日本文化政策学会 副会長、2020、2021

文化経済学会〈日本〉理事、2020、2021

(4) その他

特定非営利活動法人アートフル・アクション理事長

公益財団法人東急財団理事

公益財団法人武蔵野市文化生涯学習振興事業団評議員

准教授 **松田 陽** MATSUDA, Akira

1. 略歴

1997年3月 東京大学文学部歴史文化学科西洋史学専修課程卒業

2002年11月 ロンドン大学 UCL 考古学研究所修士課程修了 学位取得 修士（文化遺産研究）

2003年3月 東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻修士課程修了 学位取得 修士（文化経営学）

2004年5月 国連教育科学文化機関（ユネスコ）パリ本部文化セクター文化遺産部コンサルタント（～同年7月）

2005年6月 国連教育科学文化機関（ユネスコ）パリ本部文化セクター文化遺産部コンサルタント（～同年8月）

2009年10月 ロンドン大学 UCL 考古学研究所博士課程修了 学位取得 博士（パブリックアーケオロジー）

2010年9月 ロンドン大学 UCL 考古学研究所名誉講師（Honorary Lecturer）

2011年9月 セインズベリー日本藝術研究所学術アソシエイト（Academic Associate）

2011年9月 イーストアングリア大学（University of East Anglia）世界美術・博物館学科（School of World Art Studies and Museology）准教授（Lecturer）

- 2014年8月 イーストアングリア大学 (University of East Anglia) 芸術・メディア・アメリカ研究学科 (School of Art, Media and American Studies) 准教授 (Lecturer) (組織再編)
- 2015年1月 イーストアングリア大学高等教育実践准修士課程修了 学位取得 准修士 (高等教育実践)
- 2015年10月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

文化資源学、文化遺産研究、パブリックアーケオロジ、博物館研究

b 研究課題

私の研究の根底にあるのは、人々にとって過去が何を意味するのかという問いにある。いかにも大仰な問いだが、この関心に導かれるかたちで、これまで人々が社会においてどのように過去をイメージし、理解し、使う（そして場合によっては「消費する」）のかをさまざまな角度から考察してきた。直接関連する分野としては、文化資源学、文化遺産研究、博物館研究、物質文化研究、人文地理学などがあげられるが、おそらくあらゆる学問分野に何らかのかたちで関わりがあり、分野横断的に展開できるテーマではないかと思っている。これまでは考古学に関連する文化遺産を事例研究にすることが多く、その中でパブリックアーケオロジという領域に強い関心をもってきた。現在は、近現代における古墳と地域住民との関係史、自然災害に対する社会の記憶、文化遺産とノスタルジアとの関係、文化遺産に真実性はどれほど必要か、といったテーマにとりわけ注力している。東京大学本郷キャンパスという文化資源を魅力的にプレゼンテーションする方策にも興味をもっている。

c 概要と自己評価

2020～2021年度は、主に（1）文化遺産研究の理論構築、（2）パブリックアーケオロジの理論構築、（3）博物館制度の検討、（4）東京大学本郷キャンパスという文化資源、という4つのテーマに絞って研究を遂行した。そこから結実した主要出版業績は、次項を参照。コロナ禍により海外でのフィールドワークや学会参加ができなくなったが、その分、日本国内の資料を精査することに注力できた。

d 主要業績

(1) 論文

松田陽、「文化資源学の国際展開」、『文化資源学—文化の見つけかたと育てかた』、2021

松田陽、「観光政策と博物館認証制度」、『博物館の未来を考える』、2021

松田陽、「パブリックアーケオロジと二つの「差」」、『京都外国語大学国際文化資料館紀要』、第13、2022

(2) 論考

松田陽、「ソンマ・ヴェスヴィアーナの古代ローマ遺跡の保全と活用」、『地中海学研究』、2020

松田陽、「文化遺産研究からみた宗教遺産学」、『宗教遺産テキスト学の創成』、2022

3. 主な社会活動

(1) 行政委員会

文化庁、文化審議会委員（分属は文化政策部会、世界文化遺産部会、無形文化遺産部会）

文部科学省、「世界の記憶」国内案件に関する審査委員会、委員

文化遺産国際協力コンソーシアム、文化遺産国際協力コンソーシアム欧州分科会、委員

日本学術会議（分属は「博物館・美術館等の組織運営に関する分科会」と「文化財の保護と活用に関する分科会」）、連携会員

市川市、市川市博物館協議会、委員

鹿児島市、鹿児島市火山防災アドバイザー、委員

川崎市、橋樹官衙遺跡群調査整備委員会、委員

高崎市、史跡保渡田古墳群保存活用計画策定委員会、委員

富岡市、富岡製糸場インタープリテーション検討委員会、委員

(2) 学会

文化資源学会、理事・事務局長

日本考古学協会、国際委員会委員

学術雑誌『Antiquity』編集諮問委員

学術雑誌『Public Archaeology』編集諮問委員

学術雑誌『World Art』諮問委員

- 教授 **大西 克也** ONISHI, Katsuya
1 1 中国語中国文学 参照
- 教授 **佐藤 健二** SATO, Kenji
2 5 社会学 参照
- 教授 **中村 雄祐** NAKAMURA, Yusuke
2 7 文化資源学《文化資源学専門分野》参照
- 准教授 **野村 悠里** NOMURA, Yuri
2 7 文化資源学《文化資源学専門分野》参照
- 准教授 **高岸 輝** TAKAGISHI, Akira
0 3 美術史学 参照
- 准教授 **西村 明** NISHIMURA, Akira
0 6 宗教学宗教史学 参照
- 准教授 **吉田 寛** YOSHIDA, Hiroshi
0 7 美学芸術学 参照

28 韓国朝鮮文化

教授 福井 玲

FUKUI, Rei

<http://www.lu-tokyo.ac.jp/~fkr/>

1. 略歴

1980年3月	東京大学文学部言語学科卒業（文学士）
1982年3月	東京大学大学院人文科学研究科言語学専攻修士課程修了（文学修士）
1984年9月	韓国ソウル大学校人文大学国語国文学科に留学（～1986年10月）
1987年3月	東京大学大学院人文科学研究科言語学専攻博士課程単位取得退学
1987年4月	東京大学文学部助手（言語学研究室）（～1989年3月）
1989年4月	明海大学外国語学部講師（日本語学科）（～1992年9月）
1992年10月	東京大学教養学部助教授（～1997年3月）
1994年10月	東京大学文学部附属文化交流研究施設助教授（併任）
1997年4月	東京大学文学部附属文化交流研究施設に配置換
1998年4月	東京大学大学院人文社会系研究科附属文化交流研究施設に配置換
2002年4月	東京大学大学院人文社会系研究科に配置換
2007年4月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2013年3月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題 c 概要と自己評価

主な専門分野は韓国語学であり、その中でも中世語の音韻体系に関する研究や古代語、近代語についての研究を行ってきた。また、それらを歴史的につなぐ通時的な研究も行なっている。現代語についても主として音声や方言に関する研究を行ってきた。さらに、中世語から近代語にかけての韓国語学の資料研究も行っている。2013年1月にはこれまでにやってきた韓国語の音韻史にかかわる研究をまとめて単行本として出版している。その他に、音声学・音韻論を中心とする言語学一般、方言研究を中心とする日本語学にも関心をもっている。2019年度には日本語と韓国語の間の古代の借用語について論じ、その成果は2020年に三省堂から出版された『日本語「起源」論の歴史と展望 日本語の起源はどのように論じられてきたか』の中にまとめられている。2021年には、新たに再発見された小倉進平の卒業論文の内容を要約し、彼の初期の学問の特徴をまとめる論文を『朝鮮学報』に執筆した。

これ以外に、2013年から現在に至るまで継続して行っている研究課題として、韓国語の語彙史の研究があげられる。過去に行なわれた方言調査（小倉進平、崔鶴根、韓国精神文化研究院）の資料に基づいて、項目を選定して言語地図を作製し、そこに見られる語彙の歴史を再構成することを目指している。2015年度からはこのテーマで科研費を受け、福嶋映子・福嶋祐介氏原作の言語地図作製プログラム（Seal）の改良を行ない、朝鮮半島の言語地図を描くことができるシステムを構築した。そして、それをを用いて、2016年度と2017年度に、『小倉進平『朝鮮語方言の研究』所載資料による言語地図とその解釈』の第1集と第2集を作成した。それぞれ30余りの項目を選び、それについての考察を筆者及び大学院生諸君で分担して執筆したものである。2019年には中国の中央民族大学と韓国の慶北大学でその成果の発表を行った。第3集は2022年3月に完成した。これらはすべて冊子版およびweb版として公表している。さらに、東京外国語大学AA研の共同プロジェクト「アジア・アフリカ地理言語学」にも参加し、毎回研究発表を行なっている。

d 主要業績

(1) 著書

編著、福井玲、『小倉進平『朝鮮語方言の研究』所載資料による言語地図とその解釈 第3集』、2022.3

(2) 論文

福井玲、「借用語を中心とした古代の日韓の音韻の対応について」、『日本語「起源」論の歴史と展望：日本語の起源はどのように論じられてきたか』、9-31頁、三省堂、2020.3

遠藤光暁・峰岸真琴・白井聡子・鈴木博之・倉部慶太編、『Linguistic Atlas of Asia』、ひつじ書房、2021.10（全項目について、朝鮮語の部分を担当）

福井玲、「再発見された小倉進平の卒業論文について」、『朝鮮学報』257号、1-33頁、朝鮮学会、2021.6

(3) 学会発表

- 国際、Fukui Rei, 「Sound correspondences between Japanese and Korean: viewed as a result of borrowing」、Yaponesian genome project (linguistic group, B02)、千葉大学、2020.1.12
- 国際、Fukui, Rei, 「Grammatical relations in Korean.」 The 2nd meeting of ILCAA Joint Research Project “Studies in Asian and African Geolinguistics” ILCAA, TUFS (online), 2021.3.28
- 国際、Fukui, Rei, 「Animal vocabulary in Korean」, The 3rd meeting of ILCAA Joint Research Project “Studies in Asian and African Geolinguistics” ILCAA, TUFS (online), 2021.9.4
- 国際、Fukui, Rei, 「Crop terms in Korean」, The 4th meeting of ILCAA Joint Research Project “Studies in Asian and African Geolinguistics” ILCAA, TUFS (online), 2022.3.19

3. 主な社会活動

(1) 学会

- 国内、日本歴史言語学会、理事、2016.4～、編集委員長、2020.4～
- 国内、日本音声学会、編集委員、2018.4～
- 国内、朝鮮語研究会、幹事、2004.4～

教授 六反田 豊 ROKUTANDA, Yutaka

1. 略歴

- 1985年3月 九州大学文学部史学科朝鮮史学専攻卒業
- 1987年3月 九州大学大学院文学研究科(史学専攻)修士課程修了
- 1989年3月 九州大学大学院文学研究科(史学専攻)博士後期課程中途退学
- 1989年4月 九州大学文学部助手(～1992年3月)
- 1992年4月 久留米大学文学部専任講師(～1995年3月)
- 1995年4月 久留米大学文学部助教授(～1996年3月)
- 1996年4月 九州大学文学部助教授(～2000年3月)
- 2000年4月 九州大学大学院人文科学研究科助教授(～2002年3月)
- 2002年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授(～2007年3月)
- 2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授(～2015年3月)
- 2015年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授(現在に至る)

2. 主な研究活動

a 専門分野

朝鮮中世・近世史

b 研究課題

朝鮮王朝(1392-1910)時代の水運史や財政史・経済史などを中心に研究している。現在の主たる研究課題は、(1) 朝鮮前期漕運制研究、(2) 朝鮮中世・近世海事史研究、(3) 朝鮮中世・近世「水環境」研究、(4) 朝鮮時代財政史研究、(5) 朝鮮時代古文書研究などである。(1)の漕運制とは朝鮮時代における官営の税穀船運機構であり、朝鮮初期におけるその整備・変遷過程や運営実態等を明らかにする作業に取り組んでいる。(2)は(1)から派生したもので、朝鮮の前近代史を「海」とのかかわりで再構成するという問題意識から、済州島民の海難関係記録の分析を通じて彼らの海上活動の実態や異国への漂流・漂着をめぐる諸問題、朝鮮時代の海防体制や「水賊」などについて研究している。(3)は(2)をさらに発展させ、広く人と「水」とのかかわりを明らかにしようとするもので、当面は漢江をはじめとする河川の管理・利用という側面を主たる対象として、水運だけでなく、渡船や漁撈、さらには治水・水利といった点も含めて「水環境」史の構築をめざしている。(4)は、朝鮮後期に施行された新税制である大同法を、その運用実態を地方財政との関連に注目しながら研究しているほか、朝鮮初期の財政制度の性格や、朝鮮時代全般にわたる地方財政の運用方式なども研究の対象としている。(5)は日本各地の諸機関に所蔵される朝鮮古文書の調査である。2020年度から2021年度にかけては、新

型コロナウイルス感染症流行の影響を受け、韓国での現地調査や文献収集が不可能となったため、研究の進行に多大な支障を生じたが、そのようななかでも特に(3)(4)の課題を中心に研究を進めた。

c 概要と自己評価

まず上記研究課題の(3)については、すでに2010年度から2013年度にかけて「朝鮮半島の「水環境」をめぐる社会・経済・文化の歴史的諸相—漢江を中心として」というテーマで日本学術振興会から科学研究費補助金の支給を受け、次いで2016年度から4年間は、それを発展させた研究課題「朝鮮環境史の創成にむけた河川の管理・利用に関する総合的研究」(基板研究(B):課題番号16H03486)が科学研究費補助金の交付対象に採択されるなど、科学研究費補助金を得て精力的に研究を進めてきた(いずれも研究代表者を務めた)。当初、後者の最終年度に当たる2019年度末の2020年3月に、この研究課題における成果を公表するシンポジウムを開催する予定であったが、新型コロナウイルス感染流行のためこのシンポジウムは中止を余儀なくされた。そこで2020年度は、あらためてシンポジウムを開催する時期を探りつつ、研究成果の補訂を進めた。そして2021年3月、朝鮮史研究会との共催の形で、他の研究分担者も含めた5人の報告者からなる「朝鮮環境史の創成にむけた河川の管理・利用に関する総合的研究」ミニ・シンポジウムをオンラインにより開催することができ、この間進めてきた朝鮮時代の農業水利施設と周辺環境との関係について「環境史からみた朝鮮時代の水利施設—堤堰と川防を中心として—」と題する報告をおこなった。

次に(4)については、岩波講座世界歴史の新シリーズの刊行にあわせ、これまでの研究成果を踏まえ、かつ近年の朝鮮時代史研究における時期区分論とも関連させながら、朝鮮時代の国家財政制度の変容過程をその背景にある経済面での変動との関連から跡づけた論文「朝鮮時代の国家財政と経済変動」を執筆し、同シリーズ第12巻に寄稿した。

このほか、韓国の韓国学中央研究院が主催する国際シンポジウムにおいて、日本国内の大学等における朝鮮史の教育・研究の歴史と現状について整理し報告した。また、河出書房新社の「世界と日本がわかる 国ぐにの歴史」シリーズの1冊として企画された『一冊でわかる韓国史』の監修に従事した。

d 主要業績

(1) 著書

(監修) 六反田豊、『一冊でわかる韓国史』、河出書房新社、2021.11

(2) 論文

六反田豊、「朝鮮時代の国家財政と経済変動」、荒川正晴ほか編『東アジアと東南アジアの近世 一五〜一八世紀(岩波講座世界歴史12)』、247-266頁、岩波書店、2022.3

(3) 学会発表

(国内) 六反田豊、「環境史からみた朝鮮時代の水利施設—堤堰と川防を中心として—」、「朝鮮環境史の創成にむけた河川の管理・利用に関する総合的研究」ミニ・シンポジウム(科学研究費補助金研究活動報告。朝鮮史研究会との共催。朝鮮史研究会関東部会2021年3月例会として開催)、オンライン開催、2021.3.27

(国際) 六反田豊、「일본 대학의 한국사 연구 및 교육 동향(日本の大学における韓国史の研究および教育動向)」、한국학중앙연구원 2021년 한국학국제학술회의「동북아시아 지역의 한국학 연구・교육 동향(韓国学中央研究院2021年韓国学国際学術会議「東北アジア地域の韓国学研究・教育動向)」、韓国学中央研究院(韓国京畿道城南市 ※ただし海外からの出席者はオンラインで参加)、2021.10.14

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

(非常勤講師) 学習院大学、「東洋史特殊講義」、2020.4~2022.3

(非常勤講師) 国際基督教大学、「韓国史」、2020.4~2020.6、2021.4~2021.6

(2) 学会

(国際) 韓国中世史学会(韓国)、地域理事、2020.3~

(国際) 朝鮮時代史学会(韓国)、編集委員、2020.1~

(国内) 朝鮮史研究会、編集委員長、2020.10~

(国内) 朝鮮学会、常任幹事、編集委員、2020.4~

(国内) 韓国・朝鮮文化研究会、副会長、運営委員、編集委員、2020.10~

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く) 委員・役員

(教育機関) 釜山大学校民族文化研究所、『韓国民族文化』編集委員、2020.3~2022.2

(その他) 公益財団法人東洋文庫、研究員(兼任)、2020.4~2022.3

(その他) NHK教育テレビ「高校講座世界史」、講師、2020.4~2022.3

(その他) 朝日カルチャーセンター横浜教室、講師、2020.7~2021.3、2021.7~2022.3

1. 略歴

- 1986年3月 東京大学教養学部教養学科第一文化人類学分科卒業
- 1986年4月 東京大学大学院社会学研究科文化人類学専修課程修士課程入学
- 1988年3月 同上 大学院社会学研究科修士課程修了
- 1988年4月 同上 大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程進学
- 1988年8月 文部省アジア諸国等派遣留学生として韓国ソウル大学校に留学（～1991年5月）
- 1993年3月 東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程単位取得満期退学
- 1993年4月 日本学術振興会特別研究員（PD）（～1994年3月）
- 1994年4月 東京大学教養学部助手（～1996年3月）
- 1996年4月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手（～2000年3月）
- 1999年8月 韓国ソウル大学校社会科学研究院比較文化研究所常勤研究員（～2000年8月）
- 2000年4月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授（～2002年3月）
- 2000年9月 英国オックスフォード大学訪問研究者（～2001年3月）
- 2002年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
- 2016年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（現在に至る）
- 2019年3月 韓国全北大学校人文大学訪問研究者（～2019年10月）

2. 主な研究活動

a 専門分野

社会・文化人類学

b 研究課題

韓国朝鮮社会を主たる対象として、社会・文化人類学的な観点から調査研究を進めている。博士課程在籍時より30年余りのあいだ、韓国全羅北道南原地域でフィールドワークを続けており、他の地域でも短期の調査を重ねている。近年の研究課題は、(1) 産業化後の韓国社会における農村移住（都市居住者の農村地域への移住。韓国では「帰農」・「帰村」と呼ばれる）、(2) 韓国の「マウルづくり」活動／支援事業とローカル・コミュニティの再編成、(3) ポストモダンの状況におけるローカル・コミュニティの再編成に関する理論的研究、(4) 1990年代以降の韓国社会における墓と死者の祭祀・追慕の変化（東アジア諸社会における少子化と父系理念の再構築についての比較研究の一環として）、等である。

c 概要と自己評価

研究課題(1)については、2007年3月に予備調査を開始し、2010年8月から韓国全羅北道南原市山内面と近隣地域で、移住者とコミュニティ運動の指導者・活動家を対象としたインタビュー調査と参与観察を断続的に行ってきたが、当該年度においてはコロナ禍での行動制限により現地調査を行うことができなかった。また成果公開としては、過去の調査で収集した資料の一部を研究発表や研究論文で言及するにとどまった。

研究課題(2)については、全羅北道南原市を対象として2018～19年に実施した現地調査と、当該年度におけるオンライン・リソースの資料整理収集の成果を、第71回朝鮮学会、2020韓国文化人類学会学術大会、日本文化人類学会第55回研究大会、2021Global Korean Studies等で発表した。

研究課題(1)・(2)の民族誌的研究を基盤として、研究課題(3)のローカル・コミュニティの理論的再検討にも取り組み、慶北大学校人文大学人文学週間国際会議で発表するとともに、研究論文「可能態としての共同体——現代韓国社会における「マウル」の想像と実践に向けて」（2022年）として公開した。

研究課題(4)については、2018年度より、台湾・中国・沖縄研究者等との共同研究（科研費基盤（A））の一環として取り組んでいる。当該年度においてはオンラインでのインタビュー調査を実施するとともに、2019年12月に実施した現地調査の成果を研究論文「現代韓国社会における祭祀・追慕実践の諸脈絡」（2021年）として公開した。

以上のように、当該年度においてはコロナ禍での海外渡航制限のため、韓国現地での調査を実施できなかったが、オンラインでのインタビュー調査や資料収集など、可能な形で調査と資料収集に当たった。また、オンライン方式の導入により、韓国の学会・大学・研究機関が主宰する学術行事に参加する機会やそこで発表する機会を比較的多く得ることができた。事例研究については基本的に既収集の資料の整理分析に留まったが、その分、理論的視角の深化・洗練により多くの進展を遂げることができたと自己評価する。

d 主要業績

(1) 論文

本田洋、「現代韓国社会における祭祀・追慕実践の諸脈絡」、『韓国朝鮮文化研究』、20、pp.41-67、2021.3

本田洋、「可能態としての共同体——現代韓国社会における「マウル」の想像と実践に向けて」、『韓国朝鮮文化研究』、21、pp.115-133、2022.3

(2) 書評

[Commentary] Ahn Seung Taik, Bier-bearing “Inferiors” and the “Skin” of the Community in Modern and Contemporary Village Society: Cases from Southern Gyeonggi Province, *Korean Anthropology Review*, 6, pp.113-116, 2022

(3) 学会発表

国内、本田洋、「韓国のマウルづくりとローカル・コミュニティの再編成：南原地域の事例から」、第71回朝鮮学会、オンライン、2020.10.4

国際、本田洋、「マウル作りと政治的主体の形成：全北南原地域の事例を中心として」、2020 韓国文化人類学会学術大会、オンライン、2020.11.7

国内、本田洋、「現代韓国社会における祭祀・追慕実践の諸脈絡」、基盤研究 (A) 「少子化に揺れる東アジアの父系理念—祖先祭祀実践と世界観の再創造に関する比較研究」(課題番号 18H03607) 第10回研究会、オンライン、2021.2.27

国内、本田洋、「韓国の「マウルづくり」とローカル・コミュニティの形成：南原地域の事例から」、日本文化人類学会第55回研究大会、オンライン、2021.5.30

国内、本田洋、「課題報告「韓国」、基盤研究 (A) 「少子化に揺れる東アジアの父系理念—祖先祭祀実践と世界観の再創造に関する比較研究」(課題番号 18H03607) 第12回研究会、オンライン、2021.7.10

国内、本田洋、「韓国：社会的分断と共感・心の共同体づくり」、シンポジウム「「共感」と「分断」」(東京大学文学部ホームカミングデー企画)、東京大学文学部 (ハイブリッド)、2021.10.16

国際、本田洋、「協同的实践の蓄積と共有：南原地域マウルづくりの事例を通して」、2021 Global Korean Studies, Global Korean Studies and Cultural Economy: Beyond the Binary of Market and Gift、韓国ソウル大学校社会科学大学人類学科 (ハイブリッド)、2021.10.29

国際、本田洋、「「マウル」の社会人類学」、慶北大学校人文大学人文学週間国際会議「共同体と人文学」、韓国慶北大学校人文大学 (ハイブリッド)、2021.11.21

国内、本田洋、「現代韓国における身近な死者の葬喪と追慕：大邱とその周辺地域の事例から」、基盤研究 (A) 「少子化に揺れる東アジアの父系理念—祖先祭祀実践と世界観の再創造に関する比較研究」(課題番号 18H03607) 第14回研究会、オンライン、2022.3.19

(4) 研究報告書

本田洋、公益財団法人日韓文化交流基金 2019 年度フェローシップ報告書「現代韓国の地方社会における共同の活動の創出と生活の場の再編成に関する社会人類学的研究」、27pp.、2020.1

本田洋、公益財団法人日韓文化交流基金 2019 年度フェローシップ報告書「현대한국 지방사회에서의 공동 활동의 창출과 생활 공간 (場) 의 재편성에 대한 사회인류학적 연구」(韓国語版)、25pp.、2020.1

(5) 予稿・会議録

国内会議、東京大学文学部広報委員会編著『「共感」と「分断」』、2022.3

(6) 会議主催(チェア他)

国内、「韓国・朝鮮文化研究会第21回研究大会」、大会委員、オンライン、2020.10.24

国内、「韓国・朝鮮文化研究会第22回研究大会」、大会委員長、オンライン、2021.10.23

(7) 教科書

『社会学概論 2020』、赤川学他、執筆、東京大学文学部社会学研究室、2020.10

(8) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 (C) (一般)、本田洋、研究代表者、「現代韓国社会におけるローカル・コミュニティの再構築：「共同体作り」の事例から」、2020～

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

特別講演、安東大学校大学院民俗学科4段階 BK21 教育研究チーム (韓国)、「地域共同体の現在を見る社会人類学的視角：全北南原地域の事例を通して」、2021.2.22

(2) 学会

国内、韓国・朝鮮文化研究会、会長、2020.10～2022.3、運営委員（庶務責任者）、2020.4～2022.3
国内、朝鮮学会、常任幹事・編集委員、2021.4～2022.3
国外、*Korean Anthropology Review*、Editorial board、2020.4～2022.3

准教授 **金 成垣** KIM, Sung-won

1. 略歴

1992年3月 延世大学校社会科学大学社会福祉学科入学（韓国ソウル特別市）
1999年8月 延世大学校社会科学大学社会福祉学科卒業
2000年4月 東京大学大学院人文社会系研究科修士課程（社会学専門分野）入学
2002年3月 東京大学大学院人文社会系研究科修士課程（社会学専門分野）修了
2002年4月 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程（社会学専門分野）進学
2003年5月 日本福祉大学21世紀COEプログラム奨励研究員（～2005年3月）
2004年4月 日本学術振興会特別研究員（DC2）（～2005年3月）
2005年3月 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程（社会学専門分野）単位取得満期退学
2005年4月 日本学術振興会特別研究員（PD）（～2006年3月）
2006年4月 東京大学社会科学研究所客員研究員（～2007年3月）
2007年3月 博士（社会学）学位取得
2007年4月 東京大学社会科学研究所助教（～2010年3月）
2007年12月 同志社大学社会福祉教育・研究支援センター委託研究員（現在に至る）
2008年10月 北京大学社会学系客員研究員（～2009年1月）
2010年4月 東京経済大学経済学部専任講師（～2012年3月）
2012年4月 東京経済大学経済学部准教授（～2016年3月）
2016年4月 明治学院大学社会学部准教授（～2018年3月）
2018年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授（現在に至る）

2. 主な研究活動

a 専門分野

福祉社会学, アジア社会論

b 研究課題

社会学を専門とし、失業・貧困問題や少子高齢化問題などの社会問題、そしてそれに対応するための雇用・社会保障政策および家族政策などの社会政策＝福祉国家政策について研究している。韓国およびアジア諸国・地域を主な対象とし、歴史比較分析を通じて今日の状況を明らかにし、国際比較分析を通じて各国の特徴とその位置づけについて分析を行っている。近年の研究課題は大きく分けて次の2つである。(1) 理論研究として、福祉国家とフォーディズムの歴史的關係性に着目して、従来の福祉国家研究を批判的に検討し、福祉国家を捉える新しい視点を構築すること、(2) 歴史・現状分析として、理論研究を通してえられた新しい視点にもとづいて、韓国およびアジア社会の歴史と現状を分析すること、である。

c 概要と自己評価

理論研究の課題(1)は、10年以上から取り組んできた(金成垣、『後発福祉国家論——比較のなかの韓国と東アジア』、東京大学出版会、2008年、金成垣編、『現代の比較福祉国家論——東アジア発の新しい理論構築に向けて』、ミネルヴァ書房、2010年)。最近では、「アジアは『福祉後進国』なのか——『福祉国家的でないもの』が示す未来」(埋橋孝文編、『どうする日本の福祉政策』、ミネルヴァ書房、2020年)、「後発福祉国家論の再検討——これまでのアジア研究と今後の課題」(上村泰裕・金成垣・米澤旦編、『福祉社会学のフロンティア』、ミネルヴァ書房、2021年)、「福祉政策の国際比較」(一般社団法人ソーシャルワーク教育学校連盟編、『社会福祉の原理と政策』、中央法規、2021年)などの

論文を通して理論的な洗練化を図っている。従来の福祉国家研究は、主に資本主義との関連、とくに資本主義の本質的な矛盾をもたらす失業・貧困問題や資本主義の成熟をもたらす少子高齢化問題への対応として、福祉国家の歴史過程を捉える傾向が強い。しかし、その視点からすると、韓国を含むアジア諸国・地域における「福祉国家の未発達」しか説明できない。それに対して、資本主義に発展をもたらした「フォーディズム」に着目することで、福祉国家の歴史過程についての新しい視点を確保することができ、それによって、アジア諸国・地域に関して、「福祉国家の未発達」ではなく、「フォーディズムなき福祉国家」という新しいあり方の福祉国家を浮き彫りにすることができる。その新しい福祉国家は単にアジア諸国・地域に限らず、他の先進諸国に対しても、ポスト・フォーディズムという新しい時代への展望を探るうえで重要な示唆を与えるものであると考えられる。このような問題関心から、歴史・現状分析の課題(2)にも取り組み、「コロナ危機のなかの韓国の社会保障」(『週刊社会保障』, No. 3075, 2020年)、“Weak social security but strong employment security in the Japanese welfare state” (Jea-jin Yang ed. *The Small Welfare State; Rethinking Welfare in the US, Japan, and South Korea*, Edgar Elgar Publishing, 2020年)、「文在寅政権下の社会保障制度改革」(『週刊社会保障』, No. 3134, 2021年)、「20世紀の韓国——なぜ福祉国家の発展がなかったのか」(『韓国朝鮮文化研究』, 第21号, 2022年)などの研究成果を発表している。

以上の研究は、2018年度から2020年度にかけての科学研究費補助金(「後発福祉国家・韓国のベーシックインカムに政策論的研究」(基盤研究(C):課題番号18K02123, 研究代表者))をふまえて、2021年度から2023年度にかけての科学研究費補助金(「韓国におけるベーシックインカム構想と後発福祉国家のゆくえ」(基盤研究(C):課題番号21K01992, 研究代表者))を受けて進めてきている。それをより発展させるための現地調査を主な目的とした研究課題が科学研究費補助金の交付対象が新しく採択され(「インフォーマル化するアジア——グローバル化時代のメガ都市のダイナミクスとジレンマ」(基盤研究(A):課題番号19H00553, 研究分担者, 2019年度~2023年度)、「アジアにおけるデジタル化の国際比較——利活用水準、政策体系、電子認証制度に注目して」(基盤研究(C):課題番号20K12367, 研究分担者, 2020年度~2023年度)、「経済発展のタイミングと福祉国家の多様性」(基盤研究(C):課題番号21K0187, 研究分担者, 2021年度~2023年度)), 現在、韓国およびアジア各国・地域の現地調査をより活発に進めている。

d 主要業績

(1) 著書

- 編著, 上村泰裕・金成垣・米澤旦編, 『福祉社会学のフロンティア——福祉国家・社会政策・ケアをめぐる構想力』, ミネルヴァ書房, 2021.11
- 共著, Jea-jin Yang ed. *The Small Welfare State; Rethinking Welfare in the US, Japan, and South Korea*, Edgar Elgar Publishing, 2020.4.
- 共著, 埋橋孝文編, 『どうする日本の福祉政策』, ミネルヴァ書房, 2020.10
- 共著, 岩崎晋也・金子光一・木原活信編, 『社会福祉の原理と政策』, ミネルヴァ書房, 2020.12
- 共著, 一般社団法人ソーシャルワーク教育学校連盟編, 『社会福祉の原理と政策』, 中央法規, 2021.2
- 共著, 埋橋孝文編, 『福祉政策研究入門 政策評価と指標 第2巻——格差と不利/困難のなかの社会政策』明石書店, 2022.3

(2) 論文

- 単著, 金成垣, 「コロナ危機のなかの韓国の社会保障」, 『週刊社会保障』, No. 3075, 48-53頁, 2020.6
- 単著, 金成垣, 「福祉国家研究と政策論——〈社会分析〉と〈政策分析〉の接点を求めて」, 『Inflecowk』, No. 1105, 16-24頁, 2020.11
- 単著, 金成垣, 「韓国の国民健康保険——国民向けの広報活動と意識調査」, 『健保連海外医療保障』, No. 127, 55-74頁, 2021.3
- 単著, 金成垣, 「文在寅政権下の社会保障制度改革」, 『週刊社会保障』, No. 3134, 48-53頁, 2021.8
- 単著, 金成垣, 「코로나 19 속 일본 상병수당의 대응과 개혁과제 (コロナ禍の日本における傷病手当の対応と改革課題)」, 『국제사회보장리뷰 (国際社会保障レビュー)』, No. 19, 38-50頁, 2021.12
- 単著, 金成垣, 「20世紀の韓国——なぜ福祉国家の発展がなかったのか」, 『韓国朝鮮文化研究』, 第21号, 37-61頁, 2022.3

(3) 書評

- 金成垣, 「崔佳榮著『韓国の大統領制と保育政策——家族主義福祉レジームの変容』, 『現代韓国朝鮮研究』, 第20号, 75-78頁, 2020.12

(4) 学会発表・講演

- 国内, 金成垣, 「これまでの国際比較研究, これからの国際比較研究: 日韓を中心に」, 日本社会福祉学会第69回秋季大会「留学生と国際比較研究のためのワークショップ」, オンライン, 2021.9

3. 主な社会活動

(1) 学会

(国内) 社会政策学会, 日本・東アジア専門部会事務局, 2010.9～

(国内) 社会政策学会, 幹事, 2019.5～2020.5

(国内) 福祉社会学会, 庶務理事, 2019.6～2021.6

(国内) 社会福祉学会, 国際学術交流促進委員, 2018.6～2022.5

(国際) 社会保障国際論壇, 事務局, 2010.9～

(国際) 韓国社会政策学会, 国際協力委員, 2012.6～

(2) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

(研究機関) アジア研究所, 機関誌『アジア経済』編集委員, 2020.4～

29 次世代人文学開発センター

《文化交流学部門》

教授 小島 毅 KOJIMA, Tsuyoshi

1. 略歴

1985年3月	東京大学文学部中国哲学専修課程卒業（文学士）
1987年3月	同 大学院人文科学研究科修士課程修了（中国哲学）
1987年4月	東京大学東洋文化研究所助手（東アジア第一部門）
1992年4月	徳島大学総合科学部講師（総合科学科）
1994年4月	同 助教授（人間社会学科）
1996年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授（中国思想文化学）
2007年4月	同 准教授（中国思想文化学）
2013年4月	同 教授（中国思想文化学）
2015年6月	同 教授（次世代人文学開発センター）に配置換

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国思想文化史、王権理論の展開および儒教の教化論、東アジア海域交流史

b 研究課題

- (1) 中国における朱子学・陽明学の思想的形成と社会的展開。
- (2) 中国皇帝制秩序を支える王権儀礼とその理論。
- (3) 日本における儒教思想の流入とその社会的効果。
- (4) 東アジアの伝統思想における尊厳概念。

c 概要と自己評価

概要：中国思想文化史研究として、宋代の儒教において生じた新たな思想潮流と、それが朱子学に集約していく様相を中心に研究してきた。また、その延長線上にいわゆる中世以降の日本における朱子学の受容と独自の展開についても扱い、特に王権論の観点から天皇制に関わる思想的・儀礼的事象を探究している。また、尊厳概念の比較思想的研究を課題とする科研の共同研究プロジェクトに加入して東アジアの伝統思想について考察を進めている。

自己評価：2020～2021年度は上記の4つの研究課題のうち、(3)と(4)についての研究を進めた。特に(4)についてはJSPS科研基盤(S)「尊厳概念のグローバルスタンダードの構築に向けた理論的・概念史的・比較文化論的研究」の研究分担者として共同研究の運営と遂行にあたった。ただし、2020度は副研究科長としての業務におわられて自身の研究が計画どおりには進展しなかった。

d 主要業績

(1) 著書

- 単著、小島毅、『中国思想と宗教の奔流』、講談社学術文庫、2021.1（2005年刊行のもの文庫化）
共著、小島毅（加藤泰史・小倉紀蔵と共編）、『東アジアの尊厳概念』、法政大学出版社、2021.3
単著、小島毅、『義経の東アジア』、文藝春秋、2021.4（2005年刊行のもの増補改訂版）

(2) 論文

- 小島毅、「孔子を神として祭る——曲阜孔子廟の歴史——」、『文化交流研究』、34、33-38頁、2021.3
小島毅、「現代新儒家牟宗三のカント理解」、『東アジアの尊厳概念』所収、179-198頁、2021.3
Kojima Tsuyoshi（小島毅）、「Emperor-Centrism and the Historiography of the Mito School」、『The Tokugawa World』, eds. by Rary P. Leupp & De-min Tao（陶徳民）』、888-901頁、2021.9
小島毅、「人材を辨ず——真徳秀『大学衍義』の君主論——」、伊東貴之編『東アジアの王権と秩序——思想・宗教・儀礼を中心として』、汲古書院、481-494頁、2021.10
小島毅、「儒教経学における「嫂」」、『文化交流研究』、35号、77-86頁、2022.3
小島毅、「江原素六について」、『関西大学中国文学会紀要』、43号、89-96頁、2022.3

「栄一、論語を説く——人格と修養の視点から——」、二松学舎大学東アジア学術総合研究所編、『『論語と算盤』の真実——日本近代史の中の渋沢栄一——』、長久出版社、33-54 頁、2022.3

(3) 書評

福岡亮大、『ハロー、ユーラシア：21世紀「中華」圏の政治思想』、講談社、『週刊文春』、2021年11月4日号

(4) 解説

「吉川幸次郎『古典について』」、『講談社学術文庫』、219-229 頁、2021.4

「儒教と近代」、島藺進他編『近代日本宗教史1 維新の衝撃』、春秋社、100-103 頁、2020.9

(5) 啓蒙

「蘇州で疫病を治した医者（難者問邪7）」、『UP』、571、2020.5

「建康で人々を自粛させた高僧（難者問邪8）」、『UP』、574、pp.49-53、2020.8

「香港で自由を求める若者たち（難者問邪9）」、『UP』、577、pp.48-53、2020.11

「市ヶ谷で自決した小説家（難者問邪10）」、『UP』、580、pp.31-36、2021.2

「市ヶ谷で自決した小説家（続）（難者問邪11）」、『UP』、583、2021.5

「松坂で大人になった国学者（難者問邪12）」、『UP』、588、2021.8

「平泉でミイラに会った文化勲章受章者（難者問邪13）」、『UP』、589、pp.47-52、2021.11

「曲阜で仁を説いた聖人（難者問邪14）」、『UP』、590、2022.2

(6) マスコミ

『鎌倉殿の13人』の主人公・北条義時、かつて「逆賊」扱いされていたのをご存知ですか?、『現代ビジネス オンライン』、講談社、2022.1.30

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本中国学会、副理事長、2015.4～2021.3、理事、2021.4～

国内、日本儒教学会、理事（常務委員）、2016.5～2021.3、会長、2021.4～

国内、中国社会文化学会、理事長、2017.7～2019.7、理事、2019.7～

教授 **芳賀 京子** SENGOKU-HAGA, Kyoko

1. 略歴

1991年3月 東京大学文学部第二類（史学）美術史学専修課程卒業
1991年4月 東京大学大学院人文科学研究科美術史学専攻修士課程入学
1994年3月 同 修了
1994年4月 東京大学大学院人文社会系研究科美術史学専攻博士課程進学
1994年10月 ローマ第2大学トール・ヴェルガータ文学部単科生（イタリア政府給費留学生、～1995年3月）
1995年4月 在アテネ イタリア国立考古学研究所大学院専門課程入学（イタリア政府給費生、～1998年3月）
1998年12月 同 修了、ディプロマ取得
2000年3月 東京大学大学院人文社会系研究科美術史学専攻博士課程単位取得満期退学
2001年4月 日本学術振興会特別研究員（PD）（～2004年3月）
2002年5月 博士（文学）取得（東京大学）
2005年9月 国立西洋美術館学芸課リサーチフェロー
2006年8月 東北大学大学院文学研究科助教授
2007年4月 同 准教授
2017年4月 同 教授
2018年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2021年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

古代ギリシア・ローマ美術史

b 研究課題

- (1) ポンペイの都市・住居・美術
- (2) 帝政前期のローマ美術の中央から周縁への伝播と地域性
- (3) 3D形状比較を用いた古代彫刻工房の実態の解明
- (4) 美術展覧会のVRアーカイブとVR美術鑑賞
- (5) 古代ギリシア・ローマ美術における神像や肖像

c 概要と自己評価

概要：2020～21年度は(1)のポンペイ関係の調査研究にかなりの時間を費やした。(2)に関しては、地中海世界における知の動態に関する科研プロジェクトに参加し、ローマ帝政前期における皇帝肖像の伝播や地方工房の形成について、英語と日本語で論文を執筆した。(3)に関しては、クロアチアとエフェソスで出土したブロンズ像の解析を行ったが、古代彫刻工房というよりも近代の修復にかかわる情報が多く得られる結果となり、美術品の修復に関するシンポジウムで発表した。(4)に関しては、上記のポンペイ展全体を8KでVRアーカイブ化するための撮影を、朝日新聞社との共同プロジェクトとして、情報理工学系研究科谷川智洋特任教授、本センター人文情報学部門の大向一輝准教授の協力のもとに行った。

自己評価：2022年1月から東京国立博物館で開催された『特別展ポンペイ』の監修を務め、作品選定や構成、図録作成などにまで大きく関わったこと、10年来滞っていた翻訳書の出版がようやくかなうこととなり、その作業に多くの時間をとられたことに加え、コロナ禍の中で海外調査を行えなかったこともあって、(5)に関してはあまり進めることができなかった。今後、力を入れていく予定である。

d 主要業績

(1) 著書

共著、秋山聰、田中正之編、『西洋美術史 美術出版ライブラリー 歴史編』、2021.12

(2) 論文

芳賀京子、「神像を見る・神像が見守る——古代アテナイの場合」、『空間史学叢書（特集：まなごしの論理）』、3、27-54頁、2020.10

芳賀京子、「古代ギリシア・ローマ美術における「古典」、『古典主義再考』、1、21-48頁、2021.1

芳賀京子、「神々と人の姿 古代ギリシア・ローマ美術」、『文明と哲学』、13、46-63頁、2021.3

芳賀京子、「古代ギリシアの聖域の記述と信仰の記憶」、『文化交流研究』、34、25-32頁、2021.3

Kyoko Sengoku-Haga, "Diffusion of Roman Imperial Portraits," in Y. Suto (ed.), *Transmission and Organization of Knowledge in the Ancient Mediterranean World*, pp. 87-104, 2022.1

芳賀京子、「ポンペイの住人と住宅装飾—神々とトロイア戦争」、『特別展 ポンペイ』、東京国立博物館、214-220頁、2022.1

芳賀京子、「《アルテミス・エフェシア》 偶像に宿る聖性の継承と分与」、木俣元一・佐々木重洋・水野千依編『聖性の物質性—人類学と美術史の交わる場所』、325-347頁、2022.3

(3) 学会発表

国内、芳賀京子、「前5世紀のギリシアにおける詩人肖像の奉納」、古代ギリシア文化研究所2020年度研究集会、2020.11.8

国内、芳賀京子、「西洋古代彫刻の修復—大理石像とブロンズ像—」、第74回美術史学会全国大会シンポジウム「修理と美術史学 残すもの、除くもの、補うもの」、神戸大学（オンライン）、2021.5.15

国内、Kyoko Sengoku-Haga, "Keener than Connoisseurs' Eyes: Analysis and Experience of Ancient Art through Virtual Reality (VR)," JADH 2021 (The 11th Conference of Japanese Association for Digital Humanities), Digital Humanities and COVID-19, 2021.7.7

(4) 監修

芳賀京子、『特別展 ポンペイ』、東京国立博物館、2022.1

(5) 総説・総合報告

芳賀京子、「古代イタリア美術」、『世界歴史大系イタリア史』、1、274-285頁、2021.3

(6) 翻訳

エリカ・ジーモン著、芳賀京子・藤田俊子共訳、『ギリシア陶器』、中央公論美術出版、2021.3

(7) 研究テーマ

- 文部科学省科学研究費補助金、芳賀京子、分担者、「古代地中海世界における知の動態と文化的記憶」、2018～
文部科学省科学研究費補助金、芳賀京子、研究代表者、「ヘレニズム後期からローマ帝政初期への転換期における彫刻
工房の地域流派の研究」、2020～
文部科学省科学研究費補助金、芳賀京子、分担者（東大内に代表者あり）、「ソンマ・ヴェスヴィアーナ遺跡発掘の成
果と文化史的展望—古代の記憶の回復をめぐる—」、2020～
文部科学省科学研究費補助金、芳賀京子、分担者（部局内に代表者あり）、「形象の記述と記録についての比較美術学
的研究」、2021～

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、東北大学、学部「美学・西洋美術史各論」、大学院「芸術学特論」、2021.7（集中講義）

(2) 学会

- 国内、美術史学会、常任委員、2020.5～
国内、西洋古典学会、委員、2019.4～
国内、地中海学会、大会準備委員、2020.6～2022.6

《 国際人文学部門 》

教授 向井 留実子 MUKAI, Rumiko

1. 略歴

- 1978年3月 青山学院大学文学部フランス文学科卒業
1994年4月 広島大学大学院教育学研究科（日本語教育）博士課程前期入学
1996年3月 広島大学大学院教育学研究科（日本語教育）博士課程前期修了（教育学修士）
1996年4月 愛媛大学教育学部、松山東雲女子大学人文学部非常勤講師
1998年4月 松山東雲女子大学人文学部専任講師
2000年4月 松山東雲女子大学人文学部助教授
2003年10月 愛媛大学留学生センター助教授
2011年9月 東京大学日本語教育センター教授
2014年7月 東京大学大学院人文社会系研究科教授
2021年3月 定年退職

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本語教育

b 研究課題

- 1) 学術的な文章における引用形態についての調査・研究および指導法・教材開発
- 2) 大学および地域における日本語教育・支援の体制づくりのための調査・研究
- 3) 日本語非母語話者の学習ニーズの多様化に対応する漢字教育のための調査・研究

c 概要と自己評価

教育面では、2020年度より、新しい科目として、日本語教育に関心を持つ学部生・院生に向けた「日本語教育の基礎」の開講を開始した。当初はフィールドでの体験を多く取り入れた内容を考えていたが、コロナ感染拡大のために、オンライン実施となった。しかし、そのような中でも、Aセメスターには、工学系研究科日本語教室の協力を得て、オンラインでの実習・授業見学も行うことができ、一定の成果をあげることができた。また、2017年度から開始した、Lecture Assistant

に認定された院生が担当する、日本に関する知識提供の科目「留学生のための特別講座」の充実化を進め、2020年度には、初めての試みとして講座の学外開講の可能性を探った。2020年8月4～5日には二松学舎大学で「日本の近現代文学と俳句入門」と題した講座を、2021年3月22～23日には昭和女子大学で「宮沢賢治から見る日本の文学・歴史・宗教」と題した講座を開講した。いずれも受講者は限定的ではあったが、留学生の評価は高かった。とりわけ、昭和女子大学で行った講座は、4人の院生が同じ人物をめぐってそれぞれの専門の立場からアプローチするもので、内容的にも好評であったが、講座の設計についても高い評価を得た。また、並行して、講座を担当する院生に向けて、指導力強化を目的とした、意見交換会や外部講師を招いた研修会も実施した。研究面では、アカデミック・ライティングにおける引用指導についての調査・研究を継続して行い、従来の指導における引用の捉え方の課題を明らかにした。加えて、2021年度からは、2020年度に終了した科学研究費補助金による研究を引き継ぎ、地域における日本語教育の課題を明らかにし、その解決策をさぐるために、地域各所のフィールド調査・研究を進めた。また各所の地域団体からの依頼による研修会も行うなど、地域貢献にも努めた。

d 主要業績

(1) 論文

向井留実子、「人文社会系分野の学位取得を目指す留学生への教育体制づくりの実践と課題」、『文化交流研究』、第34号、95-110頁、2021.3

(2) 学会発表

国内、向井留実子、中村かおり、近藤裕子、「留学生は学術的文章の引用箇所をどのように判断しているか」、日本語教育学会2020年度秋季大会、2020.11.29

国内、近藤裕子、中村かおり、向井留実子、「初年次の日本人学生が引用箇所を判断する際の困難点」、第27回大学教育研究フォーラム、2021.3.18

国際、中村かおり、近藤裕子、向井留実子、「文章理解過程と要約文に見られる学習者の文化的背景と読解方略の影響」、2021年第24回AJEヨーロッパ日本語教育シンポジウム、2021.8.27

国内、近藤裕子、中村かおり、向井留実子、「初年次ライティング教育から専門教育への接続の問題—論文・レポートの書き方教本の引用解説分析に基づいて」、第28回大学教育研究フォーラム、2022.3.17

(3) 予稿・会議録

近藤裕子、向井留実子、「読解学習を論理的な文章作成につなぐための一考察」、『日本語教育方法研究会誌』、Vol.26, No.2、8-9頁、2020.3

向井留実子、中村かおり、近藤裕子、「学術的文章の非典型的引用をめぐるとの考察」、『日本語教育方法研究会誌』、Vol.27, No.1、82-83頁、2021.3

向井留実子、中村かおり、近藤裕子、「社会学系の学術論文に見られる引用形態とその使用傾向」、『日本語教育方法研究会誌』、Vol.28, No.1、24-25頁、2021.9

高橋志野、向井留実子、築地伸美、「地域日本語ボランティア養成講座の講師の課題」、『日本語教育方法研究会誌』、Vol.28, No.1、74-75頁、2021.9

高橋志野、向井留実子、築地伸美、「地方の活動歴の長いボランティア団体向け研修会の課題」、『日本語教育方法研究会誌』、Vol.28, No.2、24-25頁、2022.3

向井留実子、中村かおり、近藤裕子、「学術論文における引用表現としての「ように」の使用環境」、『日本語教育方法研究会誌』、Vol.28, No.2、88-89頁、2022.3

(4) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、向井留実子、研究代表者、「アカデミック・ライティングにおける適切な間接引用指導のための調査・研究」、2019～2022

文部科学省科学研究費補助金、向井留実子、分担者、「移住女性のリテラシー保障に向けた学習支援体制と地域コミュニティの構築に関する研究」、2016～2020

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本語教育方法研究会、委員、～2021.3

教授 唐沢 かおり KARASAWA, Kaori

26 社会心理学 参照

准教授 鎌田 美千子 KAMADA, Michiko

1. 略歴

1991年3月 宮城教育大学教育学部小学校教員養成課程卒業
1994年4月 東北大学大学院国際文化研究科国際交流論専攻博士課程前期入学
1996年3月 同 修了、修士(国際文化)
2002年9月 宇都宮大学留学生センター講師(～2007年10月)
2006年10月 東京工業大学大学院社会理工学研究科人間行動システム専攻博士後期課程入学
2007年11月 宇都宮大学留学生センター准教授(～2012年3月)
2008年4月 同 宇都宮大学大学院国際学研究科准教授(～2019年3月)
2010年3月 東京工業大学大学院社会理工学研究科人間行動システム専攻博士後期課程修了、博士(学術)
2012年4月 宇都宮大学留学生・国際交流センター准教授(組織名変更)(～2017年3月)
2017年4月 同 学術院准教授(国際学部・国際学研究科責任教員、改組)(～2020年8月)
2019年4月 同 大学院地域創成科学研究科准教授(改組)(～2020年8月)
2020年9月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本語教育学

b 研究課題

- (1) 日本語ライティング教育のための教授法開発とその基礎研究
- (2) 日本語教員の養成・研修のための教授法開発とその基礎研究
- (3) 外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修のための教授法開発とその基礎研究

c 概要と自己評価

研究課題(1)及び研究課題(2)に関しては、科学研究費補助金基盤研究(B)「日本語教師養成・研修におけるライティング教育実践能力の育成—批判的思考を中心に—」を研究代表者として開始した。2020～2021年度は、①日本語教員養成課程の大学4年生を対象にしたインタビュー調査、②日本語教員養成課程の大学生を対象にした質問紙調査、③現職の日本語教員を対象にした質問紙調査を実施し、定量的・定性的に分析した結果からライティング指導の難しさの特徴の解明を試みた。加えて、代表理事を務める大学日本語教員養成課程研究協議会が2021年に30周年を迎えたのを機に、大学・大学院における日本語教員養成の教育・研究を概説した書籍刊行を企画し、編集統括及び執筆を行った。この著書は、2022年12月刊行の予定である。

研究課題(3)に関しては、以下の二つの研究成果を発表した。一つは、公益社団法人日本語教育学会が文部科学省から受託した「外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修モデルプログラム開発事業」の研究の一部として、教育方法に関する課題と今後の可能性について熟達化の観点から考察した。もう一つは、外国人児童生徒の教科学習支援のための基礎研究として、中学校社会教科教科書に使用されている抽象語を分析し、その特徴を捉えた。

以上の通り、当初の研究計画を概ね遂行することができた。今後も着実に展開していけるよう鋭意努めていきたい。

d 主要業績

(1) 著書

共著、石黒圭・鳥日哲 編、井伊菜穂子・鎌田美千子・胡芸(芸)群・胡方方・田佳月・黄均鈞・布施悠子・村岡貴子 著、『どうすれば論文・レポートが書けるようになるか—学習者から学ぶピア・レスポンス授業の科学—』、ココ出版、2020.2

(2) 論文

鎌田美千子、「パラフレーズに着目した日本語指導書開発のための一考察—質問紙調査から見えてきた課題—」、『宇都宮大学国際学部研究論集』、49、51-59 頁、2020.2

鎌田美千子・板垣信哉、「第二言語としての日本語による視写と黙読の効果—レポート・論文表現の学習に向けた実証研究—」、『宇都宮大学国際学部研究論集』、49、41-49 頁、2020.2

鎌田美千子、「日本語教授法開発と教師養成—ライティングにおける書きことばの習得と学習を例に—」、『文化交流研究』、35、87-95 頁、2022.3

坪根由香里・鎌田美千子、「大学の日本語教員養成課程で学ぶ大学生がライティング指導に感じる難しさ —PAC 分析の結果をもとに—」、『大阪観光大学研究論集』、22、33-42 頁、2022.3

(3) 学会発表

国内、金田智子・菅原雅枝・仲本康一郎・鎌田美千子、パネルセッション「教師教育の課題と可能性—外国人児童生徒等教育を担う教員の養成と研修に焦点を当てて—」、2020 年度日本語教育学会春季大会、2020.5.30

国内、清水友美・鎌田美千子、「中学校社会科教科書における抽象語の分析と授業実践の試み—日本語指導が必要な子どもたちへの学習支援に向けて—」、2020 年度日本語教育学会春季大会、2020.5.31

国内、坪根由香里・鎌田美千子、「大学の日本語教員養成課程で学ぶ大学生が持つライティング指導に対する意識—難しさに焦点を当てて—」、第 30 回小出記念日本語教育研究会、2021.6.27

国内、鎌田美千子・坪根由香里・副田恵理子・脇田里子・村岡貴子・菅谷奈津恵・松岡洋子、「大学で日本語を教える教師が抱えるライティング指導の難しさ—日本語教師養成・研修の具体的検討に向けて—」、2021 年度日本語教育学会秋季大会、2021.11.28

国内、脇田里子・鎌田美千子、「ドイツのアビトゥア試験ドイツ語科目の問題分析—日本語のアカデミック・ライティングへの示唆—」、第 55 回 AJG 定例研究会、2022.2.20

(4) 予稿・会議録

国内会議、金田智子・菅原雅枝・仲本康一郎・鎌田美千子、パネルセッション「教師教育の課題と可能性—外国人児童生徒等教育を担う教員の養成と研修に焦点を当てて—」、『2020 年度日本語教育学会春季大会予稿集』、38-47 頁、2020.5

国内会議、清水友美・鎌田美千子、「中学校社会科教科書における抽象語の分析と授業実践の試み—日本語指導が必要な子どもたちへの学習支援に向けて—」、『2020 年度日本語教育学会春季大会予稿集』、238-243 頁、2020.5

国内会議、坪根由香里・鎌田美千子、「大学の日本語教員養成課程で学ぶ大学生が持つライティング指導に対する意識—難しさに焦点を当てて—」、『第 30 回小出記念日本語教育研究会予稿集』、61-64 頁、2021.6

同『小出記念日本語教育研究会論文集』30、185 頁、2022.3

国内会議、鎌田美千子・坪根由香里・副田恵理子・脇田里子・菅谷奈津恵・松岡洋子、「大学で日本語を教える教師が抱えるライティング指導の難しさ—日本語教師養成・研修の具体的検討に向けて—」、『2021 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』、81-86 頁、2021.11

国内会議、脇田里子・鎌田美千子、「ドイツのアビトゥア試験ドイツ語科目の問題分析—日本語のアカデミック・ライティングへの示唆—」、『第 55 回 AJG 定例研究会会員発表予稿集』、1 頁、2022.2

(5) 会議主催 (チェア他)

国内、2020 年大養協シンポジウム「社会の変化に対応した持続可能な日本語教員養成課程に求められるもの」、主催、オンライン開催、2021.3.20

国内、2021 年大養協シンポジウム「大学日本語教員養成における教育実習の新たな課題—学習場面の多様化・求められる教師像の変化・コロナ禍に揺れる社会の中で—」、主催、オンライン開催、2021.6.5

国内、大養協 30 周年記念シンポジウム「社会を築くことばの教育—日本語教員養成のこれまでの 30 年、これからの 30 年—」、主催、オンライン開催、2021.10.17

(6) 資料

『中国語を母語とする児童を対象としたリライトのための日中漢語対応表』、鎌田美千子・劉琮、2020

(7) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 B、鎌田美千子、研究代表者、「日本語教師養成・研修におけるライティング教育実践能力の育成—批判的思考を中心に—」、2020～

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 B、鎌田美千子、研究分担者、「日本語読解・ライティングの方法に影響する母語・母文化の教育的背景要因に関する研究」、2019～

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、宇都宮大学大学院、「言語教育特論」、2021.4～

非常勤講師、宇都宮大学、「言語・コミュニケーション研究E（日本語教育特別演習）」、2021.10～
セミナー、公益財団法人栃木県国際交流協会、「日本語学習支援研修会」、2020.10～2020.11

(2) 学会

国内、公益社団法人日本語教育学会、審査・運営協力員、2016.7～

国内、専門日本語教育学会、編集幹事、2020.4～

国内、大学日本語教員養成課程研究協議会、代表理事、2020.11～

国内、異文化間教育学会、一般会員、2004～

国内、社会言語科学会、一般会員、2013～

(3) 行政

文部科学省、法務省告示をもって、日本語教育機関を定める際の設備・編制を調整する委員会、委員、2017.12～2021.3

宇都宮市、芳賀・宇都宮市 LRT 停留場名称検討委員会、委員、2019.11～2021.3

公益財団法人栃木県国際交流協会、講師、2020.10～2020.11

(4) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

教育機関、一橋大学、学位（課程博士）請求論文審査員、2020.7～2020.10

《 人文情報学部門 》

教授 **下田 正弘** SHIMODA, Masahiro

15 インド哲学仏教学 参照

教授 **鉄野 昌弘** TETSUNO, Masahiro

09b 日本語日本文学（国文学） 参照

教授 **中村 雄祐** NAKAMURA, Yusuke

27 文化資源学《文化資源学専門分野》 参照

教授 **小林 正人** KOBAYASHI, Masato

01 言語学 参照

教授 **高橋 典幸** TAKAHASHI, Noriyuki

10 日本史学 参照

1. 略歴

1996年4月	同志社大学工学部知識工学科入学
2000年3月	同 卒業
2000年4月	同志社大学大学院工学研究科知識工学専攻博士前期課程入学
2002年3月	同 修了
2002年4月	総合研究大学院大学複合科学研究科情報学専攻博士後期課程入学
2005年3月	同 修了
2005年3月	博士(情報学)(総合研究大学院大学)
2005年4月	国立情報学研究所 助手(～2007年3月)
2006年4月	総合研究大学院大学 助手(併任)(～2007年3月)
2007年4月	国立情報学研究所 助教(～2009年10月)
2007年4月	総合研究大学院大学 助教(併任)(～2010年3月)
2009年11月	国立情報学研究所 准教授(～2019年8月)
2010年4月	総合研究大学院大学 准教授(併任)(～2019年8月)
2019年9月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

人文情報学、ウェブ情報学、学術情報流通

b 研究課題

- (1) 人文学における知識表現ならびにデータ構造化の検討
- (2) 史資料を対象とした情報流通システムの設計
- (3) 日本のインターネットにおける技術的・社会的展開

c 概要と自己評価

2020～2021年度は情報技術と人文学の関わりを主題として、主に人文情報学(デジタルヒューマニティーズ)やデジタルアーカイブに関する研究教育と社会貢献活動を行った。(1)では、史資料に関する情報をインターネット上に公開する際に、利用者が内容を容易に理解するためのメタデータの設計を行い、文化庁ならびに東京大学史料編纂所が保有する資料情報に適用するとともに、持続可能な運用を実現するための情報システムの要件を整理した。また、歴史資料を対象として、概念や人物の時系列的変遷を明示的に記述する手法を確立し、実際の資料情報への適用を行った。(2)については、各種データを社会へと効果的に流通させるための情報システムの設計を行い、文化庁メディア芸術データベース版に反映させた。また、複数の機関によって提供された異なるデータベース間での情報の連携手法を確立し、検証を行った。(3)については、日本のインターネットの展開を把握するための基礎資料の整備を進めている。この他にも、人文情報学分野の普及を目的とした講演やコミュニティ形成を行っている。

d 主要業績

(1) 著書

編著、小風尚樹、小川潤、櫻田宗紀、長野壮一、山中美潮、宮川創、大向一輝、永崎研宣、『欧米圏デジタル・ヒューマニティーズの基礎知識』、文学通信、2021.7

(2) 論文

小池俊希、大向一輝、鴻野知暁、永崎研宣、『日本語歴史コーパス』へのTEI適用に基づく諸本比較—『万葉集』における「読添えのモ」を事例として—、『情報処理学会研究報告』、Vol.2020-CH-123, No.2, 1-6頁、2020.6

小風綾乃、大向一輝、永崎研宣、『18世紀パリ王立科学アカデミー集会の出席会員分析に向けたデータ構築と可視化』、『情報処理学会研究報告』、Vol.2020-CH-123, No.3, 1-8頁、2020.6

大月希望、大向一輝、佐倉統、『デジタルアーカイブの設計・運用における課題：2010年代の国内の研究動向から』、『情報処理学会研究報告』、Vol.2020-CH-123, No.4, 1-5頁、2020.6

小林和央、風間一洋、吉田光男、大向一輝、佐藤翔、『インターネット上のユーザの行動データを用いた論文の普遍性の分析手法』、『情報知識学会誌』、Vol.30, No.3, 312-327頁、2020.9

- Ikki Ohmukai, Yasunori Yamamoto, Maori Ito, Takashi Okumura, 「Tracing patient PLOD by mobile phones: Mitigation of epidemic risks based on patient locational open data」, 『2020 IEEE 29th International Conference on Enabling Technologies: Infrastructure for Collaborative Enterprises (WETICE)』, 283-286 頁, 2020.9
- 江上周作, 大向一輝, 山本泰智, 伊藤真和吏, 坂根昌一, 網淳子, 奥村貴史, 「SARS-CoV-2 感染リスクオントロジーの提案」, 『人工知能学会セマンティックウェブとオントロジー研究会資料』, Vol.2020, No.SWO-052, 02-01-02-10 頁, 2020.11
- 渋谷綾子, 山田太造, 渡邊要一郎, 平澤加奈子, 大向一輝, 金子拓, 山家浩樹, 保谷徹, 「日本史史料の長期利用とデータ共有・連結化に向けたシステム環境整備」, 『情報処理学会人文科学とコンピュータシンポジウム論文集』, Vol.2020, 23-30 頁, 2020.12
- 渡邊要一郎, 永崎研宣, 朴賢珍, 王一凡, 村瀬友洋, 渡邊眞儀, 大向一輝, 下田正弘, 「大正新脩大藏経の構造的記述に向けて」, 『情報処理学会人文科学とコンピュータシンポジウム論文集』, Vol.2020, 61-66 頁, 2020.12
- 永崎研宣, 大向一輝, 下田正弘, 「仏教文献研究のための IIF の活用における諸課題の解決に向けて」, 『情報処理学会人文科学とコンピュータシンポジウム論文集』, Vol.2020, 75-80 頁, 2020.12
- 小川潤, 永崎研宣, 中村寛, 大向一輝, 「時間的文脈情報を含む社会ネットワーク記述のためのデータモデル設計と一次史料を用いたデータ構築の実践: カエサル『内乱記』を事例に」, 『情報処理学会人文科学とコンピュータシンポジウム論文集』, Vol.2020, 215-222 頁, 2020.12
- Yuto Chikazawa, Marie Katsurai, Ikki Ohmukai, 「Multilingual author matching across different academic databases: a case study on KAKEN, DBLP, and PubMed」, 『Scientometrics』, Vol.126, 2311-2327 頁, 2021.2
- 小川潤, 大向一輝, 「歴史一次史料の知識構造化のための Factoid モデルの拡張」, 『人工知能学会セマンティックウェブとオントロジー研究会資料』, Vol.2021, No.SWO-053, 06-01-06-10 頁, 2021.3
- 大月希望, 大向一輝, 永崎研宣, 佐倉統, 「デジタル時代における多様な資料継承の仕組みを包括する議論モデルの提案」, 『情報処理学会研究報告』, Vol.2021-CH-126, No.6, 1-7 頁, 2021.5
- Junko Ami, Kunihiro Ishii, Yoshihide Sekimoto, Hiroshi Masui, Ikki Ohmukai, Yasunori Yamamoto, Takashi Okumura, 「Computation of Infection Risk via Confidential Locational Entries: A Precedent Approach for Contact Tracing With Privacy Protection」, 『IEEE Access』, Vol.9, 87420-87433 頁, 2021.6
- 江上周作, 大向一輝, 山本泰智, 神崎正英, 野本昌子, 坂根昌一, 伊藤真和吏, 網淳子, 奥村貴史, 「行動と空間の状態に着目した COVID-19 感染リスクオントロジーの提案」, 『人工知能学会全国大会論文集』, Vol.JSAI2021, 3H1GS3d02 頁, 2021.6
- Mai Takahashi, Michikazu Kobayashi, Ikki Ohmukai, 「Spectral analysis for identifying octave playing in piano works」, 『Proceedings of the 11th Conference of the Japanese Association of Digital Humanities』, 72-76 頁, 2021.9
- Yoichiro Watanabe, Kiyonori Nagasaki, Hyunjin Park, Yifan Wang, Tomohiro Murase, Masayoshi Watanabe, Norimichi Yajima, Yoshihiro Sato, Yui Sakuma, Xinxing Yu, Masahiro Shimoda, Ikki Ohmukai, 「Towards a Structured Description of the Contents of the Taisho Tripitaka」, 『Proceedings of the 11th Conference of the Japanese Association of Digital Humanities』, 161-163 頁, 2021.9
- 山田太造, 中村寛, 渋谷綾子, 大向一輝, 井上聡, 「日本史史料を対象とした研究データ基盤整備における課題」, 『情報処理学会人文科学とコンピュータシンポジウム論文集』, 80-87 頁, 2021.12
- 小川潤, 永崎研宣, 大向一輝, 「一次史料における時間的コンテキストを含む社会関係記述モデルの提案と実践」, 『情報処理学会論文誌』, Vol.63, no.2, 258-268 頁, 2022.2
- 永崎研宣, 大向一輝, 下田正弘, 「仏教学のためのデジタル学術編集システムの構築に向けたモデルの提案と実装」, 『情報処理学会論文誌』, Vol.63, no.2, 324-334 頁, 2022.2
- 江上周作, 山本泰智, 大向一輝, 奥村貴史, 「オントロジーを用いた COVID-19 感染リスク行動の推論」, 『人工知能学会第二種研究会資料』, SWO-056-16, 2022.3
- (3) 予稿・会議録
- 小池俊希, 大向一輝, 鴻野知暁, 永崎研宣, 「『日本語歴史コーパス』への TEI 適用に基づく諸本比較—『万葉集』における「読添えのモ」を事例として—」, 『情報処理学会研究報告』, Vol.2020-CH-123, No.2, 1-6 頁, 2020.6
- 小風綾乃, 大向一輝, 永崎研宣, 「18 世紀パリ王立科学アカデミー集会の出席会員分析に向けたデータ構築と可視化」, 『情報処理学会研究報告』, Vol.2020-CH-123, No.3, 1-8 頁, 2020.6
- 大月希望, 大向一輝, 佐倉統, 「デジタルアーカイブの設計・運用における課題: 2010 年代の国内の研究動向から」, 『情報処理学会研究報告』, Vol.2020-CH-123, No.4, 1-5 頁, 2020.6

- 国内会議、大向一輝、渡邊要一郎、渋谷綾子、平澤加奈子、山田太造、山家浩樹、保谷徹、「東京大学史料編纂所におけるデータインフラ整備の現状」、2020年度統計関連学会連合大会、2020.9.10
- 江上周作、大向一輝、山本泰智、伊藤真和吏、坂根昌一、網淳子、奥村貴史、「SARS-CoV-2 感染リスクオントロジーの提案」、『人工知能学会セマンティックウェブとオントロジー研究会資料』、Vol.2020, No.SWO-052、02-01-02-10 頁、2020.11
- 小川潤、大向一輝、「歴史一次史料の知識構造化のための Factoid モデルの拡張」、『人工知能学会セマンティックウェブとオントロジー研究会資料』、Vol.2021, No.SWO-053、06-01-06-10 頁、2021.3
- 大月希望、大向一輝、永崎研宣、佐倉統、「デジタル時代における多様な資料継承の仕組みを包括する議論モデルの提案」、『情報処理学会研究報告』、Vol.2021-CH-126, No.6、1-7 頁、2021.5
- 江上周作、大向一輝、山本泰智、神崎正英、野本昌子、坂根昌一、伊藤真和吏、網淳子、奥村貴史、「行動と空間の状態に着目した COVID-19 感染リスクオントロジーの提案」、『人工知能学会全国大会論文集』、Vol.JSAI2021、3H1GS3d02 頁、2021.6
- 江上周作、山本泰智、大向一輝、奥村貴史、「オントロジーを用いた COVID-19 感染リスク行動の推論」、『人工知能学会第二種研究会資料』、SWO-056-16、2022.3

(4) 総説・総合報告

- 大向一輝、「SNS の進展」、『電子情報通信学会通信ソサイエティマガジン』、Vol.13, No.4、252-256 頁、2020.3
- 大向一輝、「「ウェブらしさ」を改めて考える—2010 年代のウェブと社会—」、『情報の科学と技術』、Vol.70, No.6、284-289 頁、2020.6
- 大向一輝、「ジャパンサーチの経緯と文脈」、『デジタルアーカイブ学会誌』、Vol.4, No.4、329-332 頁、2020.10
- 大向一輝、「Wikidata と知識ベース」、『人工知能』、Vol.35, No.6、761-765 頁、2020.11
- 清田陽司、大向一輝、「特集「図書館情報学と AI の新展開」にあたって」、『人工知能』、Vol.35, No.6、761-765 頁、2020.11
- 大向一輝、「識別子としての Wikidata」、『情報の科学と技術』、Vol.70, No.11、559-562 頁、2020.11
- 大向一輝、飯野勝則、片岡真、塩崎亮、村上遥、「学術情報システムの標準化技術」、『情報の科学と技術』、Vol.71, No.4、152-158 頁、2021.4
- 大向一輝、「共通性と固有性のあいだ」、『人工知能』、Vol.36, No.3、331 頁、2021.5
- 大向一輝、三原鉄也、福田一史、「序論：「メディア芸術」のアーカイブ」、『デジタルアーカイブ学会誌』、Vol.6, no.1、14 頁、2022.2

(5) 受賞

- 国内、大向一輝、令和 2 年度文部科学大臣表彰・科学技術賞（開発部門）、文部科学省、2020.4.7

(6) 共同研究・受託研究

- 受託研究、大向一輝、大日本印刷株式会社、「多様な文化資源を扱う大規模データベースサービスの設計に関する指導」、2020

3. 主な社会活動

(1) 学会

- 国内、人工知能学会、編集委員、2020.6～
- 国内、デジタルアーカイブ学会、理事、2021.4～
- 国内、人工知能学会、理事、2021.6～

准教授 **高岸 輝** TAKAGISHI, Akira

03 美術史学 参照

准教授 **祐成 保志** SUKENARI, Yasushi

25 社会学 参照

30 死生学・応用倫理センター

教授 池澤 優 IKEZAWA, Masaru (センター長)
06 宗教学宗教史学 参照

教授 小松 美彦 KOMATSU, Yoshihiko

1. 略歴

1982年3月 東京大学教養学部基礎科学科卒業
1982年4月 東京大学大学院理学系研究科科学史・科学基礎論修士課程入学
1985年3月 東京大学大学院理学系研究科科学史・科学基礎論修士課程修了(修士(理学))
1985年4月 東京大学大学院理学系研究科科学史・科学基礎論博士課程進学
1989年3月 東京大学大学院理学系研究科科学史・科学基礎論博士課程単位取得退学
1994年4月 玉川大学文学部 助教授
2000年4月 東京水産大学水産学部 助教授
2002年3月 東京水産大学水産学部 教授
2003年10月 東京海洋大学海洋科学部 教授(東京水産大学と東京商船大学が統合されたことに伴う名称変更)
2012年4月 東京海洋大学大学院海洋科学技術研究科 教授(東京海洋大学の大学院化に伴う名称変更)
2013年4月 武蔵野大学教養教育部会 教授
2015年4月 博士(学術) 東京大学総合文化研究科広域科学専攻
2018年5月 東京大学大学院人文社会系研究科 教授
2021年3月 定年退職

2. 主な研究活動

a 専門分野

科学史・科学論、生命倫理学、死生学

b 研究課題

①西欧の生命観と死生観に関する科学史研究、②現代における死生問題の検討、③医療と科学技術の歴史的考察、
④既存の生命倫理学の批判的顕揚

c 概要と自己評価

2020年度は、上記の研究課題のうちまず①として、過去何年間かにわたって取り組んできた Marie François Xavier Bichat, *Recherches physiologiques sur la vie et la mort*, 1800. の翻訳(共訳)と解説を完成させ上梓した。次に②として、『増補決定版「自己決定権」という畏——ナチスから新型コロナ感染症まで』を著して、特に新型コロナ感染症をめぐる問題を多角的に検討し、また、相模原障害者殺傷事件について考察を以前より深めた。私は2020年度末をもって定年退職したため、ここに記載したのは当該年度の事柄に限定しているが、ただし、年度内に執筆・整理を終えていたものとして(刊行は2021年4月~7月)、共編著1冊(研究課題②+③)、共著1冊(研究課題②)、学術論文1本(研究課題①、約7万字)、ロングインタビュー1本(研究課題①+②+③+④、約8万字)がある。以上の意味で、2020年度は執筆の点では自分なりに生産力の高い年度であった。しかし、その一方、コロナ禍のため一般講演をあまり行わず、研究の社会的還元が低調であった。

d 主要業績

(1) 著書

共著、小松美彦、「グザヴィエ・ビシャと『生と死の生理学研究』の歴史的在処」(単著)、中川久定・村上陽一郎責任編集、『一八世紀叢書VII 生と死 生命という宇宙』、401-507頁、国書刊行会、2020.9
単著、小松美彦、『増補決定版「自己決定権」という畏——ナチスから新型コロナ感染症まで』、現代書館、全373頁、2020.12

共著、小松美彦、「茅島洋一さんを哀悼する——最後の日本人の最期」(単著)、茅島洋一さんを偲ぶ会実行委員会編、『窮愁の人 茅島洋一』、117-120 頁、2020.12

(2) 論文

小松美彦、「過去とは過ぎ去った今ではなく、将来へと開かれていく永遠の現在の基盤である」、『生物学史研究』、第 100 号、76-83 頁、2020.6

(3) 翻訳

マリー・フランソワ・グザヴィエ・ビシャ、『生と死の生理学研究』、中川久定・村上陽一郎責任編集、『一八世紀叢書 VII 生と死 生命という宇宙』、国書刊行会、金子章予との共訳、177-333 頁、2020.9

(4) 書評

轟孝夫『ハイデガーの超政治——ナチズムとの対決／存在・技術・国家への問い』、トニー・ウォルター『いま 死の意味とは』、岩田健太郎『新型コロナウイルスの真実』、『図書新聞』、2020 年 7 月 25 日号、4 面

山田朗『帝銀事件と日本の秘密戦』、雨宮処凜『相模原事件・裁判傍聴記』、森下直貴・佐野誠『新版「生きるに値しない命」とは誰のことか——ナチス安楽死思想の原典からの考察』、『週刊読書人』、2020 年 12 月 11 日号、1 面

轟孝夫『ハイデガーの超政治——ナチズムとの対決／存在・技術・国家への問い』、山田朗『帝銀事件と日本の秘密戦』、小山俊樹『五・一五事件——海軍青年将校たちの「昭和維新」』、斎藤光『幻の「カフェー」時代——夜の京都のモダニズム』、アルベール・カミュ『反抗的人間』、『みすず』、第 700 号、95-96 頁、2021.1

(5) 解説 (ロングインタビュー)

小松美彦、「小松美彦氏に聞く (第一部) 相模原障害者殺傷事件を考えるために——ナチス・ドイツの優生思想／生命倫理学との出会い」、『飢餓陣営』、第 52 号、86-106 頁、2020.12

(6) 学会発表

国内、小松美彦、「科学的生命観の史的再構成——科学はどこから道をまちがえたのか」、ハイデガー・フォーラム第 15 回大会、オンライン、2020.9.12

(7) 総説・総合報告

小松美彦、「自著紹介『「自己決定権」という罠——ナチスから新型コロナ感染症まで』」、UTokyo Biblio Plaza、2021.2、https://www.u-tokyo.ac.jp/biblioplaza/ja/E_00088.html

小松美彦、「日本学術会議会員任命拒否問題」の歴史的構造——戦後日本の科学技術政策と学術会議、東京大学大学院人文社会系研究科・文学部 HP、「学問と社会の現在とこれからを考える」、2021.3、<http://www.lutokyo.ac.jp/studies/komatsu.html>

(8) マスコミ

対談、飯野和夫・小松美彦、「十八世紀、人はいかに真理と向き合ったのか」、『週刊読書人』、1-2 面、4 面、2020.11.6

インタビュー、小松美彦、「「日本学術会議任命拒否問題」に提言する」、『週刊読書人』、3 面、10 面、2020.11.6

インタビュー、小松美彦、「「生きる」を語る——京都 ALS 囁託殺人から」、『京都新聞』、27 面、2020.12.8

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等 (自機関を含む)

非常勤講師、東京大学大学院農学生命科学研究科・農学部、「生命倫理」、オンライン、2020.4~2020.6

特別講演、東京大学大学院人文社会系研究科 死生学・応用倫理センター上廣死生学・応用倫理講座 《医療・介護従事者のための死生学》2020 セミナー、「死はいかに捉えうるか——「個人閉塞した死」と「共鳴する死」」、オンライン、2020.9

セミナー、東京大学文学部第 9 回文学部ラボ、「「日本学術会議会員任命拒否問題」の歴史的構造——戦後日本の科学技術政策と学術会議」、オンライン、2021.1

セミナー、東京大学文学部第 252 回文化交流懇談会、「西洋生命論史 2600 年の批判的再構成——自然科学から人文科学へ」、オンライン、2021.3

(2) 学会

日本生命倫理学会 (副代表理事、評議員)、日本科学史学会、日本科学史学会生物学史分科会、科学技術社会論学会

(3) 学外組織

公益財団法人俱進会 (評議員)

1. 略歴

- 1982年4月 東京大学教養学部文科Ⅲ類入学
1984年4月 東京大学教養学部教養学科科学史・科学哲学科進学
1986年3月 同卒業
1986年4月 東京大学大学院地域文化研究科修士課程入学
1988年3月 同修了（修士（地域文化研究）取得）
1988年4月 東京大学大学院地域文化研究科博士課程進学
1989年10月 ロンドン大学ウェルカム医学史研究所博士課程入学
1992年9月 東京大学大学院地域文化研究科博士課程退学
1992年10月 ロンドン大学ウェルカム医学史研究所博士課程修了（Ph.D取得）
1992年10月 ロンドン大学ウェルカム医学史研究所 Post Doctoral ResearchFellow（～1993年9月）
1993年10月 日本学術振興会海外特別研究員（ロンドン大学ウェルカム医学史研究所）（～1995年9月）
1995年10月 アバディーン大学トマス・リード研究所 Post Doctoral ResearchFellow（～1996年9月）
1996年10月 日本学術振興会特別研究員（東京大学大学院総合文化研究科）（～1997年3月）
1997年4月 慶應義塾大学経済学部助教授
2006年4月 同教授
2021年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

医学史

b 研究課題

①精神医療の歴史、②感染症の歴史、③医療記録の歴史、④その他

c 概要と自己評価

2020～21年度は、いずれの領域においても作業を進めることができた。①においては、*History of Psychiatry* の Special Issue である東アジア特集の編集長を Wen-Ji Wang 先生とともにに行い、全体の導入と2022年の段階では8本の論文・翻訳がすべて出版されている (<https://journals.sagepub.com/home/hpy#>)。ラテンアメリカの科学史・医学史研究の主要な雑誌である *História, Ciências, Saúde-Manguinhos* に掲載が決定した。『死生学・応用倫理研究』においては精神病院の地理的配置に関する論文を掲載した。②においては『世界平和評論』に評論を掲載した。③においては、『文化交流研究』35巻に論文を掲載し、HMC講演会で1923年の関東大震災における東大第二外科の活動についての中間報告を行った。④については、Wei Yu Wayne Tanの著作を *Isis* に、Timothy M. Yangの著作を *British Journal of Psychiatry* に、『聖なる医療』を週刊読書人に書評した。

d 主要業績

(1) 論文

Akihito Suzuki, "Psychiatric Hospital, Domestic Strategies and Gender Issues in Tokyo c.1920-1945", *History of Psychiatry*, 33(2022), issue3.

Akihito Suzuki and Wen-Ji Wang, "Introduction: Madness and psychiatry in East Asian countries in the modern period", *History of Psychiatry*, 33(2022), issue3.

Akihito Suzuki, "Two Korean Immigrants in a Psychiatric Hospital in Tokyo c.1920-c.1945", *História, Ciências, Saúde-Manguinhos*, 29(2022), forthcoming.

鈴木晃仁、「患者の日本語と医師のドイツ語——1930年代の症例誌の構成」、『文化交流研究』、35、2022.3

鈴木晃仁、「江戸近郊と東京郊外：東京の精神病院の地理的配置の変化」、『死生学・応用倫理学』、27、2022.3

(2) 書評

Wei Yu Wayne Tan, *Blind in Early Modern Japan: Disability, Medicine, and Identity* (Ann Arbor, MI: University of Michigan Press, 2022), in *Isis*, forthcoming.

Timothy M. Yang, *Medicated Empire: The Pharmaceutical Industry and Modern Japan* (New York: Columbia University Press, 2021), in *British Journal of Psychiatry*, forthcoming.

Leonard Smith, *Private Madhouses in England, 1640-1815*, in *Medical History*, 2021

Susan Burns, *Kingdom of the Sick: A History of Leprosy and Japan*, in *Asian Medicine*, vol.16, no.2, 2021.6

『聖なる医療』、週刊読書人、2021.6.11

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

特別講演、日本ジョンソン協会、2021.6

特別講演、新英米文学会、2021.11

(2) 学会

日本精神医学史学会、第24回日本医療大学月寒キャンパス 論文発表、2021.11.6-7

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

日本精神医学史学会 (理事)、日本医史学会 (理事)、日本科学史学会 (理事)

教授 堀江 宗正 HORIE, Norichika

1. 略歴

1992年3月	東京大学文学部心理学専修課程卒業
1992年4月	東京大学文学部研究生(～1993年3月)
1993年4月	東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻修士課程入学
1995年3月	同修了(修士(文学)取得)
1995年4月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻宗教学宗教史学専門分野博士課程進学
2000年3月	同単位取得退学
2001年4月	聖心女子大学文学部専任講師
2003年4月	聖心女子大学大学院文学研究科専任講師兼任
2007年4月	聖心女子大学文学部准教授、聖心女子大学大学院文学研究科准教授兼任
2008年9月	博士(文学)取得(東京大学大学院人文社会系研究科)
2013年4月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2020年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

死生学、宗教学、スピリチュアリティ研究、サステナビリティ研究

b 研究課題

日本人の死生観、宗教理論、個人主義的スピリチュアリティ、サステナビリティと人文知

c 概要と自己評価

研究と教育の方向性は大きく二つに分けられる。一つは死生学・宗教学方面で、もう一つはサステナビリティ学方面である。この二つは、死生学・応用倫理センターの、「死生学」と「応用倫理」に対応する。

死生学方面では、コロナ禍を踏まえて、2021年に日韓加3カ国同時のコロナ死生観調査をおこなった。これは、2019年の死生観調査をベースとしつつも、コロナ禍で問題となっている主要な争点を全てデータで検証しようという試みで、将来的に貴重な記録を残すものとなった。その内容は多岐にわたるが、もっとも喫緊の論点と思われる、コロナ患者のトリアージをめぐる問題については、同僚の小松美彦とともに編集した『〈反延命〉主義の時代』において、データに基づいて、一般国民は年齢によるトリアージに反対していることを明らかにした。

他方、こうした社会的要請の度合いの高い問題とは別に、東日本大震災から10年という節目の年を迎え2021年には、被災地でおこなった霊的体験に関する調査を、東北大学の高橋原教授との共著『死者の力』にまとめた。それにちなんだ論文、メディア記事、また対談にも積極的に取り組んだ。

加えて、ポッドキャストを配信し、コロナ禍で閉じこもっている人々に、より広い見地から現在の状況を捉えるためのヒントとして、死生学、宗教学、スピリチュアリティ研究、サステナビリティ学の知見を伝えるよう努力した。また、この2年間は、学会および一般向けの招待講演をおこなう機会に多く恵まれた。結果として、コロナ禍においてかえって広く社会的発信に注力することになった。

サステナビリティ学方面では、本研究科の教員が中心となって推進してきた総長裁量経費による「Sustainability と人文知」プロジェクトの実施責任者として、研究交流を促進してきた。このプロジェクトは2020年度で終了したが、それに伴い、2015年度から2020年度までの活動実績の報告書を編纂した。2021年度は、文学部の事業としてプロジェクトを継続し、学内公開研究会を多分野交流演習としても院生に開き、学外からも多数の講師を招いて、研究活動の範囲を広げている。現在、東京大学はSDGs（持続可能な開発目標）達成に研究面から積極的に関与しており、GX（グリーン・トランスフォーメーション）を行動計画の柱の一つとしている。だが、サステナビリティやSDGsやGXへの学生・院生の関心は必ずしも高くない。とくに、本学部・本研究科の学生・院生の環境への関心が低いことが問題として見えている。コロナ禍という困難な状況ではあるが、学生の関心を高めるためにどのような方策が有効なのかを本学全体にも関わる教育課題として模索していきたい。いずれにせよ、この2年間でサステナビリティを人文社会系研究科の教員として研究と教育の両輪で進めるという道筋がはっきりとし、関係する教員の間で共有されたことが、今後につながる大きな成果と言える。

今後は、コロナ死生観調査の続編を、2019年の基本的な死生観調査と総合する形で実施してゆきたい。死生観に関する基礎的なデータを提供することは、当センター・当専攻の社会的責務であり、この事業を着実に実行していきたい。とくにコロナ禍の死生観、生命倫理への影響を調査し、後世に残す責務があると言える。同時に既に終了している調査の成果を著書の形でまとめて世に問いたい。また、サステナビリティ学方面では、多分野交流演習という形でサステナビリティと人文知に関心を持つ教員間の交流を続行すると同時に、海外の「サステナブルな人文学」の動きとも連携し、学問的な体系化の方向を模索したい。理論面では従来からの未来倫理に関する探究をすすめ、感染症のみならず様々な想定外の危機に対応するリスク社会のエートスを明確化したい。

d 主要業績

(1) 著書

小松美彦・市野川容孝・堀江宗正（編著）、『〈反延命〉主義の時代——安楽死・透析中止・トリアージ』（現代書館、2021.7）、「序章」12-46頁、「第5章」（聞き手）186-200頁（298頁中、50頁担当）
高橋原・堀江宗正（共著）、『死者の力——津波被災地「霊的体験」の死生学』（岩波書店、2021.9）、「第3章」「第4章」「第5章」「結論」「あとがきに代えて」67-277頁（277頁中、211頁を執筆）
（実施責任者として編集・執筆した報告書）『東京大学総長裁量経費プロジェクト「Sustainability と人文知」（2015年度～2020年度）報告書』（2021.3）

(2) 翻訳

トニー・ウォルター、『いま死の意味とは』（岩波書店、2020.4）、全192頁

(3) 論文

堀江宗正、「死を前にして生きる——良い死はあるか」、浅草寺『佛教文化講座』第64集（2020.8）、122-141頁
堀江宗正、「東日本大震災における霊的体験——故人との継続する絆と共同体の力」、『臨床心理学』増刊第12号（特集 治療は文化である）（2020.8）、118-124頁
堀江宗正、「『日本の霊性』をひらく——スピリチュアリティ関連思想との類似性から」、『現代思想総特集 鈴木大拙』11月臨時増刊号（2020.10）、204-219頁
堀江宗正、「スピリチュアリティと生の意味——宗教と心理学の観点から」、『死生学・応用倫理研究』26号（2021.3）、27-50頁
堀江宗正、「専門知と政治の間で——多分野交流演習「サステナビリティと人文知」2020年度を終えて」、『東京大学総長裁量経費プロジェクト「Sustainability と人文知」（2015年度～2020年度）報告書』（2021.3）、211-215頁
堀江宗正、「メディア史のなかのスピリチュアリティ」、『福音と世界』（特集 スピリチュアリティ——社会との交渉）2021年5月号（2021.4）、18-23頁
Norichika Horie, “Spirituality,” Erica Baffelli, Andrea Castiglioni, and Fabio Rambelli (eds.), *The Bloomsbury Handbook of Japanese Religions* (London: Bloomsbury, April 2021), pp. 241-249
堀江宗正、「サステナブル人文学を目指して——専門知の公共性を高めるアジールとして」、『多分野交流演習ニューズレター』第81号（2021.7）、頁番号なし（全5頁）
堀江宗正、「〈反延命〉主義とは何か」、小松美彦・市野川容孝・堀江宗正編著『〈反延命〉主義の時代——安楽死・透析中止・トリアージ』（現代書館、2021.7）、12-46頁

- 堀江宗正、「消費社会と宗教の変容——聖なるものへの奉獻から自己への奉獻／投資へ」、島藺進・末木文美士・大谷栄一・西村明『近代日本宗教史第6巻 模索する現代——昭和後期～平成期』（春秋社、2021.7）、111-143 頁
- 堀江宗正、「コロナ禍がはらむ命の選別と連帯の可能性」、福永真弓編『Tokyo College Booklet Series11 連続シンポジウム「コロナ危機後の社会——長期的な視点から見た『新常态』とは？③脆さ・弱さと共にある連帯の社会システムへ』』（東京大学国際高等研究所東京カレッジ、2021.8）、7-15 頁
- 堀江宗正、「宗教と感染爆発——通過儀礼としてのパンデミック」、『宗教研究』（特集 宗教と疫病）（2021.9）、第95巻 2輯、371-394 頁
- 堀江宗正、「「亡くなった人はここにいる」…震災被災地の「霊的体験」が私たちに教えてくれること——「多死社会」へのヒント」、『現代ビジネス』（2021.10.17）、<<https://gendai.ismedia.jp/articles/-/88344>>
- 堀江宗正（寄与者：パク・ジュンシク、和田香織）、「202203 新型コロナウイルス感染症に関わる死生観調査（コロナ死生観調査）の結果について」、『死生学・応用倫理研究』27号（2022.3）、(1)268-(45)222 頁
- Norichika Horie (With Joon-Shik Park and Kaori Wada), “Results of Survey on Views of Life and Death Related to COVID-19 (SoVoLaD-COVID-19),” *Journal of Death and Life Studies and Practical Ethics* 27 (March 2022), pp. (46)221-(94)173

(4) 小論・記事

- 堀江宗正、「現代社会に広がるスピリチュアリティ」、『読売クオーターリー』（2020 春号、2020.4）、134-143 頁
- 堀江宗正、「宗教が感染爆発の引き金に——集会なき礼拝支えられるか」、『中外日報』（2020.4.10）、8 頁
- 堀江宗正、「コロナ禍に生きる——命のつながりを感じて」、『山陰中央新報』（2020.4.22）、24 頁
- 堀江宗正、「ポスト・コロナの地球意識——消費抑制は温暖化阻めるか」、『中外日報』（2020.5.29）、8 頁
- 堀江宗正、「早すぎるトリアージを許すな——人間性の放棄につながる懸念」、『中外日報』（2020.10.8）、8 頁
- 堀江宗正、「新たな精神的感染症——「トランプ支持者」の陰謀論」、『中外日報』（2020.9.25）、8 頁
- 堀江宗正、「大統領選でQアノン台頭——米福音派にも近く日本も注意を」、『中外日報』（2020.11.13）、8 頁
- 堀江宗正、「新型コロナと2021年——科学と社会の架け橋に」、『週刊 東京大学新聞』（2021.1.1）、3 頁
- 堀江宗正、「教団の関与目立つトランプ現象——「隠される宗教」に注視必要」、『中外日報』（2021.1.29）、8 頁
- 堀江宗正、「米国で広がるアジア憎悪——「他人事感覚」超えるべき問題」、『中外日報』（2021.3.26）、8 頁
- 小松美彦・市野川孝寿・堀江宗正、「〈反延命〉主義の時代に対抗する思想と実践のために」、『週刊読書人』（2021.8.27）、1-2 頁
- 堀江宗正、「「死者の力」とパンデミック」、『東京大学 総合報告書2021 IR Cubed』（2021.11.26）、75 頁

(5) 対談・ポッドキャスト

- 鏡リュウジ・堀江宗正、「ユングと現代のスピリチュアリティ」（朝日カルチャーセンター新宿教室、オンライン、2020.7.6）、招待講演
- 堀江宗正、「ノアエイジ NOrAGE 予告編」（ノアエイジ NOrAGE、2021.1.3）
- 堀江宗正、「テーマは2021」（ノアエイジ NOrAGE、2021.1.16）
- 森岡正博・堀江宗正、「トランプ支持現象とスピリチュアリティ」、森岡正博インスタグラム（インスタグラムライブ、2021.1.24）、招待講演
- 堀江宗正、「オンライン化と仕事の価値」（ノアエイジ NOrAGE、2021.1.30）
- 堀江宗正、「感情の力について」（ノアエイジ NOrAGE、2021.2.15）
- 堀江宗正、「『鬼滅の刃』について」（ノアエイジ NOrAGE、2021.3.1）
- 堀江宗正・高橋原、「死者の力——震災の経験から」、ジュンク堂書店・池袋本店（オンライン、2021.3.2）、招待講演
- 堀江宗正、「90年代」（ノアエイジ NOrAGE、2021.3.14）
- 堀江宗正、「都市と田舎」（ノアエイジ NOrAGE、2021.3.30）
- 堀江宗正、「コロナと私たちの文化環境」（ノアエイジ NOrAGE、2021.4.10）
- 堀江宗正、「食について」（ノアエイジ NOrAGE、2021.4.25）
- 堀江宗正、「うつとスピリチュアリティ」（ノアエイジ NOrAGE、2021.5.25）
- 堀江宗正、「ビジネスとスピリチュアリティ」（ノアエイジ NOrAGE、2021.6.15）
- 堀江宗正、「ファッションとスピリチュアリティ」（ノアエイジ NOrAGE、2021.6.28）
- 堀江宗正、「音楽とライフスタイル」（ノアエイジ NOrAGE、2021.7.11）
- 堀江宗正、「宮崎アニメとスピリチュアリティ」（ノアエイジ NOrAGE、2021.7.28）
- 堀江宗正、「お盆について」（ノアエイジ NOrAGE、2021.8.7）
- 堀江宗正、「妖怪と謎」（ノアエイジ NOrAGE、2021.8.21）
- 堀江宗正、「動物とスピリチュアリティ」（ノアエイジ NOrAGE、2021.9.5）

堀江宗正、「死者の力」(ノアエイジ NOrAGE、2021.9.20)
堀江宗正、「土地の見えない働き」(ノアエイジ NOrAGE、2021.10.12)
堀江宗正、「生まれ変わりとワンネス」(ノアエイジ NOrAGE、2021.11.9)
堀江宗正、「治療と治癒」(ノアエイジ NOrAGE、2021.11.23)
堀江宗正、「政治とスピリチュアリティ」(ノアエイジ NOrAGE、2021.12.17)
堀江宗正、「2021年の10大ニュース」(ノアエイジ NOrAGE、2021.12.30)
堀江宗正、「僕の音楽遍歴」(ノアエイジ NOrAGE、2022.1.22)
堀江宗正、「推しは宗教なのか」(ノアエイジ NOrAGE、2022.2.18)

3. 主な社会活動

(1) 学会

日本宗教学会(理事)、「宗教と社会」学会、日本社会学会、日本生命倫理学会、日本自殺予防学会、日本スピリチュアルケア学会

3 1 北海文化研究常呂実習施設

教授 熊木 俊朗 KUMAKI, Toshiaki

1. 略歴

1990年3月	北海道大学文学部文学科言語学専攻課程卒業
1990年4月	旭化成工業株式会社入社
1994年3月	明治大学文学部史学地理学科考古学専攻卒業
1996年3月	東京大学大学院人文社会系研究科考古学専門分野修士課程修了
1996年4月	東京大学文学部助手(附属常呂実習施設勤務)
2004年4月	北海道常呂町教育委員会社会教育課とくろ遺跡の森主幹
2005年2月	博士(文学)学位取得 東京大学大学院人文社会系研究科
2006年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授
2018年11月	東京大学大学院人文社会系研究科 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

北東アジア考古学

b 研究課題

北東アジア地域の考古学的研究を専門としており、特に近年は以下の3点を主要な課題として、北海道でのフィールドワークを中心とした調査研究を行っている。

- (1) アイヌ文化成立過程の考古学的研究
- (2) 日本列島とアジア大陸の「北回りの交流」に関する研究
- (3) 東北アジアにおける「窪みで残る竪穴群遺跡」に関する研究

c 概要と自己評価

上記研究課題について、2020年度～2021年度には以下の研究をおこなった。

1) 北見市大島遺跡群の発掘調査

北見市大島遺跡群は、擦文文化の竪穴住居等からなる集落遺跡である。アイヌ文化の直接の母体になったと考えられる擦文文化の終末過程や、擦文文化とオホーツク文化の関係について解明するため、北見市大島2遺跡の発掘調査を実施した。この調査は2010年度から継続して実施しており、2013年度までの調査成果については報告書を刊行済みであったが、2020年度には、2014年度から2018年度までの調査成果に基づく二冊目の報告書を刊行した。また、2020年度から2021年度に実施した発掘調査では、大島2遺跡で竪穴住居跡1軒を発掘し、竪穴住居跡の分布や内部の構造、出土遺物、住居の廃絶儀礼等について知見を得た。大島2遺跡については、2022年度まで調査を継続し、その後総括報告書を公開する予定である。

2) オホーツク文化の研究と特別展による成果の公開

本研究科と常呂実習施設が、開催館と共に主催した巡回特別展『オホーツク文化 ―あなたの知らない古代―』(横浜ユーラシア文化館:2021.10.16-12.26、大阪府立近つ飛鳥博物館:2022.1.15-3.13)と関連して、地方自治体(稚内市、礼文町、利尻町、枝幸町、網走市、斜里町、根室市等)や北海道大学が所蔵するオホーツク文化の資料調査をおこなひ、特に網走市モヨロ貝塚における過去の発掘調査の内容や、オホーツク文化の動物意匠遺物について新たな知見を得た。それらの成果は、開催された特別展とその図録に組み込む形で公開した。

d 主要業績

(1) 論文

福田正宏・カプリルチュク M・夏木大吾・國木田大・張恩恵・ゴルシュコフ M・森先一貴・佐藤宏之・熊木俊朗、「ユダヤ自治州新石器時代ビジャン4遺跡出土の新資料」、『東京大学考古学研究室研究紀要』、34、107-130頁、2021.3

(2) 解説

熊木俊朗、「オホーツク文化とは何か」、『オホーツク文化 ―あなたの知らない古代―』、4-7頁、2021.10

熊木俊朗、「集落と住居」、『オホーツク文化 ―あなたの知らない古代―』、10-13頁、2021.10

熊木俊朗、「コラム 住居の廃絶と建て替え」、『オホーツク文化 ―あなたの知らない古代―』、14頁、2021.10

熊木俊朗、「生活の道具 木器」、『オホーツク文化 ―あなたの知らない古代―』、15-17 頁、2021.10
熊木俊朗、「オホーツク文化の成立 オホーツク文化の展開 オホーツク文化の地域化 擦文文化への同化 オホーツク文化の広がり (サハリン)」、『オホーツク文化 ―あなたの知らない古代―』、42-52 頁、2021.10
熊木俊朗、「コラム オホーツク文化研究略史」、『オホーツク文化 ―あなたの知らない古代―』、54 頁、2021.10
熊木俊朗、「遺跡紹介 北見市 栄浦第二遺跡」、『オホーツク文化 ―あなたの知らない古代―』、55 頁、2021.10
熊木俊朗、「遺跡紹介 北見市 トコロチャシ跡遺跡」、『オホーツク文化 ―あなたの知らない古代―』、57 頁、2021.10
熊木俊朗、「墓」、『オホーツク文化 ―あなたの知らない古代―』、68-73 頁、2021.10
熊木俊朗、「大陸系・本州系遺物」、『オホーツク文化 ―あなたの知らない古代―』、102-108 頁、2021.10
熊木俊朗、「東京大学と北海文化研究」、『オホーツク文化 ―あなたの知らない古代―』、112-113 頁、2021.10
熊木俊朗、「オホーツク文化は何をもたらしたのか」、『オホーツク文化 ―あなたの知らない古代―』、114-115 頁、2021.10

(3) 学会発表

国内、熊木俊朗、「オホーツク文化の集落」、北海道考古学会 2020 年度研究大会、2020.5.16

(4) 啓蒙

熊木俊朗、「東京大学考古学研究室の考古学実習」、『考古学ジャーナル』、No.752、21-22 頁、2021.4

(5) 研究報告書

熊木俊朗編、『アイヌ文化形成史上の画期における文化接触：擦文文化とオホーツク文化 ―大島 2 遺跡の研究 (2)―』、2021.3

萩野はな・福田正宏・國木田大・斉藤譲一・夏木大吾・熊木俊朗、「稚内市立大岬小学校関連資料の報告」、『東北アジアにおける温帯性新石器文化の北方拡大と適応の限界 (III)』77-100 頁、2022.2

内田和典・シェフコムード I.Ya.・森先一貴・國木田大・福田正宏・張恩恵・佐藤宏之・大貫静夫・熊木俊朗・ゴルシユコフ M.V.・コシツツナ S.F.、「マラヤガバニ遺跡 2008 年度発掘調査 II d 層 ―コンドン文化の検討―」、『東北アジアにおける温帯性新石器文化の北方拡大と適応の限界 (III)』101-121 頁、2022.2

(6) マスコミ

「オホーツク文化 あなたの知らない古代 1 「続縄文」「擦文」という時代の中で」、『毎日新聞 (神奈川版) 朝刊』、2021.11.6

「オホーツク文化 あなたの知らない古代 3 大型堅穴住居 複数家族が同居」、『毎日新聞 (神奈川版) 朝刊』、2021.11.20

「オホーツク文化 あなたの知らない古代 5 海峽超え北、南から製品入手」、『毎日新聞 (神奈川版) 朝刊』、2021.12.4

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、北見工業大学、「オホーツクと環境」、2020.6、2021.6

(2) 学会

国内、日本考古学協会、埋蔵文化財保護対策委員、2020.4~2022.3

国内、北海道考古学会、会誌編集委員会委員長、2021.4~2022.3

(3) 行政

斜里町教育委員会、教育政策、斜里町遺跡調査活用検討委員会委員、2020.2~2022.2

北見市教育委員会、教育政策、文化財審議委員会委員、2020.4~2021.3、史跡常呂遺跡整備専門委員、2020.12~2022.12、常呂地区社会教育推進会議委員、2021.4~2022.3

北海道教育委員会、教育政策、北海道常呂高等学校学校運営協議会委員、2020.5~2022.5、北海道文化財保護審議会委員、2020.7~2022.6

湧別町教育委員会、教育政策、湧別町シブノツナイ堅穴住居群調査検討委員会委員、2021.5~2022.3

(4) 学外組織 (学協会、省庁を除く) 委員・役員

北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル北見、運営協力委員会委員、2020.6~2022.3

一般財団法人北方文化振興協会、理事、2021.5~

3 2 上廣倫理財団死生学・応用倫理寄付講座

特任教授 **会田 薫子** AITA, Kaoruko

1. 略歴

1984年3月	成蹊大学文学部英米文学科 卒業
1986年9月	Contemporary British Society Course, School of Oriental and African Studies, University of London 入学
1987年6月	同修了
1988年4月	Medical Tribune 翻訳者・報道部記者
1992年9月	The Japan Times 報道部記者
1999年9月	Medical Ethics Fellowship Program, Harvard Medical School, Harvard University 入学 (フルブライト留学)
2000年6月	同修了
2003年4月	東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻修士課程入学
2005年3月	同修了、修士号(保健学)取得 東京大学大学院医学系研究科)
2005年4月	東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻博士課程進学
2008年3月	同修了、博士号(保健学)取得 (東京大学大学院医学系研究科)
2008年4月	東京大学大学院人文社会系研究科グローバルCOE「死生学の展開と組織化」特任研究員
2012年4月	東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター上廣死生学・応用倫理講座 特任准教授
2017年4月	同 特任教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

臨床倫理学、臨床死生学、医療社会学

b 研究課題

エンドオブライフ・ケアの改善

医療技術が進展するなか、超高齢社会となった現代の日本におけるエンドオブライフ・ケア（人生の最終段階における医療とケア）のあるべき姿を模索し、研究知見をうみだし、社会還元し、現状の改善・充実を目指す。

臨床倫理の研究・普及啓発

日本社会における家族関係や意思決定に関わるコミュニケーションのあり方などの社会的文化的な特徴および法・制度と国・医学会のガイドライン等を踏まえ、臨床現場における一人ひとりの患者/利用者に関わる倫理的諸問題に対し、よりよく応答することが可能な方法論を探り、臨床現場の医療・介護従事者との協働・対話によって、現実の症例の倫理的問題について幅広く検討を深め、現場における実践の知へつなぐ。また、上記のエンドオブライフ・ケアの研究知見とともに、研究成果を国および各医学会の政策・ガイドラインに活かすことを見据え、医療現場との共同研究に取り組む。

臨床死生学の展開

死生学の重要な一領域である臨床死生学を、「一人ひとりが最期までより良く生きることを社会のなかで考える学問」と捉え、臨床現場における死生をめぐる諸課題の理解・考察を深め、一般への浸透を図る。

c 概要と自己評価

エンドオブライフ・ケアの改善について

上記の臨床倫理の理論と実践法を国内の医学会のガイドラインの策定に活かした。まず、日本腎臓学会理事長である柏原直樹氏（川崎医科大学副学長/腎臓・高血圧内科学教授）が研究代表者を務める国立研究開発法人日本医療開発機構（AMED）研究「長寿・障害総合研究事業 高齢腎不全患者に対する腎代替療法の開始/見合わせの意思決定プロセスと最適な緩和医療・ケアの構築」において、会田は研究開発分担者として、本講座の臨床倫理の理論を活かした「高齢腎不全患者に対応する医療・ケア従事者のための意思決定支援ツール」の研究・開発に携わらせて頂いた。その研究成果である、「高齢腎不全患者に対応する医療・ケア従事者のための意思決定支援ツール」全4章を令和3（2020）年度に当講座ウェブサイトにて公開した。（<https://www.lu-tokyo.ac.jp/dls/cleth/tool.html>）

また、AMED 柏原班の成果発信も含め令和2（2020）年度末に開催したシンポジウム「人生の最終段階と透析療法—緩和ケアと ACP の役割」の登壇者の協力を得て、その概要を東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センターの紀要である『死生学・応用倫理研究 第27号』にまとめた。

AMED 柏原班の研究成果の集大成である『高齢腎不全患者のための保存的腎臓療法—conservative kidney management (CKM) の考え方と実践』は令和3年度末までにまとめ、令和4（2022）年6月に刊行された。会田はそのなかにおいて臨床倫理・意思決定支援および医療倫理と法に関する章の責任者・執筆者に指名された。老化が進行した高齢者の末期腎不全に透析療法を導入せず、緩和ケアを軸として保存的にケアしていく CKM は、西洋先進国においては過去10年間に進展が著しいが、国内での取り組みは緒に就いたばかりである。同『ガイド』は日本における初めての CKM 指針である。これは超高齢化が進展し、超高齢腎不全患者が激増する時代にあつて、高齢者に益となり、医学的・社会的に新たな時代の扉を開く研究知見となると期待されている。これは会田が長年取り組んでいる frailty 研究とも密接に関連している。

また、エンドオブライフの意思決定支援の方途である Advance Care Planning (ACP) についても、会田の研究知見は日本社会における政策医療へ導入された。これらの知見は異なる AMED 研究の課題「長寿・障害総合研究事業長寿科学研究開発事業「呼吸不全に対する在宅緩和医療の指針に関する研究」（研究代表者：国立長寿医療研究センター在宅医療・地域医療連携推進部長 三浦久幸氏）に活かされた。会田はこの研究においても研究開発分担者として携わり、「ACP 支援ツール」の研究開発を担当させて頂いた。同「ツール」も令和3年度末に当講座ウェブサイトにて公開した

(<https://www.lu-tokyo.ac.jp/dls/cleth/acp.html>)。ACP は人生の最終段階における医療とケアの意思決定支援に関わる、臨床倫理的・臨床死生学的に重要な概念であるが、英語圏から輸入された概念と方法論を翻訳しただけでは日本社会における運用が困難であるため、日本の社会的文化的特徴を踏まえた形で再解釈し発信した。

さらに、10年余の研究課題の1つである frailty に関する研究知見の分析と発信にも務めた。カナダの Kenneth Rockwood 博士から許諾を得て Clinical Frailty Scale ver2 の和訳版を作成し、高齢者の人生の最終段階における過少医療および過剰医療への対策としての考え方を示した。frailty に関しては、国内の老年学関係者はフレイルという名称にておもに介護予防に注目しているが、会田は frailty が進行した高齢者における適切な医療のあり方について、医療関係者を対象とするセミナーや学術集会等で問題提起した。会田の講演を契機に、岡山大学医学部救急医学講座を中心として全国の救急医が参加し救急・集中治療の現場で実証研究を進め、論文にまとめた。また、上述の ACP のプロセスに frailty の評価を組み込むことの重要性に関して医療・介護従事者の理解を求める論文や講演活動も行い、これも臨床現場での実証研究につながっている。

臨床倫理の普及と啓発について

臨床倫理プロジェクトの事例検討法の枠組みとワークシートが定まったことから、研究活動のまとめとして、テキスト『臨床倫理の考え方と実践—医療・ケアチームのための事例検討法』（東京大学出版会）の刊行のための仕事を進めた。また、コロナ禍で対面セミナーが実施困難となるなか、医療・ケア従事者の自習用および勤務施設内での小規模研修用に供するため、中核となる講義（「臨床倫理入門編」、「事例検討法」）の e-learning コンテンツを令和2年度に制作し、ウェブサイトにて公開した。臨床倫理オンライン・セミナーは、北陸地区および諏訪地区にて多職種用を実施し、また、日本医療ソーシャルワーカー協会との協働で、おもに MSW を対象とするセミナーも実施した。

臨床死生学の試みについて

当講座の《医療・介護従事者のための死生学》「基礎コース」において、セミナーの企画・運営と臨床死生学関連の講義を担当し、臨床現場で働く人たちが死生についてどのように理解し、どのようにケアに活かしていくかの研鑽を支援する活動を展開した。

また、年間に10回開催している「臨床死生学・倫理学研究会」を企画・運営し、この分野において研究・実践活動に取り組む研究者や実践家との意見交換の機会を医療・介護従事者と一般市民および学生・院生に広く提供した。コロナ禍を契機としてオンライン開催としたところ、同研究会への参加者が急増し、令和3年度には年間で延べ約4,000名が全国から参加し、臨床現場の実態を踏まえて死生の問題に関して議論した。今後も、現場で生きる臨床死生学の取り組みを継続し、社会のなかで活かす知の集積・活用を目指したい。

日本医学会「子宮移植倫理に関する検討委員会」への参画

ロキタンスキー症候群など先天性子宮欠損の女性に対する子宮移植術の臨床研究がスウェーデンをはじめいくつかの国々で開始されている。国内では慶応義塾大学医学部を中心とする研究グループが動物実験の知見を重ね、ヒトでの臨床研究の準備を進めているが、医学的な技術に残余の問題が多く、さらに、生命倫理と臨床倫理に関わる諸問題については国内では未検討であった。そのため、日本の約140の医学会のアンブレラ組織である日本医学会は令和元（2019）年度に検討会を組織し、これらの課題について議論を開始した。会田は生命倫理および臨床倫理に関する諸問題についての検討のため委員を委嘱された。同検討会議は令和3年度に報告を取りまとめ公表した。

会田は生殖補助医療技術としての子宮移植という手段について、その社会的意味に関する議論が必要と主張し、また、従来の移植医療とは大きく異なり、救命医療でも生命維持治療でもない子宮移植という新しい医療に関して、少なくとも生体ドナーの健康を害することのないように、まずは脳死ドナーを対象として臨床研究を開始し、手術手技を確立してから生体ドナーの協力を仰ぐべきと論じたが、検討委員会の多数派の最終見解は、最初から生体ドナーからの臓器摘出に道を開くものとなった。

一般社団法人 日本専門医機構への貢献

日本の専門医制度の設計を時代に合わせて更新する役目をもつ日本専門医機構の活動に関し会田は編集会議の議員を委嘱され、専門医を対象とする e-learning コンテンツ科目「医療倫理」全12本の企画を主幹させていただくこととなった。これは全国約40万人の医師のほとんどを占める、何らかの科の専門医を対象とするものである。

まず基本方針を「内科・外科のすべてを対象とし、医師の職業倫理である医療倫理を認識しつつ、各現場において一人一人の患者に関わる倫理的な問題を扱う臨床倫理を中核とする」とし、「専門医機構」編集委員会からの了承を得て、e-learning コンテンツの制作を開始した。コロナ禍のため一時制作を中断せざるを得ない状況となったが、令和3年度はコンテンツ制作を再開し、同年度末までに「医療倫理と臨床倫理」、「医療倫理と法」、「研究倫理上・下」のコンテンツの配信開始につなげた。

d 主要業績

(1) 著書

『臨床倫理の考え方と実践 —医療・ケアチームのための事例検討法』(清水哲郎、会田薫子、田代志門共編著)、東京大学出版会、2022.1

(2) 論文

会田薫子、「アドバンス・ケア・プランニング(ACP)が目指すもの —「事前指示」「医師の免責」という誤解」、『月刊保団連』、no.1321、4-10頁、2020.4

日本透析医学会「提言」作成委員会、「透析の開始と継続に関する意思決定プロセスについての提言」、『透析医会誌』、Vol. 53, no.4、173-217頁、2020.4

Imai K, Morita T, Akechi T, Baba M, Yamaguchi T, Sumi H, Tashiro S, Aita K, et al., 「The Principles of Revised Clinical Guidelines about Palliative Sedation Therapy of the Japanese Society for Palliative Medicine」、『Journal of Palliative Medicine』、vol.,23no.9、1184-1190頁、2020.9

会田薫子、日本老年医学会「『ACP 推進に関する提言』の意義 —社会的文化的特徴を踏まえることの重要性」、『老年内科』、2、539-545頁、2020.10

Masafumi Kuzuya M, Aita K, Katayama Y, Katsuya T, Nishikawa M, Hirahara S, Miura H, Rakugi H, Akishita M., 「Japan Geriatrics Society "Recommendations for the Promotion of Advance Care Planning": End-of-Life Issues Subcommittee consensus statement」、『Geriatrics and Gerontology International』、vol.20, no.11、1024-1028頁、2020.11

会田薫子、「人生の物語りと advance care planning」、『日本在宅救急医学会誌』、vol.4,no.1、31-37頁、2020.12

Kuzuya M, Aita K, Katayama Y, Katsuya T, Nishikawa M, Hirahara S, Miura H, et al., 「The Japan Geriatrics Society consensus statement "recommendations for older persons to receive the best medical and long-term care during the COVID-19 outbreak-considering the timing of advance care planning implementation」、『Geriatrics and Gerontology International』、vol.20, no.12、1112-1119頁、2020.12

会田薫子、「日本老年医学会「ACP 推進に関する提言」の意義」、『Aging & Health』、vol.29,no.4、6-9頁、2021.1

Hirakawa Y, Aita K, Nishikawa M, Arai H, Miura H., 「Facilitating Advance Care Planning for Patients with Severe COPD: A Qualitative Study of Experiences and Perceptions of Community Physicians, Nurses, and Allied Health Professionals.」、『Home Healthcare Now』、39(2)、81-90頁、2021.3

会田薫子、「『透析の開始と継続に関する意思決定プロセスについての提言』の意義 — 倫理的視点からの検討」、『臨床透析』、37(4)、pp.319-324、2021.4

会田薫子、「日本老年医学会『ACP 推進に関する提言』の意義」、『臨牀と研究』、98(4)、pp.486-491、2021.4

会田薫子、「非がん疾患のエンドオブライフ・ケアと臨床倫理のカンファレンス法 —よりよい意思決定支援のために」、『Geriatric Medicine』、59(6)、pp.571-574、2021.6

会田薫子、「医師による自殺ほう助 —現状と課題」、『精神医学』、63(7)、pp.1099-1108、2021.7

会田薫子、「エンドオブライフ・ケア —臨床倫理の事例検討法」、『日本腎不全看護学会誌』、23(2)、pp.58-66、2021.8

Hirakawa Y, Saif-Ur-Rahman KM, Aita K, et al., 「Implementation of advance care planning amid the COVID-19 crisis: A narrative review and synthesis.」、『Geriatrics and Gerontology International』、21(9)、779-787頁、2021.9

会田薫子、「変革期を迎えた高齢腎不全患者への意思決定支援」、『看護管理』、31(10)、908-918頁、2021.10

会田薫子、「認知症のエンドオブライフ・ケア —ACP のあり方」、『老年期認知症研究会誌』、23(10)、pp.58-62、2021.10
会田薫子、「神経変性疾患を有する高齢患者のエンドオブライフ・ケア」、『Geriatric Medicine』、59(12)、pp.1203-1206、2021.12

Hirakawa Y, Aita K, Nishikawa M, et al.、「Contemporary Issues and Practicalities in Completing Advance Care Planning for Patients With Severe COPD Living Alone: A Qualitative Study.」、『Journal of Social Work in End-of-Life and Palliative Care』、18(1)、80-95 頁、2022.1

会田薫子、「人生の最終段階と透析療法 —緩和ケアと ACP の役割」、『死生学・応用倫理研究』、27、pp.10-23、2022.3

(3) 解説

会田薫子、「ALS 患者囑託殺人事件から考えること」、『PDN 通信』、2020 年 10 月 30 日号、1 頁、2020.10

会田薫子、「続・さあ始めよう、人生会議 —ACP (人生会議) 普及のための対談動画」、『DVD』、2021.5

会田薫子、「Advance Care Planning の意義 —エンドオブライフの意思決定支援」、『PDN 通信』、77 号、p3、2021.10

(4) 学会発表

国内、招聘講演、会田薫子、「フレイルの知見を ACP に活かす —臨床倫理の視点から」、第 25 回日本老年看護学会学術集会、誌上開催 (COVID-19 のため)、2020.6.21

国内、招聘講演、会田薫子、「日本老年医学会「ACP 推進に関する提言」の趣旨と現状の課題」、第 2 回日本在宅医療連合学会大会、WEB 開催、2020.6.28

国内、招聘講演、会田薫子、「人生の最終段階を考える —食べられなくなったらどうしますか?」、第 2 回日本在宅医療連合学会大会 市民公開講座、WEB 開催、2020.6.28

国内、招聘講演、会田薫子、「クリティカルケア看護における倫理的ジレンマへの対応」、第 16 回日本クリティカルケア看護学会学術集会、WEB 開催、2020.7.1

国内、会田薫子、「高齢者における CPR の適正化 —ACP の役割」、第 62 回日本老年医学会学術集会、WEB 開催 (リアルタイム・オンデマンド)、2020.8.5

国内、招聘講演、会田薫子、「経口摂取が困難となった場合の対応 —人工的水分・栄養補給法のあり方」、第 116 回日本精神神経学会学術集会、WEB 開催 (オンデマンド)、2020.9.28

国内、招聘講演、会田薫子、「今だから問う、あなたの臨床倫理 —意思決定支援者としての役割発揮」、第 51 回日本看護学会 —看護管理—WEB 学術集会、2020.11.1

国内、招聘講演、会田薫子、「エンドオブライフ・ケア 病いをもった人々への明かりとなるもの —臨床倫理的視点から」、第 23 回日本腎不全看護学会学術集会、WEB 開催、2020.11.21

国内、招聘講演、会田薫子、教育講演「心不全診療と ACP ～生物学的生命と人生の物語り～」、第 25 回日本心不全学会学術集会、WEB 開催 (リアルタイム・オンデマンド)、2021

国内、招聘講演、会田薫子、「エンドオブライフと性差 —倫理思想の観点から」、第 14 回日本性差医学・医療学会学術集会、WEB 開催 (リアルタイム・オンデマンド)、2021.2.7

国内、招聘講演、会田薫子、「医療倫理 —救急・集中治療の死生学」、第 48 回日本集中治療医学会学術集会、WEB 開催 (リアルタイム・オンデマンド)、2021.2.14

国内、招聘講演、会田薫子、「医療倫理と臨床倫理」、第 48 回日本集中治療医学会学術集会、WEB 開催 (リアルタイム・オンデマンド)、2021.2.14

国内、招聘講演、会田薫子、「延命医療と臨床現場 —professionalism のあり方」、第 66 回日本透析医学会学術集会、横浜国際会議場/WEB (リアルタイム・オンデマンド) ハイブリッド開催、2021.6.5

国内、招聘講演、会田薫子、「人生の最終段階における医療とケア」、第 34 回老年期認知症研究会、都市センターホテル/WEB (リアルタイム) ハイブリッド開催、2021.6.5

国内、会田薫子、「「新型コロナウイルス感染症流行期において高齢者が最善の医療・ケアを受けるための日本老年医学会からの提言 —ACP 実施のタイミングを考える」の意義」、第 63 回日本老年医学会学術集会、2021.6.12

国内、招聘講演、会田薫子、「医療倫理と研究倫理の最新知識～保存的腎臓療法 (CKM) の選択を題材に」、第 64 回日本腎臓学会学術集会、パシフィコ横浜/WEB (リアルタイム・オンデマンド) ハイブリッド開催、2021.6.19

国内、招聘講演、会田薫子、「医療倫理と臨床倫理」、日本ペインクリニック学会第 55 回学術集会、WEB 開催 (リアルタイム・オンデマンド)、2021.7.24

国内、招聘講演、会田薫子、「看護倫理を实践する —意思決定支援のあり方」、日本地域看護学会第 24 回学術集会、2021.9.12

国内、招聘講演、会田薫子、特別企画講演 1「PEG と生命倫理:アドバンス・ケア・プランニングの意義 —エンドオブライフの意思決定支援」、第 25 回 PEG・在宅医療学会学術集会、WEB 開催 (リアルタイム・オンデマンド)、2021.9.18

国内、招聘講演、会田薫子、「With コロナ時代の ACP と倫理」、日本 ACP 研究会第 6 回年次大会、WEB 開催（リアルタイム）、2021.9.26

国内、招聘講演、会田薫子、「手術看護における倫理」、第 35 回日本手術看護学会年次大会、WEB 開催（オンデマンド）、2021.10.16

国内、招聘講演、会田薫子、「認知症のエンドオブライフ・ケア —ACP のあり方」、第 23 回近畿老年期認知症研究会、WEB 開催、2021.10.23

国内、招聘講演、会田薫子、「死生学の課題と展望」、日本医学会「未来への提言」作成委員会、WEB 開催（リアルタイム）、2021.10.27

国内、招聘講演、会田薫子、「脳死の二重基準の意味」、第 16 回日本移植・再生医療学会学術集会、WEB 開催（リアルタイム・オンデマンド）、2021.10.30

国内、招聘講演、会田薫子、「ACP —人生の最終段階における意思決定支援」、日本がん看護学会 SIG ホスピスケア研修会、WEB 開催（リアルタイム）、2021.11.13

国内、招聘講演、会田薫子、「ACP（人生会議）—エンドオブライフ・ケアの意思決定支援」、第 53 回高知県リハビリテーション研究大会、WEB 開催（リアルタイム）、2021.11.14

国内、指定講演、会田薫子、専門医共通講習 1「救急・集中治療の死生学 —脳死をめぐる臨床倫理」、第 49 回日本救急医学会学術集会、WEB 開催（オンデマンド）、2021.11.21

国内、招聘講演、会田薫子、「エンドオブライフ・ケア —透析療法の見合わせと終了」、第 58 回三重県透析研究会学術集会、WEB 開催（リアルタイム・オンデマンド）、2022.2.20

国内、招聘講演、会田薫子、「在宅医療における ACP の考え方と実践」、第 58 回日本腹部救急医学会学術集会、京王プラザホテル（東京）、2022.3.25

(5) 監修

会田薫子、『看護職の倫理綱領』、公益社団法人 日本看護協会、2021.3

(6) 会議主催（チェア他）

国内、「医療・介護従事者のための死生学セミナー」、実行委員長、WEB セミナー、2020.9.27

国内、「人生の最終段階と透析療法 —緩和ケアと ACP の役割」シンポジウム、主催、WEB 開催（リアルタイム）、2021.3.14

国内、「呼吸不全の在宅緩和医療と ACP の役割」、主催、ハイブリッド開催:WEB 開催（リアルタイム）・名古屋大学鶴友会館、2022.3.6

(7) 報告

会田薫子、「子宮移植 —移植医療をめぐる新時代の課題」、千里ライフサイエンス振興財団『Senri LF News』、2021 年 10 月号、p19、2021.10

(8) マスコミ

「わが国の臨床倫理への取り組みはどこまで進んだか —臨床倫理プロジェクトの活動から振り返る（前編）」、『看護管理』、p405-410、医学書院、2020.5.10

「わが国の臨床倫理への取り組みはどこまで進んだか —臨床倫理プロジェクトの活動から振り返る（後編）」、『看護管理』、p495-500、医学書院、2020.6.10

「ALS 患者囁託殺人」、共同通信配信、『神戸新聞』、『中日新聞』など地方紙各紙、2020.7.24

「多様な価値 認める社会に」、共同通信配信、『信濃毎日新聞』、『長崎新聞』など地方紙各紙、2020.8.3

「患者の「治療をやめたい」への対応法」、『日経メディカル』、2020.8.11

「在宅看取り広がる」、共同通信配信、『岩手日報』、『河北新報』、『福井新聞』など地方紙各紙、2020.9.6

「医療は本人の幸せのため、複眼「『死の権利』はあるか」、『日経新聞』、朝刊、8 面（オピニオン面）、日本経済新聞社、2020.11.5

「『最終的な治療』は許されるのか ある医師への取材記録」、『NHK NewsWEB』、NHK、2020.12.23

「医療・ケアに必要な倫理の視点 —医療倫理の四原則とは」、『慢性期.com』、日本慢性期医療協会、2021.1.8

「医療を取り巻く倫理の諸課題とその背景にあるもの」、『慢性期.com』、日本慢性期医療協会、2021.1.8

「医療・ケア従事者と患者さんや家族が一緒に考える「共同意思決定」を」、『論座』、『朝日新聞』、2021.2.4

「高齢者が希望する最善の医療およびケアを受けるための倫理的考え方」、『看護管理』、医学書院、2021.2.10

「もしもの時の医療ケアのための話し合い ～ACP とは」、岡山県民公開医療シンポジウム「共に考えよう 岡山の医療」、『山陽新聞』、2021.3.28

「終末期医療 看護師に重い負担 横浜の点滴連続中毒死 初公判」、共同通信配信、『静岡新聞』など地方紙、2021.10.2

「高齢腎不全患者に対する SDM の進め方 「透析ヤダ！」では本人の真意を探るべし」、『日経メディカル電子版』、2022.5.18

『「高齢腎不全に透析導入せず緩和ケア』の選択肢 一保存的腎臓療法とは』、『日経メディカル』、2022.5.20

(9) 教科書

『内科学I』、総編集 矢崎義雄・小室一成、分担執筆、朝倉書店、2021

(10) 共同研究

国内、国立研究開発法人日本医療開発機構 (AMED) 研究「長寿・障害総合研究事業 高齢腎不全患者に対する腎代替療法の開始/見合わせの意思決定プロセスと最適な緩和医療・ケアの構築」(研究代表者: 日本腎臓学会理事長 柏原直樹氏) (令和元年度~3 年度)

国内、国立研究開発法人日本医療開発機構 (AMED) 研究「長寿・障害総合研究事業長寿 呼吸不全に対する在宅緩和医療の指針に関する研究」(研究代表者: 国立長寿医療研究センター在宅医療・地域医療連携推進部長 三浦久幸氏) (令和元年度~3 年度)

国内、日本学術振興会科学研究費 基盤研究 (A) 研究課題名「臨床倫理システムの哲学的展開と超高齢社会への貢献 および医療者養成課程への組み込み」(研究代表者: 岩手保健医療大学臨床倫理センター長 清水哲郎氏) (平成 30 (2018) 年度~令和 3 年度)

国内、日本学術振興会科学研究費 基盤研究 (B) 研究課題名「認知症高齢者の摂食嚥下障害に対する原因疾患別予防プログラムの多職種共同開発」研究代表者: 北海道医療大学 山田律子氏) (平成 30 年度~令和 3 年度)

国内、日本学術振興会科学研究費 基盤研究 (C) 研究課題名「小児医療に特化した子どもの権利擁護実践能力を高める教育プログラムの開発と検証」研究代表者: 東京慈恵会医科大学 高橋衣氏) (令和元年~令和 3 年度)

国内、厚生労働科学研究費補助金 研究課題名「療養場所の違いに応じた認知症者のエンドオブライフ・ケア充実に向けての調査研究—COVID-19 流行の影響も踏まえて」(研究代表者: 国立長寿医療研究センター在宅医療・地域医療連携推進部長 三浦久幸氏) (令和 3 年度~5 (2023) 年度)

国内、埼玉県医師会、「人生の最終段階における医療の選択 —advance care planning」第 2 弾、令和 3 年度

(11) 授業開発・教育プログラム

「臨床倫理 e-learning プログラム」、会田薫子、令和 2 年度

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義

非常勤講師、国立大学法人 長崎大学 歯学部、「長寿時代の臨床死生学」、2020.5

セミナー、一般社団法人 日本老年医学会、「高齢者のエンドオブライフ・ケア」、2020.8

非常勤講師、国立大学法人 岡山大学歯学部、「長寿時代の臨床死生学」、「アドバンス・ケア・プランニングにフレイルの知見を活かす」、2020.8

特別講演、公益社団法人 大阪府看護協会、「アドバンス・ケア・プランニング —人生の最終段階における医療とケアの意思決定支援」、2020.9

特別講演、大和市医師会、「多職種のための死生学入門 —アドバンス・ケア・プランニングとは何か」、2020.9

非常勤講師、東京慈恵会医科大学、「臨床倫理 入門編」、2020.9

セミナー、公益社団法人 大阪府看護協会、「看護倫理」、「臨床倫理」、「事例検討法」、「エンドオブライフ・ケア」、2020.9

特別講演、中外製薬株式会社、「ESRD (末期腎不全) 患者の意思決定支援」、2020.9

特別講演、公益社団法人 日本医療社会福祉協会、「アドバンス・ケア・プランニング—意思決定の支援」、2020.9

セミナー、東京慈恵会医科大学、「臨床倫理: 考え方と事例検討法」、2020.10

セミナー、諏訪中央病院・諏訪赤十字病院、「臨床倫理入門編、エンドオブライフの意思決定支援」、2020.10

セミナー、公益社団法人 広島県看護協会、「ACP 研修」、2020.10

特別講演、大曲厚生医療センター、「ACP とは何か —人生の最終段階における意思決定支援」、2020.10

特別講演、第 3 回医療と介護の総合展地域包括ケア EXPO、「高齢者のエンドオブライフ・ケア —ACP の役割」、2020.10

セミナー、公益社団法人 愛媛県看護協会、「なぜ、今、意思決定支援なのか」、「ACP の考え方と実践」、2020.10

特別講演、中外製薬株式会社・山形腎不全研究会、「患者の意思と生命を尊重した腎代替療法選択を考える —納得できる意思決定支援のために」、2020.10

非常勤講師、岩手医科大学、「人生の最終段階における医療とケアの意思決定支援 —ACP とは何か」、2020.10

特別講演、中外製薬株式会社、「ESRD (末期腎不全) 患者の意思決定支援 —カンファレンスの方法」、2020.10

特別講演、一般社団法人 わライフネット、「人生会議について考える ―食べられなくなったらどうしますか?」、2020.10

セミナー、公益社団法人 福島県看護協会、「ACP ―人生の最終段階における意思決定支援、臨床倫理：事例検討の進め方、エンドオブライフ・ケアを考える」、2020.11

特別講演、神戸市兵庫区医師会、「ACP ―エンドオブライフの意思決定支援」、2020.11

特別講演、ナースライフバランス研究室、「エンドオブライフ・ケア ―ACP の役割」、2020.11

セミナー、一般社団法人 全国老人保健施設協会、「老人保健施設におけるエンドオブライフ・ケア」、2020.12

特別講演、公益財団法人 笹川保健財団、「ACP ―人生の最終段階における意思決定支援、高齢者のエンドオブライフ・ケア」、2020.12

特別講演、埼玉県南部保健所、「人生会議とエンドオブライフ・ケア」、2020.12

セミナー、公益社団法人 大阪府看護協会、「看護倫理」、「臨床倫理」、「事例検討法」、「エンドオブライフ・ケア」、2021.1

特別講演、埼玉協同病院、「高齢者が自分らしく生き抜くことを支えるために人生の最終段階の医療とケアについて考える」、2021.2

特別講演、諏訪中央病院、「新型コロナウイルス感染症と ACP」、2021.2

特別講演、諏訪中央病院、「ACP とは ―意思決定支援に求められること」、2021.2

特別講演、公益社団法人 北海道看護協会札幌第一支部、「その人らしさの尊重：その人が主役であり続けるケア ―臨床倫理の視点から」、2021.2

特別講演、石川県小松市、「高齢者ケアと意思決定支援―人生の最終段階を支える文化の創成―」、2021.2

特別講演、岡山県病院協会・岡山県医師会・岡山県、「新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の拡がりのなか もしもの時の医療・ケアのための話し合い〜ACP とは〜」、2021.2

セミナー、一般社団法人 日本老年医学会、「高齢者のエンドオブライフ・ケア」、2021.4

特別講演、NDH ネットワーク、「透析療法における臨床倫理」、2021.5

非常勤講師、国立大学法人 長崎大学歯学部、科目名 「「高齢者歯科学」における「長寿時代の臨床死生学」」、2021.5

講義、東京大学農学部、科目名 「「生命倫理」における「脳死と臓器移植」」、2021.5

セミナー、公益社団法人 大阪府看護協会、「看護倫理」、「臨床倫理」、「事例検討法」、「エンドオブライフ・ケア」、2021.6

特別講演、一般社団法人 埼玉県医師会、「高齢者に対する ACP 普及の必要性」、2021.6

セミナー、公益社団法人 日本医療ソーシャルワーカー協会、「臨床倫理」、2021.7

セミナー、公益社団法人 大阪府看護協会、「アドバンス・ケア・プランニング ―人生の最終段階における意思決定支援」、2021.7

セミナー、一般社団法人 日本老年医学会、「高齢者のエンドオブライフ・ケア」、2021.8

セミナー、公益社団法人 大阪府看護協会、「看護倫理」、「臨床倫理」、「事例検討法」、「エンドオブライフ・ケア」、2021.8

特別講演、国立大学法人 徳島大学看護リカレントセンター、「在宅療養者が安心して暮らし穏やかな最期を迎えることを支える意思決定支援」、2021.8

非常勤講師、国立大学法人 岡山大学歯学部、「アドバンス・ケア・プランニング ―よりよい意思決定支援のために」、「高齢者のエンドオブライフ・ケア ―人工的水分・栄養補給法の問題を中心に」、2021.8

セミナー、公益社団法人 大阪府看護協会、「アドバンス・ケア・プランニング ―人生の最終段階における意思決定支援」、2021.8

セミナー、公益社団法人 広島県看護協会、「ACP とは何か ―人生の最終段階における意思決定支援」、「臨床倫理：事例検討の進め方」、「エンドオブライフ・ケアを考える」、2021.8

セミナー、北陸地区臨床倫理事例研究会、「エンドオブライフの意思決定支援 ―積極的な治療を拒否する高齢患者のケースを題材に」、2021.9

特別講演、岩手医科大学、「人生の最終段階における医療とケアの意思決定支援 ―ACP とは何か」、2021.10

セミナー、諏訪赤十字、「臨床倫理：事例検討の進め方」、「エンドオブライフの意思決定支援 ― 積極的な治療を拒否する高齢患者のケースを題材に」、2021.10

セミナー、独立行政法人 国立病院機構中国四国グループ、「臨床倫理の基礎 ―看護倫理を現場で活かすために」、「事例検討の進め方」、2021.10

セミナー、公益社団法人 大阪府看護協会、「看護倫理」、「臨床倫理」、「事例検討法」、「エンドオブライフ・ケア」、2021.10

特別講演、JA 秋田厚生連大曲厚生医療センター、「医療倫理と臨床倫理 入門編」、2021.11

特別講演、保土ヶ谷区、「人生会議（ACP）って何？ 人生の最終段階を幸せなものにするために最期の医療と介護をどうするべきか？」、2021.11

セミナー、公益社団法人 広島県看護協会、「アドバンス・ケア・プランニング —エンドオブライフ・ケアの意思決定支援」、「事例検討法」、「エンドオブライフ・ケア」、2021.11

セミナー、公益社団法人 日本医療ソーシャルワーカー協会、「アドバンス・ケア・プランニング —意思決定の支援」、2021.12

セミナー、公益社団法人 福島県看護協会、「アドバンス・ケア・プランニング —エンドオブライフ・ケアの意思決定支援」、「事例検討法」、「エンドオブライフ・ケア」、2021.12

特別講演、一般社団法人 群馬県医療ソーシャルワーカー協会、「アドバンス・ケア・プランニング —臨床倫理にもとづく意思決定支援」、2021.12

セミナー、公益社団法人 大阪府看護協会、「看護倫理」、「臨床倫理」、「事例検討法」、「エンドオブライフ・ケア」、2022.1

特別講演、広島ドナーバンク、「脳死の二重基準の意味と意義」、2022.1

特別講演、諏訪中央病院、「意思決定が困難な患者さんへの意思決定支援を考える」、2022.2

特別講演、世田谷区安心すこやかセンター、「LIFE これからのこと —明日からできる ACP」、2022.2

特別講演、高知県中央西保健所、「一人ひとりの最善をさぐる意思決定支援のあり方 ～高齢期におけるよりよい合意形成とは」、2022.2

セミナー、石川県小松市、「高齢者ケアの意思決定支援 —人生の最終段階を支える文化の創成」、2022.2

特別講演、広島市立広島市民病院、「高齢者における意思決定支援」、2022.2

セミナー、国立研究開発法人日本医療研究開発機構（AMED）長寿科学研究開発事業「高齢腎不全患者に対する腎代替療法の開始/ 見合わせの意思決定プロセスと最適な緩和医療・ケアの構築」研究班（代表:川崎医科大学 柏原直樹）、「アドバンス・ケア・プランニングについて」、2022.2

特別講演、社会医療法人 あさかホスピタル、「ACP（人生会議）とは —人生の最終段階における医療・ケアを考える」、2022.3

(2) 学会

日本生命倫理学会（2001～）、理事（2014～2020）、評議員（2020～現在）

日本医学哲学・倫理学会（2011～）、評議員（2013～）、理事（2016～現在）

一般社団法人 日本老年医学会（2005年～）、代議員（2013～）、監事（2017～現在）

Japan Geriatrics Society *Geriatrics & Gerontology International*, Associate Editor（2020～現在）

日本脳死・脳蘇生学会（2017～）、理事（2017～現在）

一般社団法人 日本在宅救急医学会（2018～）、理事（2018～現在）

一般社団法人 PEG・在宅医療学会（2017～）、学術評議員（2017～現在）

一般社団法人 日本救急医学会（2006～現在）

一般社団法人 日本透析医学会、倫理委員会外部委員（2014年～現在）

日本老年社会科学会（2005年～現在）

日本臨床死生学会（2008年～現在）

一般社団法人 日本呼吸器学会、「非がん性呼吸器疾患 緩和ケア指針」外部評価委員（2020～2021）

一般社団法人 日本移植学会、「心停止下提供推進委員会」外部委員（2020～現在）

日本医学会「子宮移植倫理に関する検討委員会」委員（2019～現在）

(3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

一般社団法人 日本専門医機構、編集会議 議員（2019～現在）

公益社団法人 日本看護協会、「看護者の倫理綱領」検討委員会委員（2018～2020）

NPO 法人 PDN（Patients Doctors Network）、理事（2007～現在）

静岡県立静岡がんセンター、治験倫理審査委員会委員（2010～現在）

NPO 法人 生活介護ネットワーク、理事（2010～2021）

1. 略歴

1997年4月	上智大学文学部英文学科 入学
2001年3月	同 卒業
2001年4月	上智大学文学部哲学科 入学 (3年次学士入学)
2003年3月	同 卒業
2003年4月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻哲学専門分野修士課程 入学
2005年3月	同 修了 (修士 (文学) 取得)
2005年4月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻哲学専門分野博士課程 進学
2006年6月	東京大学大学院人文社会系研究科 21世紀COE「死生学の構築」リサーチアシスタント (~2007年3月)
2007年10月	東京大学大学院人文社会系研究科グローバルCOE「死生学の展開と組織化」リサーチ アシスタント (~2008年3月)
2010年3月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻哲学専門分野博士課程 単位取得退学
2010年4月	上智大学大学院哲学研究科 特別研究員 (~2013年3月)
2013年5月	東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター (上廣死生学・応用倫理講座) 特任研究員
2013年9月	博士 (文学) 取得 (東京大学大学院人文社会系研究科)
2014年4月	三重県立看護大学看護学部看護学科 准教授
2017年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 特任准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

行為論、ケアの倫理、臨床死生学

b 研究課題

(1) ケアの倫理における「共感」と「認識をめぐる責任」についての哲学的分析とその臨床的展開

ケアの倫理における中心概念である「共感」に関して、その身体的・情動的側面および認知的・知性的側面を主題的に分析する。そのことを通じて「共感」とそれに伴う「認識上の責任」を、臨床の場に即した複雑さと深みを備えたものとして理論化する。

ケアの倫理によれば、功利主義的な生命倫理は、患者（患者家族）の置かれている具体的な状況に関する「認識上の責任」（責任をもって認識すること）を果たしていない点で不十分だとされる。このような具体的な状況の認知において、共感が重要な働きをすることは疑いえない。しかし他方、共感には認知的なバイアスが働くことが指摘されている。そこで、共感の危うさや困難さを踏まえつつ、医療従事者—患者（患者家族）関係における望ましい共感のあり方と、それに伴う認識上の責任を明らかにする。

(2) 関係的な自律論の構築とその臨床的展開

ケアの倫理の立場から関係的な自律論を構築すると同時にその臨床的応用を試みる。生命倫理における個人主義的な自律論は、個人の独立性と他者からの不干渉を基調とする自己決定を核としてきた。それに対してケアの倫理は、人間の相互依存性と傷つきやすさに着目する。そして一定の依存関係や社会的環境の中で育まれるものとして自律を捉える。しかしながら、依存性と自律性は緊張関係にもあるため、個人主義的な自律論はなお根強い。そこで、自律性と依存性の諸相および自律性と依存性の結びつきについて徹底的に検討することを通して、関係的な自律論をより十全なものにする。そのうえで、医療従事者・患者・患者家族、それを取り巻く社会的／文化的環境という要素を考慮しつつ、関係的な自律の概念を、臨床における共同意思決定プロセスに適うものへと鍛え上げたい。

c 概要と自己評価

(1) 病いの語りをめぐる認識的不正義と共感

病いの語りや証言に関する認識的不正義について考察した。病いによって打ちのめされる体験をした患者の証言は、極めて重要であるにもかかわらず、病いの文脈における認識上の不正義のうちには、そういった証言の重要性を過小に評価するということが、中心的なものとして含まれている。そこで、とりわけ病いの語りの中でも、最も無視

され周縁化されやすい「混沌の語り」に注目して、それがいかんとして認識の次元で社会的に排除されているのかを探究した。

その際、混沌とした病苦に対する共感的な知の重要性に着目し、認識的排除を是正するには、共感はどのように機能しうるのか、また機能しなければならないのか、という問題に取り組んだ。具体的には、「共感が認識上の責任を引き受けるものであるとき、その共感、病いに関する認識上の不正義に抗うメカニズムを、どのような形で備えていなければならないのか」という問題を考察した。とりわけ、共感や認識的な責任を、個人々の相互作用のレベルに着目するミクロな視点のみならず、社会的構造のレベルに着目するマクロな視点からも分析した。その成果は“*Illness Narratives and Epistemic Injustice: Toward Extended Empathic Knowledge*”として *Knowers and Knowledge in East West Philosophy: Epistemology Extended* (ed., Karyn L. Lai, Palgrave Macmillan, 2021)の第六章として刊行された。

(2) タイミングと意思決定支援の倫理

患者本人を中心とした共同意思決定のプロセスを踏むためには、本人の時間感覚を尊重するようなコミュニケーションが要求される。このような基本的発想のもと、倫理的に妥当な意思決定支援の要件を哲学的に考察した。まず、患者本人が体験する、周囲の人々との時間感覚のずれが、本人の孤立感をいっそう深刻なものにしている点に注目した。患者本人と医療者の間にある時間感覚の齟齬が何らかの仕方では是正されない限り、医療者は、患者本人のタイミングに合った働きかけや対応ができないままになり——すなわち、患者にとってタイミングが早すぎたり遅すぎたりして——結果として、意思決定支援に必要とされる、患者との信頼関係やコミュニケーションの深化が妨げられる。この点を踏まえ、共同意思決定に不可欠な信頼関係やコミュニケーションの深化には、患者の現在停留的な時間感覚に寄り添う「現在中心的な共時化」が極めて重要であると論じた。

さらに、その共時化によって共有されることになる現在を、カイロス＝危機的現在という観点から分析した。そうすることで、意思決定プロセスの共有がカイロスの共有を含む点を明らかにした。以上の研究成果は、論文「意思決定支援の倫理とカイロスの共有——本人の時間感覚に寄り添う」(『死生学・応用倫理研究』第27号)にまとめられている。

d 主要業績

(1) 論文

Misa Komatsu, Seisuke Hayakawa, Norikazu Ohnishi, Kazunari Takemura, Makoto Tabata, Ritsuko Shimizu, “Developing a Cooperative Caring Model for Nurses and Older Adults with Dementia,” *International Journal for Human Caring* 24(4), 290-297, 2020.12

早川正祐, 「自己実現の自由と不自由——相互性がもたらす現在享受的な自己実現」、『哲学』第72号(日本哲学会編)、21-35、2021.4

Seisuke Hayakawa, “Illness Narratives and Epistemic Injustice: Toward Extended Empathic Knowledge,” in *Knowers and Knowledge in East-West Philosophy: Epistemology Extended* (ed. Karyn, L. Lai), Cham: Palgrave Macmillan, 111-138, 2021.10

早川正祐, 「臨床におけるケアの倫理——混沌の語りから考える」、『臨床倫理の考え方と実践——医療・ケアチームのための事例検討法』(清水哲郎・会田薫子・田代志門編著)、東京大学出版会、92-100、2022.2

早川正祐, 「意思決定支援の倫理とカイロスの共有——本人の時間感覚に寄り添う」、『死生学・応用倫理研究』第27号、(東京大学大学院人文社会系研究科 死生学・応用倫理センター)、123-149、2022.3

(2) 翻訳

早川正祐・松田一郎訳『ケアの倫理と共感』、勁草書房、2021.11= Michael Slote (2007), *The Ethics of Care and Empathy*, Routledge.

(3) 学会講演

Katsunori Miyahara and Seisuke Hayakawa, “Empathic perspective-taking, mental simulation, and receptivity,” The 95th Joint Session of the Aristotelian Society and the Mind Association 2021, June.

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

学術講演、「成熟した共感と感情主義的な徳倫理学の展開」、東京都高等学校公民科「倫理」「現代社会」研究会、2022.3
セミナー、三重大学附属病院看護部「倫理コーディネータ養成プログラム」講師、2021.10

(2) 学会

哲学会、2003.4～現在

上智大学哲学会、2003.4～現在

日本倫理学会、2005.8～現在

日本科学哲学学会、2006.12～現在

日本哲学会、2006.12～現在

ケアの哲学学会、2016.9～現在

American Philosophical Association、2021～現在